

【完結】 The 5th Survivor

河蛸

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

死神と畏れられる男がいた。

コードネームをハンク。アンブレラ私設部隊U・S・S所属のエージェントである。

Gウイルスとその開発者、バーキン博士の回収のため、ラクーンシティに派遣されるハンク。

しかし任務のさなか、異形と化したバーキンの逆襲に遭い部隊は壊滅。ウイルス奪取に失敗してしまう。

独り生き残ったハンクは、やむを得ず別ルートからの回収を試みる。

そんな時、新たな任務の報せが届けられた。

それは極秘裏に開発されていた新型生物兵器の回収という、事前情報に無いミッションだった。

地の底で彼を待ち受けていたのは、幼い少女の姿をしたB・O・Wで……。

# 目次

## プロローグ

無銘の日記

1

新型生物兵器

9

## Chapter 1

暗澹の巣

27

遺志を

39

プラント43凍結作戦

53

メッセージ

67

腐臭の底

79

Umbrella must die

91

## Chapter 2

忘霊

107

十字架の元に

114

奈落を抜ける

127

波旬、暴虐を焼べたまえ

140

休息。急転

154

## Chapter 3

芽吹く脅威

165

舌禍と謀略の男

178

喰らえよ血肉、理性を叫べ

194

虚妄の破顔

207

身を捨てずして浮かぶ瀬を

223

死神を殺せ

241

わたしは裏切らない

253

Chapter 4

駆け抜ける、生と死の境界線を

愛憎の収斂進化

End 1 : 最期の流星

End 2 : The death can't die

エピソード

ファイル : 回収後の記録

第5の生存者

337 332 311 299 279 269

## プロローグ 無銘の日記

【1991／12／28】

バーキン博士が珍しく浮かれていた。何かあつたのか尋ねてみると、博士立案の新プランがスペンサー総帥から承認されたらしい。その名も『G―ウイルス計画』。Tに変わる新世代ウイルスの開発計画だとか。

聞いた話によれば、アークレイの研究所で極秘裏に取り扱われていた被検体、リサ・トレヴァーから採取された新型ウイルスが元手となった計画だという。

リサ・トレヴァーが見せた、寄生生物ネメシスすら吸収するほどの驚異的な生命力と変異性の秘密を探っていたところ、遺伝子に類稀な変化をもたらすウイルスが見つかったのが事の発端だ。なかなか面白そうな代物である。

アレクシア・アシュフォードの台頭で精神的に参っていた博士も、Gの開発を認められて完全に本調子に戻っている。

ずっとその調子でいてもらいたい。高飛車なのは鼻につくが、ヒスの相手はもつと御免だ。

……しかし、Gか。

計画書の予測実績が本当に実現可能なら、密かに考案していたアレの開発の一助になるかもしれないな。

【1995／8／3】

被検体リサ・トレヴァーが処分されたという報告を得た。三日間かけての処分だったそうだ。

既存のB・O・Wとは一線を画す生命力、と評価する他に無いだろう。死なないことに特化しただけの哀れな娘とは、まさしく不死身の出来損ないか。

……いや、私にとって出来損ないとは言い難い。

彼女の持つあらゆる試作ウイルスや寄生生物すら「リサ・トレヴァー」という一個の生物として統合せしめた特異性は、バーキン博士と同じく、私にとって重要なアイデアの源泉となってくれたのだから。

アークレイの良き友人に頼んで、リサ・トレヴァーの生殖細胞を採取してもらって本当によかった。私財をはたいてまで癒着した甲斐があったというものである。

これで秘密の計画を順調に進めることが出来る。

【1996／4／10】

被検体リサ・トレヴァーの生殖細胞を安定化させることに成功。サンプルは順応性、変異性はそのまま、通常の生物と同等レベルの生殖機能を取り戻した。

半ば癌化に等しい細胞の異常増殖と生殖機能の劣化がネックだったが、峠は越えた。あとは協力者が例のサンプルを届けてさえくれれば……。

【1996／6／24】

協力者がついにサンプルを提供してくれた。ここ2ヶ月ほど研究が行き詰っていたのでありがたい。なにせ、このサンプル無しには完成し得ないものなのだから。

頼んでいた代物は、セルゲイ・ウラジミール大佐の精細胞だ。T型B・O・Wの究極系、タイラントのベースとなっている彼である。

彼は一千万人に一人の確率で存在するTーウイルスの完全適応者だと知られている。

それゆえ、彼のクローンは通常の生物兵器を遥かに凌駕した知性、耐久性、戦闘能力を兼ね備えるタイラントシリーズに最も適した素材だった。

私は彼の特異体質に着目していた。Tベース兵器の欠点である知力低下を起こさず、体組織の腐敗や劣化も招かない、人間に限りなく近いまま兵器としての能力を獲得できる可能性に。

さあ、早速研究にとりかかろう。私の目的到達まであと一歩、ここが踏ん張りどころだ。

【1997／7／25】

やった、成功した！ 遂にセルゲイの細胞核を、リサ・トレヴァーの生殖細胞内で再構築胚として定着させることができたのだ！

リサの細胞が強すぎてセルゲイ細胞が食われてしまっていたのが難点だったが、なんてことはない。あらかじめセルゲイ細胞をTで強化しておけば済む話だったのだ。

こんな初歩的な発想を得るまで何ヶ月もかかるとは、これが私とバーキン博士の違いかと痛感させられる。

しかし、しかし、私は成し遂げた。机上の空論だった計画の山をひとつ、確実に踏破したのだ。

あとはこの胚を培養していくだけだ。理想は生きた女性の子宮内に定着させて生育することだが、これは私だけが知っている極秘プラン。情報の漏洩は命とりである。他人を仮親にするなんて真似は許されない。

特にバーキン博士に漏れるのはまずい。嫉妬深く、上昇志向の強い彼にバレたら計画を潰されるかもしれない。それだけは御免だ。ここまで来るのにどれだけの時間を費やしたと思ってる。

だが恐らく、これを培養装置で生育しただけでは私の望む結果にはならない。やはり生きた子宮が必要だ。

……ああ。なんだ。

あるじゃないか。ここに。

【1997／11／10】

摘出した私の内性器を培養装置で管理し、胚を定着させてから4ヶ月近く経過した。

胚の生育は良好。通常の間と同等か、あるいは少し早い程度の発生スピードである。このまま順調に育ってくれば問題ない。あと

は時間との戦いだ。

しかしながら、こうして自分の子宮を眺めつつ研究を続けるというのは何だか妙な気分だ。我ながら狂気の沙汰だと唾棄せずにはいられない。

けれど、これでいい。アンブレラなんて悪魔に魂を売った私に、真つ当な人生なんて歩めるはずがないのだから。

願わくば、この子が無事成長してくれますように。

【1998／6／2】

定着から10ヶ月と少し。NESTへの移動などと山場はあったが、彼女はようやく誕生の時を迎えた。

誕生した実験体は、生殖細胞提供者から取って『LISA-001』と呼称することにした。

『LISA-001』の身長は47cmと人間の新生児に比べても平均的だったが、体重はなんと6500gと非常に重かった。超巨大児とされる基準値より2kg近く重いのだ。おそらく通常の新生児とは比べ物にならない骨密度、筋線維の総量、密度を誇っているに違いない。

培養装置から取り出した際、産声一つ挙げずに肺呼吸機能を獲得したのも驚いた。さらには瞼を開き、明らかに視覚を使って周囲の情報を獲得し始めたのだ。

胎児の段階までは人間とほぼ変わらなかったのに、外気へ晒されてから目まぐるしい速度で成長を遂げている。これはリサ・トレヴァーの形質なのだろうか？

見た目は人と変わらずともやはり生物兵器。驚かされることは多いものである。

【1998／7／2】

『LISA-001』は生後1ヶ月程度にも関わらず、3歳児ほどに成長を遂げていた。

身体のみならず知能の発達も著しい。肉体年齢に応じた識字能力



を獲得しており、絵本の読解や、子供用パズルの解決まで達成している。B・O・Wの中でも頭一つ抜けた知性だ。このままいけばネメシスT型に匹敵するかもしれない。

しかし識字能力や言語への理解能力はあっても、どういうわけか『LISA-001』自身が言葉を使うことが無いのが不思議である。喃語の兆候すら一度も確認出来ていない。

検査をしても発声器官に異常はない。正常に機能しているはずなのだが、さて、どういうことなのだろう。

【1998/8/10】

予測通り、T-ウィルスやGサンプルの投与実験は成功した。リサ・トレヴァーの吸収能力とセルゲイ・ウラジミールの特異性の融合が、知性の低下もないままに、従来の生物兵器以上の身体機能と適応性の獲得をもたらしたのである。

肉体年齢はさらに飛躍的成長を遂げ、8歳程度となった。相変わらず身長は平均的だが体重は重い。その分パワーは言うことなしだが。しかし、言葉を介する兆候はない。意思疎通はもっぱら筆談やジェスチャーに限られている。ただの一度も、彼女は声を発したことがない。

……生物兵器を相手にするのに、あつてはならない感情だ。ほんの少しでも声を聴いてみたいなんて思うのは。

【1998/8/13】

実験体『LISA-001』の戦闘実験を行った。

『LISA-001』が完成し、これまでのような隠密行動に励む必要もなくなったので、秘密裏ではあるが協力者を募れるようになったのはありがたい。バーキンにさえバレなければ問題ないのだ。

さておき、計測された『LISA-001』の戦闘能力は抜群なまでに良好だ。RED QEENを欺くためにちっぽけな設備しか使えなかったが、これほどの能力値を叩き出せたのなら文句はない。

ただ兵器として必要な攻撃性が低いのは問題か。例えば物であつて

も破壊に躊躇している節がある。

この点は後々、教育プログラムで改善していく必要がありそうだ。

【1998／8／17】

アンブレラ上層部とのコンタクトを行った。予想通り、目覚ましい成果を挙げた上での報告は、私の独断専攻の処罰を阻む一助となった。

アンブレラはそういう組織だ。成果さえ出せば多少の不正程度は見逃してくれる。それもGやTを超える生物兵器の製造に成功したとあつては、奴らも私を無下には出来ない。まさか組織の腐敗具合に助けられる日が来るとはね。

これで私の密かな夢は達成されたも同然だ。ウィリアム・バーキンやアレクシア・アシユフオードのような天才たちの足元にも及ばない凡百が、既存の常識を覆す生物兵器を生み出すという野望を叶えたのだ。

アンブレラの重役に抜擢される日も、そう遠くないだろう。

【1998／9／19】

遂にバーキンがGの開発に成功したらしい。しかし今となつてはそんなことはどうでもいい。私には『LISA-001』がある。

彼女はたった3ヶ月で完成形へと至った。量産型タイラントを超える戦闘能力に、複雑な作戦を遂行可能な知性、そして完璧なまでの人間への擬態。大変素晴らしい出来栄えだ。

だがやはり、攻撃性の低さは目に余るものがある。今日は紙を切つて花を模したモノを、あろうことか私へプレゼントしてきた始末だ。

これは生物兵器としてあるまじき欠点である。これさえ治れば、彼女は最強の兵器として君臨できるのに。

……そう。これは欠点のはずだ。はずなのだ。

【×／9／23】

最悪だ。最悪だ。最悪だ。

なんということだ。NESTでバイオハザードが発生した。事故でT-ウィルスが漏れたのだ。管理システムは一体何をしていた。アレがどれほど危険なモノか分かっていたはずだろう。

拡散初期のT-ウィルスの感染力は凄まじい。きつと私も感染している。抗ウイルス剤を投与してみたが、多分一時凌ぎだ。汚染レベルが高すぎる。

せつかくここまで来たのに、ここまで辿り着いたのに、こんな。

【9／24】

どうやらNESTで生き残っているのは私だけのようだ。他は多分、活性死者のランチにされた。きつと上のオフィスはバイキング会場になっていることだろう。

幸い、私は『LISA-001』に守られてまだ生きています。彼女が暴走したプラント43や活性死者の変異体を退けてくれた。

けれど、もう無理だ。後がない。症状が着実に進行している。抗ウイルス剤は進行を遅らせることしか出来ていない。

腕や背中が痒い。どれだけ食べても食欲は満たされない。急速な新陳代謝の影響だ。

終わりだ。私はもう助からない。けれど『LISA-001』だけは守らなくては。私の生涯を賭した最高傑作だけは、この子だけは、何としてでも守らなくては。

×  
×  
×

×冷凍睡眠装置を使ってあの子を休眠させた。あの子に関するデータのバックアップも一緒に保存した。アンブレラに追加の回収部隊も要請した。

あとはアンブレラに任せればいい。私の役目もこれで終わりだ。  
……ああ、しかし。まさか最後に、あの子の声を聴くことが出来るなんて。

嫌だと言った。傍にいると言った。

顔をくしゃくしゃにして、彼女は生まれて初めて、言葉にしてそう

言ったのだ。

けれど私は、懇願する彼女を冷凍睡眠装置へ押し込んだ。私に残された時間はもう少ない。皮膚の腐敗が目に見えるまで進行している。

とても痒い。強烈な空腹感が内側で暴れている。右目はもう掠れていてよく見えない。

死ぬのはいい。これはアンブレラという悪魔に与してしまった報いなのだ。因果応報、これが相応しい最期なんだ。

ただ、これで良かったのだろうかと思う。

最高の生物兵器を作って、それをアンブレラのために残して、本当に良かったのだろうか。

ウィルスに頭をやられているのか、それとも心境の変化か、私自身にも分からないが、あの子がくれた花の切り紙が手放せずにいる。今も、ポケットの中に入っている。まるでリー研究員の言っていた東洋のオマモリみたいだ。

……ああ。このままあの子がアンブレラの手に移ったら、あの子の未来は——（ここから文字が滲んでいて読めない）

【

りさを逃がさない。あのこをここから逃がさないと

アンブレラが来るまえに はやく

でも そうちの開けかた わからなく なた

どうすれば どうすれば

【ごめなさい】

わたし が まちが て た

## 新型生物兵器

死神と呼ばれる男がいた。

類稀なサバイバルスキルと機械のような冷徹さを持つ男。

どんな状況だろうと、どれほど過酷だろうと、必ず任務を成し遂げるアンブレラ保安警察のエージェント。

例え彼以外のチームが全滅しようが、彼だけは必ず生還する——ゆえに、人は死神と畏れた。

コードネームをHUNK<sup>ハンク</sup>。

彼を形作る情報はその無機質な作戦名だけだ。彼がどんな人物で、どんな経歴を持つのか、詳細を知る者は誰一人存在しない。

「……………」

ハンクはいつものように任務を遂行していた。

アメリカ合衆国最大規模を誇る製薬会社アンブレラの私設部隊、U・S・Sαチームの隊長として、離反の疑いがあるウイリアム・バーキン博士を確保すべく動いていた。

しかし、予想外のアクシデントにより失敗寸前まで追い詰められてしまう。

事故により無数の銃弾を浴び、息絶えてしまったはずのバーキンが、死の間際にGウイルスを自らへ投与したのだ。

彼は急速な変異を遂げ、αチームを壊滅にまで追い込んだ。

G生物と化したバーキンの力は凄まじく、隊員を逃がそうと孤軍奮闘したハンクも一撃で吹き飛ばされ、呆気なく意識を失った。

それが幸運だったと言うべきか。バーキンは倒れたハンクに追い打ちを掛けず、Gを持つ隊員の追跡を優先したのである。

意識を失っていたお陰で命は助かった。だが肝心の博士どころか、ウイルスすら確保できていない。

ハンクにとつて、自分の命より任務の遂行こそが重要だ。死神に失敗の二文字は無い。

意識を取り戻したガスマスクの男は冷静に思考する。

この状況、この装備で、任務を完遂するためには何が最善の行動か

と。

(……日付が24日になっている。丸一日気を失っていたらしい)

精密機器の表示時計を一瞥したハンクは、ひとまず手持ちの装備の確認へと移った。

主力火器はサブマシンガンLE5。だがG生物と化したバーキンとの交戦で弾倉を1つ空にしている。予備の弾倉は2つ、計64発。決して無駄には出来ない弾数だ。

続いてハンドガンMUP。こちらはLE5が使用できなくなった際の護身武器だ。残弾はたったの13発。使いどころは限られた緊急用だろう。

その他の武器はコンバットナイフが一振り、手榴弾が3つである。それら全てに故障はない。

確認を終えたハンクは、バーキンの存在を十分警戒しながらNES Tの通路をゆつくりと進んでいく。

ほんの数メートル進んだ先に血痕が見えた。さらにはアタツシユケースとその中身の残骸が、無残にも広がっている。

もつとも、残骸は無機物に限った話では無い。

(ウイルスサンプルがG、Tともども全て破壊されている。隊員の生命反応も無い。即死だったようだ)

胸を凄まじい力で叩き潰されたもの。握り潰されたのか、頭部が脆いトマトのように粉碎されたもの。首があり得ない方向へねじ曲がったもの。

死因は様々だが、訓練を積んだ特殊部隊たるU・S・Sが子供のようには屠られた有り様は凄惨を極めていた。通常の者であれば、血のカーペットを吐瀉物の重ね塗りで彩ってもおかしくはない。

だが、ハンクは無機質な二眼ガスマスクの裏で眉一つ動かすことはなかった。

仲間の死臭は嗅ぎ慣れている。

「こちらαチームハンク。生存者は応答せよ」

無線を起動し、隊員たちへ呼びかける。

返事はない。ザーツと微弱な砂嵐が流れるだけだ。

「繰り返す。こちらαチームハンク。生存者は応答せよ」

再度アナウンスを繰り返す。同じく返事はない。無情な静寂が電波を支配していた。

αチームは自分を残して全滅——それが彼の出した結論だった。すぐさま無線のチャンネルを切り替える。今度は隊員ではなく、司令部に向けて発信する。

「司令部、こちらαチームハンク。交戦中に負傷したウィリアムが死亡直前にGを投与。蘇りαチームを襲撃した。私を残して部隊は全滅。ウイルスサンプルは全て戦闘中に破損、周囲に飛散。指示を」

「こちら司令部。了解した。その場で待機し、指示を待て。周囲を厳重に注意せよ」

「了解」

無機質な会話が終わり、再び閉口するハンク。

司令部から罵声のひとつも無かったということは、サンプルはバーキンが持っていたものだけではないのだろう。ストックがあるのだ。恐らく司令部はそれを見越し、新しい作戦経路を練っている。

つまり、まだ任務は終了していない。ならば遂行するのみ。司令部から撤退の指示が出ない以上、死神ハンクに任務放棄の選択肢はあり得ない。

『こちら司令部。αチームハンク、応答せよ』

「こちらハンク。指示を」

『Gウイルス回収作戦は引き続き続行せよ。また、同時進行で別の任務も行ってもらおう』

「了解。追加任務の詳細を求む」

『新型B・O・Wの回収だ。ターゲットはNEST最下層、西エリアの冷凍睡眠装置管理施設で保管されている。装置の暗証番号は0602。繰り返す、暗証番号は0602だ。ターゲットを捜索し、回収せよ。なお、可能な限り生存させたまま帰還せよ』

指示を耳にしたハンクは、ほんの少しだけマスクの中で眉を顰めた。

新型B・O・W。それはいい。ハンクはアンブレラの研究員では

ない。新作の怪物なんてモノに興味はないしどうでもいい。

問題はそれを知らされていなかったということだ。

ハンクは作戦を行う前にあらゆる情報の整理やミーティングを徹底して行うが、博士やG以外の回収——それもウイルスではない生体兵器を回収するという話は一切聞かされていなかった。

任務の変更自体に異論はない。ハンクは上の指示に従うのみだ。私情は欠片も挟むことはない。

だがこうなるとかなり勝手が違ってくる。なにせ装備が心もとな

い。  
B・O・Wはみな強力で、かつ尋常ならざる生命力をもった怪物である。人間から物資を奪う目的で設定された装備のみで、おまけにハンク1人のミッシェンとなれば、怪物を捕まえるという特異なシチュエーションにおいて戦力に欠けていると判断せざるを得ない。

少なくとも回収専用の装備が要る。狂犬を扱うには、首輪とリードが必要だ。

「事前情報にはないミッシェンだ。ターゲットの具体的な特徴と、確保に必要な装備の情報を求める」

『ターゲット名は「LISA-001」。10歳前後の少女の姿をしたB・O・Wだ。平均的な人間とほぼ大差なく、銀色の頭髮が特徴。報告によれば、知力、精神レベル共に外観的同世代とほぼ同程度であり、言語での意思疎通を可能とする。また、兵器として完成段階ではない「LISA-001」は攻撃性に欠ける。そのため専用の装備は必要ない。懐柔し、帰投せよ』

「……了解した。任務を続行する」

通信を切り、ハンクは思考を展開していく。

言語を介するほどの知性を持った生物兵器、『LISA-001』。得た情報が真実ならば、どうも精神スペックは人間の子供と大差ない存在のようだ。

流石のハンクも生物兵器の懐柔を任せられるとは思わなかった。人を喰らい、切り裂き、忌々しいウイルスを媒介する化け物を手懐けるとは、今まで体験したことのない任務である。



（子供をあやして連れて帰れ……か。死神が子守とはな。子守で済めば良いが）

万が一情報が間違っていたら、ターゲットとの交戦は免れない。データの少ない新型相手ともなれば命の取り合いになるだろう。

司令部は可能な限り生存させよと言った。最悪、死体からサンプルを回収できればいいらしい。であれば、たとえ相手の姿が子供だろうが、その時が来たら躊躇はない。

「……」

足を動かし、隊員の死体へと歩み寄る。

可能な限り装備の補充をしておきたかった。特に弾薬は重要だ。ウイルスが漏洩してしまった今、NESTがバイオハザードに見舞われた可能性がある。施設内を活性死者——通称ゾンビが徘徊していてもおかしくない。

ゾンビと化した感染者は非常に頑丈だ。痛覚は無く、恐怖も無い。四肢を打ち抜く程度では足止めにもならず、心臓への射撃も有効打となりにくい。

Tーウイルスの作用で血液凝固が速い上に、組織の再生能力も向上しているからだ。

仕留めるには中枢神経を破壊するか、焼却して事実上の活動不能へ追い込むしか方法はない。だからこそ武器の存在は重要だ。

（戦闘の影響か、装備の大部分が破損している。使えるのはこれだけのようだ）

折れ曲がった銃身やナイフ、見たことも無い形状にされた弾倉が山ほど出てくる。

怪物と化したバーキンの膂力が如何に凶悪だったか分かるだろう。我ながらよく無事だったなど、ハンクは薄く自嘲した。

結局確保できた物資は、LE5の弾倉がひとつとナイフのみ。他は全て破損してしまい、使い物になりそうになかった。

（生物兵器が往来跋扈している可能性を考えると、バーキン接触時と違ってダクトは使えない。となれば、NESTの最深部へ向かうにはエレベーターを使うしかない。だがエレベーターにはリストタグに

よる電子ロックがかけられている。電源は生きていようだから、システムは健在だろう。別ルート<sup>①</sup>の搜索か、リストタグを探す必要が――む?)

かがみ込んで物資を整理していると、自分の影が不自然に膨張していることに気づく。

影が膨らんでいる。それはつまり、照明を遮る面積が広がっているということ。

ハンクの背後に、自分以外の何者かが存在しているという証明だ。「ツ―」

すぐさま床を転がり、振り返りながらLE5を構える。

照準の先には、やはり隊員だったものが幽鬼のように佇んでいた。

(……傷口から感染したか)

右腕と左足はあらゆる方向へ振じれ、防護服の内側から骨片と思わしき突起が飛び出している。

明らかかな開放骨折だ。尋常ならば筆舌に尽くしがたい激痛に襲われ、満足に立ち上がることすら叶わないだろう。ショックで失神していてもおかしくない。

だが、今の隊員に痛みを感じる素振りはありません。

口から漏れ出す不快な音波は苦悶に喘ぐソレではなく、まるで地獄の悪霊のような、悍ましい濁った呻き声だ。

元隊員は原形を失った足を引きずりながら前進を続ける。

残された左腕を伸ばし、レンズの割れたマスク越しに濁った視線を定めながら、目に映る食料<sup>ハンク</sup>を喰らおうと進軍する。

(通路幅目測4m。背後は行き止まり。壁は音の反響を抑える材質で出来ているが、炸薬音で活性死者を招き袋のネズミにされる可能性がある。現時点での発砲は下策。標的は一体で、負傷により機動力を欠いている。――ならば)

思考に割いた時間、わずか1秒にも満たず。

次の瞬間、ハンクはLE5を背中へ担ぎ直すと、隊員へ向かって一直線に突進した。

隊員がハンクへ掴みかかろうと雄叫びを上げる。その左腕が伸び

た刹那、ハンクは腕を掴んで捻り上げた。

関節を回し、容易く隊員の背後を取る。

間髪入れず右膝関節に蹴りを叩き込む。崩れ落ちたゾンビの隙を突き、ハンクは頭部を包み込むように腕を回すと、一切の躊躇なく首の骨を回転させた。

死神のネックツイストは脊髓を完膚なきまでに粉碎し、ゾンビの活動能力をあっという間に奪い去る。

(対象沈黙。周囲に敵影なし。任務、続行可能)

銃火器を構え直しながら、ハンクは忍者のように気配を消しつつその場を後にした。



どこもかしこも地獄のジオラマのようだった。

目につくすべてに命はなく——厳密に言うところには彼らはあくまで病人であり死者ではないのだが、ともかく、かつて確かに存在したであろう人の賑わいは血の海と死臭の底へ沈み、最新の設備や科学技術に恵まれたアンブレラの根城も、歩く屍の巣と化していた。まさしくNESTと言ったところか。

ハンクは歩く。人を喰らう怪物が練り歩く通路を巧みに進み、出来る限り発砲を避けるルートを辿る。

ひとつひとつ、活性死者の手首を検閲しながら。

(中央区の非常用エレベーターを動かすにはマスターレベルのリストタグがいる。地位のある研究員なら持っただけでもおかしくない。そいつを探さなくては)

ハンク自身、NESTへ侵入してバーキンと接触するにあたり、アンブレラ本社からマスターキーとでも呼ぶべきチップを支給されていた。

だがそのチップはGバーキンの一撃で破壊されてしまっている。隊員の死体も同様だった。

不幸中の幸いというべきか、ここはNESTの中。そして恐らく職員は全滅している。現地調達は比較的容易い部類だろう。

(……ん?)

近くの部屋からひとつひとつ念入りに探索していると、ゾンビ独特の呻きとは違う、悲痛な声が聞こえてきた。

サブマシンガンからハンドガンに装備を変える。にじり寄るように音源へと近づいていく。どうやら書類や研究材料が乱雑にばらまかれたデスクの後ろにいるらしい。

回り込むと、そこには首元を布で抑えながら苦痛に喘ぐ研究員が机の下に隠れていた。

生存者だ。しかし噛まれている。襟元は自身の血液で赤黒く染まっけていて、出血の影響か顔面は蒼白だ。噛まれた箇所を基点とするように血管が一部黒く浮き上がっており、もう長くはないと悟らせるには十分だった。

「あ、アンタ、U. S. Sだな? アンブレラが寄越した救援隊か……?」

研究員はハンクを見定めると、懇願するように声を振り絞った。

「頼む、頼む、助けてくれ。ちくしよう、いきなり首を噛まれたんだ。きつと感染してる。けれどP-4レベル実験室に行けば抗ウイルス剤がある。まだなんとかなるんだ……!」

彼の手首にはマゼンタ色のリストタグが括り付けられていた。どうやらNESTの幹部クラスの研究員らしい。瀕死の重傷を負ってなお状況を冷静に分析しているところから、知性の高さが伺える。

ハンクはチラリと周囲の様子を確認した。

この部屋は密室で、防音仕様に抜かりはなさそうだ。

「ここからそう遠くない。頼む、私をそこまで連れて行ってくれ! 礼ならいくらでもする!」

「抗ウイルス剤があると言ったな。Gウイルスのサンプルはあるか?」

「は? G? バーキン博士のアレがなんだと——おいまさか、アンタひよつとして……いや、アンタの立場なんてどうでもいい。どうせNESTは終わりだ。ああ、私を連れて行ってくれるならGでもTでもくれてやる。このキーさえあれば取り出せるさ!」

震える手を動かし、必死にポケットからキーを取り出す研究者。

ハंकは一考ののち、再び無線を起動した。

「こちらハंक。司令部、応答せよ」

『こちら司令部』

「生存者を発見した。NESTの幹部だ。しかし感染者の攻撃により、首に噛傷を負っている。指示を」

『了解。容態の詳細を求む』

「意識ははつきりしているが、少なくともウイルス曝露から24時間近くは経過。創傷周辺の血管が膨張し、黒く染まっている。眼球の白濁、出血によるチアノーゼの所見あり。体力を摩耗しており、微細な腕の痙攣も見られる」

『了解。報告の衰弱レベルでは抗ウイルス剤を用いても生還不可能だ。救助は任務に支障を来しかねない。即刻、終了処分とせよ』  
「了解」

「お、おい。ちょっと待ってくれ、終了だと？　じよ、冗談だろう？

私はまだ助かる！　抗ウイルス剤さえあれば、抗ウイルス剤さえ手に入ればぶぎゅっ」

撃鉄の弾かれる音がした。

発射された9mm弾は血も涙も無く研究員の頭蓋を貫き、一息に命の終わりを与える。

魑魅魍魎として人の尊厳を奪われるよりは、温情ある処置だったのかも知れない。

(リストタグ、キー共に無傷)

崩れ落ちた研究員の手首からリストタグを外し、自身の左腕に装着する。握っていた小さなカード状のキーの回収も忘れない。

踵を返し、ハंकは足早に部屋を去った。

脳裏に叩き込んだ地図を元に、一直線にエレベーターへと突き進む。

不幸中の幸いか、まだウイルスの汚染段階が初期であり、活性死者へ変異した感染者は少ない。今最も警戒すべきは、この施設で管理されていた生物兵器が脱走した可能性である。

いっどこから襲い掛かれても対応できるよう、緊張を緩めず、油断を許さず、しかし呼吸は乱さず動く。死神が死神と呼ばれるようになったのは、ひとえにこの冷徹なまでの判断力と精神力の賜物だ。

(エレベーターは使えるな)

リストタグでAIの監査をパスし、ボタンを押してNESTの深部へと移動する。

ドアが開き、機械的に西へ向かう。

道中、明らかに飛沫の異なる夥しい血の海が、両手を広げてハンクを出迎えた。

(……血痕がホースで水を撒いたように広がっている。通常の出血量じゃない。まるで体を真っ二つにされた残滓のようだ。死体がないところを見るに、持ち帰ったか)

アンブレラが生み出した猛獣の気配を感じとりながら、天井にも警戒を寄せてハンクは進んでいく。

やがて、ひととき異質な雰囲気を放つ部屋を発見した。

冷凍睡眠装置管理施設。ドアにはそう刻まれている。

(ここか)

手動のドアを開き、さらに先の自動ドアも潜る。二重扉という厳戒態勢が、研究施設独特の異世界めいた不気味さを漂わせた。

通り抜けた先には、電子機器の微細なモニターだけが光源を担う部屋が広がっていた。

寒い。防護服で身を固めていても冷感が肌を突いてくるのがよく分かる。

冷凍睡眠装置の影響か、それとも一部機器の故障によって冷気が漏れているのか。体感温度は外と比較にならないほど低かった。

構わず探索を続ける。部屋の中にはSF映画に登場しそうな2m余りのポッドが複数設置されていた。

いくつか空いているものもあるが、この中のどれかに『LISA—001』が保管されているのだろう。

(装置ごとの搬送は不可能。命令通り覚醒させて回収する他ないが……さて)

ひとまず、内部を確認できる覗き窓を使つて順番に調べ上げていく。

元々は凶暴な生物兵器を保管し、安全に目的地へ輸送するための装置である。そのせいか、どれもこれも異形の怪物ばかりが収められていた。

巨大な脳が剥き出しの、皮を剥がれた人間のような緑の生物。頭髪の無い灰色の肌をした大男。人と植物を融合させたかのような、悪趣味な観葉植物。

けれど肝心の少女の姿はない。本当に人間と瓜二つな姿をした生物兵器がいるのかと、思わず疑つてしまいそうな有様だ。

やがて、ハンクは最後のポッドの元へと辿り着く。

傍には女性研究者だったものが転がっていた。

念のため、銃器の先で小突いてみるが反応はない。室温が低いのもあつて細胞の活性が鈍っているのだろう。完全に活動を停止している。

無視し、中を覗き込む。

そこには、司令部の情報通り、人間と瓜二つの生物兵器が眠っていた。

本当に年端もいかない少女である。ポッドがあまりに大きすぎて、設計を間違えた棺桶を彷彿させるアンバランスさだった。

ガスマスクのレンズのせいで髪の色は正確に分からないが、明暗の具合からしてきつと銀髪だ。ハンクは装置の制御盤を操作し、指示された暗証番号を入力する。

『解除コードの入力を確認。ポッドの開放、保管個体の覚醒シーケンスを起動します。冷気の排出に伴い凍傷の危険があるため、適切な距離をとってください』

機械音声のアナウンスが流れ、直後にけたたましい警告音が鳴り響いた。同時にプシューッという駆動音と共にポッドの蓋が開いていく。

足元に冷気が蔓延する。機械が正常に中身を凍らせていた証だった。

『保管個体の覚醒を促進。30秒後に覚醒予定』

眠る少女が露わになる。

簡素な無地の衣服だけを身に纏う、雪のように白い肌と白銀の髪をした、全体的に色素の薄い女の子だ。

ハンクはアンブレラに携わる者として、少なからずB・O・Wと接触、あるいは資料を介して情報を得ることがある。

だがこれほどまでに人間と近い容貌の兵器は目にしたことは一度も無かった。この完成度なら、民衆や社会へ溶け込むのもT-103型より容易だろう。

加えて、幼い少女の姿には人間の警戒心を薄れさせる働きまで見込める。これに知能も高いと来れば、実に理に適った実用性を持つ兵器と言えよう。アンブレラが生きたまま欲しがらるわけだとハンクは納得した。

——その時、妙な違和感がハンクを襲う。

装置の淵に血痕が付いている。それも粘質だ。過去についた痕跡ではない。

まるで、たった今上から滴り落ちてきたばかりのような。

(……まづいな)

寸分の迷いも無く銃口を天井へ向ける。

ハンクの読み通り、そこには唾棄すべき異形がガチガチと牙を打ち鳴らしながら、鋭い爪を駆使して貼り付いていた。

全身の皮膚が剥がれ落ち、肥大した筋組織が剥き出しになっている怪物だった。

ウイルスの影響で脳も肥大化したのか、頭蓋骨を破って完全に外気へ露出してている。

なにより異様なのは、口腔から伸びる長い舌だ。まるで口の中に蛇でも飼っているのかと言わんばかりの、あまりにも長すぎる舌がうねうねと宙を彷徨っている。

異様で特徴的な外見を、ハンクは資料で目にしたことがあった。

感染者は通常、ウイルスの影響で加速する新陳代謝に栄養補給が追



いつかず、緩やかに体組織を腐らせていくのだが、逆に十分な栄養を摂ることが出来た場合、組織が再編成されることで全く新しい生物に変異するという報文を。

獣のように発達した四肢と、人間を一撃で切り裂くほどの鋭い爪。人間ベースとは考えられない圧倒的な敏捷性。

なにより、人を容易く貫けるほどの殺傷力を秘めた槍のような舌。間違いない。舐めるもの<sup>リツカー</sup>という俗称を着けられた感染者の変異体だ。

それも体色が緑色をしていることから、自然発生したものではなくアンブレラが開発した『改良型』だろう。

(こいつは肥大した脳で視覚を潰された代わりに聴覚が異常発達している。ポッドからダクトへ脱走した個体が、機械音声を聞きつけて戻って来たのか)

しかし、どうやら怪物はハンクの存在に気づいていないらしい。あくまで機械の音に反応してきただけのようだ。

リツカーが侵入したと思わしき通気口へ視線を超越す。

追加で現れる気配はない。部屋の中を探っても、居るのは天井の一体のみ。

引き金へ添えられた指に、ほんの少しだけ力が籠る。

(気付かれていない内に仕留めるか……？ いや、奴の機動力を考えると仕留めきれなかった時のリスクが大きい。正確に脳天を狙撃するには距離がある)

『覚醒までの予測時間、残り15秒』

(……音に近づいて来た時を狙うか)

濃淡の無い音声が異形の鼓膜を刺激する。カチカチと肉を削ぐことに特化した牙を鳴らしながら、機敏な動作で壁伝いに降りてくるリツカー。

対象までの距離、目測5m、4m、3m……—発砲。

ガガガッ!! とフルオートマシンガンが唸りを上げる。極限までブレを削減された精密射撃は、命を狩る無数の弾丸を正確無比にリツカーの脳天へと浴びせかけた。

断末魔の金切り声を張り上げ、壁から剥がれ落ちる異形。流石の生物兵器も脳脊髄をミンチにされては耐えきれず、呆気なく絶命を果たしてしまう。

だが油断するには早い。Tーウィルスで製造された生物は驚異的な再生能力と生命力を発揮する。念のため、もう一発心臓へ弾を打ち込んだ。

反応はない。確実に生命活動を停止している。

『覚醒シークエンス完了。保管個体の覚醒に成功しました』

再度周囲をクリアリングする。追加でやってくる気配は無い。傍の女性研究者の死体も動くそぶりを見せない。

安全は確保されたと判断し、振り返ってポッドを見る。

——生物兵器の姿が消えていた。

「!?」

流石のハンクもほんの少しだけ動揺した。動揺せざるを得なかった。

おかしい。さつきまでここに横たわっていたはずだ。中身が存在していたのはハッキリと確認している。絶対に見間違えたはずはない。

ならば、どうして。

「……………」

360度、銃を構えながら確認を再開する。軍用ライトを点灯させ、鮮明な視覚を確保していく。

カムフラージュ能力か？ ——そんなハンクの予想と反し、ターゲットがどこに居るのかすぐに分かった。ハンクの右手方向、未開放の冷凍睡眠装置の影にソレは隠れていたのだ。

ライトの光を照り返す、白銀のような髪色をした少女だった。外見的特徴から『LISA—001』で間違いない。

眩しように目を細めている彼女からは、どこか怯えに似た感情を受け取った。不安そうに物陰に半身を隠し、びくびくとハンクを観察している姿はまさしく人間の子供である。本当にリツカー改と同じ生物兵器なのかと疑わざるを得ないほどだ。

司令部の言っていた通り攻撃性は低いと判断したハンクは、ライトを切り、銃口を降ろした。

どうやって干渉しようか思案する。年端も行かない少女の姿をしていても、『LISA—001』は人智を越えた兵器だ。強制的に連行するのは不可能なのはもちろんのこと、下手に刺激して敵対心を煽れば任務に支障をきたしかねない。

だからハンクは、素直に言語でコンタクトを試みることを選択した。

「言葉が分かるそうだな」

膝を着き、遠くの少女と目線の高さを調節する。

「怯えなくていい。私はハンク。お前を助けに来た者だ。……意味は分かるか？」

数拍の後、少女はコクコクと首を縦に振った。

警戒心は解けていない。きっと、漆黒のガスマスクと戦闘服に包まれたハンクの姿が異様に映るのだろう。

子供とは見たことのないものに対し、好機を抱くか不安を覚えるかの二択である。彼女はどうかやら後者らしかった。

だがマスクを脱ぐことは許されない。T—ウイルスの拡散初期段階である以上、空気感染する恐れがあるからだ。

証拠に、女性研究者の遺体には皮膚の腐敗は見られても外傷はなかった。彼女は空気感染で発症し、息絶えたのだという証拠だ。

「ここは危険だ。そこに転がっている怪物が施設内をウヨウヨしている。私と来い、安全な場所まで連れて行く」

「！！！」

「……もしかや、喋れないのか？」

身振り手振りで何かをこちらへ伝えようとしている。だが動作が小さすぎてよく分からない。

ジェスチャーを使えるということは、一応の意思疎通は成功しているのだろう。ハンクは腰を上げ、少女へ近づこうと一歩を踏みしめ――

「り、やっ」

——濁音の混じる声でした

「りぎ、り、ぎ、りいいいいいぎああああ……」

音の発生源は背後だった。ハンクは反射的に振り返りながら銃を構え、素早く標的から距離を取った。

正体は沈黙していたはずの女性研究員だ。タイミング悪く覚醒したらしい。それを『L I S A—001』は伝えたかったのだろう。

白内障のように濁った眼でハンクを睨みながら、よろよろとした動きで迫ろうとする感染者。

だがやはりというべきか、室温が低いせいで満足に活性が進んでいないようだ。平均的なゾンビと比べても遥かに遅い。

引き金を引こうと、ハンクは人差し指に力を籠める。

「だめっ！」

不意に背後から衝撃を受け、ハンクは咄嗟に引き金から指を離れた。

衝撃の正体は『L I S A—001』だった。ハンクの射撃を、どういうわけか食い止めたのだ。

「だめ、だめ、だめ！」

首を横に振りながらしきりに抵抗を示している。あの感染者を撃つなど言っているらしい。

「だめ、だめ、やだ、やだ……！」

何度も何度も同じ言葉を繰り返す少女。生物兵器としては破格の知性だが、言語能力はまだ不十分なようだ。単語単語でしか話せていない。

「知り合いか？」

殺害に対する明らかな拒絶を見て、ハンクは少女と感染者の関係性を察知する。

この手の事件ではよくあることだ。

親しい存在が人間を喰らう怪物となり、それでも現実を受け入れることが出来ず、助からないと知りながらも殺すなど懇願してくる光景は。

例に漏れず、この生物兵器にとってのソレが今らしい。生物兵器にも関わらず親愛を示すとは、未だかつてない体験だった。

少女は言う。必死に振り絞るような、震えた声で。

「ママ。ママ」

「母親……お前の開発者だったのか」

「ママ。だめ。だめ。やだ。やだあつ……」

涙を蓄えながら懇願する少女の姿を横した兵器。その素振りには、舌足らずな子供と変わらない。

ハंकはこんな光景を何度も目にしてきた。

客観的立場だけではない。自分自身、チームの一員が感染して襲い掛かられたことは何度もある。

その度に死神は永劫の眠りを届けてきた。例えチームの家族だろうがハंकを知る者だろうが、感染したなら容赦はない。すれば自分が食われるのみだと知っている。

しかし、今回のケースにおいて手を下すのは愚策だとハंकは判断した。

ここで母親にあたる感染者を始末すれば、『L I S A—001』が予期せぬ暴走を引き起こす危険がある。

感受性が人の子に近く、内に秘める力が怪物ならば、圧倒的な破壊を伴う痼癩の的にされるなど想像を絶する悪夢でしかない。

幸い標的の動きは遅い。それこそ、石像が気合だけで動いているかのようなものだ。

ハंकは静かに銃口を下ろし、少女へと目を遣った。

「いいか、『L I S A—001』。あれはもうお前の母親じゃない。母親の姿をした別のものだ。ああなったら元に戻る方法はない」

「……っ」

「彼女にしてやれることは二つに一つ。殺すか、見逃すかだ。分かるな?」

「う、う」

「これが最後の機会だ。今のうちに別れの挨拶を済ませておけ」

聞いて、ゆつくりと。少女はハंकから離れていく。

俯きながら、静かに、静かに、少女は母親だった活性死者へと近づいていく。

「……まま」

「りぎあ、りいいいいぎああああ」

『LISA-001』の略称を鳴き声にする、かつて研究者だったものの。

初期段階の感染者はまだ破壊されきっていない前頭葉の影響で、生前の通勤通学路などを徘徊したり、我が家に留まるといった、記憶と関わる行動をとる場合がある。

ケースは違えどこれも同じだ。この女性研究者にとって、『LISA-001』とは相当思い入れ深い存在だったのだろう。

兵器の担当者としては失格という他にはないが、例えウイルスに脳を破壊されても、我が子を想うが如く名を叫ぶほどだったか。

その悲痛な木霊に、少女は目元を腫らしながら応える。

「……ありが、とう。ばいばい」

精一杯の感謝を伝え、少女は母だったものと訣別する。

こぼれ落ちる雫を拭う。何度も、何度も、袖を濡らす。

それでも、しばらく雨は止みそうにない。

「別れは済んだか」

一拍のち、嗚咽と共に首肯。死神は冷徹に意思を受け取り、脳裏へ次の行動への算段を立てる。

「では行くぞ。時間が経てば経つほど、ここは危険になる」

少女の姿をした兵器を連れ、ハンクは冷凍睡眠装置の管理室を去っていく。

その背中を追うように、彼女は腕を伸ばしながら叫んでいた。

## Chapter 1

### 暗澹の巢

「司令部。こちらαチームハンク。『LISA-001』を保護した。これよりP-4レベル実験室へGウィルスの回収に向かう」

『了解。よくやった。引き続き任務を遂行せよ』

無線を切り、冷凍睡眠装置の管理施設から遠ざかっていく。

ここは西エリアだ。このまま上層へ登った方がP-4レベル実験室に近い。ハンクは往路の非常用エレベーターではなく、通常時に使われているだろう西エリアのエレベーターを選択した。

エレベーターの元まで辿り着き、スイッチを押す。無音で開いた箱の中へ少女を招き、ハンクも追って入室する。

強化ガラス製のドアが閉じ、エレベーターが上階へ向かうよう再度スイッチを——押す前に、ハンクは背を向けながら少女に向けて言った。

「私の仕事はお前をここから連れ出すことだ。仕事を全うするため、お前には約束を守ってもらう」

「……？」

「ひとつ、騒ぐな。ふたつ、勝手な行動をするな。みつつ、私の指示に従え。いいな」

淡々と、作業的に告げるハンク。

言うまでも無いが、わざわざこんな事を告げたのは任務を効率よく進めるためだ。

出会って数分足らずだが、彼女の性格が内向的なのは把握した。しかし、だからといって何もしないと決まった訳ではない。何かの拍子に騒ぎ出すかもしれないし、子供特有の好奇心に負けて、ひとりどこかへ消えてしまうかもしれない。

『LISA-001』の運動能力は、ポッドからハンクに気取られず脱出した時点で相当高いことが伺える。彼女はあくまで生物兵器であって人間ではない。本気を出せば、舌の長い怪物のように縦横無尽

に飛び跳ねてダクトの奥へ消えていく、なんて真似も十分可能だろう。そうなったらハンクでも追跡は困難だ。

だから規範を設け、予め行動を縛る。

いっつどこで魔の手が襲ってくるかも分からない戦場に身を置いている以上、『LISA—001』の動向ひとつが命とりになりかねない。それを抑制するための規範だ。言葉が通じるイレギュラーだからこそ、出来る芸当だと言えるが。

「う、う」

しかし、未だ女性研究者と死別した現実を拭えないのか——子供の精神なら無理もないが——少女は俯きながら、黙りこくってしまったている。

無音の世界に鼻を擦る音が混ざる。親とはぐれてしまった子供のような嗚咽が絶えない。

「……」

ハンクは振り返り、膝を折って、腫れぼったい顔をしている『LISA—001』と目線を合わせた。

「死にたくなければ泣き止め」

諭すように、死神は言う。

煩わしさからくる脅迫ではない。忠告だ。

そんな有様では脱出は不可能だという、彼からの忠告だった。

「お前がどんな環境で育ったかは知らないが、平和なNESTはとっくに消えた。ここはもう戦場と変わらない。怪物が往来跋扈する地獄になったんだ」

「……」

「戦場に大人も子供も無い。最後に頼れるのは自分だけだ。死にたくなければ——母親の死を無駄にしたくなければ、余計なエネルギーを消耗するな。己の身一つで道を開ける状態を常に整えておけ」

真っ赤なレンズの奥の瞳を、じっと見つめる銀髪の少女。

言葉を咀嚼するように、少女は涙をぐしぐしと拭う。小さくどだが、しつかり頷き首肯を示した。

ハンクは腰を上げ、踵を返してスイッチに手を伸ばす。



その時だった。ブウン、と古い蛍光管の断末魔のような音が聞こえたかと思えば、NEST全体がゆったりと暗黒に包まれたのである。停電だ。タイミング悪く、主要電力源に問題が発生したらしい。

(ラクーンの変電所でトラブルか？ それとも送電経路に何かあったのか)

しかし、その解釈はすぐに誤解であると判明する。

もしそうだとしたら、NESTを管理している人工智能が直ちに非常用電源へ切り替えるはずだ。なのにその気配が一向に無い。数分間待機したものの、結局暗闇が晴れることはなかったのだ。

ということは、停電の原因はラクーンシティ側ではなくNESTの電力供給システムそのものにあるのだろう。

(……階段を使っても実験室は全て電子ロックで封鎖されている。電気を戻さなくてはサンプルの元まで辿り着けない。やむを得ん、電源を確認するしかないか)

そうするためにも、まず密室と化したエレベーターからの脱出が必要だ。

ハンクはライトを点灯し、エレベーターのロックを手動で解除できるフックが無いか確認した。

だが見当たらない。スイッチの付近や電子パネルの下にもない。どうやらエレベーター内には無さそうである。

秘密裏の施設と言う立場上、ほぼ自治的に運営されているNESTだからこそその弊害とでも言うべきか、外部からの助けなく長期間閉じ込められるというケースは想定されていなかったのだろう。

幸い、まだ最下層から移動していない。ドアさえ開ければ行動出来る。

ただしドアの構造上、手動でのこじ開けは不可能だ。強化ガラスを破るしかない。

「離れている。身を低くして頭を庇え」

MUPに切り替え、セーフティを解除しながら指示を出す。少女は言われた通り頭を抱えながら、一番後ろまで下がってしゃがみこんだ。

直後、数回の発砲音が響く。強化ガラスのお陰で跳弾は起きず、叩き込まれた弾丸はガラスの中に食い込み一気に亀裂を拡散させた。ひび割れたガラスを蹴り破る。派手な高周波が無音の空間を劈き奔る。

直後、この世のものとは思えない金切り声が遠方から爆発する。怪物だ。気付かれた。

しかし想定通りだ。聴覚が強化されているリツカーにとって、今の破壊音は朝食を知らせる食堂のベルに等しいと知った上での行動だ。

「動くな、『LISA-001』。そのままじっとしている」

ヘッドライトに切り替え、LE5を構えて標的を待つ。

獣の爪が壁や床を引っ掻く音が聞こえる。それはどんどん、尋常ならざる速度で近づいてくる。

音の濃淡から10m圏内に怪物がいると推測し、ハンクは手榴弾を暗闇へ向かって投擲した。

瞬間、爆熱が闇を食い破ると同時に、至近距離にいた一体の半身が弾け飛んだ。さらに拡散された殺傷性の破片が、中程度の距離にいた個体の体表へ容赦なく突き刺さり動きを止める。

唯一射程距離外にいた個体が、人間を容易くスライスする大仰な爪を振り上げながら、ハンクに向かって飛びかかった。

冷静に半身をずらしつつ無数の射撃を叩き込む。弾丸は頭部を中心に怪物の肉を削ぎ落とし、瞬く間に蜂の巣へと加工する。

空中で体勢を崩され、しかし勢いを止めることが出来ず吹っ飛んでくるリツカー。ハンクは飛来する亡骸を蹴り飛ばし、肉塊がエレベーター内へ着弾することを阻止した。

瞬時に標的を変える。破片のダメージから復帰しつつある個体に更なる銃撃を浴びせ、完全に沈黙させた。

リロードを行う。空の弾倉を懐へ仕舞いながらも、周囲へ五感を張り巡らせるのも忘れない。

「クリア」

沈黙を浴びる。追撃がやってくる気配は無い。

ハンクはようやくやく臨戦態勢を解いた。

(……好ましくない状況だな)

心の内に吐き捨てる。停電が招くだろう、これからの障害たちへの懸念だった。

全施設が停電に見舞われているならば、当然B・O・Wを保管してある設備も全てシャットダウンしていることだろう。ハンクが目覚めた時点で既に脱走の痕跡を複数発見したというのに、追い打ちを掛けるが如く全ての隔離が解放されてしまったとくれば、この暗澹の底に沈んだNESTがどのような意味を持つのか想像に難くない。

視界不良。装備不十分。おまけに保護対象まで有り。そしてNESTは、文字通り怪物の巣と化した。

絶望的。それ以外に現実を表す言葉はない。壁を縦横無尽に這い回るリツカーのみならず、まだ未遭遇の生物兵器まで徘徊しているとくれば、天井の通気口のみならず何も無い壁や天井だって一瞬も油断できない状況だ。

しかもハンクにとってのデッドラインは一撃だ。そう、たった一撃なのだ。

たかが指の逆剥け程度でも、感染体から傷を受ければ死と同義である。T-ウィルスに侵食され、いずれ自我の無い化け物に変わる運命が待つのみとなってしまふ。

絶対に攻撃をもらってはいけない。ただの一度も攻撃をもらわず、作戦を遂行しなくてはならない。

そんなハンクの立場において、停電は最悪に近いシチュエーションだった。

(電源はどこだ。NESTはどこで電気をコントロールしている?)

それでもハンクは怯まない。ただただ最善の行動を模索する。

地図を脳裏に復元させる。作戦に使った経路を基準に、電力源がどこにあったかを思い出す。

確か、動力源は中枢にあった。それも最深部——ハンクがいる層のメインシャフトにブレイカーシステムが据えられていたはずだ。

新たな目標を設定したハンクは、すぐさま行動を再開する。

「来い、『LISA-001』」

呼び声に応じて、蹲っていた少女が動き出す。恐る恐るエレベーターから顔を出しながら、傍に転がる三つの肉塊を目にしてパチパチと唼を瞬かせた。

ハンクの元へ駆け寄る少女。ハンクは『LISA—001』の無事を確認すると、暗闇の進軍を開始した。

ひたひたという少女の足音以外、静謐に包まれた虚無を歩く。ふと、ハンクは背後の足音が急に途絶えたことに気がついた。

振り返る。やはり『LISA—001』は立ち止まっていた。どういう訳か、じいっと、背後の闇を見つめている。

視線の先には怪物の死体が転がっているだけだ。他には何も無い。怪物が追加でやってくる気配も無い。

ハンクに兵器の思考を読むことは出来ないが、彼女が死体を気にしているらしいことは分かった。

それも恐怖や嫌悪の類ではない。しかし好奇心ともまた異なる。まるで、鮮やかな花を見つけた蝶のように視線を奪われていた。

「何をしている。行くぞ」

「んう。う、う……」

ハンクと死体の間で視線を行き来させる少女。

葛藤のような色が見えた。ハンクの指示に従わなくてはいけないが、あの死体がどうしても気になる。そんな狭間で揺れているような表情だ。

「それは死んでいる。気を逸らすな、さっさと来い」

「……………」

少女は再度死体を一瞥して、今度こそハンクの傍へと戻っていた。



メインシャフトへの道中は比較的穏やかな道のりだった。

活動を始めている感染者はいたものの、まだ数が少なかったことが幸いした。活動前の休止段階にいるものがほとんどで、ハンクや少女

が傍を通っても指先一つ動かさないものばかりだったのだ。

だが油断は出来ない。やはり電源が落ちたせいか、目覚めたばかりの頃より明らかに生物兵器の気配が増している。

視覚を持たないリツカーだったからこそ無視が出来たと言える。これがハンターシリーズのような視覚に頼るB・O・Wだったら、狭い通路での乱戦を余儀なくされていたかもしれない。

(メインシャフトはここか)

巨大な空間の中央、四方から伸びる連絡橋の交差点に佇む、柱の身を割り貫いたような場所があった。

上層の清潔感漂うものとは一転し、金網を張り巡らされた作業効率優先の床だ。メンテナンスに携わるエンジニア以外が立ち入ることは滅多に無いのだろう。

中心には円状の機械がある。バチバチと火花が散り、盛大なショートを起こしていた。

その渦中には作業員らしき死体が覆い被さっている。よく見ると腕が機械の基部と接触しており、大電流の影響かドス黒く焦げていた。

(コレのせいでブレーカーシステムが故障したらしい。何があった?)

ひとまず死体を退かす作業に移る。まともに触れれば感電の恐れがあるので、死体を蹴り飛ばして処理した。

一際強く火花が弾ける。ほんの少しだけ施設に通電の兆しが見えたが、しかし、完全に明かりが戻る気配は無かった。明らかに脆弱だ。(駄目だ、ヒューズがイカれている)

ブレーカーシステムが、最後の力を振り絞って壊れたヒューズを排出した。触れられないほどの熱が放散されるのを待ってから、ハンクはそれを回収する。

大きく、特徴的な形状をしたヒューズだ。まるでSF映画に登場するロボットの部品のようなのである。このブレーカーシステムに合わせて造られた特注品なのかもしれない。

(予備を探さなくてはならないが、さて、どうする)

困ったことに、ハンクには部品の在処にアテが無い。完全な手探りだ。しかもこの暗闇の中とくれば、いくら巨大なパーツとはいえ搜索は困難を極める。

冷静に、ハンクは部品の構造から予備の在処を考察する。

研究所の電力を担うほどとなれば、きつとこのヒューズは大電力に耐えられるような超伝導体で製作されているだろうと推測した。であれば、状態を保持するために低温下で保存している可能性が高い。

意図的に温度を下けている場所があるとすれば、東エリアの低温実験室か『LISA-001』を覚醒させた冷凍睡眠装置管理施設のどちらかである。

思考に耽っていると、何やら視界の端でゴソゴソと動いている姿が見えて、ハンクは少女の方へ振り向いた。

死体の服から何かを取り出そうとしている。紙だ。ポケットの中に突っ込まれている紙を取り出そうとしていた。

「何をしている」

「これ」

少女は紙を取り出すと、ハンクへそつと手渡した。

焦げている箇所もあるが、ブレーカーシステムに関するマニュアルだ。簡略ながら、機械や各部品の取り扱いに始まり、メンテナンス法まで一通り記されている。

目を通してみると、やはりヒューズは低温下で管理しているらしかった。しかもヒューズケースを装着するには、低温下で装置を使つて行ふ必要があるらしい。

ハンクは消去法的に低温実験室にあるだろうと推測した。『LISA-001』を目覚めさせた部屋にはポッドと管理コンピュータがあるだけで、ケースを装着できそうな装置など見当たらなかったからだ。

「よくやった。低温実験室に向かうぞ」

「ん」

僅かに喜色を浮かべ、首肯する少女。

ハンクは横を通り抜け、東エリアに向かって歩き出す。

階段や梯子を使い、散乱した障害物を乗り越え、やがて最下層東エリアへ辿り着いたハンクたち。どこかに上層へ続く道は無いかと探索を続けていく。

(……駄目だな。正規の道は無い)

これほど広大な施設となれば、ハンクが把握していない非常口のひとつやふたつあるかと踏んでいたのだが、予想を外れてどこにも存在しなかった。どうも上層の連絡橋だけが東エリアに続く道らしい。

しかし、今のNESTは電力が途絶えている。もし連絡橋が格納されていた場合、開通させるのは不可能だ。どちらにせよヒューズを先に調達しなくてはならなくなる。

そこでハンクは考えた。この施設全体に張り巡らされていて、直接的にも間接的にも繋がっている裏道を。

そう。ウィリアム・バーキンを奇襲した時と同じく、ダクトを通じて東エリアへ向かうという作戦だ。

(恐らくダクトは既にB・O・Wの獣道になっている。リスクは遥かに大きい。『LISA-001』を同行させるなら尚のことだ)

目を離れた隙に逃走される可能性がある以上、少女を置いて東エリアへ向かうことは出来ない。必ず同行させるしかない。

だがダクトは未知の脅威でいっぱいだ。あのような閉鎖空間でリッカーに挟み撃ちにもされたら、生き残れる保証はない。

(だがやるしかない。任務を遂行するには、ダクト以外に道はない)ハンクは即決で判断した。すぐさま傍の通気口を探し、周囲を確認

してから『LISA-001』を下がらせ、蓋のボルトを銃撃する。盛大な金属音が鳴り響く。しばらくダクトの様子を見守った。怪物と鉢合わせになる危険を避けるためだ。

数分経ち、何もやってこないことを確認して、ハンクは傍の障害物を積み上げて足場を作り出していく。

先にダクト内の安全を確認し、まずは少女から登らせようと選択した。

「入れ」

手を伸ばし、抱えようと促す。しかし少女は手を受け取らなかった。

た。

少女はなんと、自身の三倍以上も跳躍してダクトの縁を掴み、そのまま中へとよじ登ってしまったのである。

腐ってもB・O・Wか——ハンクは改めて、『LISA—001』が人ではないと認識する。

「ん」

ダクトの中から見下ろし、まるで物陰に隠れ潜む猫のようにハンクを待つ少女。

ハンクは手持ち無沙汰になった腕を引っ込めると、少女に続いてダクトの中へと侵入した。

狭いと言えども、やはり大施設スケールのせいか比較的広い。ハンクでもかがめば十分歩けるレベルだ。背の低い少女にとってはただの道でしか無いだろう。

「警戒を怠るな。背後から音がしたら、私に知らせてすぐに伏せろ」  
注意を促しながらダクトを歩く。目的は東エリア中層、低温実験室だ。

角を曲がり、婉曲した金属の坂を『LISA—001』の手を引っ張りながら乗り越え、的確かつ着実に進んでいく。

状況は全く別だが、ハンクはまるで任務が振出しに戻ったような錯覚を覚えた。バーキンにコンタクトを取った時も、こうして気付かれないように進んでいたものだ。

「はんく」

舌足らずな声で名を呼ばれ、行進を止める。

静かに振り返ると、少女は怯えの顔色を浮かべながら後方を指さしていた。

少女のか細い指先が、狭苦しい金属の檻で蠢く物体を示している。遠目過ぎてよく分からないが、うねうねと蛇のようにつたうつ、しなやかなナニカだった。

やがて、ハンクは配管の隙間から無数に這い出てくるソレの正体を知る。

(まさか)



植物だった。植物の蔓<sup>ツル</sup>だった。

信じ難いことに、本来なら易々と動けるはずがない植物が、まるで意志を持った動物のように驚異的なスピードでダクトへ侵入してきていたのである。

それも、ハンクたちを捕らえ養分に変えんと言わんばかりに、明らかな殺意を向けながら。

『L I S A—001』、急げ！』

アレの正体が、東エリアで研究されている植物ベースのB. O. W、プラント43だと直ぐに理解した。停電が原因かは分からないが、何らかの原因で暴走し、テリトリーへ侵入した獲物である彼らに襲い掛かって来たのである。

植物型生物兵器に通常火器は通用しない。それもツルが相手では銃器など何の意味もなさない。

声を上げて『L I S A—001』を誘導し、ハンクはダクトを全力で駆け抜ける。

植物の侵食スピードは、ハンクの想像を遥かに超えていた。

さながら悪意を手に入れた蛇だ。狡猾に、確実に、僅かな隙間からでも侵入し、ハンクと少女の足を絡め取らんと溢れ出す。

穏やかだが必殺の猛攻を間一髪で掻い潜る。足や腕に絡みつかれそうになればナイフを振るい、『L I S A—001』を援護して、低温実験室へと突き進む。

「ッ」

目標地点まであと十数メートルを切った矢先、ハンクと少女は逃亡にブレーキをかけた。

原因は前方だ。彼らの行く手が、忌むべき植物の塊で埋め尽くされていたのだ。

しかもただの塊ではない。肉と植物の融合体とでも言うべき、悍ましすぎる物体だった。

リツカーだ。無数のリツカーやNESTの研究員が獰猛な植物の網に捕らえられ、ダクトの中へ引き摺り込まれた成れの果てだったのだ。

道理で怪物が現れなかったものだとハンクは理解した。東エリア付近に侵入した怪物は、この怪植物の餌になっていたのである。

(東エリアも既に崩壊していたか。だがヒューズを回収しなければ任務の遂行は不可能。何が何でも手に入れなくてはならない)

ツタは獲物の皮膚を破り、肉を侵し、ぐじゅぐじゅと生理的嫌悪感を催す粘質な音を立てながら、体という土壌から養分ちにくを存分に吸い上げていた。

背後から迫る追手に捕まれば、次にあの姿となるのは自分自身で間違いない。

瞬時に視点を切り替え、真下の通気口を渾身の力で蹴り飛ばす。二度、三度、ストンプを加える度に金網は歪み、遂に活路は開かれた。

獲物の気配を辿って植物が迫る。ツタ先端部の花のような形をした捕食器官が、粘液を引きながら口を開いた。

ハンクは少女を抱えると、躊躇なくダクトの外へ身を投げた。

## 遺志を

間一髪で怪植物の襲撃から逃れたハンクたちは、東エリアの一室に避難していた。

未だ植物の侵食が及んでいない領域だ。どうやらプラント43は温室を中心に一定範囲を縄張りに行っているらしく、索敵範囲さえ振り切れれば深追いされることもなかった。

ひとまず、遁走で消耗したスタミナを整えながら現状を分析する。

(記憶が正しければ、低温実験室までそう距離はない。ヒューズを回収して戻ればいい話だが、問題はダクトを巣食っている植物だ。アレをどうにかしなければ帰路を確保できない)

電気が通っていない以上、東エリアからメインシャフトへ戻る正規ルートが使える保証はない。仮に使えたとしても、連絡橋まで辿り着くには温室を突破する必要がある。

言わずもがな、強行突破など愚策中の愚策だ。温室はプラント43の根城であり、そんなところを通り抜けようものなら食虫植物に誘われた蠅よろしく養分にされるのみである。

やはりダクトを使って戻らなくてはならない。そのためにも、植物を食い止める何らかの方法が必要だ。

しかし今のハンクが持ちうる情報や武器で打ち立てられる策は無い。ひとまず植物の対抗策は隅に置き、ヒューズの回収に専念しよう  
と決断する。

「休憩は終わりだ。行くぞ」

声を掛けたところで、ハンクは少女の些細な異変に気付く。

少しだけ足取りが不安定だった。ほんの一瞬だが、僅かにフラリと傾いたのである。

疲弊の兆候だ。人間より遥かに頑強なB・O・Wが体力的に摩耗しているとは考え難いが、顔色からしても彼女は倦怠を帯びていた。

「どうした」

「……ん、う。だいじょうぶ」

微笑み、平常に戻る少女。

繕ってはいるが、無理はしてない。大方女性研究者との別離や環境の一変によるストレスのせいだろう。

しかしB・O・Wの取り扱いにおいて、最も警戒すべきは生命危機による暴走だ。

T―ウイルス型兵器の究極系たるタイラントシリーズを筆頭に、アンブレラの獣は生命活動が危険にさらされると、細胞活性のリミッターを外すことで予測不可能な暴走状態を引き起こすことがある。

ハンクは『LISA―001』がどの系譜のB・O・Wか知らないし興味も無いが、彼女が未知の突然変異を引き起こす可能性を秘めていることは重々承知していた。どれほど取り繕おうが、『LISA―001』は意思を持った爆弾なのだ。

だからこそ、彼女の戦闘機会を極力避け、ケアに余念を欠かさないうように動いている。

「異常があれば報告しろ。特に、お前の不調は任務の失敗を招きかねない。忍耐と無謀は別物だと肝に銘じておけ」

「うん」

少女への意識を緩めぬまま、ハンクは暗闇のNESTを歩く。

意外にもあつさりと、低温実験室へ続く扉の前に辿り着いた。

ただし電気が落ちていて自動ドアは開かない。電子ロックがかかったままだ。

（手動でこじ開けるのは不可能。銃撃も無駄に弾を減らすだけ。となれば……）

ハンクは腰元の手榴弾に意識を向けた。

手持ちの手榴弾は残り2つ。爆発の際に懸念すべきリッカーたちは殆どプラント43に捕らわれており、炸裂させたところで襲われる心配はない。

爆弾を使つての強行突破。それが効率的にも妥当かと判断する。

それを遮つたのは、黙ってハンクに付き添っていただけの少女だった。

「あけたい？」

舌足らずな言葉で簡素に尋ねる少女。どういう意味なのか、ハンク

は暫し困惑した。

言葉通りに受け取るなら、この少女は扉を開ける術を持っているらしい。生物兵器の腕力を駆使し、無理やりこじ開けるつもりなのかとハンクは訝しんだ。

「何をする気だ」

「ん」

ハンクの予想に反して、少女のといった行動は穏やかだった。

ドアに手を添える。ただそれだけ。殴りつけるわけでも、ロックを無視して引き剥がすわけでもない。本当にただ添えるだけだ。

たったそれだけの動作で、自動ドアは電子音の欠伸を一瞥しながら、独りでに開いたのである。

まるでドアが息を吹き返し、ハンクたちを迎え入れようとするかのように。

「!？」

流石のハンクも動揺を隠せなかった。むしろこれで驚かない人間など存在するだろうか。

N E S Tは停電に見舞われている。どこもかしこも暗闇と無音に塗り潰された沈黙の世界となっている。

その事実には違いはない。自動ドアが勝手に動き出すなんて有り得るはずがないのだ。

「何をした？」

「びりびり」

短く、抽象的な言葉で告げる少女。

それが『L I S A—001』の持つ、ある種の特性のようなものを表現しているとハンクは解釈した。

彼女は体内に何らかの発電器官を備えているのだろう。ロックフォード島で開発されたサンショウウオベースのB・O・Wのように、筋肉組織の変異によって発電能力を獲得した例もある。電気を扱う人型B・O・Wが開発されていても不思議ではない。

驚くべきはその精密性だ。機器を破損することなく、適切な電圧電流を局所的に供給してみせた電気操作能力は十分驚愕に値する。少

なくともハンクの持つ情報には無いものだ。

(電子ロックまで解錠可能とは、ますます暗殺向きの兵器だな。アンブレラが欲しがるのも無理はない)

よくやった、と一言添えて、ハンクは開いた門戸を潜る。

サーチライトで物陰を確認し、感染者を警戒しつつ低温実験室を目指す。ひとつ死体が転がっていたものの反応はなく、壁に寄りかかった状態で息絶えていた。

構わず進み、実験室の前に立つ。入り口同様停電のせいで開かないため、同じく少女の手により開放させた。

途端、防護服越しでも体を蝕むほどの冷気が容赦なくやってくる。

(異常な室温だ。いくら低温実験を目的に造られた部屋とはいえ、限度がある)

実験をしようにも、機器や棚の薬品まで凍りついては話にならないだろう。室温をコントロールする機器が故障しているのかもしれない。

「寒さに耐えられなければそこで待機しておけ。すぐに戻る」

「へーき」

刺すような冷気を前にしても、顔色ひとつ変えない少女。

そんな彼女の衣服はいたってシンプルで、到底冷気を阻める代物ではない。なにしろ身に着けているものは小さなネックレスと、丈こそ長いものの生地が薄そうなワンピースだけである。

靴どころか靴下すらない裸足という有様で、そのまま霜がこびり付いた床の上を歩くなど正気の沙汰では無い。下手をすれば凍傷はおろか、皮膚と床の癒着による強制剥離の危険まで考えられる。

しかし、少女はなんともケロリとしていた。やせ我慢ではない。本当に平気らしい。極寒を生きる動物のように皮膚の断熱能力が高いのか、発電能力のせいかは不明だが。

(ヒューズを探さなくては)

搜索を始める。積まれたダンボール箱や缶の开封、戸棚の中身を入念に調べ上げていく。

すると、デスクの上に散乱する器具類の中に紛れ込む形で、ヒュー

ズが安置されていたのを発見した。

しかし厄介なことに、ヒューズは金属製のケースが取り付けられている状態だった。メインシャフトで使うためには、まず頑強なケースから中身を取り出さなくてはならない。

(ケースの解除は低温下での作業が必要だと記されていた。取り出せるとすれば、あの装置か?)

ハンクが目留めたのは、実験室中央に鎮座しているガラス張りの奇妙な装置だ。

外部から円筒状の物体を挿入できるようになっており、内部のクレーンを使って様々な精密作業が行える代物らしい。付属のボタンを見る限り、パーツの取り外しや対象物の急速冷凍といった作業が行えるようだ。

ただし言うまでも無く、肝心の電気が無くては装置を動かせない。ならば、選べる選択肢はひとつ。

『L I S A — 0 0 1』。こいつを動かせるか?」

ハンクに尋ねられた少女は、じいつと装置を観察して、小さく頷き肯定を示した。

宣言に嘘偽りは無く、少女は装置のコンセントを発見すると、小さな手でぎゅつと包み込んでしまう。

駆動音が装置の目覚めを緩やかに告げる。ボタンやガラス内部の電灯が回復した。

ハンクは素早くヒューズを挿入すると、内蔵されたアームを使ってケースから本体を摘出する。

「よくやった、もういいぞ」

排出口からヒューズを受け取り、懐へ仕舞う。要件を終えたハンクは、『L I S A — 0 0 1』を連れて冷凍実験室を後にしようと移動を始め、

「はんく」

少女の何かを発見したような声を受け、再びその場へ縫い留められてしまった。

視線を遣れば、少女が手招きをして呼んでいる。部屋奥の机の影

だ。ハンクは少女が何を目に留めたのか、念のため確認に向かう。

「……」

そこに転がっていたのは、全身に霜を付着させた男の無残な死体だった。

いや、死体と呼ぶのは正しくない。まだ微かに息はあり、末期感染者には無い人としての生気が感じられる。

感じられるのだが、しかし、もはや手遅れと言う他にない容態だった。

(芽が生えている。ダクトで目撃した肉塊と同じだ)

顔の右半分から、のたうつ新緑色の触手が生えていた。

男の肉を苗床にしている。植物は極細の根を皮下に張り巡らせて、緩慢だが着実に体を侵食し、外部へ露出した植物体へ栄養を届けていた。

発芽は顔だけに留まらない。袖から覗く右腕も酷い。よく見ると、肘関節に黄色い腫瘍のようなものが形成されている。

それは脈打ち、膨張と縮小を繰り返しながら、芽全体へ体液を行き渡らせる心臓のように拍動を続けていた。

きつと、服の下はさらに惨たらしい光景が広がっていることだろう。

「うつ……いっほ、げほっ！」

不意に男が咳き込んだ。根の及んでいない左目がゆっくりと開かれていく。

死んだ魚のように霞んだ瞳に、ほんの少しだけ光が宿る。胡乱な焦点が定まって、傍にいたハンクと少女を捕捉した。

「……『LISA-OO1』? どうして、こんなところに。しかも、ああ、その鴉みみたいな恰好、U.S.Sか。ぐっ、く、来るのが、遅いんじゃないか……?」

激しい喘鳴を奏でながら、コールドタールのような咯血で床を塗り潰す男。

虫の息だ。辛うじて命を繋いでいるに過ぎない。いつ事切れ、植物に養分を供給するだけの土壌となるか時間の問題だ。



少女はそんな男を不安そうな表情で見つめていた。おろおろと、どうすれば良いのか分からないといった様子である。

「知り合いか？」

「……おかし、くれたひと」

どうやら既知の仲らしい。深い親交はなさそうだが、『L I S A | 001』とコンタクト歴のある研究者ということとは、『L I S A | 001』の研究に関わる情報を持つ可能性がある。例えば、彼女の研究データの在処とか。

ハンクは膝を着き、臍に意識を取り戻した男へ問いかけた。

『L I S A | 001』を知っているらしいな」

「……ああ、知っている。こいつの開発者に……秘密裏の協力を任されてね。少しだけだが関わっていたよ。今じゃ研究もクソも無い地獄だが……それを聞いてどうする……？」

「任務のために彼女の情報が欲しい。開発データの保存場所を知りたい」

「はは、任務、任務ねえ……。上は俺たちの命より、生物兵器の方が大事ってか……ッ」

粘質な暗赤色の液体が零れ落ちる。臓器を丸ごと吐き出したかのような、凝固しかけた血液の塊だった。

塊の中には、小さな種のようなものがいくつも混じっている。

「いいさ、教えてやる。これが最後の仕事だ。……西エリア中層、個人研究室に向かうといい。そのロッカーかパソコンの中にあるだろうよ……。部屋はそいつに案内させな。彼女を匿っていた部屋だ。知っている、げほっ、はずだ」

「了解した。協力感謝する」

「礼はいらねえ。どうせ助からないんだ。秘密なんて持っても意味が無い。……だが、だが。あんた、代わりにひとつだけ、俺の頼みを聞いちゃくれねえか……っ？」

植物の及んでいない左腕を、苦悶を浮かべながら動かす男。満足に神経が働かない五指を必死に言い聞かせ、内ポケットから液体の入った試験管を取り出した。

指の力が抜け、試験管が虚しく床を転がる。男は目で『拾え』とハンクに訴えた。

意思を汲み、ハンクは試験管を回収する。

「そいつは……植物の体液移動を阻害する薬品だ」

ひゆうひゆうと、気管に穴が空いているかのような雑音を交えつつ、男は振り絞って言葉を紡ぐ。

「ここに来る途中、あんたも見ただろう……？ プラント43。あの、クソツタレの人食い観葉植物だ。あんたさ、あの化け物にそいつをこ馳走してやってくれないか。プラント43を、止めてくれないか」

懇願だった。命を賭した懇願を、男はハンクに託そうとしていた。

プラント43の凍結。その一大任務を、見ず知らずの男に委ねようと。

「枯死剤を使えばアレを殺せるが……薬剤を調達するには、まずプラント43を出し抜いて薬品実験室へいかなくちやならない。そんなの不可能だ。だからこれを使い……こいつを使って体液の流れを止めるんだ、U・S・S。そうすりゃ、やつは木偶の坊だ」

植物であるにも関わらず、プラント43が運動能力を獲得しているのは、体液移動による仕掛けが原因だ。

食虫植物のハエトリグサが一瞬で葉を閉じ虫を捕獲できるのは、細胞間の迅速な水分移動による、組織の軟化と硬化のメカニズムである。

同じく、プラント43は尋常を越えた体液移動によって、動物に匹敵する活動を可能とした。

男が言っているのはそれだ。薬を使ってそれを剥奪しろと言うのだ。

プラント43の停止を訴える隻眼は、悲哀とも憤怒とも絶望ともつかない、擦れた極彩色の感情で塗り潰されていた。

「あの野郎は……俺の友人を何人も食いやがった。足を掴んで、目の前で攫って、吊るして、種を植えて……地獄だったよ。どうすることも出来なかった。イーストエリアは封鎖されていて、橋を架ける権限の無い俺たちには逃げ出すことさえ許されなかった」

教会で告白する懺悔のように、息絶え絶えに心中を吐露する男。きつと、彼は自分の終わりが近いことを悟っている。だからなのだろう。見ず知らずのハンクに独白を続けているのは。

「オレは運よく生き残ったが……絶望だった。出口は無いし、仲間は死んだか果実にされた。救援も無い。死ぬのがほんの少し長引いただけ。……だからさ、せめて、せめてちよつとだけでも、仲間を食った化け物に、一矢報いてやろうと思ったんだ」

お陰でこのザマだ——男は自嘲的な笑みを浮かべた。

「命からがら逃げだして、ここに避難した。極寒なら植物の侵食を食い止められるかもって、冷却装置を全開にして……っ、あ、あがつ!?

あ、あああああツ!!」

突然だった。前触れもなく絶叫が奔り、背骨がエビのように曲がり始めたのだ。

メシメシと木々が軋むような音が男の体の中から聞こえる。額に脂汗が浮かび、表情筋は苦痛を象った。

根が皮膚の下をミミズのように進んでいるのが、ライトに照らされてハツキリと見える。停電の影響か冷気が停滞し、遅れていた侵食が再開したのだろう。

芽が皮膚を内側から喰い破り、次から次へと溢れ出てくる。悪趣味な草原の成り立ちを、早送りで見せられているかのような光景だった。

「あ、あ、ぎっ、ちく、ちくしよう、また動き始めた……! 痛い、痛い、痛い! 根が、根が這いずつてる! ああああいやだ、やめてくれ、嫌だ嫌だ嫌だ!! ぎ、ひ、ごぼ……!!」

蔦が食い込んでいた右眼窩から、眼球が腐った果実のようにドロリと落ちた。空洞から粘質な血液が滴って、霜を薄汚く染めていく。

全身を痙攣させ、泡を吹き出し、男は激痛に絶叫しながら体を掻き毟る。あまりの力に爪が割れ、ビリビリと衣服が裂けてしまった。

無数の芽がウゾウゾと蠢く醜悪な体が露わになる。少女はあまりの残酷さに後ずさり、震えながら顔を背けてしまった。

「ああ、ああ、クソ、あんた、おい、なあ聞いてくれ、その薬をプラン

ト43の土壤に差し込むんだ！ 土に混ぜろ！ そうすればすぐにでも効果が出る！ 仇を、かたき、を、つづ、ああああッ!!」

獣のような絶叫が部屋を薙ぐ。少女は涙を蓄えながらハンクに絶った。

「はんく、はんく、どうすれば」

「……どうにも出来ん。ただ死を待つのみだ」

「そうだ、その通りだ、オレはもう助からない」

少女の肩がビクンと跳ねる。

もう助からない——その言葉が、先の悲劇を想起させた。

「だから頼む！ そいつで撃て！ 撃つてくれ！ せめて人のまま死なせて欲しい！ 化け物になんかなりたくない！」

「……元よりそのつもりだ」

MPUのセーフティが解除される。漆黒の銃口が男の額を正確に捉え、ハンクは引き金に指を沿えた。

この至近距離だ。決して外すことは無い。

だから職員の手を握る少女に、退避命令を下すことはしなかった。青ざめた手をぎゅうつと握り締める少女を、男は僅かに残った視力で捉える。既に根は右眼球の莖膜にまで侵食し、無花果のように腫れ上がっていた。見えているのが不思議なくらいだ。

「……なんだよ。オレを看取ってくれるのか？ 生物兵器のお前が？」

「う、う」

生物兵器。そんな言葉を掛けられるには相応しくない、悲痛な面持ちで少女は呻く。

不思議なことに、男は笑みを浮かべていた。

友人も死に、家族に会えることも無く、ただ孤独の闇に命を落とすだけだった彼にとつて、自分を看取る者の存在が細やかな救いになったのかもしれない。

「……………はは。ちくしょう、あいつめ。とんだ兵器造りやがって。結局、兵器職人としちやあ落第もいいところだったな。オレもお前も」  
瞼が降り、吐息が落ちる。

全身を苛む激痛を感じさせないくらい、穏やかな表情で満たされていく。

「ああ……こんなことなら、飴玉くらいたらふく食わせてやりやよかったなあ」

——死神の一射は、男に安らかな眠りを届けた。



ヒューズの回収は成功した。

おまけにメインシャフトへ帰還するにあたり最大の障壁だった、プラント43を排除する解決策まで手に入った。

東エリアに残されたミツシヨンは、温室に行つて薬品を土壌に注入するのみ。それでプラント43の猛攻は止まり、ダクトを安全に通過することが出来る。

だが言うは易く行うは難し。数々の人間を葬った怪物の巣へ飛び込むどころか、懐まで接近しなければならぬとくれば、流石のハンクも命を賭すべき難関なのは明白だ。

そうであっても、死神に後退の二文字は存在しない。

「行くぞ、『LISA-001』」

硝煙を吐く銃を仕舞い、ハンクは動く。

しかし『LISA-001』は動かない。息絶えた男に寄り添って、ずっと手を握っている。

よく見ると淡く発光していた。パチパチという音が、男の体に電流が流れている証拠となってハンクへ届く。

少女の電気は、男に巢食う忌々しい植物を焼いていた。体表の大部分を占めていた芽が瞬く間に炭化していくのが分かる。

焦がすというより、細胞組織を破壊していると言った方が正しいかもしれない。

数秒の後、男の体から植物は消えた。残ったのは痛々しい皮膚の名残のみだ。

少しか体が萎んでいることから、内臓レベルで侵食が進んでいた

と窺い知れる。仮に生存時に植物を焼いても、多臓器不全とウイルス感染で助からなかったに違いない。

(わざわざ草を払うとは。人のまま死にたいという願望を受け取ったからか?)

生物兵器である少女が男の心境をどう解釈したのかは誰にも分からない。

ただ少なくとも、ハンクの目には弔っているように映り込んだ。

一度だけ抱擁して、少女は職員の亡骸と別れを告げる。

暗い面持ちだったが、落涙は無かった。一度目の離別が彼女に精神的成長を促したのかもしれない。

「……」

敢えて、ハンクは同情や励ましの言葉を掛けることは無かった。それは逆効果であると知っているからだ。

今はその時ではない。死者を想うのは生還した後でいい。『LISA—001』も、既にそれを理解している。

「次は温室だ。気を引き締めて行動しろ」

低温実験室を抜け、二人は足早にイーストエリアを進んでいく。

目的地は温室、プラント43の本丸だ。今までのような感染者やリッカーといった、銃火器の通じる敵とは違う怪物を目前に緊張感が高まっていく。

(この梯子の先か)

手をかけて、ハンクは背後の少女をどうしようかと一考する。

今から侵入するのは、例えるなら怪物の胃袋だ。部屋全体が敵の独壇場であり、前後左右はおろか、床下や天井すら油断を許さない魔の領域である。

そんな環境に『LISA—001』を連れて行くのは、いくら彼女がB・O・Wでも無謀に尽きる。

少女の戦闘能力がどれほどか把握していないのもあるし、万が一致命傷を負った時のリスクが計り知れない。下手をすると、プラント43と『LISA—001』を同時に相手にしなければならぬ、なんて悪夢も想定できる。

脱走される危険はあるが、流石にやむを得ないと判断した。

「ここで待て。すぐに戻る」

「やだ」

予想外の発言に、ハンクはマスクの下で眉を顰めた。

今まで従順だった少女がハンクの指示を拒絶したのだ。まるでその指示が来ることを知っていて、しかしその命令だけは聞けないとでも訴えるかのよう。

「命令だ。待て」

「やだ！」

毅然と要求を跳ね除ける。服の端を掴み、不満そうにハンクを睨んでいた。

ハンクは小さな反抗を、無機質だが的確に諫めていく。

「お前が温室へ行つたところで何が出来る？ 敵の的が増えるだけだ。私もカバーできる保証がない。同行は得策ではないと理解しろ」

「う……」

「はつきり言おう。足手まといだ、残れ。いいな」

「ううー……い！」

しぶしぶ頷き、傍の壁まで下がっていく少女。

ハンクは背を向け、梯子を昇る。ハッチの内鍵を解除すると、そつと温室を覗き込んだ。

金網製で出来た通路が見える。それが中央の樹木——プラント43を囲うように張り巡らされていて、奥にはひび割れたガラスビュールが確認出来た。

怪植物に悟られていない今のうちに最適ルートを模索する。このハッチから飛び出した後、最短最速で土壌へ辿り着ける経路を描く。(ポイントまでの距離としては左通路の方が近いが、枝垂れた蔦が多い。強引に抜けければ絡め取られる可能性が高い。迂回がネックだが、確実に向かうとすれば右通路が最適か)

火器の通じない敵にサブマシンガンは必要ない。

ハンクはコンバットナイフを手に、ハッチから素早く身を乗り出した。

(駆け抜けて大樹の根元へ飛び下り、薬剤を注入する。それで奴の動きは止まる)

無風の間、木々の軋む音が響く。

ハングの吐息に含まれる二酸化炭素を感知したか、それとも振動を悟ったか。

とにかく、化け物は懐へ飛び込んできた餌の存在に気がついた。

鳶が動き、捕食器官と化した花卉が遠くで開く。

怪物の支配圏を、死神は全速力で疾駆した。



## プラント43凍結作戦

鞭のような蔦が迫る。牙を彷彿させる無数の棘が生え揃った、花卉状の捕食器官が襲い掛かる。

ライトで行き先を照らしつつ、ハンクは襲撃のタイミングを把握しながら緻密に動く。

左から薙ぐように襲来した蔦を滑り込みで避け、真上から覆い被さってくる花は身を投げて躲した。

しかし着地の瞬間、足場のフェンスを通り抜けた蔓の群れが蛇の如く絡みついてしまう。

間髪入れずナイフを振るった。二度、三度と叩き込み、死の桎梏から脱獄を果たす。

(ポイントまで目測10m)

観察を欠かさず、行動に余念を残さず、漆黒の男は機械的に闇夜を走る。一度の失敗が死を招くような極限状態だろうが、平静は一欠けらも揺るがなかった。

駆ける。駆ける。わずか十数歩ばかりの距離を、まるで短距離走の世界大会のように全力で駆ける。

敵に一切の隙を与えず動く。それが死中に活を開く鉄則だ。怪植物がハンクに追いつくよりも迅速に行動し、任務を完了するのみなのだ。

プラント43の目前まで到着する。ハンクは鉄柵に手を添えて、躊躇なく身を乗り出した。

落下と同時にポーチの中へ手を伸ばす。薬液の入った試験管を手を幹を伝い、一直線に根本の土壌へ降下して――

「!?」

地に足が着く、まさに刹那のタイミングだった。

樹冠から急速に成長した大蛇のような蔓がハンクの胴体に絡みつき、ワイヤーで貨物を釣り上げるが如く引き戻したのである。

「がッ……いー」

万力のような圧がハンクを襲う。情など微塵も無い怪物の締め付

けは人体が耐えられるものではなく、胸骨や内臓がミシミシと悲鳴を上げ、筆舌に尽くしがたい激痛が脳髓まで貫いた。

だが。だが。

それでも彼は諦めない。たかが肉体を引き絞られる程度の痛みなど、彼にとつては気付薬にしか成り得ない。

ナイフを蔓に突き刺し抉る。何度も、何度も、忌々しい蔓が力を保てなくなるまで止まることなく穿ち続ける。

緑色の液体がスプレーのように噴射していく。目に見えて力が弱まっていくのが分かった。体液を損失したせいで蔓の組織が軟化し、さながら萎れた葉のようにパワーを保てなくなっているのだ。

弱体化を察したハンクは一際強く傷を抉った。串刺したナイフを渾身の力で捻り、千切り飛ばすように切断してツルの拘束から脱出を果たす。

試験管を粉碎せぬよう受身を取り、すかさず現在位置を確認した。

少しだけ距離を離されていた。目測8mほどだ。ハンクは周辺の脅威を把握すると、再びプラント43へ向けて脱兎の如く駆け出した。

だが怪植物も黙ってはいない。捕食器官と化した毒々しい花卉が牙を剥き、ハンクへ襲いかかってくる。

植物故に心など存在しないはずだが、その篠突く雨が如き猛攻は、蔓を裂かれたことへの怒りに満ちているようにすら感じた。

(MPUの残弾は残り5発、全て叩き込んでも効果は見込められないだろう。かといって、LE5を無暗に消耗すれば今後の行動に支障をきたす。――ならば)

ナイフを仕舞い、腰元のフックから手榴弾を手を取った。

ピンを抜き、すかさず花卉の口へ投擲する。

けたたましい爆発音が響き渡った。花卉は内側から弾け飛び、夥しい体液を巻き散しながらもがき苦しむ。蜥蜴の尾のようにのたうち回る花卉だったモノは、やがて力を失くし倒れ伏した。

だがしかし、花卉を破壊したところでプラント43が絶命したわけではない。攻撃手段のひとつが潰れたただけだ。

薬液を土壤へ染み込ませ、機動力を奪わない限りハンクを狙う猛攻が止むことは無い。

そうであっても、たかがあと十数歩程度の距離が、まるで果てしなく続く道のりのように感じられる。

(っ、あれは)

不意に行く先の違和に気づき、ハンクは反射的に急ブレーキをかける。

原因は、前方を阻むこの世のものではない異物だった。

柔らかな物体が無造作に叩きつけられるような生々しい音と共に、ハンクを立ち塞がるように姿を現したのである。

辛うじて人の形をした怪物だった。

全身に植物の支配が及び、苗床とされながらも歩く屍としての領分も揃えた異形の怪物。心臓のように脈打つ黄色おうしよくの球茎が幾つも生えており、それが低温実験室で目撃した男性職員の腫瘍と全く同じ器官であるとハンクは瞬時に理解した。

出来ない人形のように体をくねらせつつ起き上がるそれは、まるで彼の末路が姿形を得たかのように。

(なるほど、こいつが果実か。面倒な)

気配を感じ、チラリと後方を見る。同じく薄気味悪い植物に支配された成れの果てが、ハンクを逃がすまいと立っていた。

範囲の定められた通路が仇となったか。左右に幅が無く、分岐も無いせいで逃げ道がない。完全に包囲されてしまっている。

すかさず前方の怪物へ三発銃弾を叩き込む。しかし弾丸が頭部や胸部を正確に射貫いたというのに、怪物は怯む様子すら見せなかった。

ぎこちない仕草を披露しながら詰まった排水口のような鳴き声を放ち、植物人間ヒトは眼球の無い眼窩で獲物ハンクを捕捉し進軍する。

(感染者より耐久性が高いな。手持ちの武器でまともに戦うのは愚策か。一方に構えば、もう一方の餌食になる)

頭部に走る垂直の亀裂が真っ二つに開いていく。内から覗く鋭い牙の数々が、感染者より遥かに悍ましい脅威を示していた。

ツタと化した腕に捕まれば最後、ハエトリグサのような頭に食まれ、惨たらしい最期を迎えるのは自明の理だろう。

形勢は不利と判断し、須臾の間に逃走を選択する。ハンクは右の手すりを乗り越えて、躊躇なく下層へ身を投げた。

柔らかな土の上へと着地し、同時に周囲の脅威を見定める。

振動で覚醒を促してしまったのか、左方の草むらに絡まっていたイビーが目覚め、藪を引き千切りながら活動し始めていた。ハンクが脱出した上方からは、2体の異形が彼を追って身を乗り出そうともがいている。

目視できる怪物は3体。プラント43の根元付近に脅威は無い。ハンクは柔らかく不安定な土を蹴り飛ばし、一気に投薬ポイントまで距離を詰めた。

膝を折り、薬液を取り出す。土壌を掻き分け、試験管のコルク栓を弾いてひっくり返すと――

「!?」

投薬まであと一歩だったその時、予期せぬ脅威が現れる。

根が襲い掛かってきたのだ。掘り起こした穴の中かしなやかな根が槍の如く飛び出し、ハンクの首へぐるりと巻きついたのである。

頸動脈が悲鳴を上げる。酸素の供給が絶たれたせいか、視界に星のような光が瞬き始めた。

意識の輪郭が、泡沫のように曖昧になっていく。

(しまった、不味いッ……!)

人は首の動脈を絞められた場合、たった7秒程度で意識を失ってしまう。

そうなれば一巻の終わりだ。首を押し折られ、背後からやってくる怪物たちの肥やしになるしか未来はない。

すぐにでも振り解かなければ死あるのみだ。しかし拘束を解く術が無い。根は茎より遥かに頑丈だ。ナイフで斬り払うより先に意識が落ちるのは視えていた。

だから、ハンクは敢えて絞首を度外視した。

明滅する意識の中、根に向けて試験管を思い切り叩きつける。漏れ

出た薬液は産毛のような側根から吸収され、瞬く間にプラント43へと浸透した。

途端に根が暴れ出す。異物に対する反応なのか、まるで毒を盛られてもがき苦しむ人間ようにのたうち回り、たまらずハンクを解放したのである。

プラント43が台風に煽られたように大きく揺らぐ。それも束の間の出来事で、人を喰らう獣だった恐ろしい樹木は、植物としてあるべき姿を取り戻したかのように沈黙した。

(対象、無力化を、確認)

断たれていた血と酸素が戻り、激しく咳き込みながら意識の彩りを取り戻す。

朧だった視界が徐々に輪郭を帯びていく。あと数秒判断が遅ければ彼の命は無かつただろう。多少の倦怠感が残るものの、問題なく動けそうだと判断した。

一段落して、まずは呼吸を整える。

ただちに次のアクションへ。休息など全て終わってからでも十分だ。

(次は果実を退ける。そのまま『LISA-001』と合流し、メインシャフトへ帰還する)

酷使され泣き言を喚く肉体へ言い聞かせるように、脳裏で作戦を回復する。

膝に手を当て、力を込めて起き上がる。ハンクを追ってくる醜い植人物人間を撃退するため、LE5のセーフティを解いた。

と、そこで奇妙な違和感がハンクを襲う。

(標的が1体のみ……他の2体はどこへ行った?)

眼前の脅威は先ほど目覚めたばかりの1個体のみだ。上の通路から追ってきていたはずの2体がどこにも見当たらない。

隠れているのかとサーチしたが確認出来ない。真上から奇襲をかけてくるわけでも、土壌を掘り進んできているわけでもないのだ。

一先ず、目先の脅威を排除しようと引き金を引く。

炸薬音が連続し、銃弾の雨が降り注いだ。球茎に被弾したイビーが

悲鳴をあげて仰け反ったのを目撃して、黄色い腫瘍が弱点なのだと察知する。

全ての腫瘍を狙撃する。イビーは夥しい体液を散らしながら、ガラスを擦り合わせたような甲高い絶叫を轟かせて倒れ伏した。

(……まだ生きているようだ。じきに復活するか)

恐らく球茎は心臓のようなもので、全身へ体液を行きわたらせ活動能力を確保するための原動力なのだ。

つまり、全て破壊したところでイビーを始末出来たわけではない。いずれエンジンは再生し、再び起き上がって徘徊を始めるだろう。

倒れながらも未だ脈打つ異形を一瞥して、ハンクは通路へ戻るための梯子へ進んだ。

登り切ると、そこには何故か待機させたはずの『L I S A—001』が立っているではないか。

「はんくー！」

少女はハンクの姿を目に留めると、ホツとしたような笑顔を浮かべて駆け寄ってくる。

しかし当然ながら、ハンクが歓迎を示すことはない。

「何故ここにいる。待機しろと命令したはずだ」

「う……」

ハンクの言葉に歩を止め、口籠る少女。裾を握り締めながら、いたたまれなさそうにしよぼんと俯いてしまう。

「はんく、あぶないとおもったの。だから、だから」

「私は何も考えずに命令を下しているわけではない。同行が危険だと判断したから残したんだ」

「っ……」

「命令無視は排除したりリスクを背負い直すことになる。お前の配慮がどうあれ、独断専行は命を脅かす愚行と知れ」

「…………ごめん、なさい」

目頭に涙を貯める少女の背後へ目を遣って、ハンクは少女へ視線を戻す。

「だが脅威を退けた点だけは評価する。助かった」

「！」

意外な一言に、今にも泣きだしそうだった少女は驚きに目を丸くした。

ハンクは背後にある散らばった死体を目撃したのだ。まるでパーツを外された玩具のようにバラバラになっている、醜い植物人間の死体たちを。

状況からして『L I S A—001』がやったのは明白だ。ハンクを追って下層に落ちるより早く、少女が怪物を仕留めたのだろう。

死神は物事を全て対等に評価する。命令反故には叱咤を、脅威の排除には礼を。それが彼のやり方だ。

もつとも、精神的に幼子である『L I S A—001』が、100%命令遵守することはないと理解していたのもあるかもしれないが。

「次から必ず命令を守れ。いいな」

「……うんっ」

表情に薄明かりを灯す少女。ハンクは手を仰ぎながら着いてこいと指示を出し、帰路のダクトへ向かって歩を進める。

感情を写さない無機質なマスクの下で、一抹の謎を噛み締めながら。

(奇妙だ)

思考の矛先は、『L I S A—001』の仕業であろう解体された死体にあった。

懐中電灯しか光源が無くともはつきり確認できるほどに、それは目に留めずにはいられない異様さに満ち溢れていたのである。

(傷があまりに綺麗すぎる。異常なほど鋭利な切り口だ。まるで日本刀にでも輪切りにされたかのように)

怪力で無理やり引き千切ったり、ましてや粗雑な爪で裂いたような荒々しい痕跡ではない。

イビーの死骸は例外なく、美しいまでの直線を描く輪切りだった。さながら東洋の剣豪が、一太刀のもとに唐竹を両断したかのような有様なのだ。

おかしな点はそれだけに留まらない。断面が焼き焦がされていたのも気掛かりだった。そのせいか体液の散乱さえ見当たらない。

(レーザーカッターで焼き切ったような痕だが……何をした?)

少しだけ振り返る。ハンクが視線を寄越して不思議に思ったのか、少女はきよとんと小首を傾げた。

少女の——『LISA-001』の姿形は人間のそれと変わらない。髪が光を弾く銀髪なこと以外、いたって普通の幼い子供だ。リツカーのような爪や牙なんてどこにも無い。

いくら電気を操れるとはいえ、人体を容易く細切れに出来る武器など無さそうに見える。

(生物兵器、か)

アンブレラの獣は例外なく、人智を越えた怪物だ。一般的に愛らしい姿であろうとも、その事実は未来永劫変わらない。

彼女は発電能力以外にも何か爪を隠している。本人に隠しているつもりなど毛頭無いかもしれないが、これで仕込み刀の存在は明らかとなった。

その正体も、いずれ分かる時が来るだろうとハンクは踏んだ。

願わくばソレを拝むことにならぬよう祈りながら。



プラント43の凍結を完了した。ダクトの中に巣食っていた植物も全て活動を停止し、ただ鬱陶しいだけの草が蔓延る様相となる。

ハンクはナイフを使って藪を切り拓き、易々とメインシャフトへ帰還を果たした。

停止した電力中枢を目前に手に入れたヒューズを取り出す。口を開けたまま固まっている機械に挿し込めば、暗澹に沈んでいたNETがようやく息を吹き返した。

明滅の後、施設へ明かりが舞い戻る。そこかしこから機械の駆動音も聞こえてきた。

無事停電を解決したらしい。これでエレベーターや自動ドアも使えるだろう。



懐中電灯を切り、ハンクは次の行動を画策する。

(GウイルスはP-4レベル実験室にある。が、道中で先に『LISA-001』のデータを回収しておく方が効率的か)

P-4レベル実験室も、職員が言っていたデータ保管場所も、全て同じ西エリアにある。

ここからの距離を考えると『LISA-001』のデータを目指す方が近く、おまけにそのまま階を上がればP-4レベル実験室へ向かえる道順となっている。

先にデータを手に入れて、その後Gウイルスを回収する——ハンクの行動方針が固まった。

(弾薬のストックと代わりの武器も調達しておこう。このままでは戦力不足を解消できない)

今現在、ハンクの手持ちはMPUの弾薬が5発分とLE5の28発、ナイフ二振りに手榴弾ひとつしか残されていない。

NESTの潜在的危険性を考慮すればあまりに厳しい装備である。どこかで物資を集めなくては死期を早めるのは明白だった。

幸い、NESTは一部生物兵器の管理も担っていたアンブレラの施設である。いざという時の護身用や鎮圧用の武器が保管されていてもおかしくない。探索すればそれなりに見つかるだろう推測した。

「はんく」  
ハンクが行動に移ろうとしたタイミングで、少女がおもむろに声を上げた。

視線を超越せば、何故か気恥ずかしそうにもじもじしている。別段悪い事態ではなさそうだが、少し、いやかなり様子がおかしかった。「どうした」

「あう……う……」

「言いたいことがあるのはつきりと言え。言葉とはそう使うものだ」

「ん、う。えっと、ね。おなか、すいた」

「……なに？」

「おなかすいたの」

きゆる、と腹の虫が相槌を打つ。照れ臭かったのか、腹部を抑えて

俯く少女。

今は曲がりなりにも緊急事態だ。呑気に食事を楽しんでいる場合ではない。むしろハンクたちの方が怪物の食事にされるかもしれないくらいだ。

普通なら、『我慢しろ』の一言で斬り捨てていたことだろう。

しかし、発言主が『LISA—001』となれば話は大きく変わってくる。

何故なら彼女の正体は、見た目こそ人間ではあるものの、人食いの怪物となんら大差ない存在なのだから。

(自ら発言したということとは、我慢の限界が近いか。なるほど、あの時怪物の死体から眼を離さなかったのは……)

少女を護衛するために3体のリッカーを屠った際、『LISA—001』は興味をそそられるような眼差しで亡骸をずっと眺めていた。

あれは怪物の死を悼んだとか、残酷な有様に嫌悪を示したとか、真つ当な理由ではなかったのだ。ただ単純に、彼女の瞳には転がる肉塊がクリスマスのグリルチキンと同じように映っただけなのである。

足取りがおぼつかなかったのも空腹のせいだ。T型生物兵器ゆえの欠点か、彼女は見た目以上に燃費が悪いと推察できる。

(死活問題だな。このまま空腹を放置していれば、背後からいきなり襲撃される可能性がある。食糧の確保も考えなくてはならないか)

B・O・Wの取扱いにおいて、生命危機こそが最大の脅威と言える。特に餓えは不味い。感染者を見れば、その恐ろしさが如何なるものか猿でも理解できるだろう。

いくら懐いているとはいえ、少女にとってハンクは十分可食可能な存在である。空腹に耐えかねて知性が低下し、本能的に捕食されたとあつては笑い話にもならない。

「分かった、検討しよう。普段何を食っていたか覚えているか？」

人に対して攻撃的でないところを考えて、主食は人肉ではないはずだ。きつとウイルスによる驚異的な新陳代謝も補えるよう調整された専用のフードがあるだろう。

思惑通り、少女は名を口にする。

「ちゆるちゆる」

「……ゼリーだな」

「うん」

つまりジェル状の栄養補給剤だ。手軽かつ、保管も携行も容易とくれば理想的な形態である。

(男性職員の発言を信じるなら、『LISA-001』はNEST内でも秘密裏に開発された生物兵器だ。彼女を匿っていた場所に栄養剤が保管されていても不思議ではない)

食糧調達も鑑みると、やはり西エリア中層の探索が最優先だと判断する。

そうと決まれば行動は早く、ハンクは『LISA-001』を連れてエレベーターまで向かおうと――

「はんくー」

――唐突な少女の絶叫が、彼の足に釘を刺すように縫い留めた。

絶叫の源は背後からの異変だった。メインシャフトの天井が突如悲鳴をあげて崩壊し、まるで大重量の物体が墜落したかのような衝撃が爆発の如く拡散したのである。

硝煙と共にメインシャフトへ降り立った未知の物体。暗赤色のレンズ越しに捉えたハンクは、感情を表に出さない彼にしては珍しく、忌々しそうに舌打ちした。

それはこのNESTを搜索するうえで、最も遭遇したくないと警戒を寄せていた存在で。

(……よりによって、満足に装備も整っていない時に現れるとは)

毛髪の無い丸められた頭。死人を彷彿させる灰色の肌。人間ベースとは思えぬほど肥大化した筋肉の鎧。そして、一切の感情を写さない虚無の顔貌。

ハンクを見下ろすほどの巨軀をもった大男が、悠然と二人の前に君臨した。

それはアンブレラの象徴にして最高傑作。暴君の銘を冠する無情の兵器。

コードネームをTタイラント――103型。人を越えた生命力と無双の怪力

を誇る、Tーウィルスが生んだ悪魔である。

「振り返るな！ エレベーターに向かつて走れ！」

寸分の迷いもなく引き金を絞る。自動機関銃が雄叫びを上げ、無数の弾丸が解き放たれた。

このタイラントはアンブレラによる制御加工が施される前段階の個体なのか、対弾・対爆仕様のトレンチコートを纏っていない。剥き出しの肉体だ。

即ち銃弾が直接通用する。ハンクはそこに賭けたのだ。

だがしかし、怪物は銃撃の嵐を浴びようが物ともしない。まるで小石を投げられた程度でしかないかのように、威風堂々とハンク目掛けて走り出した。

重々しい足音と共に重戦車のような巨体が迫る。まともに喰らえば人体など豆腐の如く碎き散らすだろう、凶器の拳が振り上げられた。

叩き降ろされる直前、ハンクは間一髪でタイラントの股下を滑り抜ける。暴君のハンマーパンチは床の金網を粉碎し、絶大な破壊音と共に金属の亡骸を生み出した。

硝煙と火花が舞う。床から腕を引き抜いたタイラントは、光の無い瞳でハンクを睨む。

（一撃でも貫えば終わりだ。骨も内臓もまとめて挽肉にされる。動きを読み、隙を突け）

全神経を集中させ、死神は暴君と相対する。

しかし応戦できる時間は残り少ない。あと数秒足らずで弾薬が底を尽きるからだ。

刻み付けた銃創が現在進行形で再生しているというのに、残り十数発程度の弾丸でこの怪物を仕留めるのは不可能に近い。そも、タイラントを絶命させるには対戦車砲クラスの火力が要る。

（勝利条件は始末ではない。任務遂行と生存を第一に考えろ）

顎に手を当て、首の骨を鳴らすタイラント。対するハンクは最後の手榴弾を手に取り、一息にピンを引き抜いた。

まだ安全装置は手放さない。瞬時に爆破出来るコンデイションを

維持したまま、間合いを取りつつ隙を伺っていく。

——その時だった。

「やああ——っ!!」

甲高い少女の叫びが響き渡ったかと思えば、目を焼くほどの眩い光と共に、タイラントが苦悶の絶叫を張り上げたのだ。

背後から少女がしがみ付いていた。そのままありつたけの大電流を爆発させ、容赦なくタイラントを感電させている。

流石の怪物も雷撃の猛威を受けてはただでは済まない。肉を焼かれ、神経伝達を滅茶苦茶にされ、痙攣を起こして膝を着いてしまう。

だがタイラントはアンブレラの傑作だ。この程度でそう簡単にやられはしない。

満足に言うことを聞かない腕を伸ばし、首にしがみついている幼き叛逆者を掴み取った。そのままボールを扱うが如く、渾身の力で投げ飛ばす。

「あぐっ!?!」

勢いよく壁に激突し、派手な音を立てながら崩れ落ちる少女。

電撃による莫大なダメージを受けたものの、代謝機能を改良されたタイラントの前には無力に等しい。瞬く間に体力を回復させ、膝に手を着いて立ち上がった。

標的がハンクから『L I S A — 0 0 1』へ移行する。予想外の反撃に怒りを滲ませ、伏して呻く少女へとどめを刺さんと走り出し、

「おい」

耳元から聞こえた男の声が、タイラントの思考をほんの一瞬鈍らせた。

刹那、死神の刃が容赦なく首元目掛けて突き刺さる。

肉が裂け、血潮が湯水の如く噴出した。

たまらず暴君は悲鳴を上げる。怯んだ隙にハンクは駆け出し、苦痛に喘ぐ『L I S A — 0 0 1』の元まで辿り着くと、そのままそっと抱きかかえた。

「■■■■——ッ!!」

悍ましい暴君の咆哮が爆発する。思い通りに仕留められないちっ

ぼけな獲物に対する、明確な憤怒の発露だった。

ナイフの落ちる音がした。既に首の傷は塞がっていて、出血まで完全に止まっている。

(急所への射撃。内臓を焦がすほどの電撃。ナイフでの刺突。これだけやって止まりもしないか)

驚異的な生命力を目の当たりにしたせい、ある種の感動すら抱くハंक。

けれど、もはや狼狽える必要はない。

何故なら、既に決着はついていた。

(所詮、知恵の無い獣に過ぎん)

着々と肉体の再生を進め、今にも飛びかかると奮い立つタイラントの足元に転がる異物。

手のひらサイズほどしかない、黒くて小さな丸いもの。

人間の悪意が造り出した、紛うことなき殺傷兵器が。

死神は静かに踵を返す。

静寂を食い破る爆発と、地獄の底に響くような叫喚を背にしながら。

## メッセージ

走る。走る。

脳裏を埋める地図に従い、エレベーターへ向かって全速力で駆けていく。

追手が来る気配は無い。至近距離からの爆破は流石の暴君も堪えられない。この千載一遇の隙を逃さぬよう、あらん限りの体力を動員して疾駆した。

(……ん?)

無事にエレベーターまで辿り着いたハンクは、付近に転がっていたはずの死体<sup>リック</sup>が全て消失していることに気付く。

一抹の違和が疑問を生み、ほんの少しだけ立ち止まらせた。

(……絨毯状の血痕がカーペットのように続いている。遺体を持ち去った何者かがいるのか?)

リックが蘇生して立ち去ったと思しき足跡ではない。誰かが死体をずるずると引き摺っていったかのような、薄く乾いた痕跡が広がっていた。

空腹の感染者が新鮮な遺骸を食うことはある。しかし彼らに巢へ餌を持ち帰るなどという、獣のような習性は無い。

感染者の仕業ではないことは間違いないのだ。しかしまだ見ぬ生存者の行動とも考え難い。

それはつまり、ハンクの知らない未知の存在が、NESTを徘徊している事実を示唆している——

(いや。今は死体の行方を考察している場合ではない)

ハンクは思考を払うように、視界から惨状を排除した。

肉体を再生させたタイラントが今にも追いついてくるかもしれないのだ。無駄な一挙一動が、折角稼いだ逃亡の機会を潰してしまう。肘を器用に使い、ハンクはエレベーターのボタンを操作していく。次の目的地を目指すべく中層へと上がっていった。

登りゆくゴンドラの中、一息と脱力。

(……想像より重いな。成人と大差ない)

迅速に逃亡するため咄嗟に抱え上げたものの、幼い容貌からは想像もつかない重量に驚かざるを得なかった。

従軍者として鍛錬を積んでいなければ、まともに運ぶことすら困難だっただろう。

まるで体内に鉄の塊でも仕込んでいるかのようだ。ハンクは感じた。発電能力を有している時点で当然なのだが、骨密度や筋肉の組成が人間とは違うのかもしれない。

「おい。声は聞こえるか？」

「……………おなか、すいた」

未だぐったりとしている少女の容態を確認すれば、虚ろな瞳で虚空をぼんやり捉えつつ、ぽつりと空腹を訴えてきた。

既に打撲は回復している。しかし、どうやら肉体とは異なる致命的なダメージを負っているらしい。

ただし、この場における『致命的』とは、少女ではなくハンクに対して働くのだが。

(不味いな、エネルギー不足が深刻化している。早く手を打たなくては)

デンキウナギは発電の際、アデノシン三リン酸——即ち生物にとってのエネルギー源を大量に消費するという。

このメカニズムが少女にも通用するならば、先の大放電で著しいエネルギーを費やしてしまったに違いない。

おまけに治療にもエネルギーを使っている。ただでさえ栄養不足だった少女の体は、相当な飢餓に見舞われていることだろう。

「気をしっかり保て。お前が案内しなければ目的の部屋が分からん」「ん、う」

臍気に返す少女。その瞳は琥珀色に染まり、瞳孔が蛇のように縦長に変異しつつあった。

既視感を抱く。ハンクたちαチームを襲ったウィリアム・バーキンの肩で蠢く、巨大な黄金の瞳を。

エレベーターが到着した瞬間、ハンクは再び走り出した。

コトは想像以上に不味い方向へ進んでいると判断する。このまま



では感染者の群れより先に護衛対象の食糧にされかねない。一刻も早く栄養剤を手に入れねば命を落とすと石火の如く理解した。

しかし彼の行く手を阻むように、複数の感染者が通路を占拠してしまっている。

異様な出で立ちの感染者だった。みな衣類を纏っておらず、全身の皮を引き剥がされたかのような風貌なのだ。

大部分の皮膚が腐り落ち、中には組織の欠落から骨が露出している個体までいる。しかし筋肉の発達が著しい。特に大腿は目まぐるしく、腐敗もほとんど進行していなかった。

それは語外に、彼らの機動力が通常のソレを遥かに上回るという証左となる。

(明らかに通常の感染者ではない。二次感染で発生したものではなく、実験によって人為的に生み出されたものだろう)

それが視認できるだけで6体もいる。対するハンクの武器は雀の涙。

しかしこれ以上残弾を消耗するのは避けたかった。再びタイラントと遭遇した場合や、『LISA-001』を始末しなければならなくなった際に必要不可欠となるからだ。

現状、確実に弾を補給できる保証はない。これ以上の浪費は極限まで抑えなくてはならない。

かといって、重たい少女を抱えたまま感染者ひしめく通路を無傷で抜けるなど不可能だ。

「……」

少女を床に下ろし、ナイフを構える。

ただし、銃は抜かない。

ハンクは満足に幅もない通路の中、一撃貫えば絶命必至の感染者たちを相手に、たった一振りの刃物で戦う覚悟を決めた。

——無謀に等しい彼の行動は、しかし闇夜を切り裂く猛禽のように素早かつ確なものだった。

最も手前にいた感染者の背後を取る。膝裏へ蹴りを叩き込んで体を崩すと、首を戸惑いもなく折り砕いた。

氷のように冷徹に、葬儀屋のように丁重に。ハンクは命を葬っている。

(次)

物音を聞き取り、迫る死神を知覚し始める感染者たち。

だが遅い。ハンクは既に次の一手へ入っている。獲物の匂いを嗅いだばかりで鈍い感染者には、ハンクの魔手を捉えられない。

振り返った感染者の腕を捻り上げ、強引に引き寄せてバランスを奪う。よろめいた隙に下顎からナイフを一気に突き立て、一息に脳幹を刺し穿った。

すかさず引き抜き蹴り飛ばす。吹っ飛ばされた遺体は奥のゾンビを巻き込みながら転がっていく。

(次)

完全に覚醒し、獯猛さを取り戻した感染者が右方から唸り声と共に迫りくる。

捕らえ食らわんと伸ばされた感染者の腕をハンクは叩き落とし、その腕に沿うようにして回り込むと、側頭から頭蓋を串刺した。

「■■■ツ——!!」

「ツ」

別のゾンビが、刃を引き抜く一瞬の隙を突き、雄叫びを上げながらハンクの腕に掴みかかる。

感染者は動きこそ鈍重だが、その筋力は常人を遥かに上回る。捕まれば最後、大量のウイルスを纏わりつかせた歯牙が骨肉を引き裂き、感染者の輪へと招かれてしまうだろう。

絶対に捕まってはならない。だから円を描くように腕を振るう。怪物の力を受け流し、瞬発的に顎を殴り飛ばした。

見た目こそ死に体だが、感染者は厳密に言えば自我を失った生者だ。痛覚や恐怖が麻痺し、加速する代謝を補うべく空腹を満たそうとしているだけの病人なのだ。

故に、正確無比な打撃は脳震盪を誘発する。鍛え抜かれた拳の砲弾は顎を通じて脳髄を揺るがし、感染者を昏倒させた。

そのまま頭を踏み砕き、確実な絶命をもたらすハンク。

残るは2体。うち1体はのしかかっている死体のせいで満足に起き上がれないらしい。

実質的な脅威は1体。ハンクは一切の躊躇なく立ち向かった。群れを成せば恐ろしい感染者も、たった一人なら敵ではない。

わざと掴みかかりを誘発して左に避け、後頭部から刃を見舞うという形で、呆気なくも勝負の幕は降ろされた。

鋭利な金属に脳髓を掻き混ぜられ、崩れ落ちる感染者。ハンクは背を向け、最後の一人に渾身のストンプを見舞う。

粘着く血糊が、床と靴の間に糸を引いた。

(クリア)

臨戦態勢を解き、ナイフにこびり付いた血液を拭う。

ホルダーへ戻すと、ハンクは『LISA-001』の元まで戻って抱きかかえた。

血と死体で出来た海を歩く。情報が正しければ、この層の何処かに

『LISA-001』が匿われていた部屋があるはずだ。

『LISA-001』、お前が住んでいた部屋はどこだ」

「……あっち」

指を使い、ハンクの行くべき方向を示す少女。

従うままに進んでいく。すると、通路奥の個人研究室へ辿り着いた。

どうやらここが『LISA-001』の住んでいた部屋らしい。手動のドアを器用に開いて侵入し、わざと物音を立てて感染者の有無を確認すると、鍵をかけて少女をソファへゆつくりと置いた

(栄養剤を探さなくては)

部屋を見渡し、栄養剤が保管されていそうな場所を探す。

隅の方で目が留まった。『LISA-001』の開発者が使っていただろう個人デスクの横に、小型冷蔵庫が配置されていたのだ。

開く。中には飲みかけの清涼飲料水と、銀色のパックが3つ保管されていた。

表面には『B.O.W専用栄養剤』と書かれてある。間違いない。普段『LISA-001』が摂食していたものだろう。

全て回収し、1つのキャップを捻り切る。緩い呼吸を繰り返しながら寝そべっている少女を起こし、口元へチューブを当てがった。

唇の奇妙な感触を不思議に思ったのか、まぐまぐとまぐつく少女。やがていつもの栄養剤と認識したらしく、両手で抱えて飲み始める。

ジェル状の栄養剤は吸収が速いのだろう。一本分を空にする頃には、褪せていた肌色や異形化しつつあった瞳が元の形を取り戻していた。

「おいしい」

つい数秒前の衰弱ぶりが嘘のように上機嫌になる少女。護衛対象から捕食される危機は脱したようだ。

「ちようだい」

一本だけでは不満なのか、手を伸ばして催促してくる。

ハンクはどれほどのペースで与えればいいか、パッケージ裏を見て確認した。

生物兵器の代謝を支えるべく、超高濃度に調整された栄養剤のようで、片手で持てるほど軽量かつコンパクトでありながら、一本で1日分のエネルギーを補給できるらしい。

おまけに飢餓抑制剤も混入されているようだ。たったこれだけで満腹になれるという。それでも欲しがるのは少女の代謝が栄養剤を上回っているのか、はたまた単なる食いしん坊か。

とにかく、要望のまま与えるという選択肢は霧散した。

「駄目だ」

「どうして?」

「これは緊急用の食料だ。迂闊に消費するわけにはいかん」

「うー……」

ある意味、この栄養剤はハンクにとっての命綱。無計画な消耗は強大な敵を増やす愚行でしかない。

幸運なことに少女の知能は高い。ハンクが無意味に制限を科しているのではないと理解したらしく、力づくで奪うこともせず大人しく催促を断念した。

「はんくはたべないの?」

ずっと飲まず食わずで動き続けるハンクを気に掛けたのか、心配の言葉を投げる少女。

無用の長物だ。ハンクはロックフォート島の過酷な訓練を耐え抜いた兵士である。2日程度の絶食で支障をきたすことはない。

仮に食料があつたとして、迂闊にマスクも脱げない現状、食事など到底不可能だ。空気中にウイルスが残留していた場合、脱衣後の一呼吸であの世行きになってしまう。

「不要だ」

「おなかすかない?」

「ああ」

「ふしぎ」

好奇の目を向ける少女を無視し、ハンクは動く。

栄養剤の次は『LISA-001』の研究データだ。

電気は生きている。PCの起動は可能だろう。少女の母親用だったらしいコンピュータのスイッチを押し、機械が目覚めるのを静かに待った。

デスクトップが現れる。パスワードを懸念していたものの、何も仕掛けられていなかったようだ。幸運とばかりにハンクはマウスを動かしていく。

しかし奇妙なことに、デスクトップにはたった2つのフォルダしか残されていないかった。『LISA-001』の名前と、『このパソコンを開いたあなたへ』という、明らかに画面の向こうへ語り掛けているものだ。

研究者のパソコンにたったこれだけしかデータが存在しないのは明らかにおかしい。意図的に整理された後なのだろう。

恐らく少女の母親が、アンブレラの救援部隊でも訪れた時に備えてパスを外し、余計なデータを始末していたか。

後者のメッセージフォルダを無視し、ハンクは『LISA-001』のフォルダをクリックする。

やはりデータが入っていた。ハンクが求めていたものだ。

だがしかし、肝心のデータにパスワードが掛かっている。これでは

USBに移送しても意味が無い。

(パスの入力画面に『メッセージを見て』と書かれている)

ヒントは例のフォルダに隠されてあるらしい。仕方がないと、ハンクは別のフォルダを開封した。

動画のデータが入っていた。サムネは暗黒で、時間はたった3分にも満たないショートビデオだ。

クリックと共に広がる再生画面。冷却ファンの音を連れて、タイムコードが動き出す。

『——こんにちは、名前も知らない誰かさん。私は……いや、どうでもいいか。名前なんて意味が無い。アンブレラのいち研究員と捉えてくれるだけで大丈夫だ』

被写体の姿が、掠れた声と共に露わになる。

ショートボブの女だった。死人のように肌を蒼褪めさせた白衣の女性が、今にも息絶えそうな面持ちでカメラと向き合っているのだ。

『この動画は、画面の前の君へ託すためのメッセージです。願わくば君がアンブレラの間人じゃないか、忠誠の薄い人であることを祈ります。……そう、私は誰とも知らない君に、いや、君だからこそ、やってもらいたいことがある』

「……ままっ。」

音声を聞きつけた『L I S A — 0 0 1』が急ぎ足でやってきて、ハンクの隣から覗き込んだ。

画面に映る、今は亡き母親の姿。反射的に手を伸ばしたが、それが本物ではないと気付いて、寂しそうに引っ込めた。

『私はもう長くない。NESTでバイオハザードが起こって……漏洩したウイルスに曝露してしまった。T—ウイルスに特效薬はない。抗ウイルス剤も、進行を遅らせることしか出来なかった』

震える手を駆使し、懐から取り出した注射器を腕へ突き刺す女性。謎の液体が注入され、呻き声と共に空の容器を手放した。

シリンジの表面には、「L— a d a p t e r . T y p e 3」と印字されている

『単刀直入に言うよ。私の代わりに『L I S A — 0 0 1』を——あの子

を救ってあげてほしい。ここから連れ出して、どこか遠くの世界で匿ってやってくれないか。お金なら私の口座を譲る。カードは引き出しの中だ。無駄に貯まっているから不足はないと思う。……それを使って、アンブレラの手の届かないところまで、逃げ、てっ、げほっ、えほっ、ごぶっ……!!』

咳き込み、口元を抑える女性。

指の隙間からどす黒い汁が伝ってテーブルを汚す。喀血にしてはあまりに粘質なそれは、まるで重油を吐き出したかのよう。

ウィルスの影響は体液に留まらない。白濁していない左目が明らかな異常をきたしていた。

琥珀色に発光し、瞳孔が縦に裂けている。まるで『LISA-001』の眼球が移植されたかのように。

『ハアーツ、ハアーツ……はは。御覧の通り、もう死に体でね。あと一日持つかも分からない。だからどうか、どうか、私の代わりに、あの子を助けて欲しい。とても良い子なんだ。冷たかった私が、人としての善心を取り戻したくらい優しい子なんだ。きつと、迷惑はかけないから』

痛むのか、苦しそうに頭を抑えている。咳が破裂するたびにコールタールのような血餅が散った。

寿命を抉られているのが分かる。命という燃料を最大限まで燃やして、画面の中の彼女はウィルスに抗い、生きていた。

『あの子は、ぜひゅ、冷凍睡眠装置管理室の最奥で眠っている。まず装置を解除するんだ。パスコードは……パスコードは……ええと……えエ、と、ギ、づヴ、うううツ……!!』

頭部が痙攣し始める。口元から白濁した泡が零れ、血管が黒く染まっていた。著しい眼振のせいで、もはや焦点すら定まっていけない。

自我の揺らぎが画面越しでも伝わってくる。抗ウィルス剤と精神力だけで持ち堪えているのだろう。一日保つかどうかと言っていたが、彼女の命は風前の灯火だ。

咄嗟に注射器を打ち込む。先ほどと同じ薬剤らしい。

投与直後に血の気が戻り、頭の揺れや眼振が収まっていく。

『これが最後の一本……どこまで話したっけ。ああ、そうそう。君がアンブレラ側の人間だった時のメッセージだね』

女性は懐から小さな手帳を取り出した。

古いが、よく使いこまれた擦れ具合を感じさせる手帳だ。

『君が見ているパソコンの中に、『LISA-001』のデータが全て入っている。敢えて削除しなかった。恐らく君はそれを欲していることだろう。でも鍵が掛かって開けられない……それを解くためのパスがコレさ。私の日記に書いてある。欲しければ、私を探して取りに来るといい』

——言葉の意図が、まるで理解できなかった。

察するに、彼女はアンブレラへ『LISA-001』を渡したがっていない。拒絶がありありと伺えている。

にも拘らず、データを消去するどころか挑発して奪いに来いとまで宣った。あまりに非合理過ぎる言動である。

ウィルスのせいでもな判断能力を失っているのかもしれないが、ハンクはこの女性から、どこか名状し難い不気味さを感じ取った。それはまるで、暗闇に潜む大蜘蛛の瞳を覗いてしまったかのような。

『もし君がアンブレラの人間で、けれど優しい心根の持ち主なら……傘を持って歩かないことだ。少なくとも、この地獄から出るまでは』

ひらひら手帳を振って、ポケットの中へ仕舞い込む。

椅子へ深く座り直す。夥しい吐血と共に、消え入りそうな笑顔を浮かべて。

『ああ、リサ。こんな事を言う資格は無いけれど……あなたの幸せを願っている。何よりも』

映像は、血の涙が頬を伝うところで暗幕に包まれた。

「……」

暗闇に消えてしまった彼女を追うように、再び手を伸ばす少女。

画面へ細指が触れる。でもそれだけだ。隔てられた向こう側へ触れることは叶わない。



取り残された指紋が、無音の虚しさを帯びていた。

(……パスワードの在処はあの感染者か。ならば『L I S A | 0 0 1』を覚醒させた場所に向かえば手に入るだろう。しかし、T—103と鉢合わせするリスクをどう拭う)

必要な情報のみを抽出し、冷静に思考を展開していくハンク。任務を重んじる彼にとって、女性研究者の心情や願望などどうでも良いことだった。

(対人火器でタイラントを始末するのは不可能に近い。だが撃退のためには武器が要る。物資調達は無視できない。まずは周辺を探索して武器を確保し、下層へ向かうのが定石か)

指針を固め、ハンクは動く。

常に最短最速が華とは限らない。任務を遂行するためには、一時的な遠回りも必要だ。



〔ファイル：L—a d a p t e r〕

著 ■ ■ ■ ・ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

T型B・O・W『L I S A | 0 0 1』の最たる特異性は、その吸収・適合能力にある。

ベースとなったリサ・トレヴァーは、数多の試作型ウイルスおよび寄生生物を投与され続けたにも関わらず、異なる複数のDNA情報を一個の生物として統合した生命体である。

彼女の生殖細胞をベースに、T—ウイルス完全適合者として知られるセルゲイ・ウラジミールの遺伝子を用いることで『L I S A | 0 0 1』は製造された。

両者の適合能力が相乗し合った結果、『L I S A | 0 0 1』は類稀な遺伝子合併吸収能力を獲得した。

即ちウイルスや細菌、寄生生物を問わず、あらゆる遺伝情報を自身のものへと組み替え、人間に限りなく近い状態のまま取り込んでしまう能力である。

これにより、従来の兵器に見られた知能低下や過剰変異といった問



## 腐臭の底

カチン、カチン、カチン。

弾倉を満たしていくリズムが、一定に研究室を支配していた。

(NESTは凶暴な生物兵器を扱う極秘施設、やはり暴走時の鎮圧に備えて弾薬が隠されてあったか。不足を補うには十分だ)

残念ながら新しい銃は手に入らなかったものの、弾を補充できただけでハンクは満足だった。これだけ揃えば、例えばタイラントを相手にしようが煙に巻ける。

「……」

寡黙に着々と作業を進めるハンク。

その後ろ姿を穴が空くほど見つめる『LISA-001』。椅子の上で膝を抱え、不思議そうな眼差しでじいつと観察していた。

ハンクが少女を気に留めることはない。どころか少女なんて存在していないかのように、ただただ機械的に没頭している。

「うー……」

退屈なのか、少しだけ体を揺らす少女。構って欲しいとアピールしているようにも見えた。部屋で仕事に興じる親をつまらなく思う子供と同じなのかもしれない。

が、催促の相手はハンクだ。子供の駄々や細かな機微なんぞに構うはずもなく、完全に無視を決め込んでいた。

あまりにも相手にされないせいで、とうとう少女の方が折れる始末。

「それなあに？」

「弾を込めている」

「やりたい」

「駄目だ」

「おねがい」

「二度も言わせるな。静かにしている」

「んううー！」

有無を言わせぬ玉砕。少女は不機嫌さを全開に頬を膨らませる。

完膚なき無視。真紅のレンズを振り向かせずらしい。

「……あ」

少女は何を思いついたか、ふとした拍子に仏頂面を改めると、椅子から降りて勝手に動き出した。

ハンクから離れたデスクへちよこんと座る。両手をそつと前へ伸ばし、そのままの姿勢で固まった。

瞬間。微弱な電気の走り抜ける音がして。

「！」

ハンクの傍にあつた予備弾倉や弾薬のパッケージが、まるで釣り針にかかった魚のように動きだした。

宙へ浮き、独りで『LISA-001』のもとへ飛んでいくアイテムたち。反射的に掴み取ったパッケージのひとつからは、縄でも括って引つ張っているかのような引力を感じた。

(電磁石の真似事か。器用な)

この少女は発電能力を有している。存外に精密であり、機器を破損することなく停電した自動ドアを解錠したり、装置を動かすほどの腕前だ。

どうやら今度は自分の腕を磁石代わりにして吸い取ったらしい。

ただしそこまで加減が効かないのか、ついでに近くの金属部品も吸い寄せてしまっていた。少女の腕が小金属まみれになっている。

装弾セットを入手すると、磁力を消したのか腕から金属が剥がれ落ち、音を立てて散らかった。

満足そうにパッケージを開き、特に躊躇もなく空弾倉を満たしている。

(……仕組みを理解している。仕草に戸惑いが無い)

手慣れている。

無知からくる迷いが無いのだ。まるで最初から知っていたかのようには手先を動かしている。

手解きを受けたとは考え辛い。何故ならこの少女、ハンクと連れ添うまで銃の存在意義すら知らなかったのだから。

(私を観察して学習したのか。赤子のような吸収能力だな)

知能の高さに僅かな感心を抱きながら、ハンクは手元の装備に目を遣った。

探索して手に入れた実包やガンパウダー、火薬の詰められていない薬莢に、中身のない弾倉の数々。

——ハンクの仕事は二つ。弾倉の装填と、ガンパウダーの補充作業。

前者はただ弾を込めるだけの単純作業。対して後者は少々複雑な工程を必要とする。

白いボトルの強化火薬を上手く配合しなくてはならないのだ。しかも一発一発手作業で。それなりに時間を喰う手間である。

で、あるならば。効率化を図るため、タスクの分断は優先事項だ。

「前言を撤回する」

「？」

「ここから半分はお前の仕事だ。出来るか？」

「！ うん」

「電気は絶対に使うな。火薬に引火する」

「わかった」

少女に任せなかった最たる理由がコレだ。事故のリスクを避けるためだ。

下手に発電されて暴発した場合、『LISA—001』どころかハンクまで無人の銃撃を浴びせられる破目になる。

その心配が無いのであれば——むしろ拒絶した方が悪戯の危険が高まるならば、任せておいた方が安全だろうと判断の舵を切り返した。

使えるものは何であろうと使いこなす。それが例え幼い兵器だろうと例外ではない。



「お前はここに残れ、『LISA—001』」

唐突な置き去り宣言を受けた少女は、言葉を咀嚼できなかつたか、きよとんと首を傾げながら戸惑った。

「どうして？」

「不都合だからだ」

メスのように鋭く、シンプルな拒絶。

理由なんて決まってる。次の標的が、少女の母親だからだ。

活動中の感染者から無傷で持ち物を強奪するのは不可能に近い。是が非でも沈黙させる必要がある。いまさら言うまでもなく、強靱な生命力を誇る感染者を止める方法はひとつしかない。

ソレを少女が——かつてハンクの引き金を止めた少女が、決定的瞬間を目撃してしまった時、はたして何が起こるのか。

最悪の想定は容易だった。

「じゃまっ？」

「――」

避けては通れない問答だと思考する。

親想いな少女にその親を殺すと端的に告げるのは悪手だ。かといって邪魔と一蹴するわけにもいかない。勘の良い少女はきつと、ハンクの動向を察するだろう。

考える。どれが最適な答えなのか。

「……これから向かうのは、お前の母親のもとだ」

「！」

少女の表情が曇る。

聡いがゆえに、ハンクの言葉の裏を理解してしまう。

「もう理解しているだろう。これは無視できない壁だ」

ハンクはあえて誤魔化すことをしなかった。しかし直接的な表現も回避した。

真意を汲ませ、選択を委ねる。それが最適なのだろう。

「……どうしても、いかなきゃ、だめ？」

「そうだ」

「まま、しんじやう？」

沈黙するハンク。その意を解さないほど、少女の知能は低いものではない。

唇が微かに震えていた。裾を握り、堪えるように俯いた。

葛藤を浮かべている。これまで抱いたことの無い強烈な葛藤に戸

惑いを見せている。

母が殺される。それは嫌だ。けれどハンクを止めることは出来ない。

少女は、十二分にも理解していた。

「……ウイルスに感染した人間は、家族だろうが友人だろうが躊躇なく喰らう怪物となる」

頭を抱える少女へ、淡々とハンクは言った。

「思い出せ、人としての死を望んだ男がいたことを。何故その答えに行きついたか分かるか？」

「……」

「怪物になることを拒んだからだ。醜い怪物になるより、人として終わることを選ぶ。それが人間だ。——そして、お前の母親も人間だった」

「！」

ハツとしたように瞼が開く。

ドクンと心臓が打ち跳ねて、少女はまっすぐハンクを見た。

「ままも、にんげん」

少女の中で点と点が繋がっていく。

それは形を作り、ひとつの答えを浮かび上がらせる。

彼女が感じ取ったのは、人としての『誇り』という曖昧模糊の輪郭だった。

人のまま終わることを尊ぶ誇り。今まで漠然と感じていた人としての精神性。

それを霧のような不定ではなく、しっかりと形を捉えて、噛み締めるように胸に抱いた。

「っ」

少女は無垢な存在だ。何色でもなく、何物にもなれる白紙なのだ。少女を象る精神ははまだ本能が大部分を占めると言っている。

だから彼女は赤子の如く吸収する。五感に始まり、言語や道具といった概念、そして人の心の機微までもを吸収し、一步一步と成長していく。

人の精神性を理解する——これは、ひとつの羽化だったのかもしれない。

「思考を止めるな」

マスクでくぐもった声が響いた。

少女の羽化を手伝うように。あるいは少女の逃げ道を塞ぐように。

「常に最善の選択を考えろ。お前が出来る最善は、お前にしか生み出せないものだ」と覚えておけ」

「——」

仮想する。人間性を失った愛しい人が、そのまま生き永らえることを望むだろうか。

きつと違っていると、少女は思う。

想えるほどに、少女は人として成長を遂げていた。

「……わたしもいく」

覚悟が固まる。

訣別の時へ向けて歩むと、決意が満ちる。

「もういちど、ままたあう」

瞳に光を宿していた。揺るぎない確固たる灯火があつた。

怯える子供はもう居ない。真つ直ぐと未来を見据える少女がいた。

——その成長こそが、ハンクの望んだ計算結果でもあるのだが。

（錯乱の兆候、離反意思は見られない。説得は成功と考えていいだろう）

傍から見れば、惑う少女を導くため諭したように映っただろう。

違う。それをハンクが任務に必要なだと判断したからに過ぎない。

彼の行動は全て一点に集結する。任務遂行に必要なか否か、ただそれだけの基準で動いている。

死神に情など存在しない。それはこれまでも、これからも変わらな

い。

「決まったか」

「うん」

「なら着いていい」

弊害は無いだらうと判断し、少女を連れて研究室を後にした。



銃口を散策させながら死臭漂う廃墟を歩く。往路でゾンビを倒した甲斐あつて敵影は見当たらないが、それでも用心は必要だ。

エレベーターで下層へ向かう。到着すれば、そのまま西エリアを突き進む。

冷凍睡眠装置が跋扈していた例の部屋。そこにいるだろう、『L I SA—001』の開発者まで一直線に、

「はんくー！」

「ッ！」

絶叫と影が落雷のように墜落した。

天井のダクトを破つて——いいや、金網の目を潜り抜けて、赤黒い醜悪なスライムが降ってきたのだ。

べしやり。潰れたトマトのような粘質な塊が床一面に爆散する。

クリーチャーではない。信じ難いことに死体だった。肉という肉をどろどろに溶かされた死体だったのだ。

常軌を逸した腐臭があつという間に鼻腔の隅まで蹂躪する。流石のハンクも眉を動かさずにはいられないほどの、強烈きわまりない腐乱臭が。

ガスマスクでこれだ、生身の少女はたまつたものではないだろう。

案の定、少女は険しい表情で鼻を覆っていた。心なしか顔が青い。吐き気を必死に堪えているらしい。

(……溶かされている。それも内側から)

片膝を着き、肉汁のプールと塊を観察する。

皮膚とおもしき部位はそこまで腐敗していない。酷いのは内臓だ。さながら臓器へ直接酸を注がれ、体の内部からグズグズに溶かし尽くされたような痕跡だった。腐ったスープを詰めたブヨブヨのソーセージといったところか。

「えう、くさっ！」

「……」

ゾンビが消化液を吐き出して攻撃することはある。だがこれは内側から溶かされたものだ。ゾンビやリッカーの仕業ではない。イビーのような怪植物とも異なる。

闇の中にナニカが潜んでいる証左と言っても過言ではない。未知の怪物の気配が色濃くなつたのをハンクは感じた。

脅威を嗅ぎ取りながらも臆せずハンクは進んでいく。

警戒は緩めず、冷静を崩さず、観察を怠らず。無音の世界を闊歩する。

辿り着いた部屋の前で、ハンクは少女を控えさせた。

腐肉が落ちてきたダクトは冷凍睡眠装置管理施設と繋がっている。ほんの手前なのだ。

その通気口から、ハンク目掛けて腐乱死体が降ってきたということ  
は。

「――」  
開く。迅速に突入する。

サーチライトを縦横無尽に駆け巡らせ、そして。

言葉を失った。

(なんだ、これは)

地獄だった。地獄としかいようのない光景が広がっていた。

はらわた腸で編まれた縄らしき汚物で吊るされた死体の森。無数の溶けた骨肉が融合しあつて出来たおぞましい塊。それは汚泥のような腐った汁をとめどなく滴らせ、筆舌に尽くしがたい臭気を放つ水溜りを生んでいる。

部屋の機械は臓物に塗れ、床は血脂の滑りと光沢を帯び、壁一面が黄ばんだ膿汁で塗装されていた。

かつての近未来的な清潔感などどこにもない。末期の野戦病院すら足元にも及ばない、凄惨で悪辣な空間と化していた。

「うっ……うええっ……！」

「吐きたければ吐け。多少は楽になる」

この光景は、臭いは、あまりにも刺激が強すぎた。

嘔吐中枢の閾値が呆気なく破壊されていく。しかし少女は寸でのところで決壊を抑え込んだ。必死に耐え忍びながら、眼前の地獄に向き合おうと前を見る。

(……吊るされた死体に腐敗はみられない。だが隅に積まれたものはみな一様に溶解している。廊下で目撃したものと同じだ)

まるで食糧庫のようだ。ハンクは感じた。

冷凍肉のようにぶら下がる死体の数々や、食後と思しき腐肉の山。備蓄と廃棄物だ。明らかに仕分けられている。

(獲物を保存するB・O・Wなど存在しない。二次感染で変異した虫か実験動物の仕業か?)

生物兵器は敵を殲滅するために作られた怪物だ。蟻のように獲物を巢へ持ち帰るといった本能行動は、兵器としての効率を妨げる欠陥である。

ならばこの光景を作った犯人は、漏洩したウイルスに蝕まれ劇的な変異を起こした原生生物の可能性が高い。

(集中だ。気を抜けばそこで終わる)

さんざん怪物と渡り合ってきたハンクだが、今回ばかりは予断を許さないと一層気を引き締めた。

理屈はない。兵士の直感だった。ただならぬ雰囲気殺戮の残滓から感じ取ったのだ。

——死神の予感、秒すら跨ぐことなく的中する。

「ッ、伏せろ！」

一瞬。ほんの一瞬空気が揺らいだ。

その僅かな機微を、ハンクは決して見逃さない。

屈んだ。反射的に少女を抑えて背を縮め、汚物まみれの床を転がった。

泥沼へ飛び込んだよりも酷く粘液が全身にこびりつく。腐臭の津波が情け容赦なく襲い掛かり、少女は「うええっ」と嗚咽を零す。

だがそんなものに構っていらられる暇はない。

頭上を鎌鼬のような鋭利が通り過ぎたら、嫌でも気にしていられない。

無音だ。梟のように無音だった。

空気を切る音もなく、しかし回避が一秒でも遅れていたら、首が宙

を舞っていたと確信せざるをえない致命の一撃だった。

襲撃者の正体は梟ではない。猿だ。爪が大鎌の如く肥大化した巨大な猿だ。

四肢が異様に長く、関節が増え、肩に蛇をつけたように複雑な構造へと変異している。唇を失った剥き出しの口は無数の牙で占められ、ただ肉を引き裂くためだけに存在するシユレッダーと化していた。

（実験用の猿が変異したようだな。こいつが部屋を荒らした犯人か？）

黒板を思い切り引つ掻いたような奇声が爆発した。けたたましい高周波は鼓膜を引き裂かんばかりに反響し、聴覚が痛覚へ置き換わるほどの波濤となって襲い掛かる。

関係ない。間髪入れず引き金を絞った。容赦のない機関の轟咆が唸りを上げ、被弾した肉塊が腐ったジュースを巻き散らす。

しかし猿に当たらない。掠りもしない。大猿は蝟と蝶を掛け合わせたかのような予測不可能の高速移動で、弾の嵐を翻弄していた。

縦横無尽に駆け巡り、吊り下げられた肉塊たちを巧みに利用し、大猿は攻撃を避け続ける。

逃がっているのではない。隙を伺っているのだ。濁る眼球は一切ハंकから逸れることなく、隙あらば首を撥ね飛ばさんと狙い定めている。

攻撃の手を緩めるわけにはいかない。守りに入った瞬間が死だ。

しかし銃には限界がある。夥しい鉛の豪雨が止む一瞬がある。

装填——<sup>リロード</sup> 僅かに生まれた虚を突かんと、怪物は壁を蹴り飛ばした。無慈悲を雄叫びに乗せて、凶刃を備えた鞭の腕を解き放つ。

——甘い。<sup>リロード</sup> 弱点など、ハंकは初めから織り込み済みだ。

「やあっ!!」

甲高い息吹が迅雷を生んだ。ほの暗い密室に眩い光が走り抜け、大猿の胸を穿ち抜いた。

ズバディツ!! と稲妻が肉を食う音が弾けて消える。大猿は悍ましい悲鳴を張り上げながら、バランスを崩して墜落した。

しかし浅い。殺めるまでにはいたらない。むしろ火に油を注いだ

だけだ。

それでいい。命へ刃を届かせるのは死神の役割なのだから。撃鉄一閃。正確無比な一点射撃は、顔を上げた大猿の額を吹っ飛ばした。

毛むくじやらの巨体が痙攣と共に崩れ落ちる。波の無い血だまりを描いて、怪物は静かな眠りに就いた。

(……妙だ。何かがおかしい)

白煙を散らす銃口を降ろし、ハンクは死体へ歩を進める。

その胸に抱くのは、脅威を排除した安堵ではない。

(奇襲も、攻撃も、こいつは消化液の類を使っていない。爪だけだ。酸を流し込む管のようなものすら見当たらない)

違和感だった。地獄と化した部屋との因果を見出せないがゆえの違和感だった。

不自然なのだ。仮に猿がこの巢の主ならば、肉を溶かし啜るための捕食器官を備えているはずである。

なのにそれが無い。そもそもそういった変異を起こしていない。むしろスタンダードな肉食獣と同じく、爪で仕留め牙で喰らう特徴だ。

(……そういえば)

奇妙な点がもうひとつだけ。

それは、少女が猿と相見えた一瞬のこと。

『L I S A — 0 0 1』は常に、私より早く生物の存在を感知していた。なのにこの猿は察知できていなかった。何故だ？)

プラント43の触手も、種に侵された男も、突如現れたT—103も、少女はハンクが気付くより早く感付いていた。

生体電気のようなものを探知する器官が備わっているのではないかとハンクは思う。それこそデンキウナギと同じように。

それが正鵠なら、猿に通用しなかったのはどういう理屈か？

「おなじくおこ」

得体の知れない、不気味なモノを目の当たりにしたかのように少女は言った。

「わたしと、おなじにおい」

繰り返す。

この猿から感じた、同属としての気配かおりを。

(まさか)

研究室で発見した記録文書が脳裏に浮かぶ。

L— a d a p t e r。『L I S A— 0 0 1』の開発者が着手したら  
しい試薬の存在。

あの薬には少女の血液が使われていた。投与実験の中にサルが含まれていたのも覚えている。

(猿がここにいた開発者を喰らったものとはかり思っていた。あの肉山の一部になってしまったとばかり！ だが違う！)

不透明な違和感が、色を帯びていくような実感があった。

もし仮に、大猿が実験の成れ果てだとするならば。

もし仮に、同属であるからこそ少女のセンサーが捉えられなかったのだとしたら。

思い出せ。女が刺した注射器の、ラベルに書かれた文字は何だった

？

思い出せ。初めて女にあった時、明らかな自我を感じたのは偶然か

？

(猿は番人だ、あの女は初めからここに——！)

「りざい」

悪霊のような濁声が這ずって。

次の瞬間。五臓六腑が弾け飛ばんばかりの衝撃が襲い掛かった。

# U m b r e l l a   m u s t   d i e

「ぐあッ!？」

激突、轟音。背中が砕け散ったかと錯覚するほどのインパクトに見舞われ、ハンクは肺の空気と苦悶の声を絞り出した。

息つく間もなく、芥のように床を転がる。

反射的に受身をとったまではない。視界が切れかけの電球のように明滅し、これっぽちも足に力が入らないという『最悪』さえなければさらによかった。

(まずい……このダメージはッ……!)

指一本も動かせない、というのはこんな状態なのだろう。ダメージのあまり神経が役割を放棄し、指令を失った体は荒々しい呼吸を繰り返すだけの肉塊と化す。

だが問題は今にも内から破裂しそうな激痛ではない。震えだ。深刻な痛手を負った体が張り上げるエマージエンシーコールこそが問題なのだ。

鋼鉄の意志に背き、膝が微かに笑っていた。眼球はノイズを訴え、耳鳴りは頭蓋をこじ開けてくるかのよう。腕は痙攣に吞まれ、まともに上がらない始末。

濃厚な鉄の味が溢れてやまない。冷えた脂汗で背が滲む。もしかすると、叩きつけられた時に内臓をどこかやってしまったのかもしれない。

(ぐッ……くっ……!)

渾身の力を込め、立ち上がらんと活を入れる。

だが立てない。当然だ。ハンクはSF映画の超人ではない。人智を越えた膂力をもって弄ばれ、おもちゃにされたカエルの如くコンクリートに叩きつけられて無事でいられるものか。むしろ生きている方が不思議だろう。

そもそもハンクは、丸一日昏睡に陥るほどの一撃をバーキンに見舞われていた。常人なら歩行すら満足にできない容態だったはずなのだ。それを鍛え抜かれた肉体と精神力で補っていたにすぎない。

今、その臨界を越えてしまった。

怪物たちとの死闘で酷使され続けた肉体が、先の痛打で決壊寸前まで追い込まれてしまった。

絶体絶命。

どす黒い未来が、大口を開けて嗤っている。

「りぎ」

響く。

「りぎ、りぎ、りいりいりいぎあああああ」

響く。響く。

耳が腐り落ちかねない、汚濁の叫びが響き渡る。

これがヒトの声なのだろうか。いいや違う。断じて違う。

悪霊だ。地獄の底から泣き叫ぶ悪霊の声だ。

——アンブレラの魔物が、腐肉の山から醜悪な歌を奏でて姿を現した。

全体的に細い、針金のようなフォルムだった。

腕や足、指に首。五体全てが細く長く、異様なまでに伸びきっている。吹けば折れてしまいそうな心細さと、何度でも立ち上がりかねない執念が癒着しあつた風貌だ。

皮は骨に張り付き、でこぼこした骨格が浮き彫りになっている。髪もバサバサで粘液にまみれ、まるで土砂降りの墓場から這い出たばかりの幽鬼のよう。

顔は辛うじて原形を保っているものの、小刻みに震え、ぎよろぎよろと独りでに蠢く右目や、唇を失くし歯が剥き出しとなった口からは生前の端麗さなど微塵もない。

だがしかし、真に目を惹くのは全貌ではない。

下顎から胸の中央にかけて走りぬける、裂傷のような生々しい亀裂があつた。

包丁で力任せに裂いたような裂け目の中に、ナニカが蠢いているのがはっきり見えたのだ。

まるで涎を吐き垂らす口のように、絶えず粘液を滴らせる傷口は、さながら別の生き物が喉に擬態しているのではないかとすら思わさ



れる。

惨たらしい変異の果てに、かつて人間だったはずの女は、まったく別の存在へと生まれ変わっていた。

「ままー」

ハンクと異形を隔てる少女。痰を絡めるような不気味な音を垂れ流しながら前進する母の行く手を、両手をいっぱい広げて妨害する。

異形の動きが止まった。

血走った左目で、少女をじいつと見据えていた。

「まま。わたしだよ。わかる？」

沈黙が空気を澱ませる。ぎよろぎよると動きを止めない右目に理性の片鱗はない。

けれど、少女を見据える黄ばみきった左目は、微かな知性を宿しているようだ。

「りゃ」

「！……うん、りさだよ、まま」

一歩、少女は前へと歩み出す。

そつと手を伸ばす。皮が腐り落ち、肉が剥き出しになった母の頬へ、触れるか触れないかの力加減で。

「まま、はんくはだめ。だめなの。はんくは、わたしをまもってくれたの」

「……？」

ゴキン、と聞こえてきそうなほど折れ曲がる異形の首。

支離滅裂に動き回っていた右目がピタリと止んだ。

収縮し、黒点のようになった瞳孔は、左目とは違うただ一点を見つめている。

少女の背後、黒づくめの特殊装備に身を包んだU<sup>ハ</sup>・S<sup>ン</sup>・S<sup>ク</sup>の姿を。

「——ん、ブレら」

鮮黄の唾液が、糸を引きながら落下した。

「あんぶ、れら、あんぶれら、あんぶれら、ガ、ごお、オオ ■■■■

「ま……ま……!!」

血の塊を吐くかのような怒号だった。

喉の亀裂から嘔吐を彷彿させる濁音が生まれる。胃をひっくり返しそうになる激臭の液を噴き出し、肉の痙攣が始まった。

次の瞬間、亀裂がばっくり裂けたかと思えば、尖鋭なナニカが凄まじい速度で銛のように射出されたのだ。

触手だ。少女の動体視力が捉えたソレは、牙を生やした蚯蚓ミミズのような触手だった。

喉を裂いて飛び出た触手は、それ自体が別の生物であるかのような金切り声を張り上げながら、少女など脇目も振らず吹っ飛んでいく。

矛先は、壁に寄りかかっているハンク一点。

「っ！」

ハンクは懐からナイフを引き抜き、反射的に投擲した。銀に輝く刃は吸い込まれるように突き刺さり、絶望の進撃を辛うじて食い止める。

黒板を爪で思いきり引つ搔いたような奇声が轟く。同時に肉の先端から、筆舌に尽くし難い黄ばんだ膿が滝のように溢れ出た。

(こいつは……!)

腐食性の液体だった。人体をも無慈悲に溶かし尽くす、酸のような液体だった。

グズグズと、ブジュブジュと。ケミカルな刺激臭と煙幕を無尽蔵に吹き上げながら、数多のゾンビを屠ったコンバットナイフを瞬く間に溶解させていく。

異形の無感情な——いいや。殺意というどす黒さに埋め尽くされた狂気の瞳が、まっすぐハンクを射貫いていた。

(強酸性の体液、サソリの尾のような消化管——やはりこいつが元凶か。短期間でここまで変異するとは、一体何人の死体を食い続けた?)

しかし、今更分かったからどうなるというのだ。

ハンクは『LISA—001』のような生物兵器ではない。たった

一呼吸で傷が治るようになっていない。

一度目はナイフで防げた。でも二度目は？ 三度目はどうだ？

あの触手はすぐにハンクを仕留めにくる。煮えたぎる殺意を抱いて、眼にも止まらぬスピードで、五臓六腑をドロドロのスープに調理するだろう。

満身創痍のハンクが、そんな怪物の猛攻を捌き続けるなど不可能に等しい。

——ああそうだ。ハンクならば不可能だ。

「ごめんなさい」

一陣の閃光があった。

稲妻を帯び、溶鋼に匹敵する熱を纏う、音すら切り裂く一閃があった。

命を溶かさんと嘲笑う触手を、螢火の軌跡を描きながら吹き抜ける、落花のような斬撃が。

凧のような沈黙が支配した。

時の流れにラグが生じる。一寸ばかりの間がひらく。

遅れて、触手の輪切りが地に落ちて。

「……ア？ いア、ガ、ギ、ギギギイイイアアアアアアア——

——！！」

「まま」

焼き焦がされた断面から煤けた黒煙が立ち昇る。ビチビチとトカゲの尾のようにのた打ち回る触手が生々しい。

異形の悲鳴が虚空を裂いた。しかしそれは激痛に喘ぐというより、予想外の反撃を喰らった驚愕とも取れる声色だ。

「ずっと、ずっと、あいしてる。ぜったい、ぜったい、わすれないから……！」

訣別を囁き、ハンクを庇う小さな背中。

粘つく床を、強く強く踏みしめて。かつて母だったモノと対峙する無垢な背中。

その身は脆弱な童に非ず。姿と心は人形ひとがたでも、中身はウイルスが育んだ怪物だ。

——証を示すように、か細い両腕は人外の片鱗を発現していた。  
前腕部。橈骨と尺骨の間を突き破るように、腕から金属のブレードが飛び出していった。

空気を焼くほど赤熱し、磁励音と酷似した波濤を放つ二振りの刃。幽かな稲妻を瞬かせる第六の爪。

けれどそれは、爪と呼ぶにはあまりに洗練され過ぎていた。

鋭く、気高く、悍ましい兵器像とかけ離れた姿は、まるで研ぎ澄まされた刀のよう。

(これが……植物の怪物を細切れにしたカラクリの正体なのか)

体内の金属質を凝集させ、骨組織を覆うことで電熱ブレードを実現させた異端の骨爪。

雷電を帯び、灼熱をもって獲物を断つ、『L I S A—001』の真骨頂。

ハンクは彼女を抱えた時、予想外の重量に鉄塊でも仕込まれているようだと比喻していた。

それは比喻ではなかったのだ。それこそが望外の真実だったのだ。

「……覚悟はいいか、『L I S A—001』」

死体のように不動のまま、ハンクは少女に言葉をうつ。

母を正しく葬る覚悟。それと向き合う決意を、ただただ静かに問いかける。

少女は真つ直ぐ、「だいじょうぶ」とだけ言葉を返した。

「ならば作戦だ。お前は時間を稼げ。ヤツの視線を奪い続けることに集中しろ」

予想外の指示だったのだろう、少女はほんの少しだけハンクを伺うように振りかえった。

少女に代わり、怪物から眼を逸らさぬままハンクは繋げる。

「その爪が絶大な破壊力を持つことは知っている。だがしかし、闇雲に振るえば日記ごと八つ裂いてしまいかねん。決着は私がつける。そのために隙を作れ」

「……ん。どれくらい？」

「3分だ。3分だけヤツを引き付けろ。出来るか？」

「うん」

「よし」

それより先は言葉など不要。

少女は異形を見据え、重く一步を踏み出していく。

熱を放ち、存在するだけで空気を焦がす、二振りの刃を携えながら。

「アンぶ、レらアア……!!」

焼き切られた触手の断面が怨嗟と共に溶けていく。

次の瞬間、薬に漬けられた発泡スチロールのように泡立つ肉の中から、

新たな触手がまるでトカゲの尾のように再生した。

しかし様子がおかしい。以前と違う。

無数の水疱に覆われて、絶えず強力な酸を染み出していた。あれで

は触れただけで水膨れが破裂し、酸のシャワーを浴びかねない。

それはまさしく、爆弾を宿したような変異だった。

「■■■■■■—— ツツ!!」

餓えた獣より狂気に堕ちた、血潮も凍る雄叫びが炸裂して。

瞬きよりも迅く、母子は互いを袂り合う砲弾と化した。



肉を纏った死が迫る。

凜猛な殺意を抱き、蝕まれた狂気で牙を研いだ怪物が、雷鳴のような咆哮と共に突撃する。

「ツ!!」

大気を切り裂き、紅蓮の軌跡を刻みながら駆ける少女。

爪の威力は証明済みだ。イビーを容易く細切れにし、人間を玩具のように屠る触手を豆腐のように斬り落とした力は舌を巻くほどである。

その脅威を、ウイルスに冒された頭脳で学習してなお、異形は『LISA—001』を敵として認識しなかった。

外見からは想像もつかない敏捷さで突っ切る異形の矛先は少女ではない。

その背後。壁に寄りかかり、立ち上がろうとしているハンクのみが、血染めの視界を埋め尽くしていた。

「アアアアアあああああんぶレリアアアアアアアアアアアア——  
——ッ!!」

「させないー!」

SF世界のビームサーベルが空を薙いだような静音が、少女の腕と共に描かれた。

刃が向かう先は異形の足だ。蜘蛛のように伸びた足を、その膝下を。根菜を叩き切るが如く、真つ二つに両断したのだ。

暗闇を広げるような絶叫が破裂する。異形は床の肉片たちを派手に散らかしながら転がった。

しかし止まらない。殺意の獣は苦痛を介してなどいない。

操り人形を彷彿させる不気味な挙動で立ち上がり、すぐさま猛進を再開した。

——立ち上がったその先に、鴉の男はいなかった。

まるで腐肉から立ち込める脂の霧に撒かれてしまったかのように、忽然と姿を消していた。

動揺。異形の原始的な脳が、不測の事態にブレーキを掛けて。

「ううああっ!!」

混乱する異形の虚を突き、残された片足を少女の刃が焼き切った。

巨体が崩れ落ち、芋虫のように這い蹲る。血脂に濡れた髪を振り乱して、硝子を砕いたような咆哮を爆発させた。

次の瞬間。少女の視界が、ミキサーにでもかけられたかの如く縦横無尽に攪乱した。

「あぐっ!」

気付けば宙を舞っていた。気付けば壁に叩きつけられていた。

油断などしていない。少女は完璧に女の死角を陣取っていた。足を狙って行動力を奪い、背後をとって虚を穿つ完璧な行動だったはずだ。

見間違えでなければ、女の関節があり得ない方向に捻じ曲がっていた。

腕が逆転したのだ。関節を真逆に付け替えた人形のような動きで背後の少女を掴み、一切の加減なく放り投げたのだ。

爆発する鈍痛をこらえて立ち上がった時には、怪物は既に悠然と起き上がったままっていた。

治っている。切断された両足が、何事もなかったかのように戻っている。

焼け焦げた断面からムカデのような触手がうごうごと這い出し、斬り落とされた足を回収したと知った時、少女の背に雪解けのような冷たい汗が流れ落ちた。

けれど、襲いかかってくる気配はない。少しばかり様子がおかしい。

頭を抱え、呻き声を上げて苦しんでいる。激しい頭痛に抗うようにのた打ち回り、ついには床へ額を叩きつけ始めていく。

絶叫が奔る。

少女の鋭敏な聴覚は確かに捉えた。獣の咆哮に、微かなヒトの声が混じっているのをはつきりと。

「あああああ、りさ、りさ、りさ、ダメだ、わたシに、わたシに近づい、ちや、あ、ああああああああああ……!!」

——答えを得た。

怪物に成り果てたこの女は、僅かな理性で少女を襲うまいと、今の今まで抗い続けていたのだと。

しかし女は今度こそ、ウイルスに呑まれ『L I S A — 0 0 1』を脅威とみなす。

全身が浮き上がったどす黒い血管に埋め尽くされた。

限界まで脈打つ血潮に耐え切れず、目頭や歯茎から重油のような液体が溢れ出す。

醜悪さの暴走は留まるところを知らず、時を経るごとに人の領域から外れていく。

生前の面影なんて、一握の砂ほども残らないほどに。

「……………」

——視たくない。

——これ以上、あなたが醜くなっていく光景を視たくない。  
——だったら、わたしはどうすればいい？

「ふーっ、ふーっ」

呼吸が荒くなっていく。自己主張を増した心音が頭蓋を揺らす。

猛り吠える獣性が脳漿を冒してくる感覚があつた。少女の中に潜むウイルス、その頭文字——暴君タイラントの性が、幼き遺伝子の奥底から産声を上げようとしているのだ。

熱い。熱い。熱い。

膨大な灼熱感が湯水の如く湧いてくる。

叫びが聴こえる。血流に乗って耳まで届く。

本能に還れと、眼に見えない暴君が囁いてくる。

頭が蕩けて、心地よくなってくるほどに。

『思考を止めるな』

けれど。それでも。少女は獣に堕ちはしない。

例え無垢の裏に潜む怪物が、彼女を血みどろの世界へ手を招こうと。

それを払う人がいる。鮮血の双瞳で暗闇を拓き、少女を守る人がいる。

「……わたしにできる、さいぜんを」

だから少女は人で在る。気高き人間で在るために、内なる獣を叩き伏せる。

どうすればいい？ ——そんなの、とっくに分かり切っていた。

与えられた任務を果たす。それこそが、少女に出来る最善に他ならない。

「まーまー」

爪の熱を爆発的に引き上げて。稲光を明滅させて。

変わり果ててしまった母へ、本当の恩返しをするために。

生まれて初めて、少女は反旗を翻した。



「わたしを、みて！」

「■■■■■■■■■■」

ゆらり。幽鬼のように細長い体が揺らめいて。

生理的嫌悪を引き出す悪音を巻き散らしながら、異形の女は強酸を吹く大蛇を吐き出した。

しかもひとつではない。根元からさらに姿を現し、首を切られれば増殖するヒュドラのように襲い掛かる。

「やあああああッ！」

鉄板すら貫く怪物の一射を、常識を超えた反射神経で見切り、再び触手を切り飛ばす。

体液が暴れるホースのように噴射した。骨すらグズグズに溶かす猛毒だ、触れれば当然ただでは済まない。

少女は地を蹴り、溶解液のシャワーを浴びる前に戦前を退く。遅かった。

いいや。そもそもが間違いだったと言うべきか。

「ぎッ……!! いづツ、ううううッ……!!」

神経へ熱した油を注がれたような激痛が、あまりにも無慈悲に襲いかかった。

浴びたのは刃だ。触手を斬り落としたブレードが沸騰し、夥しい水蒸気と激臭を噴き上げている。

金属のコーティングが成す術もなく溶かし尽くされ、一気に侵食されていた。

鋼の下は生きた組織だ。骨髄も神経も全て備わっている。

それをまとめてグズグズに溶かされた。想像を絶する痛みが濁流の如く蹂躪し、一瞬にして脂汗が滝のように溢れ出す。

しかも、爪だけでは終わらない。

(ひろがってる……! うでに、ひろがってくる!!)

手を下げようが振るおうが、腐食液が爪を上って、腕まで侵略してくるではないか。

体で毛細管現象を実験しているかのようだった。眼を見張るスピードで細胞から細胞へ伝染し、魔の手を着実に伸ばしている。

濃硫酸が生易しく思えるほどの破壊力。まるで生きるモノを徹底的に壊すためだけに存在するかのような、邪悪さすら感じるほどの猛毒だ。

「ッ!!」

腕まで溶かされるのはまずい——本能的に危機を悟った少女は、残された爪で病巣を一息に切断した。

奥歯から血が滲みそうな痛みが、腕を中心に神経を八つ裂く。

(いつ……!! いたい、いたい、いたいよ、はんく……!)

鮮血が断面から溢れ出す。

しかし流石は生物兵器か、体内のウイルスがすぐさま凝固を促し、負傷組織をみるみる回復させていく。

それでも痛覚が働かないわけではない。むしろゾンビや通常のB・O・Wと違って中枢神経が正常な分、より強烈なパルスを味わう羽目になる。

ある種、これが彼女の弱点といっても過言ではない。

数値上、戦闘データがタイラントの平均を上回っていたとしても、『LISA-001』は戦闘向きの存在ではない。そういう精神構造をしていない。

ハンクという支えが無ければ、ここで倒れ伏していた可能性すらあるほどだ。

(でも……あと、すこし……!)

折れたブレードが伸びていく。あっという間に元の形を取り戻す。歯を食いしばって前を向き、全速力で駆けてくる異形の女を捕捉して。

(もうすこしだけ、がんばらなきゃ!)

3分経過まで、残り1分。

少女は敢えて、万物を腐らせる化け物の懐へ突っ込んだ。

異形の腕が鞭のように振り下ろされる。少女は床を蹴り飛ばし、ともに喰らえばミンチのマンホールにされかねない致命の殴打を回避した。

床が砕ける破壊の音を背に受けて、少女は思考を加速させる

胴は狙えない。電気も使えない。

ただでさえ腐った体液や腐肉の雨で異形の女はどろどろなのだ。これ以上日記を破損させるなど許されない。

かといって頭部を狙うのは危険すぎる。異形の身の丈は3m近くあり、小柄な少女は跳ばなくては攻撃できないからだ。

安直な跳躍は莫大な隙を生んでしまう。それを見越して、ハンクは少女へ『殺せ』と命令しなかったのだろう。

だから、徹底的に足を狙った。異形の女の再生能力が追いつかなくなるほどに、ぐるぐる旋回を繰り返しながら鎌鼬のように切りつけた。

敏捷さでは『L I S A—001』に軍配が上がる。小柄な体躯と小回りを活かし、常に死角へ潜み、無尽蔵の斬撃を叩き込む。

「ガアアアアアアアア——ッ!!」

声帯から血を噴き出すような異形の咆哮が爆発した。

腰を基点に胴体が真後ろまで捻じ曲がる。ちよこまか動き回る少女を、蜘蛛のような腕で捉えんと解き放つ。

腕だけではない。顎の亀裂から二本の触手が、またしても金切り声と共に現れた。

だがしかし、同じ手を食うほど『L I S A—001』は間抜けではない。

五感を研ぎ、動きを予測し、人間を凌駕した反射神経をフル稼働して、不規則な猛攻を見極めていく。

右からの一閃。屈んで躲す。

上と左から波状攻撃。腕は切りつけ、触手は触れずに転がって避ける。

心臓目掛けて放たれた一射。床を蹴飛ばし、宙を回転しながら蝶のように回避する。

強酸のスプレーは、全速力で異形の背後へ滑り込んで難を逃れた。隙を貫き、虚を破り、バランスを奪うために切り裂き続ける。

回避を重ねるたびに異形へ傷が刻まれていく。即座に再生するが、それを上回るペースで斬撃を放ち続ける。



力をもってまともに浴びれば、例え燃え盛る炎だろうと凍死する。それでも素直に凍らない。女は長い腕で頭部を庇い、執念の力でハンク目掛けて疾駆した。

最後の一撃。猛毒の触手が、砲弾のように飛び出して。

矛先がハンクへ達するよりも早く、女は霜を宿した氷像となって動きを止めた。

悲鳴も凍り、静まり返る血反吐の世界。

ハンクはレバーを上げ、彫像の傍へと歩み寄る。

「最後だ。お前の判断に委ねよう」

「……わたし、やる」

「そうか。ならば首から上を確実に狙え」

少女はこくりと頷いて、過去の残影を振り払うように赤熱する刃を一薙ぎした。

塊が落ちる。少女は手早くキャッチする。

現実を呑み込むように瞳を閉じて、空白の果てに、そっと床へ安置した。

「……日記を回収する。おそらくここだ。少しだけ溶かせるか？」  
「ん」

ハンクの指示に従うまま、少女は異形の懐へ手を当てる。

稲光。じんわり霜が溶け消えて、水滴が腕を伝って肘から落ちた。

衣服の断片が解凍されると、ハンクは露わになったポケットへ手を突っ込んだ。

感触がある。ビンゴだ。ハンクはそのまま、日記を壊さないよう引っ張り出す。

(……油脂で汚れている。やはり状態が悪い——が、どうにか解読は出来そうだ)

ごわごわのメモを流し読みしたハンクは、一先ず研究室へ戻ろうと日記を仕舞い、いつもと変わらず歩き出す。

静穏を取り戻したNEESTを引き返し、エレベーターの中へ入って。

上層へ進む。

ボタンを。ボタンを。ボタンを。

「はんく?」

鈍重な音が頭蓋中に響いた。

視界が水面に落とされた絵具のようになぐにやりと曲がる。耳鳴りは鼓膜を射貫きそうなほどガンガン響き、聴覚を失ったかと錯覚した。

おかしい。妙だ。

立っていたはずなのに、視線が床と水平なのは。

「はんく……? はんく!」

少女のソプラノが。

遠く、なって――

## Chapter 2

### 忘霊

「どうしよう、どうしよう、どうしよう」

ハンクが動かなくなつて、どれほどの時間が経つただろうか。

動かぬ時計に閉塞した空間。息を止めれば消えてしまいそうになる沈黙の帳は、時間の感覚をあやふやにさせる。

昏倒したハンクを背負い、無我夢中で馴染みある研究室へ戻った少女は、ソファに寝そべるハンクの傍で呻くことしかできなかつた。

死んではない。息はある。

けれど死にかけている。瀬戸際だ。崖っぷちを爪先で凌いでいるに等しい。

少女には分かる。人ならざる感覚を持つ『L I S A—001』には、壊れかけの人間のことがよく分かるのだ。

これまでの道中、散々目にしてきたのだから。

「はんく……」

少女に出来るのは電気を操ることだけ。それ以外に何も無い。そもそも放置しておけば致命傷すら勝手に塞がる生物兵器に、医療知識なんてあるわけがない。

彼女は異端であっても兵器なのだ。人を殺すために造られた殺戮兵器が、死にかけの人間をどうやったたら助けられる。

それどころか、きゆるる、と。

最悪のタイミングで、鳴つてはならない音がした。

「あ」

空腹を知らせる獣の鐘。飢餓を叫ぶ細胞の声。

電気を生むという特性上、少女は多くのエネルギーを消耗する。全力を出せば出すほど、無尽蔵の食料が必要となってくる。

電熱ブレードの代償が、無慈悲な足音を立てながらやってきた。

「」

目の前でハンクが眠っている。

微弱に胸を上下させて、生死の境を彷徨って、弱々しくなった肉が眠っている。

無意識のうちに口が潤う。生唾が喉を滑っていく。

瞳が金色に、蛇の如く鋭利なものへ。

(はんく、きずついてる)

——肉の塊だ。喰い甲斐がある。

(まっけてもなおらない。どうして? ……ままは、びよーきにはおくすりがいいって、いつてたっけ)

——血の匂いで脳が痺れる。臓物はきつと、最高の舌触りに違いない。

(おくすり、さがさないと)

——ちよつと大きいけれど、解体なんて簡単だ。

(おなかすいた)

手が伸びていた。細くしなやかで幼い五指が、屈強な喉元に絡みついていていた。

白妙をたたえる無垢な両手。しかしそれは、人間を容易く挽肉に変える受肉した凶器に変わらない。

圧が。

加わる。

「……だめ、だめ! だめだめだめっ!!」

本能の渦潮に吞まれかけた刹那、少女は自らの指を噛み、囚われかけた理性を解き放った。

鮮烈な痛みが脳髓の汚泥を攪拌させる。腹に穴が開きそうな飢餓感を抑え込んで、少女は必死に思考を巡らせ、自我を離すまいと抗い続けた。

「えつと、えつと」

ハンクのポーチへ手を伸ばす。物取りのようにながさごそ漁る。

記憶通り栄養剤のパックが入っていた。たった2つしかないが、少女にとっては地獄に垂らされた蜘蛛の糸に等しい。

無我夢中で取り出し、キャップを振じ切って中身を吸い取る。

馴染みの味が舌を包む。瞬く間に吸収され、猛獣のような飢えが鳴



りを潜めていく。

「……」

最後の最後まで絞り尽くしたチューブをゴミ箱へ捨て、残った1本を見つめる少女。

これが真正正銘最後の命綱だ。ハンクが言った通り、無暗に消耗することは出来ない。

ポーチにストックを戻し、すぐさま次の行動へ。

「おくすり……い！」

少女は人を治す術など知らない。自動的に傷が塞がる少女に、『治療』などという縁遠い概念は分からない。

故に僅かな知恵を頼るしかない。暗闇を手探りで進むような方法しかない。

ハンクを治す薬を探す。

ただそれだけの羅針を導しるに、少女は仄暗い電灯の世界を歩き出す。



ロッカーや小物入れ。机の引き出しに小さな金庫。

研究室の隅から隅まで、それこそ鍵のかかった場所すら怪力でこじ開けてまで探しだした。

けれど薬は見当たらず、半ば途方に暮れながら、少女はNESTを徘徊していく。

道中、施設案内の地図を見つけて立ち止まった。

少女の識字能力は高くない。しかし簡単な単語程度なら読み取れる。

「いむしつ」

NEST上層、ノースエリア。ラクーンシティ下水道へと続く入り口付近に、視線を惹かれる言葉を見つけた。

この施設は広く、存在自体が極秘のブラックボックスである。おまけに大勢のスタッフが労働に励む環境上、こうした部屋が設けられていても不思議ではない。

さっそく少女は駆け出した。エレベーターへと引き返し、リストタグ認証装置のロックを電気で狂わせ、最上階を目指していく。

未踏の地へと辿り着く。記憶した地図によれば、エレベーターを出て真っ直ぐ進むだけで良いはずだ。

しかし、肝心のノースエリアへ続く橋が見当たらない。

「んう？」

どうやら管理者権限で格納されているらしい。辺りをきよろきよろ見渡すと、エレベーターと同じリストタグ認証装置を発見した。

駆け寄り、触れる。リストタグが無いため反応は無い。

だが関係ない。少女は電気を操る兵器だ。停電が回復した今、少しの電気で関係なく作動させられる。

バチバチと火花が叫ぶ。静かな駆動音が発生し、シャフトに格納されていた橋が釣り竿のように伸展すると、ノースエリアへ接続された。

小さな足で風のように疾駆する。

あつという間に対岸へ到着、そのままドアを抜け、脳裏の地図に従いながら目的地へ。

『Medical Office』のプレートが視界に映り、ブレーキを掛けた。

「いむしつ……い！」

ドアを開く。電気は全てつけっぱなしで廊下より明るく、少し眩しく感じてしまう。

おかげで、部屋の奥に倒れ伏す死体の姿がよく見えた。

「……う？」

生体反応はない。間違いなく死んでいる。

少女が首を傾げたのはそこではない。後頭部に空いた風穴が、一抹の違和感を招いたのだ。

こんなふうに穴が開いているということは、銃火器で射撃された痕跡に他ならないわけで。

「！」

その時、鋭敏な少女のセンサーに未確認の存在が引っ掛かった。

部屋の隅。少女から見て左前方、診療用デスクの影に何か潜んでいる。

ゾンビではない。感じる生体電気に乱れが無いのだ。T―ウィルスで暴走した細胞組織を持つ感染者なら、異常活性を起こしているがゆえのノイズが混じる。

それが感じられないということは、もしかして。

「あの」

「動くな」

呼び声が起爆剤となるように、人影がデスクの背後から現れた。

重く低い男の声。少女より遙かに高く、屈強な背丈。

声の持ち主は、少女へ酷く既視感をあたえる出で立ちだった。

鴉のような黒づくめの戦闘服。受信機の壊れたトランシーバー。

ヘルメットにガスマスクと隙が無く、素肌の色すらロクに伺い知れない

容貌は、あのハンクと瓜二つ。

垣間見える素性といえ、割れた右レンズから覗く黒い瞳くらいだ

ろう。理性を宿した人間の眼からは感染の気配など感じない。

見慣れた凶器<sup>レズ</sup>で少女に狙いをさだめる男は、ほんの少し照準器から

視線を逸らして、

「子供？　こんなところになぜ子供が」

「う……う？　はんく？」

「!?　い、今なんて言った!?」

銃口を降ろし、警戒を解く謎の男。デスクから身を乗り出して、

ゆっくり少女へ近づいた。

少し距離を取ったまま、膝を着いて視線を合わせる。少女は不思議

そうに、ハンクと同じ姿をしながらも、匂いも気配も雰囲気も異なる

別人を観察していた。

「俺を見てハンクと言ったのか？　隊長を知ってるのか!?」

「はんく、しってるよ」

「い、生きてるんだな!?」

「うん」

「そうか……い！　やっぱり生きてたんだ、流石隊長だ！」

安堵を滝のように流しながら、大きく一息つく男。

少女は依然混乱したまま、ハンクとは似ても似つかない男に疑問符

を浮かべるのみ。

一方、男は完全に警戒を解いたらしく、銃を背のホルダーへと戻す。

「君、隊長がどこにいるか分かるのかい？」

「うん。わたしのへや」

「君の？ ……NESTに保育所なんてあったっけか」

言葉を介する幼子が、生物兵器の一種とは毛ほども疑っていないらしい。

無理もない。B.O.Wとは総じて食欲に支配された化け物なのだ。意思疎通が可能な時点で、疑う余地など消滅する。

むしろ、アンブレラらしいドス黒さの犠牲者と考えた方が自然だろう。

「お嬢ちゃん、そこまでおじさんを案内してくれないかな。無線機……つて言っても分かんないか。ええと、電話が壊れてて、隊長とお話しできないんだ。会って話が見たい」

「……おじさん、はんくのおともだち？」

「お、お友達……はは、なんというか、まあ」

「そっくり」

「ああ。一緒のグループなんだ。新しく入ったばかりなんだけど」

子供の拙い語彙に合わせるように、男はほぐした会話を続けていく。

少女は意を決したように、ハンクと瓜二つの男へ言った。

「あの、ね。たすけてほしいの」

「助けて欲しい？」

「はんく、きずついてて、うごかないの」

一言が、マスク越しの表情を一変させた。

愕然とする彼に少女は伝える。覚えたばかりの幼い言葉で、簡素に、必死さを伝えていく。

ハンクが少女を守ってくれたこと。道中、怪物に襲われ致命傷を負ったこと。

そして今、命の灯火が消えかけているという現実を。

食い入るように耳を傾けていた男は、全貌を把握するやいなや立ち上がって、

「ちよつと待っていてくれ。少し準備がいる」

「ん。おくすり？」

「そうだ。ここは医務室だから治療道具に事欠かない。隊長をここへ運ぶ前に、現場で出来る処置はしておかないと」

言いながら、男は薬品棚や救急箱を物色し、アイテムを検閲してはポーチへ放り込んでいく。

そんな彼の腕や腹部には、血の滲んだ包帯が巻かれていた。

バーキンの襲撃に遭いながらも運よく生き延びた彼は、この医務室へ籠って傷の治療に専念していたのだろう。

「それにしても、たった一人でよくここまで辿り着いたね。怖かったな。立派だぞ」

「ん、う」

「でももう大丈夫だ。あの隊長が君を保護したってことは、きっと確かな理由があるからなんだろう。だったらU・S・Sの俺が、その任務を引き継がなくちゃならない。隊長の元まで君の安全を守ると約束するよ」

装備を整え、銃のチェックを済ませ、男は医務室のドアに手を掛ける。

少女は恐る恐る、男の後ろを着いていく。

ほんの一瞬、立ち止まって。

「おじさん」

「ん？」

「えと。なまえ」

「ああ……そうだな」

割れたレンズの奥から覗く眼を上げて、少し考え込んだあと。

「隊長にのつとるなら——俺の名前は『GHゴOSTスト』さ」

## 十字架の元に

「こっち」

指差して先導しながら、少女は明かりに乏しい廊下をすいすいと進んでいく。

ゴーストは銃のサーチライトで行く先を照らしつつ、従うままに歩いていた。

(奇妙な子供だな。こんな環境なのに全く怖がらないなんて)

明滅する電灯。不気味に反響する足音。白磁の壁を悪趣味なアトに変えた血痕の数々に、容赦なく鼻腔を突き刺す腐臭。貪られた死骸のフリーマーケット。

泣きだして蹲ったって、誰も責めやしない地獄街道の真つただなかだ。

にもかかわらず、少女は怯える様子など微塵も見せなかった。どころか勇猛果敢に先陣を切り、ハンクの元へ一刻も早く導こうと邁進しているほどだ。

(この惨状だ。隊長に保護される過程で、きつとたくさんの地獄を見てきたんだろう。感受性の強い子供なら心が麻痺してしまっても不思議じゃない。しかしどうも引つ掛かる)

銀箔の髪を肩まで靡かせ、瞳に黒曜を宿すこの少女は、年齢みために反してあまりに冷静すぎていた。

ひとつまみの不思議が脳裏に積もる。塵芥程度でしかないものの、清掃された部屋の隅で存在感を放つ埃のように、どうにも気になって仕方がない。

「……君はどうして隊長に保護されたんだい？」

ゴーストはほろりと零すように言った。

立ち止まり、小首を傾げる少女。

「……？」

「あぁごめん、混乱させちゃったかな。そうだよな、君みたいなお子供が俺たちの事情を知るわけがない」

「？」

きつと、保護の『理由』を知らされていないのだろうと推測する。そもそも子供に小難しい事情を教える必要はない。ましてやU・S・Sのような、裏社会的側面を孕む組織であればなおさらだ。

ゴーストはU・S・Sに入隊して日が浅い。そもそも今回が初仕事だったくらいの新入りだ。隊員の事情に精通しているとは言い難い。

それでも噂ながらに耳にはしていた。同隊所属ながらあらゆるプロフィールが謎に包まれた男の、唯一知れ渡っている素性——『死神』と呼ばれるその所以<sup>ゆえん</sup>を。

いわく、ハンクはアンブレラの命令を第一とする兵士である。目的を達成するためなら如何なる手段も選ばない。例え味方が負傷しよう、それが任務遂行の弊害となるなら即座に切り捨てる人物だ。

逆に、彼にはそれが出来る並外れた判断力と精神力が備わっているということになる。

だから彼は生き残る。どれほど過酷な戦場だろうが、仲間が全て息絶えようが、彼だけは必ず生きて帰る。

その人物像と数多くの実績が、彼に『死神』の異名を与えたのだ——と。

(実際、隊長は俺たちと同じ人間かどうか疑わしくなる時がある)

初めて相対した時、噂に違わず——いいや、噂以上に冷たく静かな、氷に近い印象を受けたことを鮮烈に覚えている。

人間味という暖かさを徹底的に排除して出来ているかのようだった。例えるなら機械だ。人間と同じ素材で造られた機械のようだと、ゴーストは寒気と共に感じていた。

(そんな隊長が理由も無く子供を保護するとは思えない。もしかしたら、俺のような末端が知る由もない任務を抱えているのかも)

ただでさえハンクは謎が多い。ゴーストが知らない裏事情のひとつやふたつ、持っていたって不思議ではないだろう。

そうこう思案しているうちに、ノースエリアから中央区画へ続く橋まで辿り着く。

「あれでしたにいくの」

「非常用エレベーターか。よし、早く隊長の元へ」

「ッ！ はしって！」

「え？」

突然甲高い声を張り上げた少女に、何事かと呆気に取られるゴースト。

しかしその呆気は、更なる驚愕に塗り替えられることとなる。

オウム返しを口にするより先に、上方から衝撃を感じるほどの大音響が轟いた。

鋼鉄の壁がひしゃげ、無理やり叩き割られたかのような波濤だった。莫大な音は兵士の反射神経に火を焚きつけ、即座に銃口をもって補足させる。

ゴーストたちが数秒前まで立っていた場所へ、音の根源が姿を現す。

重々しく巨大な影が破壊と共に降ってきた。

「■■■■■■■■■■——ッ!!」

死人のような灰の肌。殺意を漲らせるおぞましい顔貌。ゴーストを見下ろすほどの堂々たる筋骨隆々な肉体。

そしてなにより、手榴弾によって刻み込まれたケロイド状の火傷痕。

ハンクがかつて撃退した最強の生物兵器が、空気を揺るがすほどの雄叫びを爆発させながら君臨する。

「こいつまさか、T-103か……!? 馬鹿な、何でこんな！」

「はしって、ゴースと!!」

少女の声がゴーストの雷管を打ち抜いた。

脱兎の如く橋を駆ける。床を踏み抜かんばかりに脚力を振り絞って、全身全霊で疾駆した。

遅れて背後から規則正しい重低音が迫ってくる。追いつかれれば最後、鉄柱すらへし曲げる怪力で人間を容易く挽肉に変えてしまう死の魔物が。

「ははやへー」

いつの間にかエレベーターに到着していた少女が兵士を呼んだ。



ゴーストは我武者羅に走り抜け、エレベーターの中へ滑り込む。

間髪入れず少女が降下のスイッチを押す。ドアは静穏を奏でて閉まり、下層へ移動を開始した。

瞬間、エレベーター全体に衝撃が走った。タイラントがその巨体を駆使し、一切のブレーキを掛けず体当たりを見舞ったのだ。

重機に匹敵するインパクトはシステムに障害をもたらしてしまう。エレベーターが緊急停止を引き起こし、慣性の法則を嫌というほど体感した。

「ちくしょう止まりやがった！ あと少しだつてのに！」

あと数秒猶予があったなら、彼らに乗せた揺り籠は何事もなく目的地に到着していたはずだった。

だが現実是最悪だ。下層まで1m以上距離が足りない。半ば合流しているドアをこじ開けても、せいぜい少女を潜らせるので精いっぱいだ。

かといって天井の非常口も使えない。T-103が上層のドアをこじあげ、エレベーターに降り立ってくるのも時間の問題なのだ。

「駄目だ、逃げ場が無い！ エレベーターをぶち破るしか……！」

銃のセーフティを外し、強化ガラスへ照準を当てる。

上から打撃音が波のように伝わってくる。上層のドアが破られたら、最後のバリケードはエレベーターの天井だ。しかしそんなものは紙の盾に等しい。T-103は易々と天井を突き破り、狭苦しいポツドの中でいとも容易く二人を殺害するだろう。

汗が伝う。喉が干上がる。

死の緊迫が、限界まで交感神経を昂らせる。

「頭を庇って身をかかめるんだ！ 跳弾に当たるぞ！」

「だいじょうぶ」

ほんの一瞬、電気が燥いだ音がして。

引き金を絞りかけた刹那、エレベーターが息を吹き返した。ガクンと伝わる振動を受けて思わず引き金から指を外す。

何が起こったのか理解出来ず、ゴーストは少女の方を見た。止まっていたはずのエレベーターが目的地に到着していた。

いつの間にか緊急ロックが解除されている。何事も無かったかのようにドアを開き、ハンクへ続く道筋を繋げているではないか。

「ッ」

どうして動き出したのか——そんな理由を考察している暇も余裕も無かった。

ただ走った。拓かれた存命の道へ身を投げるように、ゴーストは少女の手を引いて、猛然と通路を走り抜けた。

足音を聞きつけたか、どこからともなく感染者たちが現れる。その悉くを無視し、避けられぬモノだけ機関の咆哮で丁重にもてなしつつ、息が切れるまで突っ切った。

止まれば死ぬと心臓で感じた。新米たるゴーストでもタイラントがどんな兵器かは知っている。アンブレラの看板娘にして、戦車に匹敵する戦力を持った化け物だ。

しかしそれ以上に顔を合わせて実感した。無色透明の殺意を抱く瞳を見た時、この上なく実感したのだ。

アレには勝てない。ただの人間が豆鉄砲で勝てる存在じゃあない。生物として格が違い過ぎるのだ。

ゴーストの本能が、けたたましい警報を打ち鳴らしていた。

「お嬢ちゃん！ 隊長の居場所はどっちだ!?!」

「いちばんおくー!」

眼前へ飛び出してきた感染者の膝を打ち、蹴り飛ばしながらゴーストは叫ぶ。

少女の案内に従って、ゴーストは通路の一角に飛び込んだ。

即座に鍵を掛け、ドアを抑える。

息を殺し、耳を澄ませ、追手の気配を探っていく。

「……ふう。大丈夫だ、ヤツらは追って来ていない」

脱力。肩に乗っていた鉄の重りが剥がれたかのような心地だった。張り詰めていた線がゆるむ。深い吐息が自然と漏れていく。

無理もない。たった一回でも噛まれば死なのだ。例え歴戦の老兵だろうと、動揺を持って然りと言える。

「バーすと」

「ああ」

亡者の群れを掻い潜ったというのに、相も変わらず怯えもしない少女に一粒ばかりの不気味さを抱きながら、ゴーストは部屋の奥へ歩を進める。

広い部屋だ。PCの数からして個人研究室のようだが、かなりの面積である。豊富な器材を与えられているところをみるに、それなりに優秀な研究者だったのだろうか。

アメリカ——いいや、アンブレラらしい実力主義の表れと言えるだろう。

(馬鹿デカイ柱みたいなガラス容器が鉄で出来たタコ足に絡め取られてるような機械が鎮座してる。培養器、ってやつか? ……この子はここが自分の部屋だといっていたが、家主は何を作っていたんだ)

ゴーストは生化学や遺伝子工学の専門家ではない。目に映る多種多様な機器がどんな働きをするのか見当もつかないが、人間として行ってはならない禁忌の気配は濃厚に感じとれていた。

得体の知らない悪寒を覚えると共に、これに嫌悪を抱く資格などないだろうと、自嘲を戒めと共に釘刺していく。

そんなことより、もつと重要な問題がある。

「隊長！」

休憩用と思しき真っ黒なソファで、ハンクは横になっていた。

弱っている。一目でわかった。意識もなく、今にも途切れそうな呼吸を繰り返すだけのハンクからは、どんな状況だろうと必ず生き延びてきた『死神』の覇気など感じられない。

手早く処置に取り掛かる。衛生兵でないがゆえに専門的な治療は施せないが、兵士として最低限の応急処置は心得ていた。

「内出血が酷過ぎる。なんて打撲だ、まるでサンドバッグじゃないか。こんな体でよくここまで……」

幸い、体幹に目立った外傷は見当たらなかった。代わりに腕や足が手酷くやられている。

恐らく弱点へのダメージを四肢で防いできた結果だろう。もし心臓や肺といった重要器官が敷き詰められた胸腔にダメージを負って

いたら、流石のハンクも助からなかったに違いない。

むしろ生きている現状は、ハンクがそれほど致命を躲せる優秀な兵士という証左である。

「はんく、だいじょうぶ?」

「ああ。安心とは言えないけど、骨も折れてないし内臓に大きな傷もなさそうだ。休めばきつと回復するよ」

もつとも、常人ならば立って歩くことも困難な怪我ではある。同じU・S・Sのゴーストですら、今のハンクと同じコンデイションで動けるかと聞かれれば苦笑いする他にないくらいだ。

整った医療を施したいのはやまやまだったが、今のNESTは生者より死者の方が多い。おまけに医者でも何でもないゴーストに出来る治療なんて限られている。

今は睡眠こそが最大の薬と言えるだろう。

休息し、疲労を清算するひと時こそが、この場においてももつとも重要だ。



「君も少し休むといい」

火器のメンテナンスを行いつつ、ソファアの上からハンクを心配そうに覗き込む少女にゴーストは言った。

「隊長は……ええと、頑固な人で有名だね。仕事人と言うべきかな。きつと目が覚めたらすぐに動き出す。そうなったら休む暇なんてそうそうないだろうし、NESTがこの有様だ。次に保証できる安全はない。今のうちに眠っておいた方がいいと思う」

「……」

「見張りは俺がやっておくから、安心してくれ」

「ゴースト、こわいの?」

心臓に針をちくりと刺されたように、ほんの少しだけ肩が動いた。

一拍ばかりの沈黙が生まれる。ゴーストは銃身を拭う手を止めて、視線は向けないまま独り言ちるように言った。

「怖いって、何が?」

「ふるえてる。はんく、ふるえてなかった。こわい?」

——少女の言う『震え』とは、きつと体が恐怖に揺れ動くことを指しているのではない。そも、ゴーストは身震いなどしていない。

生体電気の乱れ。肉眼では捉えられない精神面に発生した幽かなノイズ。少女はそれを言っているのだ。さながら?を見抜く脳波測定器のように。

しかし『LISA-001』の正体を知らないゴーストは、子供特有の鋭い直感かと誤解する。

けれど、だからこそ、ゴーストは胸に溜まった汚泥のような本心を、幼い少女へ吐き出せた。

「……怖いというよりは、後悔かな。悔いてるんだ?」

「いや、すまない。こんなこと君に言っても仕方のないことだ。今は忘れてくれ」

雑念を払うように頭を振る。少女の瞳は、ゴーストから外れようとしなかった。

「ううん。はなして。むしろはなすべき」  
「え?」

「んかね。わたし、あたまわるいから、ごーすとのいつてること、ぜんぶはわからないんだ。けど、だからいいとおもうの。はなしたらきつと、すつとするよ?」

「はは、ありがとう。でも気遣いなんかいらさないさ。これは俺の問題だ」

「いいたいこと、はつきりいえてはんくがいつてた」  
拙く、舌足らずな幼い言葉を覗かせる。

僅かな語彙を必死に集めて、少女は励ましの言葉を紡いでいた。それはひとえにハンクから学んだ経験がゆえに。血みどろの地獄に相応しくない、無垢な心を持つがゆえに。

「……そうか。隊長らしいな。ああ、隊長が言ったのなら、それが正しいに違いない」

空笑いを飛ばし、天井を仰ぐゴースト。

無邪気が染みるようだった。一点の曇りもない、真っ白な善意だからこそ揺り動かされるナニカがあった。

割れたレンズの奥が、もの悲しい後悔の青を帯びていく。

「ここから先は独り言だ。君がお昼寝をしてると思つて喋る、ただのちっぽけな独り言だ」

「うん」

「……………実は、仕事でミスをしたんだ。どれだけ謝つたつて許されないくらい大きなミスさ。お偉いさんからクビ飛ばされた方が百万倍マシつて言えるくらい、でっかいでっかいへマをやらかしたんだ」  
時刻にして3日ほど前の出来事が、脳裏へ鮮明に浮かんでくる。

ウイリアム・バーキンを包囲し、連行しようと詰め寄つた一部始終。

ゴーストにとって、呪われた初仕事の追憶が。

「俺たちがNESTに来たのは、偉い学者さんを連れて帰るよう命令されたからだ。それが俺にとって初めての仕事だった。別に、難しくもなんともない仕事だったんだ。マッドなワーカーホリックをボスの所へ連れ帰るだけ。子供のおつかいみたいなモンさ。——それを、生物災害にまで変えちまったのが俺だ」

苦虫を口いっばいに噛み締めたように、ゴーストは視線を落として吐き出した。

「自分でも何でやっちゃったのかは分からない。ただ、博士に銃口を向けられた途端、ヤバイつて思ったんだ。撃たれたら死ぬつて、背中に嫌な汗が流れたんだ。戦闘服を着てるから、9mm弾程度じゃよほど当たり所が悪くない限り死ぬことはない。でも駄目だ。ブルツちまったんだよ。気づいたら引き金を絞つて、博士は真っ赤な蜂の巣になつていた」

「…………」

「あんなに怒つてる隊長は初めて見たよ。氷の彫像みたいなあの人が、それはもう凄い剣幕でさ。正直、素直に撃たれた方がマシだと思つたね。実際ソツチのほうが遥かに良かったし、あの時の俺は間違いない、サイアクの選択をしちまったんだ。隊長が怒鳴り散らしたの

は正しかった。むしろそれで済めば、どれほど良かったことか」  
悔いを吐く。後の過ちを嘆き叫ぶ。

けれど、起きてしまった過去を変えることは出来ない。この三日間で残酷な現実を誰よりも身に沁み込ませた彼だからこそ、ゴーストはやり場のないやるせなさに拳を握り込んだ。

「結果、バーキン博士が死に際に変異して、俺たちの部隊は壊滅。そのせいでクソツタレ殺人ウイルスがバラ撒かれた。あとはもう、御覧の有様だ」

皮肉を交じえた慟哭だった。

涙はない。だがそれは、間違いないく慚愧の叫びに他ならなかった。

自分の些細なミスが、仲間どころか広大なNESTで働く大勢の命を奪ってしまったのだ。

その事実、罪悪感、並の人間に耐えられるほど軽い責ではない。後悔の念に押し潰されたっておかしくないのだ。鍛え抜かれた屈強な兵士だろうと、ひとたび戦禍という地獄へ赴けば、PTSDを患い廃人となってしまうことも珍しくはない。

だというのに、自分そのものが地獄を生み出す元凶になったなど、いくら汚れ仕事を担うU・S・Sだろうが耐えられる所業ではない。ましてや、入隊したばかりのゴーストが背負える十字架であるものか。

「ああ、そうだ。そうなんだよ。この地獄を作ったのは、俺なんだ。お、俺が、NESTを化け物の巢に変えちまったんだ。俺のせいで、仲間や関係のない人々が大量死んだ。あの時、俺がビビッて博士を撃ちしまったからっ……！」

頭を下げ、震える両手で顔を覆う。

大人の男が小さく見えた。少女を見下ろすくらい大きいはずなのに、とてもとても小さく見える。

押し掛かる幾千幾万の責任に、ミシミシと押し潰されていくかのような背中だった。

自業自得とはいえ、それは一個人に押し付けるには、あまりに惨すぎる十字架で。

「……君、家族はいたのかい？」

顔は上がらない。

手で覆い、俯いたまま、ゴーストは絞り出すような声で問いかけた。「君の境遇や生い立ちには知らないけれど、もし、ここに家族と呼べるくらい愛する人がいたのなら、すまなかった。全部俺の責任だ。君から一生恨まれたって仕方のないことをした。殺されたって文句は言えないくらい酷いことだ」

「……」

「すまない。本当にすまない。謝ったって許されることじゃない。本当に、なんて言えればいいか」

「ゴースト」

ぺたぺたと、小さな足音が近寄ってくる。

ゴーストの傍に立ち止まって、少女は隣へ静かに腰を下ろした。

「わたしね、むずかしいこと、まだよくわからないの。でも、ママがあなつたのがゴーストのせいなら、ぜったいぜったいゆるせない」

「……ああ、その通りだ。絶対に許されることじゃない」

「でも、でもね。はんくがいったの。つねにさいぜんのせんたくを。ゴーストとけんかしちゃうのは、きつとさいぜんじゃないとおもう」  
白い小さな手が、そつと膝に添えられる。

「きめたの。ママがしんじやったこと、むだにしないって。だから、いまはなかなおり」

ゴーストは、油を差されたブリキのようにゆっくりと、頭を引き上げ目を合わせた。

驚愕に染まる、男の顔。

「き、みは。許してくれると、言っているのか？」

「……うん」

「君のお母さんを、殺してしまったも同然なのに……!? それでも君はっ……」

「じゃあ、こうする。んしょ」

ぺちん、と。

小さな衝撃が、ゴーストの頬を走り抜けた。



屈強なガスマスク越しではほとんど何も感じないくらい、小さな小さな平手打ち。

酷く重く感じた。バーキンの一撃も遥かに超えた、魂に響く重みを伴っていた。

「いまはこれでおしまい」

「……っ」

「おそとにでたら、ままとあめのおじさんに、いっぱいいっぱいあやまってね。やくそく」

静かに差し出される、柔らかな五指。

幼くも確かな強さを宿した手のひらは、その小ささに似合わないくらい、遥かに大きなものだと感じた。

無論、少女とて完全に許したわけじゃない。これは一時休戦の握手だ。

今は争っている場合ではないと少女が理解したから、間接的にも母の仇であるゴーストを咎めずにいられるのだ。

闇の泥底を這いまわり、幾度の死別を乗り越えて、それでも前を向けるようになったからこそ、仮初であつても少女はゴーストを赦せたのだろう。

ハンクと出会ったばかりの頃なら、我を忘れて暴れ回ったに違いない。

ゴーストもそうだ。例え赦すと言われようが、彼の立場を鑑みるに、救われたというにはあまりに烏澁がましい言い分である。

しかしそれでも、間違いなく。暗雲に閉ざされ、心臓に杭を打たれたようだった彼の心を、ほんの少しでも解きほぐせる一条の天日と成り得たのだ。

ゴーストは、優しく少女の手を握り返した。

「ああ、ああ！ 約束する、絶対に償うと約束するよ……！」

彼<sup>ト</sup>が<sup>ア</sup>生<sup>を</sup>き<sup>甲</sup>残<sup>く</sup>れた<sup>音</sup>ら<sup>が</sup>の<sup>し</sup>話<sup>だ</sup>が<sup>た</sup>。

## 奈落を抜ける

ほんの少し先の未来で、『エヴリン』という名の少女が誕生する。正式名称をE型被検体。真菌由来の生物兵器を自在に操る、幼子の姿をした黒い悪魔。

彼女は家族に対する強い執着を抱いていた。抱いていたがゆえに、恐怖に濡れた忌まわしい事件を引き起こし、果てに短い生涯を終える。

そんな『エヴリン』が、ただの童女で終われなかった理由を語るにおいて、背後に絡み付く歪みきった教育の存在は無視できないものだろう。

ロール役割に当て嵌められた人形遊びの家族。 カムフラージュ コントロール模倣と制御のため、作業的に与えられる空っぽの愛。

人と変らぬ知性を持つ『エヴリン』だったからこそ、幼き彼女は愛に餓え、渇き、狂うまでに至ってしまう。

彼女の人生は、金儲けに溺れたエゴイストに食い潰された茨の道だった。ある意味、『L I S A ― 0 0 1』が辿ったかもしれない、もう一つの可能性とも言える道だ。

その可能性を変えたのは、『L I S A ― 0 0 1』と『エヴリン』の決定的な違い――教育にこそあったのだ。

とある組織に造られた『エヴリン』は、組織が編んだマニュアルによつて育てられた。

機械的に、消費的に、ただ自我と力を持つだけのモノとして扱われた。

『L I S A ― 0 0 1』はその真逆だ。彼女はただのいち研究者の独断専行によつて生み出され、組織ではなく一人の人間に育てられた。ここが、大きなターニングポイントだったのだ。

少女を作った研究者は非人間だった。

昇進を目論み、野心と好奇に溢れ、己の目的を達成するためなら禁忌を侵すことだつて躊躇わない外道だった。

けれど、だからこそ、少女の母は普通の教育に手を伸ばしたのだ。

研究と昇進以外に価値を抱かない女だったからこそ、子育てなど眼中にない女だったからこそ、まるで第一子をもうけたばかりの妊婦のように、今まで学ぼうともしなかった知識を補うため、まっとうな教育資料へ手を伸ばした。

組織のバックアップ無しに生物兵器を懐かせつつ育成するにあたり、己のポケットマネーが許す範囲でしか動けなかったという裏もある。しかし、それがかえって功を奏したという他ない。

猛獣を手懐けるため、容易に手に入る絵本や玩具を与えた。仮面上からでも偽物の愛を与えた。

いつしかそれが、知らず知らずホンモノへとすり替わっていくほど、念入りに本格的に。

そんな環境は、怪物を少女に作り替えた。

歪んだ家族の果てに怪物と化した『エヴリン』とは違う、怪物でありながらヒトとしての在り方を持つに至ったのだ。

けれど、初めから『LISA—001』は人間だったわけではない。むしろ、初めは紛うことなき怪物のソレだった。

ずっと、ずっと、母親を観察していた。

生体電気から精神状態を読み取るシックスセンスを持つ少女は、常に母親の感情と行動を把握し、本能的に計算しながら動いていた。

この『親』とどう接すれば玩具や絵本が貰えるのか。この『親』にどう応えれば食べ物貰えるのか。

狡猾な雛鳥は原始的欲求を満たすため、無垢の道化を本能レベルで演じていたのである。

それがホンモノに変わったのは、非人間から母となった彼女の気持ち、一番傍で、誰よりも現実的に感じ取ってきたからだ。

暖かいと思った。打算では得られないものだど知った。失い難いものだど強く感じた。

己を快適に生存させるための宿主<sup>ホスト</sup>でしかなかったはずの母が、いつしか理屈抜きに寄り添えるホンモノの家族となっていた。

道徳の萌芽。倫理の獲得。親愛の構築。

あらゆる奇跡が積み重なって、『L I S A—001』は『リサ』へと進化を遂げる。

ただし、全てがプラスばかりではなかった。

まっとうに育った弊害として、ヒトの持つ悪意や敵意、嫌悪といったマイナスな感情に対し、人一倍敏感になってしまったのだ。

母に秘密裏の協力者が増え、準じて『L I S A—001』の接触する人間が増えたころ。少女の第六感は、あらゆる汚濁を生々しくも感知した。

笑顔の裏で生物兵器たる少女を嫌悪する者がいた。幼く可憐な肢体に異常な情欲を抱き、胸中で舌なめずりする者がいた。

少女は初めて、純粹な恐怖というものを抱いた。

粘ついたどす黒い感情に対するトラウマは、無条件に信頼できる母への依存を強めていく。

それは同時に、親離れがより困難になったことを示していた。

嫌いなものが生まれたのだ。マイナスの感情と親しき者との離別。是が非でも避けたいものが生まれたのだ。

だから、母親がウイルスに感染し、少女を冷凍睡眠させた時、どうしようもなく深い傷を負ってしまった。

ただひとり信じられた母の喪失が、他人に対して臆病になるほどの傷と不安を刻み込んでしまったのである。

——それを拭い去ったのが、皮肉にも天敵にあたるはずのハンクだったのだ。

ハンクは一切の感情を向けなかった。ただただ実直に任務に準じ、必要とあらば少女を教え導いた。

傷心していた少女にとって、彼のプラスでもマイナスでもない、凍った水面のような無貌の心が、かえって傷を癒す時間をくれた。

ハンクは少女を尊重しないが、蔑ろにもしなかった。必要であれば褒め、必要であれば諫め、必要であれば命令を下し、必要であれば救っ

た。

淡白で、波風ひとつない彼の対応は、逆に少女へ安心感を与えていった。

奇妙なことだが、師弟に近い信頼を芽生えさせていたのかもしれない。

故に、無垢の子は憧れた死神に応えんと尽力する。

その先に待つのが、アンブレラへの隷属という、どうしようもなく救いのない未来に繋がってしまうとしても。



叩く音がした。叩く音がした。叩く音がした。

理性の片鱗など聴こえない。邪魔な障害物を殴りつけ、退けようとする獣性だけが伝わってくる。

ヒトではない。ゴーストも少女も、寸分の相違なく確信する。

「ここで待ってな」

「ん」

コンバットナイフを抜き、忍のような足取りで詰め寄るゴースト。

ドアノブに手を伸ばし鍵を外す。

タイミングを見計らうと、思い切りドアを開け放った。

瞬間、ドアの向こうから影が落ちた。肉を強打する鈍い音が散らばる。重心の在処を失った感染者が、奇声と共に転がったのだ。

頭部へ間髪入れずストンプを見舞う。二度、三度と、一切の加減も躊躇もなく頭蓋を踏み砕く。

バギツと寒気の走る音がした。頑強な頭蓋骨がようやく蹴り割れたらしい。

新米だろうと、ゴーストはU・S・Sに配属された屈強な兵士だ。たったひとりの感染者相手に、白兵戦で後れを取ることはない。

(敵影はこいっただけみたいだ。……しかし奇妙な風貌だな。まるで蠟

の池にでも突き落とされたかのような)

ヒトの面影を失いつつある、異様な姿をした感染者だった。

粘質な白に染まっている。皮下組織の脂肪だけが剥き出しになったかのような、光沢と滑りを帯びた白濁が頭頂からつま先まで覆っていた。

頭髪はない。白塗りのバケツペイみたいな頭ヘッドをしている。眼球も唇も消失し、剥き出しの歯茎と黄ばんだ歯ばかりの頭部からは、子供の落書きじみた不気味さが漂っていた。

「もう大丈夫だ。けど長居は危ない、隊長を連れてさっさと移動しよう」

「!? ごーすと、うしろ!!」

「え? ——がっ!!」

猛烈な圧力が、ゴーストの頸椎へ何の前触れもなく襲い掛かった。混濁する思考に反し、原因はこれまでになく明瞭だ。

感染者だった。頭蓋骨を蹴り砕き、唯一の弱点である中枢神経を破壊したはずの、白蟻のような感染者だった。

「ぼっ、がぐ、馬鹿な、頭を破壊したのに何故……!?!」

「アアアアアアアアアア——ッ!!」

「離せ、このっ!!」

ゴーストを押し倒し、嘎れた老婆のような濁声を這いずらせながら肉を啄まんと食いかかる白い怪物。

感染者の筋力は強大だ。ウイルスにリミッターを外された肉体は、ただの腕力だけで脅威となる。

加えてこの感染者はただのゾンビではない。突然変異を起こした亜種だ。その力と自己再生能力は、通常のソレを遥かに上回っていた。

辛うじて牙を凌ぐのも、限界が近くなるほどに。

「ごーすと!!」

「来るな、来ちゃ駄目だ! 大丈夫だから!」

すかさずナイフを叩き込む。金属が肉を裂き、頸椎に押し入った感触が生々しく手首へ伝わってくる。

捻る。首の骨を、鶏を屠殺するように折り砕く。

断末魔を張り上げた感染者は、そのまま力なく被さるるように倒れ込んだ。

蹴り上げ、立ち上がるゴースト。

手早く全身を確認する。幸い噛まれてはいないようだ。

「な、何なんだこいつは!? 頭を割ってくたばらないなんて聞いてな、……ッ!？」

驚愕のあまり、ゴーストは今度こそ言葉を失った。

だって、こんなの、驚くなどという方に無理がある。

白妙の幽鬼がまたも立ち上がっていた。

ゆらりと。ブルブルと。全身を微かに痙攣させながら、折れ曲がった首を整えて。

蘇る。急所を破壊されたはずの人体が、目まぐるしい速度で蘇生していく。

——そんな奇跡とさえ呼べる悪夢も、瞬きの間に終わりを告げた。

首が落ちたのだ。さながら風に吹かれるボールのように、胴を離れた真つ白な首が、赤黒い軌跡を残しながら転がっていた。

前触れなどない。予兆なんてどこにもなかった。

ただ、血を噴く悪趣味な噴水の傍には少女がいた。ほんの数秒前までゴーストの背後にいた少女が、頭を失った体の傍に立っていた。

「な、ん」

見間違いかと疑った。ついに眼がイカれてしまったのかと、ゴーストは混乱に濁る声を吐いた。

疑って然るべきなのだ。ゴーストの背後からすっ飛んできた少女が、まるで草刈の如く首を刎ね飛ばした光景など。

ましてや、彼女の細腕から刃が生えたともなれば。

「君、その腕は」

「……」

「なんだそれは。なんなんだ。君は一体、何者なんだ」



ぐらぐらと脳を揺らす混乱の隅で、パズルのピースが嵌っていくかのような錯覚を得る。

道中、違和感のようなものは感じていた。

浮世離れた霧囲気。ゴーストを越える健脚。エレベーターの謎の回復。あのハンクが護衛対象としたアンブレラに属する子供。

そして、目の前で腕の中に収納されていく鋼の爪。

まさかとは思っていた。そんな馬鹿なとも思っていた。

何の変哲もない、小さく無害なこの子供が、そこに寝転がる怪物と同類などと。

「……ゴースト」

「動くなー」

反射的に銃口を向けていた。己を守る防御姿勢をとっていた。

心配そうに手を伸ばす少女の額に照準を合わせ、そのまま後ずさっていく。

「頼むから、今は来ないでくれ。ああくそ、畜生、頭がミキサードで掻き混ぜられたみたいない気分だ。俺は一体、何を信じればいい!?」

ゴーストの推測が正しければ、少女は人間ではない。きつとウィルスで造られたB・O・Wの一種だ。

それも相当高品質な、傑作とすら呼べる代物だろう。もはや人間と呼んでも差し支えない。

ここまで高い知能と人目を欺く容姿をしているなら、本部が極秘裏に回収命令を下していても不思議ではない。冷血漢のハンクが子供を守っていた理由も説明できる。

つまり、この子供は紛うことなく怪物だ。

いくら幼い容姿をしていても、人間の首を簡単に斬り落とせる力を持った怪物なのだ。

怖くないわけがない。これまでの過程がどうあれ、さんざんB・

O・Wの脅威を味わってきたゴーストが、同じ化け物である『L I S A | 0 0 1』に恐怖を抱かないわけがない。

ぼけもの少女を無条件に受け入れられるほど、ゴーストの神経は逸脱していない。

けれど。

照準器から覗く彼女の顔は、酷く悲しそうな色を湛えていた。それはひとえに、少女にはゴーストの心が分かかってしまうがゆえに。

「ごめん、なさい」

怪物なんて言葉じゃ括れない、悲痛を孕み上ずった声で、少女は絞り出すように言った。

「ごめんなさい。ごーすと。ごめんなさい。きらいにならないで。ごめつ、ごめん、ごめんなさい」

「……！」

唇を震わせて、目尻に涙を溜め込んで。友人から絶交を宣言された子供のように、今にも泣きだしそうな懇願をする少女。

目にした瞬間、ゴーストは胸の『恐怖』が、どうしようもない過ちだったと気が付いた。

(……クソつたれ。そうだよな。信じるべきものなんて初めから決まっていたじゃないか。ああそうだ。例え中身がそうだとしても、君がヤツらと同じわけがない。他人のことを心配する怪物なんているもんか。俺は最低だ)

バーキンを撃つた時と同じ間違いを繰り返すところだったと、引き金から指を遠ざけていく。

「う、う」

「すまなかった。大丈夫、もう大丈夫だ。俺が悪かった。俺を助けてくれた君を、少し変わってるだけで嫌うなんてサイアクだった」

銃口を下げ、傍について膝を折り、少女の手を安心させるようにそっと握る。

「ただ、そうだな。分かる範囲で良い。話せるところまででいいから、君のことを教えてくれないか」

「……」

「君が何者か知りたい。それが分かれば、俺はきつと君が何者だろうと守ることができる」

「……わたし、は」

——少女が言い終えるよりも速く、事態は急転直下を迎える。

部屋の換気扇が突如として悲鳴を上げ、ファンの亡骸がズタズタに引き裂かれて落下したのだ。

瞬きをする暇すら切り裂き、邪悪な脅威がやってくる。剥き出しの肉と脳組織、刃物の如く鋭利な爪と槍の舌を携えた醜い獣が。

ゴーストは間髪入れず嵐を見舞った。音速の三倍で解き放たれた弾雨はリツカーの背を打ち抜き、悲鳴と共に撃墜させる。

だが獣は止まらない。致命を与えるには中枢神経を破壊する必要がある。

唸り、牙を剥き、視覚を失った爬虫類のような怪物が血肉を貪らんと飛びかかった。

後ろへ倒れこむように躲すゴースト。上を飛び越えていくリツカーを、床から蜂の巣に加工した。

ガラスを引っ掻いたような断末魔が空気を叩く。鮮血を噴き出しながら壁に激突し、崩れ落ちたリツカーの脳を粉微塵にすることも忘れない。

「どうやらさっきのボヤ騒ぎを嗅ぎつけたようだ。すぐにもっと大群が押し寄せてくる。ここはもう駄目だ、ずらかるぞ」

「うん」

「隊長は俺が運ぶ」

意識不明のハンクを起こし、器用に背負うゴースト。

しかしそのせいで両手は塞がり、無防備な有様となっていた。

「けど、これじゃ感染者に襲われたらひとたまりもない。だからお嬢ちゃん、恥を忍んで君に護衛を頼みたい」

「！」

「君が何者なのか、少しずつだが分かってきた気がする。隊長が重傷を負っても生き残れたのは、きつと君の力のお陰に違いない。だから、それを見込んで頼みたい。隊長を安全な場所へ——医務室に運ぶまで、脅威を退けて欲しいんだ」

「……ん！ わかった」

強く頷き、少女はゴーストと共に部屋を出る。

案の定、銃声を聞きつけた感染者たちが集まりつつあった。呻き声を吐き、汚水の泡のように白濁した眼球で食料を見定める亡者たち。

両手を伸ばしながら、ゆっくりと距離を殺し始めた。

「……行くしかない！ 全力で突っ切るぞ、お嬢ちゃん！」

「まかせて、ごーすと！」

腕から伸びる二振りの刃が、仄暗い電灯を反射した。

威力と引き換えに多大なエネルギーを消耗する電熱は纏わない。

鋼の爪だけで活路を開くと、少女の瞳が覚悟を決める。

視線を交差させた二人は、頷き、強く一步を踏み出した。

二つの足音が、闇と屍の中を駆け抜けていく。

◆ 「隊長のためにもひとまず医務室を目指す！ もと来た道に戻るぞ！」

「うん！」

今までどこに隠れていたのかと疑うほどの感染者たちが、四方八方から押し寄せてきた。

下半身がないもの。腕を失ったもの。まだ腐敗が浅いもの。そして先の白いバケツ頭<sup>ペイルヘッド</sup>。

千差万別の屍喰鬼どもが水銀灯に吸い寄せられた羽虫の如く集し、瘦せた狼の唸り声より背筋を凍らせる雄叫びで歓迎してくる地獄の中へ突っ込んだ。

動きの鈍いゴーストへ食いかかる感染者は少女が退け、化け物の群れの中から蜘蛛糸のような道を切り拓いていく。

「ええい次から次へと！ こいつらどこから湧いて出るんだ!? ゴキブリの方がまだ謙虚さがあるってもんだ！」

「……！ ごーすと、しゃがんで！」

少女のセンサーが、一際巨大で邪悪な存在を感知した。

頑強な壁をスチロールとでも言わんばかりに殴り碎き、硝煙と共に現れたのは振り切ったはずの暴君<sup>タイラント</sup>だ。

ゴーストの頭を叩き潰さんと薙ぎ払われた丸太のような腕を屈み

躲し、脇を抜けて走り切る。脚力のギアをさらに引き上げ、少女と兵士は死の廊下を全身全霊で疾走した。

襲い来る感染者は少女の刃が始末する。

だがそれも前方だけだ。背後から重厚な足音を連れてやってくるタイラントまでは撃退できない。

「駄目だ！ このままエレベーターに乗っても前回の二の舞になる！

階段で上るしかない！」

「——いいや。下へ向かえ」

ゴーストの判断に異を唱えたのは、冷たく重い男の声だった。

背の負担が軽くなった。それが引き金となり、ゴーストは彼が意識を取り戻したのだと実感する。

振り返れば、少し苦しそうではあるものの、平常時のように凜然としたハンクが、自らの足で直立しているではないか。

「はんくっ！」

「隊長、お目覚めに……！」

「無駄話は後だ。着いてこい」

労いも再会の感動もなく、ただただいつものように命令を下すハンク。

無論、語らい合っている場合でないことはゴーストでも分かっている。そんな些事は、この災禍を生き残った後でいい。

問題なのはハンクのコンディションと、言葉の真意を汲み取ることができない点だ。

「ですが隊長、あなたははまだ十全じゃないはずです。治療できる場から離れるのは危険では？」

「口の前に足を動かせ」

目覚めたばかりのはずなのに、生存していたゴーストに対する驚きや、無数の感染者と生物兵器に追われている現状への悪態など微塵もなかった。

しかしだからこそ、黙々と任務を遂行する死神が戻ってきたのだと、ゴーストは一握の安堵すら感じられたと言っている。

「どこへ向かっているのですか？」

「地下の動力部だ」

負傷を感じさせない足取りで階段を下るハンクから必要最低限に告げられた言葉を脳裏で反復しつつ、ゴーストは施設の地図を思い浮かべる。

NESTの地下にある動力部ともなれば、それは溶鉄の熱を電力に変換させているNESTの心臓において他に無いだろう。

「溶鉱炉ですか？　そこで何を――」

「始末をつける」

階段を降り切り、無骨な金属製のドアを蹴り開いて、サーチライトで慎重かつ迅速に敵影を確認しながら、剥き出しの電子機器と金網の領域を進んでいく。

「T-103はこちらを明確に敵視している。我々の息の根を止めるまでどこまでも追跡し続けるだろう。ヤツの存在は任務の大きな障害となる。だから手を打つ」

「手を打つって、たった2人でタイラントと戦うつもりですか!?　奴のスペックは戦車並だ、通常火器で勝てる相手じゃない！　それは隊長も、いいえ、隊長だからこそよく分かっているはずでしょう!？」

「少しは頭を使い」

曲がり角から飛び出してきた作業着の感染者を蜂の巣に変え、蹴り飛ばすハンク。

かつて停電を直すためにヒューズを組み込んだメインシャフトを通り過ぎ、さらに地下へと続く階段へ。

「撃ち殺す必要は無い。ここにはもつと有用な手段がある。我々の数少ない物資でも、奴を確実に死に至らしめられる方法が」

重々しい、二重のバルブで施錠された扉を開く。

途端に熱気が肌を薙いだ。戦闘服の上からでもはつきりと感じ取れるほどの、まるで太陽と相見えたかのような膨大な熱波が。

「うう、あつい……」

汗腺が悲鳴をあげ、怒涛の勢いで汗が吹き出す。生物兵器の『LI SA-001』でも流石に堪えるのか、顔を顰めて嫌悪を示した。

しかし眉を曲げたのは気温のせいだけではない。床の温度もだ。

流石に焼けるほどではないが、裸足の少女には苦痛を強いられる熱さではある。

心配したゴーストが、ポーチから厚手の包帯とテープを取り出し、幾重にも足へと巻きつけた。即席の靴だが、無いよりはマシだろう。

「まさか隊長、手段つてのはひよつとして……?!」

「ここに奴を沈める」

柵から顔を覗かせる。

煮えたぎる鉄の海が視界を占領した。ボコボコと唸る1500度の魔物に囲まれた円盤状のエリアも見える。

そこへ降りる手段を模索しながら、ハンクは端的に告げた。

「2人で挑むと言ったな。不正解だ。我々3人で奴と戦う」

その時。施錠した背後の扉から、重機が衝突したかのような炸裂音が轟いた。

語るまでもない。タイラントだ。ハンクたちに追いついたらしい。

ドアの開閉を理解しない暴君が、石壁も殴り抜けるパワーをもって、金属の障壁を叩き壊そうとしている音だった。

しかし、死を告げる鐘の音に臆することもなく、漆黒の兵士は、凍土のように平坦な口調で言った。

「作戦を伝える」

## 波旬、暴虐を焼べたまえ

鬱陶しい鋼鉄のドアを吹っ飛ばす。

ピリつく熱気が、まんべんなく肌を撫でた。

だがしかし、獣の皮膚より頑強なT-103にとってこの程度、なら脅威と成り得ない。

「――」

荒々しく鼻息を散らし、姿の见えない標的に唸る。

小賢しい鼠は間違いなくここへ逃げた。T-103の鋭敏な聴覚は、3つの足音が消えて行ったのを聞き逃していない。

ズン、ズンと、筋骨密度の暴威を重々しい足音によって証明しながら、大岩のような巨体を直進させていく。

このエリアは狭い。なにせ、機械によってほぼ全自動管理されている動力施設だ。

通路はメンテナンスに必要な最低限のスペースに留められており、柱のように聳え立つ中央の制御ユニットをぐるりと囲う一本道しかない。

ゆえに、T-103は沿って歩く。人間のような理論的思考を持たない生物兵器は、敵の隠れ場を原始的に舐潰していく。

――その時だった。

暴君の死角<sup>はいご</sup>。それも天井から、稲妻のような奇襲が吹っ飛んできたのは。

「やああああッ!!」

「!?!」

甲高い咆哮が鼓膜を突いたかと思えば、砲弾と錯覚するほどの一撃が背中へ突き刺さった。

あまりの威力に巨体は揺らぎ、フェンスの外へ押し出され、真つ逆さまに落下してしまう。

重厚な衝撃。抑制された痛覚神経ですら、全身から打撲の鈍痛を感じた。

しかし、たかが数メートルの高さから落ちた程度、路傍の石ころに



躓くのと変わらない。

体を起こし、その先に立つ脅威を視た。

小さな小さな童女だった。背丈で言えば、タイラントの膝元にも足らない銀髪の少女だった。

「フーツ、フーツ」

両腕から鈍く輝く刃を生やし、腰を落として迎撃の姿勢をとっている。

他に影は見当たらない。どうやら、たった一人でこの暴君に挑むつもりらしい。

「……………」

T-103に感情はない。

ゆえに撃滅する。目の前のターゲットをただ撃滅する。

相手が子供？ 関係ない。脳髓にインプットされた■■■■のためなら容赦はしない。

そも、この子供からは一度ならず二度までも辛酸を舐めさせられている。その苦渋の味は、舌の根に絡みつくように残っている。

苛立ちはない。無色の殺意がそこにあった。

殺意を握り、拳を固める。

応じるように、雌雄は咆哮を爆発させる。

「■■■■■■■■■■——ツ!!」

「しゃああああああ——ツ!!」

高低入り混じる雄叫びが不協和音と鳴り響き、溶鉄プールに波濤を墮とした。

空気の転瞬。少女が消える。小柄な体躯から繰り出される迅雷の機動力を存分に振るい、スピードで劣るタイラントへ果敢に攻め込んだのだ。

暴君の脹脛から裂傷が芽吹いた。鮮血の花弁が舞い散るように飛沫を上げる。

あまりに鋭利な一太刀は、T-103に斬られたことすら知覚を許さないほどだった。

鈍い痛覚も相まって、なぜ足の機能が低下したのか理解することが

出来ない。

ただ、原因は把握している。視界をチヨロチヨロ動き回る、小賢しいネズミの仕業ということは分かっている。

けれど止まぬ、斬撃、斬撃、斬撃。

止められない。T-103のスピードでは、少女の敏捷性に追いつけない。

——知ったことか。

一呼吸のうちに掠り傷が増えようが、命に届くことはない。

ならばと言わんばかりに、暴君の名を冠するアンブレラの最高傑作は、理不尽と唾棄されるほどのパワーを拳に乗せて解き放った。

人体を泥団子に等しく爆砕する、猛獣のようなハンマーパンチ。

だがその矛先は少女ではない。足場だ。溶鉄プールに囲まれた漆黒の足場を、渾身の力で殴り飛ばしたのだ。

信じ難いことに足場が揺れた。局所的地震が巻き起こった。

荒ぶる足場が少女の機動力を一気に削ぎ落とす。小動物のように駆けまわれる弊害か、不安定なフィールドは少女の足首を掴むように歩を遅らせ、致命的な隙を生み出した。

見逃さない。

T-103は、その機会を決して逃がさない。

パイルバンカーに匹敵する拳を解き放ち、もたつく少女を挽肉にせんと殴りかかる。

篠突く、発砲の雨。

予期せぬ衝撃が肩を穿ち、必殺の拳は少女を逸れ、再び鋼鉄の床へと吸い込まれた。

「!？」

「しっ!!」

なぜ拳が外れたのか——逡巡の戸惑いを突かれ、顎に会心のサマーソルトを叩き込まれる。

華奢な足から放たれたとは思えぬほどの剛脚。電柱でフルスイン

グされたかのような衝撃が顎を伝い、脳髓の奥まで揺れ動かされてしまふ。

大きくよろめいたその刹那、またしても背中に痛みが走った。

それも一度ではない。弾丸の大豪雨に見舞われたかのような連続射撃が、息つく間もなく降り注いでくるではないか。

明滅する視界を被弾方角へ向ける。

鴉のような黒染めの兵士が二人、上層と中層でこちらを狙い撃っていた。

ダメージの根源を特定。まずは雑魚から仕留めにかからんと、T-103は脚に力を籠める。

だが少女に脚部を抉られ、跳躍すらままならなかった。

ならば先に少女を屠らんと反撃すれば、またしても精密射撃に阻まれ、ネズミを仕留めることが出来ない。

「……ッ!!」

タイラントに言語能力はない。理論的思考能力も存在しない。

けれどもし、人と同等の頭脳があつたなら、「馬鹿な」と叫んだに違いない。

「ゴースト、ポイントCへ移動しろ。頭部へ照準を合わせておけ。私は奴の関節を狙う」

「了解」  
ラジャー

『L I S A—001』、左旋回。そのまま機を見て右足を狙え。我々へ意識が逸れたら、右足の傷をさらに抉ってやれ」

「ん！」

鋭敏な聴覚が会話を捉えた。

T-103を翻弄する、蜘蛛の巣が如き連携を象る知の籠絡。その源流をしっかりと捉えた。

それがなんだ。理解したから、T-103にどうすることが出来るか。

タイラントシリーズは強靱だ。その皮膚は象皮に匹敵し、筋肉は生きた鎧に等しい。

強度のみならず、銃創すらあつという間に完治させる自己再生能力

の前には並の攻撃など通用しない。

しかし、物事には限度というものが存在する。

絶えず止むことのない集中砲火と、B・O・Wたる少女が織り成す阿吽の呼吸。

タイラントが攻撃することを許さない波状攻撃は、単身で特殊部隊を壊滅させうる圧倒的戦力を誇る怪物ですら、カバーし切れないほどの甚大なダメージを刻まれていった。

「――」  
おかしいと、幽かな疑問が芽吹いていく。

つい数分前まで追い詰めていたのは、間違いなくタイラントの方だった。

敵は負傷兵と似た匂いにする幼体だけ。何ら脅威ではないはずだった。

袋小路に追いこみ、粉碎する。ただそれだけ。

たったそれだけのはずだったのに、なぜこの身が膝を着いている？

「■■■■」  
T-103に心は無い。あるのは原始的な闘争本能と■■■だけだ。

そこに一片の情はなく、あるのは破壊の限りを尽くす無色透明の暴虐のみ。

――透明だったT-103の胸中に、幽かな色彩が花咲き誇る。

真っ赤な、真っ赤な、血に染まったような情動の華。

血を沸かせ、肉を躍らせる激情の大輪。

ヒトは、それを憤怒と呼んだ。

「■■■■■■■■■■」――ツ!!」

ドクン、と。

悪魔の鼓動が、残酷に脈打っていく。



「T-103は並の銃火器で仕留めきれぬものではない。ゆえに作戦

の要は『L I S A—001』、お前にこそある」

「これより各自死角に潜み、奴を待ち構える。T—103は部屋に侵入次第、我々を探し出すため短絡的に通路を巡回するだろう。T—103が背後を見せた瞬間、『L I S A—001』は奴を下へ突き落とせ。手段は問わん。一回限りのチャンスを無駄にするな」

「そのまま『L I S A—001』は奴を追い、下層で注意を引きつつ立ち回れ。私とゴーストは上層と中層、それぞれのポイントから援護する。T—103のパターンの思考を利用して立ち回れ。『L I S A—001』は奴の機動を削ぎ、我々が『L I S A—001』への攻撃を阻害しつつダメージを与えていくのが主な流れだ」

「ただし『L I S A—001』、お前は深入りするな。仕留めようと考えずなくていい。一步でも踏み外せば溶鉄プールへ真つ逆さまの環境だ、前のように投げ飛ばされたら消し炭だということを忘れるな。優先事項は生存とデコイにあると肝に銘じておけ」

「T—103はその性質上、立て続けにダメージを負うと、肉体の再生を優先して一時的な運動停止に陥る。その隙に溶鉱炉へ突き落とす。くれぐれも油断するな、奴の能力は計り知れん。万一の場合は合図を出す。その時はゴースト、お前は『L I S A—001』を連れて仮想ポイントBに着き、合図を待て」

「無線と不必要な金属機器は置いていけ。装備は最低限で良い。指示の聞き洩らしには注意しろ、不備が生じた場合、追って指示を出す。常に冷静な思考と最善の状態を整えておけ」

「以上だ。装備の再確認に移る」



血潮を吹かんばかりの雄叫びが、暴君を爆心地に轟き奔った。

あまりの声圧は大気を殴る。膝を着いた隙を穿ち、溶鉄プールへ突き落とさんと猛進した『LISA-001』が、たまらず耳を塞いでバックステップせざるを得ないほどの大爆音だ。

——『LISA-001』の足が、再び床と接することはなかった。前触れもなく腹に突き刺さったのは、丸太の如く屈強な怪腕。

地に足がつくより迅く、跪いていたはずの暴君が少女を殴り飛ばしたのだ。

「あぐっ!？」

圧倒的で、理不尽なまでのインパクトが少女をボールのように吹飛ばす。紙吹雪のように小さな体が飛んでいく。

不幸中の幸いか中央の柱へ激突し、溶鉄プールに放り出される最悪の事態は免れた。

「げほッ、げほッ！ ぜひゅっ、ぐ、ぼッ」

真っ白な衣服が鮮血に染まる。

瑞々しい口元からとめどなく溢れる赤が、少女の肢体を染め上げていく。

胴体を丸ごと壊されていた。

T-103の砲弾のような鉄拳が五臓六腑を叩き潰したのだ。

これで済んだだけマシだったと言える。少女がB・O・Wの強度を持たなければ、今の一撃で原形も留めずに破壊されていたことだろう。

「いウ、あ、い、がふっ!？」

手をつき、必死に体を起こそうとする少女が再び床を転がった。

蹴り飛ばされた。薙ぐような蹴りが突き刺さり、ゴミ屑のように吹っ飛んだ。

反射的に鋼の爪で床を引っ掻き、どうにかこうにか減速する少女。

あと1m減速が遅ければ、溶鉄の海へ真っ逆さまに落ちていたほどの間一髪。

しかし、怪物に情けなど存在しない。

彫像のような肉体が重厚な闊歩を刻んで躍動した。

迫撃砲の如き跳躍。T-103は、そのまま全体重をかけて少女の腹を踏み抜いた。

「カツ、は」

爆音と衝撃、血飛沫の大演舞。

だが流石はB・O・Wの肉体か。これほどの破壊を一身に受けとめてなお、少女は原形を保っていた。

ならばと巨人は踏みつける。

執拗に執拗に繰り返し、目障りな虫を踏み潰す。

踵で蟻を丹念に摩り下ろすように、ぐりぐりと少女の腹を押し砕いていく。

「ひツツツ——!? アあああああああああああああッ!? あぐあつ、いやッ、うアアあああああああああああああああああああああああッツツ!!」

鉄の骨に亀裂が走り、バキバキと裂けていく悲鳴が聴こえた。あまりの圧力に内臓が弾ける生々しい感触が広がった。

内側から皮膚が裂ける。鼻腔が鉄臭さに覆われる。眼球の毛細血管がバツンと破れ、視界が真っ赤に染まっていく。

激痛が稲妻の如く蹂躪した。頑丈過ぎる肉体を呪うほどの痛みが永遠のように襲い掛かり、少女は声帯が千切れんばかりの絶叫を張り上げる。

「隊長、不味いぞー! あの野郎どれだけ撃ってもビクともしない!!」

何が何でも止めを刺す気だ、このままじゃあの子が殺されちゃう!!」

「放電しろ! 『LISA-001』!」

混濁する自我をハンクの言葉が呼び戻す。苦痛で歪んだ少女の瞳に、意思の灯火が舞い戻る。

少女は千切れかけた腕を引き抜き、電熱を宿したブレードを暴君の足に突き刺すと、そのままありつたけの大電流を暴走させた。

火花が散る。雷撃が神経を焼き焦がし、T-103を弾き飛ばす。

「げほっ、えほっ、えううう……!」

「よかった、生きてる!」

「集中を乱すな、頭を狙い続ける。私は『LISA—001』を回収——ッ!?!」

背筋を凍らせる、残酷な重低音と振動。

それは、ハンクがいる上層まで、一息に暴君が飛び乗ってきた証左だった。

T—103にとって煩わしきの根源——司令塔<sup>ハンク</sup>の殲滅に打って出たのだ。

怒りを滲ませ、顔貌に深く皺を刻む怪物。

浮きあがった毛細血管が皮膚を朱の鬼が如く変貌させ、刻まれた無数の傷が治癒と共に盛り上がり、巨体がさらに膨張していく。

爪は未だ短いながら、肉食獣を彷彿させる鋭利なものへ。

(……データにあつた変異か。生命危機に陥ったタイラントシリーズが、急速再生と共にさらに驚異的な進化を遂げるといふ)

それはスーパータイラントと呼ばれる、いわば一種の暴走状態。

アークレイ研究所にて確認された究極生物の真骨頂。T—ウィルスがもたらす、自然の理を越えた災いの進化。

その身体能力、耐久性、戦闘能力は覚醒前の比ではない。

現に『LISA—001』は成す術もなく弄ばれ、ハンクたちの持つ火器類さえ一切通用しなくなった始末。

この状態になったタイラントは、暴君の名に恥じぬ攻撃性を惨たらしいまでに発揮するのだ。

あまりに凶悪過ぎるがゆえに、運用時は暴走を抑える特殊なスーツを着用させるほどに。

しかし、この個体は拘束具を初めから着けていなかった。理解する。怪物の進化は、きつと手榴弾を喰らわせた時から始まっていたのだと。

(変異前に一時的な休眠状態に陥るはずだったが……アテが外れたな)

それでもなお、兵士は一滴の絶望も呷らず。

振り上がる拳が落ちるより先に股下へ滑り込み、そのまま全速力でフェンスを越えて飛び降りた。



(奴はまだ変異を終えたわけではない。いわば羽化途中の蛾、最も不安定な状態だ。むしろ叩くなら今が好機か)

中層へ着地し、流れるような手さばきでゴーストへ物体を投擲する。

受け取ったゴーストの手には栄養剤が握られていた。少女の元へ持って行けという意図だろう。

頷き、下層へ降りて行ったゴーストを見届け、ハンクは視線を背後へ向ける。

死が降りてきた。

時を経るごとに増していく筋肉と骨組織の重みを、足音という形で体感しながら、暴威の化身と相見える。

「……」

たった10mにも満たない至近距離。ゆえに、機動力に欠けるLE5は使わない。

死神が握るは、ただ一振りの刃と白銀の拳銃。

ライトニングホーク  
稲妻の鷹。部下がNEST内にて探し出した、必殺の大口徑マグナムを。

「いいだろう」

ハンクはただの人間だ。T-103の猛攻を受けながら原形を留められた、『LISA-001』のような強度は無い。

一撃でも喰らえば死に至る白兵戦は、溶鉄の熱気すら掻き消すほどの寒気を招く難業だろう。

「来い」

しかし。

力も、肉体も、命の強度さえも。何もかも劣る身でありながら。

死神は、一歩たりとも死線を退かず。

「■■■■——ツッ!!」

魍魎は叫ぶ。仇敵を前にした怨霊が如く。

死神は撃つ。命脈へ鎌を喰ませるが如く。

雄雄しき炸薬の絶叫。音速の1.5倍で解き放たれた13mmの凶弾は、空気を引き裂き暴君の右胸を抉り抜いた。

怯みもしない。頭蓋すら吹っ飛ばすマグナム弾を喰らっても、ほんの少し仰け反るだけだ。

どころか、弾丸は厚く強靱な胸板に阻まれ、急所たる心臓まで辿り着かない始末。

無貌の怪物は静かに歩を進め、大岩の拳を振りかぶる。

大振りだが、豪速を連れたハンマーパンチ。ハンクは後ろへ跳んで躲し、再度右胸の傷を狙い撃った。

間髪入れずミサイルのような前蹴りが吹っ飛んでくる。半身を捻ってやり過ぎし、精密機械のような技量で、傷を深めるよう狙っていく。

(残弾4発、3発——堅いな。足りると良いが)

猛烈なラツシユを掻い潜る。

掠るだけでも致命に至る接戦を、紙一重の均衡で乗りこなす。

バレルが唸りを上げる。5発の凶弾が硝煙と共に吐き出され、ようやくと言うべきか、覚醒したタイラントの胸に大仰な穴が割り貫かれた。

だが浅い。上辺の肉を吹っ飛ばしたただけだ。監獄の檻のような肋骨が僅かに顔を覗かせただけ。

しかも傷が見る間に再生し始め、直ぐに埋もれて消えていくではないか。

——ハンクは、この瞬間を待っていた。

「撃てー」

号令と共に、下層から無数の弾丸が到来した。

全てT-103の巨大な背中へ吸い込まれる。しかし、ライトニングホークですら至近距離で5発も叩き込まなければ怯まない堅牢ぶりだ。遠距離からのサブマシンガンでは火力に欠ける。

それでいい。与えるダメージは重要ではない。

ほんの一瞬、コマ数秒だけ意識を逸らせればそれでいい。

T-103の視線がちらりと泳いだ。耳元で騒ぐ蚊を鬱陶しく感じるように、横槍を入れたゴーストへ意識が向いたのだ。

ハンクは、その須臾の時を見逃さなかった。

「餞別だ。くれてやる」

僅か砂粒ばかりの虚を穿つ。再生途中の傷口へ、渾身の力を込めて白銀のナイフを振り込み込む。

深く、深く、刃は肉を掻き分け抉る。

しかし、あと数センチで心臓に届くというところで、ハンクはおもむろに手を離れた。

「■■■■ツツ……!!」

暴れ狂うT-103。

腕を振るい、怪物は駄々をこねるようにのた打ち回る。

喰い込んだナイフは肉の再生に巻き込まれ、柄だけを残して取り込まれてしまった。

否、取り込まれたのではない。高い再生能力を逆手にとり、あえて体内に残したのだ。

「今だ『LISA-001』！ 引張れ!!」

——溶鉄の焰を引き裂くような、眩い稲光が迸った。

ゴーストが与えた最後の栄養剤は、少女に申し分ない燃料を注いだ。

ぐちゃぐちゃだった肉体の再生を終え、再び兵器として立ち上がった少女。

彼女が放つは、大気の抵抗値を破り捨てるほどの大雷撃——ではなく。

腕に電流を纏い、己が鉄骨を磁界の要とした、磁力の津波とでも言うべき波動だった。

それが果たして何を招くか。

答えは、刹那の間に訪れた。

かつてハンクから弾薬を盗んだ時と同じように——否、そんなものは稚戯に等しいほどの磁力爆発は、一瞬だが周囲の磁性体をブラックホールのように引き寄せた。

タイラントの胸に埋まったナイフでさえも。

「ツ——」

怪物は苦痛を意に介する暇すらなかった。

水入りの風船を思い切り叩きつけたような破裂音と共に、T-103の背から、ナイフが血肉を引き連れて飛び出したのだ。

赤く、温かな液体が間欠泉のように噴き出していく。不屈の巨体が、支柱を抜かれたジェンガのように揺れ動く。

尋常の出血量ではない。まるで破裂した水道管のような、全ての血液が流れ出らんばかりの凄まじい勢いだった。

無理もない。ハンクが残したナイフが心臓を穿ち、そのまま体を貫いたのだから。

強靱なタイラントの肉体を人力で破壊することは出来ない。銃も、ナイフも、骨と筋肉の鎧に阻まれ無効化される。

だからハンクはアプローチのベクトルを変えた。『LISA-001』が生み出す莫大な磁力を利用して、心臓を内側から破壊した。

このために、ハンクは金属装備をゴーストたちから外させたのだ。

「ゴア、ア、■■■■……!!」

それでもなお即死せず、フェンスに凭れかかりながらもしぶとく生きるT-103は、やはり真正の怪物か。

しかし、死神はこの好機を絶対に逃さない。

全力のソバットを叩き込む。体幹を失ったT-103は、あっさりとフェンスから突き落とされた。

頭から下層へ激突する。赤い血だまりが広がっていく。いいやまだだ。まだ死なない。T-103は不死性を存分に振るって立ち上がり、標的を滅ぼさんと鬼神の雄叫びを張り上げた。

「総員、構え」

悪あがきを見せる暴君へ、立ち塞がるように集う3つの影。

生物兵器たる幼き子。亡霊の銘を刻んだ兵士。

そして、黒づくめの死神が。

「——かかれ」

撃った。撃った。撃った。

ライトニングホークを。LE5を。拳を。蹴りを。電熱の刃を。油断はない。容赦もない。そんなものが許されるわけがない。



## 休息。急転

「出来たぞ。さあ飲んで」

「や」

「そう言わずに。ほら」

「や!」

「大丈夫だって全然苦くないし。甘いぞー」

ガスマスクを外し素顔を露わにしているゴーストは、小さな薬包紙を掴まんで中身を口へ傾けた。

カラフルな粉がサラサラと流れ込んでいく。ゴーストは喉を鳴らして呑み込み、軽快な笑顔を浮かべて口の中が空っぽになっているのを見せた。

「な? 大丈夫だって。ただの甘い粉だから」

「……ほんと?」

「ホントさ。この通り俺は平気だ」

「にがくない?」

「全っ然苦くない」

少女に差し出される薬包紙。

紙の上には緑、赤、青の三色に別れた色鮮やかな粉末が乗っていた。どうも乾燥した植物を砕いたものらしい。

少女は恐る恐る、さながら初めて見る奇妙な生物と触れあうような慎重さで薬包紙を掴まむ。

しかし自分で飲む勇気がなかったのか、ゴーストへ薬包紙を渡して目を閉じつつ、あーんと大きく口を開けた。

眉間に皺が寄っている。覚悟を決めたから入れてと言っているらしい。

ゴーストはすかさず流し込んだ。少女はギョツと眼を見開いた。

「~~~~っ!? にがっ、にがいっ! うええ、ごーすとうそつき!!」

「はは、騙してごめんよ。確かにこいつはサイアクな味だ。でもよく効くんだ。すぐに傷が治る君でも、体にかかる負担を減らすことは出

来るはずなんだよ。隊長に迷惑かけたくないだろう？ だからな、ほら、あと半分我慢して」

「んうううう〜!!」

目元に涙を浮かべながら、残った薬を一息に呑み込む少女。

けほけほと咽つつ、ゴーストから貰った柑橘の缶ジュースを流し込んで何とか攻略に成功した。

粉末の正体は、ラクーンシテイ近郊アークレイ山地に自生する薬草<sup>ハーブ</sup>である。

身体機能の改善、治癒能力の促進といった東洋医学的効果があり、種類によっては解毒作用を持つものもある。

ラクーンシテイでは古くから馴染みのある薬草だけあってか、NE STでもそこかしこで栽培されていたらしい。

きっと応急処置用だろう。それを拝借し、粉薬として加工したのがこれである。

ただし、味は子供舌を震え上がらせる脅威だったが。

「よしよし、偉いぞ。頑張ったご褒美だ、好きなものを選んでくれ」

ポーチから茶褐色のビニール袋が次々取り出されていく。かなり詰まっているのか、中身の輪郭が浮き彫りになっているものばかりだ。

パッケージの表記はMRE。即ち軍用<sup>レール</sup>携帯<sup>シヨ</sup>食料<sup>シ</sup>である。

「これはチョコレートバー、ウェットブレッドとピーナツバター。こっちはグリルチキンだな。あとはミートソースパスタと……ビーフシチューくらいか」

「? ??」

MREは戦地での栄養補給と士気の維持に貢献するため、1980年代と比べればかなり改良されている。

が、一般的な食事として見ればかなり劣悪な部類だ。見た目も味も劣るのはしかたない。

しかし、少女の眼はそういった期待外れの眼差しではなく、まるで異国の奇特な料理を目の当たりにしたかのような、怪訝に満ちた眼差しをしていた。

「……もしかして、食べたこと無いのか？」

「？ うん」

「パスタも？ 全部？」

「ばすたつてなあに？」

きよとんとする少女。思わず目を泳がせるゴースト。

当然と言えば当然だった。彼女は兵器で、人間じゃない。

食堂のカウンターで小銭を出し、プレートに乗せられたジャンクフードとコーヒーのモーニングセットを静かに味わいながら眠気を覚ます——そんなごく当たり前の経験すら存在しないのだ。

きつと、例のゼリー飲料だけで過ごしてきたのだろう。

彼女の開発者が何かしら食べているところを見かけたかもしれないが、口にする機会はなかったのだ。

「……よし。じゃあパスタとシチュー、ブレッドを開けよう。気に入った奴を食べると良い」

幸い、この医務室で器には事欠かない。棚から手術用トレイを取り出し、ひとつひとつ盛っていく。

本来食器として用いるべきものではない金属プレートばかりだが、だからこそ滅菌もしっかりしている。ある意味、普通の食器より清潔かもしれない。

「このドロドロした汁物がシチューで、こっちの細い奴が纏まつてるのがミートソースパスタ。で、これがパン」

念のため『L I S A — 0 0 1』用に小分けしてから渡す。

もし彼女が口に合わないと残した場合、それを処理するのはゴーストだ。『L I S A — 0 0 1』がウイルスで造られた兵器である以上、感染を避けるために同一の食器を使うことは出来ない。

真空パックからスプーンとフォークを出して少女へ渡す。しかし道具の使い方が分からないからか、木の枝でも貰ったかのようにしっかりと握って受け取る少女。

ゴーストが使用方法を教えると、少女はすぐに理解した。慣れない手つきながらパスタを絡ませ、慎重に口へと運んでいく。

「……おいしー」



「おっそうか。じゃあきつとこれも気に入るだろう」

苦い薬を飲まされたせいで半信半疑に包まれていた少女の顔は、見違える笑顔で満たされた。

ジェル状栄養剤以外に口にするのは初めての体験だ。味蕾に絡みつくソースの旨みは、疲れも相乗してか、例え軍用であつても格別に感じる。

気付けば容器は空っぽだ。名残惜しそうにソースを掬う様子を見て、ゴーストはパン以外を全て少女に差し出した。

付属薬品の化学反応でレーションを温めていく。少女は今か今かと待ちわびつつ、医務室の奥で椅子に腰かけながら見張りに徹するハンクに目を遣った。

「はんくはたべないの？」

「もう済んでいる」

あつさり両断された。

言われてみれば、傍の机に食べ痕のパッケージが放られている。

スティック状の食品だ。味を犠牲にする代わりに手軽さや栄養面へ力を入れた完全栄養食だろう。

薬包紙のゴミを見るに、ハーブも服用したようだ。

「……………」

「何だ」

「かお」

「……………なに？」

「ますく。ぬいで」

食事のためにマスクを外したゴーストと、相変わらず漆黒の装備で肌ひとつ見えないハンク。

どうやら顔が気になるらしい。出会ってから一度もマスクの下を見たことがないせいだ。

ゴーストがマスクを脱いだせいもあつて、余計に好奇心を刺激されらしい。

少女は口元にソースをつけたまま、ハンクの元のにじり寄った。

当然ながら、ハンクがまともに相手をするはずもなく。少女を無視

し、通気口や入り口のドアへ注意を――

「ぬいで」

「……」

「ぬーいーでー」

脱がしにかかろうと伸びる少女の魔手を躲す。

時には叩き落とし、時には頭を抑えて鎮まらせる。

だが子供の好奇心は一度火が着くと止まらない。一向に収まる気配はなく、あの手この手でマスクを剥がそうと躍起になっていた。

B・O・Wとしての馬鹿力を発揮されないだけマシだが、鬱陶しいことこの上ないとハンクは唸る。

「黙れ。大人しくしている」

「……むー」

少女はこの3日間でハンクとの付き合い方を学習している。

これ以上は拳が飛んで来かねないと感じたのか、大人しくゴーストの元へ戻っていった。

「……」

精神的に成長している――あるいは戻っていると、ハンクは臆に思考する。

出会ったばかりの少女は人形と言っても差し支えない存在だった。

感情の機微に乏しく、陰鬱としていて、自発的な言動をせず、常々ナニかに怯える小動物のような脆さを帯びていた。

それが今はどうだ。機械的に従う傀儡のようだった少女に、ハンクにちよつかいをかけるほどの色彩が宿っているではないか。

哀しみしか無かった表情に喜怒哀楽がはつきり映るようになった。自ら言葉を発し、他者の損得を考えて行動するようになった。

精神的に成長している。それも恐ろしい速度で。

肉体の変異とは違う進化。歓迎すべきか否か、逡巡に値する成長である。

（精神の成熟は制御をより容易にする。しかしそれは現状のみ。回収後はむしろ弊害となりそうなものだが、さて）

そこまで案じて、ハンクは思考を切り落とした。

ハンクの仕事は少女とGウィルスを回収すること。その後の少女は管轄外だ。考えるだけ無駄である。

強力な生物兵器を容易に操れ、任務を円滑に遂行できる——今はそれだけを視野に入れる。

利用価値が生まれるのなら精神の熟れだつて大歓迎だ。悪いようにはならないのだから。

使えるものはなんだろうと利用する。それは幼児であろうが変わらない。

死神の芯は揺るがない。金剛の意志に亀裂はない。

兵士はただ、主命に忠を尽くすのみ。



ソファですうすうと安らかな寝息を立てる少女。

コールドスリープから目を覚まし、動き続けることおよそ3日目。いくら生物兵器とはいえ、疲労の蓄積は相当だつたに違いない。

満腹になった少女はうつらうつらと舟をこぎ始め、そのまま海の底へ沈んでいくかのように、深い深い眠りへ落ちていった。

(……無事にNESTから連れ出せたとして、この子はどうなる)

地獄に相応しくない安寧の微睡みを見守りながら、ゴーストは薄々と自問を投げかけた。

(彼女は兵器で、アンブレラは持ち主。……どうなるかなんて想像もしたくない)

ゴーストは人並の人生を送れなかった人間だ。ある意味負け犬ともとれる人間だ。

そうでなければ、非合法的な仕事を担う工作部隊に配属などされるものか。

U・B・C・Sのような捨て駒じゃないのが救いだ、だからと言って真つ当な別の生き方を選べたかと聞かれれば、静かに首を振らざるをえない。

銃を手に権力者の汚れを流血で雪ぐ人間が、日の元を歩む無辜の民

と同列なはずがない。

高給と高待遇に眼が眩み、悪魔の狗となることを選んだのはゴーストだ。

時に殺人すら厭わないその悪性は、ハンクとなんら変らない。

そんなゴーストであつても、アンブレラの本質は唾を吐くに値する悪道なのだ。

無知で幼い子供だろうと、彼らは大義の元に容易く胎まで切り刻む。必要ならチューブと機械の苗床にだつてするだろう。

生まれたことを後悔するほどの苦痛と屈辱を、彼らは平坦な表情で強いるのだ。

下っ端のゴーストは全ての情報を掴んでいるわけではない。それでも耳に入ってくる噂はある。

若者の頭を麻酔無しで切開し、脳の一部を切り取るという吐き気を催す違法手術。ウイルスへの適合性を持ってしまったがゆえに、人の形を留めなくなるほど人体実験を繰り返された『不死身の出来損ない』の話。

アンブレラに踏み躪られた犠牲者たちの墓標には、冒流なんて言葉が生温いほどの非道な傷痕が刻まれているのだ。

(どれだけ楽観的に考えても、彼女の行きつく先は隷属だ。爆弾付きの首輪でもつけられて、お偉いさんの敵を葬る暗殺者にでも育てられるんだろう。私情を潰され、幸福の甘受も許されない肉の機械として擦り切れるまで働かされる。後継が生まれてしまえば、その時点で廃棄処分だ)

絶望的。それ以外に言葉はない。

どう見繕ったって少女は死ぬ。体は生きても心は死ぬ。それは最悪な結末に他ならない。

今のNESTは奈落の底だが、彼女にとってこの瞬間こそ幸福なのではと思えるほどだ。

ハンクとゴーストに保護されている現状が、彼女の感じる最後の安息なのではないだろうか。

「……」

ゴースト自身、アンブレラに魂を売った外道に変わりない。それでも、そうであっても、彼女の境遇はあまりに酷だと、胸を痛めずにいられない。

一片の同情も寄せずにいられるのはハンクくらいの例外だ。ゴーストは例外ではない。亡霊が死神になることは出来ない。

(どうすりゃいい。いや、俺が考えたところでどうなるってんだ)

タイラントを退け、医務室へ避難し、一時休息するとハンクの指示が下った時。途中で回収した『LISA-001』のデータや開発者のビデオメッセージなど、全ての情報がハンクによって共有された。少女の母である研究者は願っていた。残酷な宿命の元に産んでしまったからこそ責務を抱いて、幸あれと切に願っていた。

(我ながらつくづく甘いな。隊長が俺の心を読んだらなんて言うか。……この仕事、向いてねえのかも)

「ゴースト」

ふと、眠っていたはずの少女がゴーストへ声を投げってきた。

向けば、なにやらソファに座ったままモジモジしている。どこかバツの悪そうな表情で、じつとゴーストに目を合わせていた。

「どうした？ 今日是一日休憩するって隊長が言ったんだから、まだしばらく寝てていいんだぞ」

「う、んう。えつとね、おしっこいききたい」

「……………あー」

兵器とて彼女も生物。生理現象は当然ある。

今はゴーストが見張り番でハンクは眠っている状態だ。必然的にゴーストが連れて行くしかない。

幸いトイレはすぐ傍にある。ほんの少し席を外す程度なら問題ないだろうと、少女を連れて医務室を後にした。

(B. O. Wの世話係か。こんな体験、もう二度と無いだろうなあ)  
手洗いの出入り口でぼうっと控えるゴースト。

この付近は電気の通りが悪いらしく、下層と比べて夜のようになり。光源は薄ぼんやりとした夜間灯の緑くらいで、さながら廃墟の病院である。

「じーすと。いるっ。」

「ああ。いるぞ」

時折確認の声が飛んでくる。たった独りでNESTを歩み、ゴーストまで辿り着いた少女でも、こういった状況には弱いようだ。

危篤のハンクのために我武者羅で動いてたんだらうと推察する。つくづく人間らしい子だと、生物兵器のトイレ番という奇妙な現状も合わさって笑みが零れた。

（それにしても静かだ。物音ひとつない。下層なんか戦場みたいだったのに）

最も大きく聴こえるのは自分の吐息と心音だ。沈黙の支配圏に立っているのがよく分かる。

このまま目を瞑れば、無音の暗闇に吸い込まれてしまいそうな静寂だった。

——そんな音無き世界を、一条の悲鳴が食い破った。

「？」

反射的に銃口を向ける。弛んでいた兵士としての感覚が一気に研ぎ澄まされ、鋭敏なセンサーとして覚醒していく。

足音が聞こえた。

ばたばたと、慌ただしく床を蹴っているのが聴こえる。

「なんだ……？ こっちに向かってくる？」

15m先の曲がり角から聴こえる。サーチライトの射程距離外だが、何か走っていることだけは確かだった。

やがて、音の正体が姿を現した。

男だった。顔を涙と鼻水でぐしゃぐしゃにしながら、脇目も振らず一目散に駆け抜けてくる男だった。

白衣や戦闘服ではなく、ごくありふれた普段着に身を包む眼鏡の男。曲がり角からゴーストのいる道へカーブして、そのまま盛大に滑ってこけた。

（生存者だ。感染していない）

感染者はあんな生氣ある動きはしない。顔を恐怖で汚されることなどない。

情けない悲鳴を上げて赤子のように這いずり回る成人の男は、ゴーストの軍用ライトを視認するやいなや座り込んで両手を上げた。

「待て！ 撃つな、撃つな!! 私は噛まれてない！ ずっと部屋のロッカーに隠れてやり過ごしてたんだ！ 頼む助けてくれ、お願いだ！」

「動くな。何者か知らんがじつとしてろ」

「無理だ、無理だ、すぐにアイツが来る！ 早く逃げなきや駄目だ!!  
なあおい、あんた、兵士なら俺を助けてくれよ！ その銃で奴を」

刹那。男はまるで影に連れ去れたかのように、悲鳴を上げながら闇の中へ消えていった。

一瞬にして汗が吹き出す。引き金へかかる圧が強くなる。

「おいおいおいおい……!! お嬢ちゃん頼むから早くしてくれ……！」

少女を置いて立ち去るわけにはいかない。水洗の音が聞こえたから、すぐにでも外へ出てくるだろう。

それまで僅か十数秒を、正体不明と向き合いながら防戦する覚悟を決める。

(……いや、ちょっと待てよ)

けれど、緊張の死線に立つゴーストの脳裏を掠めたのは、まだ見ぬ強敵の出現や死の恐怖ではなく、一抹ばかりの違和感だった。

(奇妙だ。素人らしかったが、何故今の今まで生きてこれたんだ?)

感染が始まってもう3日以上だぞ。しかも新品に近い私服姿。この地獄で武器も持たずに、着替える余裕まであったってのか?)

N E S Tの感染者はみな一様に作業着を着こなすスタッフばかりだった。

白衣、ツナギ、スーツと様々だが、プライベートを楽しむ普段着など身に着けている者は見たことが無い。

それは暗に、アウトブレイクが起こってから着替えに頓着する余裕など誰も無かった証左である。

(それにだ。アイツは俺が銃を持つてると一目で見抜いた。ライトで視界を塞がれてたはずなのに。何故銃を持つてると疑いもなく分

かった?)

視認してからの状況把握が速すぎる。まるで事前に知っていたかのような口ぶりだった。

ゴーストの持つ軍用ライトは非常に強力なのだ。まともに浴びて視界を確保できるわけがない。

にも関わらず、ただのバイオ研究機関であるNESTの真つただ中、目を瞑られて何故ゴーストが兵士であると理解できた?

(肝心の敵の気配が無いのも引つ掛かる。気味が悪い、まるで墓の中にでも放り込まれたような気分だ。何かとてつもなくヤバい気がする! 俺には想像もつかないことが――)

違和感。

視界の端に違和感。

何かが垂れている。ぶらんぶらんと揺れている。

鈍く光る、ブラインド状の四角い金属。

見間違えるはずもなく、それは通気口の蓋だった。

「あっ」

「ゴースト。おおきいこえきこえけど、だいじょうぶ?

.....ゴースト?」



## Chapter 3

### 芽吹く脅威

「ゴーストが消えたただと?」

猛烈なドアの開閉音。微睡みから急速浮上し、ハンクが最初に目にしたものは、今にも泣き出しそうなしわしわ顔をした少女だった。

銀髪の少女『LISA-001』は、鼻を嚙りながら慟哭のように訴える。

「どこにもいないのっ! ごーすとがいなくなっちゃった! どうしよう、どうしようはんくっ! もっもしかしたら、たべられちゃったかも……!」

「落ち着け」

「ごめんなさい、わたしがたのんだの! ついてきてったのんじやって……! そしたら、そしたら……っ!」

NESTは怪物で溢れている。たった一度の噛み傷で人を殺す化け物が、石の下の蟲塊のように巢食っている。

そんな暗闇の中、ゴーストは消息を絶ってしまった。

最悪の未来が脳裏を掠る。少女を絶望の真菌が蝕むには十分だった。

「いいか、まずは冷静になれ。ゆっくりでいい。深呼吸しろ」

パニックで呼吸を荒くする少女と視線を合わせ、静かな口調で混乱を静めていく。

手の動きでリズムを作る。少女は合わせて息を吸い、深く吐いた。

幾度か繰り返すうち、頬の紅潮と吐息の乱れが、静穏へ溶けるように姿を消す。

「落ち着いたか?」

「……うん。ありがとう」

「よし。順を追って話せ」

少女はたどたどしく経緯を綴る。

手水へ行くためにゴーストへ同伴を頼んだこと。ほんの十数秒離

ただだけで返事が来なくなったこと。

外へ出て探しても見当たらなかったこと。血の匂いはなく、怪物の気配も全く無かったこと。

(……ゴーストが独断で消えたとは考え難い。一番高い可能性は奇襲だが、痕跡ひとつ残さず討たれることはない。ダクトが開放されていたということは……まさか、通気口に潜むプラント43のような怪物に攫われたか?)

しかし、それでは説明できない部分がひとつ。

(『LISA-001』の生体探知が機能しなかったところが引っかけ。だからこそゴーストにも油断が生まれた。仮に怪物の奇襲を受けたのなら何故機能しなかった?)

思い浮かぶのは、『L-adapter』の存在だ。

少女の血液をもとに製作された人工血清。万人に始祖ウイルスの恩恵をもたらすことを目的としたものだったが、その実態はT-ウイルスと異なる禍々しい進化を与えるだけの不良品である。

第一の特徴として、『L-adapter』によって生まれた生物は『LISA-001』のサーチに引っかけられない。

第二に、敵に罠を仕掛けるほどの高い知能を保持できる。

――

だが、『L-adapter』で生まれた怪物は現状全て死亡したはずだ。

猿はハンクが頭をふっ飛ばした。女研究者の成れ果ては、少女が首を刎ねて殺害した。

記録上投与されたラットとウサギも処分済み。この世に『L-adapter』の系譜は存在しない。

(……まさか、な)

脳裏に過る砂粒程度の可能性。

あり得ない。流石のハンクも断言せざるを得なかった。

アレは首を刎ねたのだ。頸椎を見事に両断して、永遠の眠りを与えたのだ。

生きていられるはずがない。圧倒的不死性を誇るタイラントシ

リーズでも、中枢神経を破壊すれば間違いなく死ぬ——それは紛れもない事実なのだ。

もし生きていたとしたら、それは生物と呼べるだろうか？

（まあいい。現状、失踪原因を特定する要素がない。考えるだけ無駄だ。思案すべきは、ゴーストを捜索するか否か）

広大な危険区域へ再び戻り、既に死んでいるかもしれないゴーストをわざわざ捜索するのは、ハンクにとってリスクしか孕まない。

普通は遠慮なく切り捨てているところだ。これからGウイルスを回収して、少女と共に脱出するだけなのだから。

「はんく」

ただし、今回ばかりはそうもいかない。

「おねがい……！　ごーすとをたすけて……！」

ハンクの服を、強く強く握りしめながら訴える少女がいる。

自責の念を帯びていた。ゴーストを連れ出した自分にこそ責があると、そう受け止めている眼だった。

これが悩みの種。簡単に即断できない理由。

何故ならこの少女は、人間の姿をした怪物なのだから。

（例え捨て置こうとも、こいつは制止を振り切って独り探しに出るだろう。本気を出した『LISA-001』を捕らえる術など存在しない。……奴に世話役を任せたのが裏目に出たか）

少女の身体能力は人間のソレを遥かに上回る。

10歳程度の容貌からは想像もつかない怪力と敏捷性を発揮するのだ。ひとたび反旗を翻されれば、実力行使で連行してもまるで意味を成さない。

ゴーストの安否がかかっている今、説得もなにも通用しない。彼女にとって既にゴーストは重要な精神的ポジションに落ち着いてしまっている。

回り道も已む無しだ。今回ばかりは、ショートカットが茨の道と言えらるだろう。

「……良いだろう。ゴーストの救援に向かう」

「っ！　ありがとう！」

「だが手掛かりもなく探し出すのは難しい。NESTは広い。まず痕跡を探す。ゴーストが消えた場所まで案内しろ」

『その必要はありませんよ、U・S・S』

——どこからともなく、人の声。

微弱なノイズが入り混じるそれは、部屋の角に備えられた緊急放送用の電子スピーカーから響いていた。

ビクツと肩を跳ねる少女。動じず音源へと向くハンク。

「だっ、だあれ……？」

『誰、とは。中々冷たい反応ですね「LISA-001」。流石の君も声だけで特定するのは難しいか』

男の声だ。しかしハンクにも思い当たる節はない。

謎孕む男の出現に困惑が漂う。だが相手は少女を知っているらしい。しかもB・O・Wであること、そしてハンクがU・S・Sであることも。

間違いなくアンブレラの関係者だ。生存者だろうか。

『さておき。君とコンタクトを取るのは初めてですね、U・S・S—

—いえ、Mr・ハンク』

「……」

『君たちの活躍はずっと眺めておりました。まったく大したものです。この魔窟をたつた一人で……大番狂わせもいいところだ』

ハンクの視線がスピーカーから移動する。

部屋の隅。メガホンとは対角に監視カメラが存在していた。

レンズの中で焦点を合わせる動作があった。明らかにハンクと少女を観察している。

「何者だ」

『大した者では。ただの生存者、あるいは元アンブレラの駒がひとつとでも。好きに解釈してくださいませんか。重要なのは、私の言葉が貴方にとって耳を傾けるに値するということですよ』

「……………」

『貴方は賢い。だから単刀直入に申し上げましょう。私と取引をしませんか？』

物腰柔らかく、丁寧な囁き。

一寸たりとも気を緩められないこの地獄と反した、柔和な声色が空気を掴む。

不思議な声だ。スピーカーから漂う正体不明で、言葉の中身は不穏でいっぱいなのに、それでも心を許してしまいそうな柔軟さがある。

無論、それは少女の話。

死神が人の言葉に動じることはない。

『貴方が探しているモノは知っています。Gウィルスのサンプル、大切な部下……どちらも手元にありましてね。そして貴方は、私が欲するモノを持っている』

言葉に矢印があるとするとするなら、これほど実感できる機会はない。

スピーカーから響く男の声は、間違いなく少女を指し示していた。

『ビジネスです。公平な立場で話しませんか』

「公平を謳うなら証拠を出せ。お前の言葉には確証が無い」

『そう言うと思ってました。——ほら、出番ですよ』

椅子が傾くような音。ガタガタと物が動く音。

一転。全く異質な声音が、電子に乗ってやってくる。

『隊長！……ここに来ては駄目です！……はやく彼女を連れて脱出を——』

『はい、お試し版はここまで。続きは地下三階、ターンテーブルの管制室でね。賢明な判断を期待していますよ、Mr. ハンク』

通信が途絶える。しんとした沈黙が目覚めます。

何が起こっているのか理解出来ない少女は、おろおろとハンクに目を遣りつつ袖を掴んだ。

一方、ハンクは黙り込んだまま。

（何者かは知らん。興味もない。だが不透明な男だ。『L I S A — 0 0 1』を知っているなら、開発関係者で間違いなさそうだが）

この少女は、秘密の多いアンブレラの中でも極秘とされる生物兵器だ。

一人の研究員の独断専行が生んだ偶然の産物。その特異過ぎる立場は、回収したデータファイルを一見したハンクも把握している。

つまり逆説的に、『L I S A—001』の関係者はごく限られた人間のみという事になる。

それも少女の母親が信頼を置いた、一部のスタッフのみだ。

しかし、ハンクにとつてスピーカー男の正体などどうでもいい。

問題なのは、この交渉が十中八九罫であるということだ。

(狙いは『L I S A—001』で間違いない。Gウイルスとゴーストをネタに手に入れる気だろう。しかし、だとすれば動機は何だ？ アンブレラ所属の研究者が、同じアンブレラの私から『L I S A—001』を奪つて何の意味がある？)

あるとすれば、それはウィリアム・バーキンのような背信行為か。

『L I S A—001』の利用価値は無限大だ。暗殺面においてこれほど秀でた個体はそういない。

バーキンがGウイルスを他組織へ横流ししようと画策したように、少女を使って巨万の富と名声を生む気なのだろう。

ただ、それでも不可解な部分が目立つ。

『L I S A—001』を奪うなら、この研究所を脱出してからでも遅くはない。大前提として、生きていなければ後生の商売など捕らぬ狸の皮算用だ。

サバイバルスキルの無い者が単独で魔窟を抜け出すことは難しい。ハンクに協力を仰ぎ、脱出の糸口を掴むならまだしも、半ば敵対姿勢を取っているのはどういう腹積もりか。

(ゴーストを捕らえた手段も引つ掛かる。奴もU・S・Sの一人、バーキンの襲撃から生還した実力を持つ兵士だ。戦闘能力の無い研究者にあつきり捕まったとは考え難い。……クサいな。何を隠している?)

得体の知れない裏がある。それは一目瞭然で、しかし想像も及ばないナニカだろう。

ほんの少しだが、どこか核心に迫る奇妙な感覚があった。まるでパズルのピースが少しずつ嵌って、絵の形が浮き彫りになっていくかのような感覚だ。

確たる証拠は無い。断言できる要素もない。

ハンクラしからぬ直感的なものだったが、それは名探偵が現場から犯人への軌跡を描いていくものと同じ洞察だ。

これまでの道のりにピースがあった。それがピースだと分かりかけてきた。

そんな、霞を掴んだかのような朧の感覚。

(……とにかく、当面の目的は決まった)

思考をリセット。まずは出来ることから整理していく。

今手元にあるのは、正体不明の男が放った数少ない手掛かりのみだ。

NEST最下層からラクーンシティ外部へ続く秘密の物資搬入口。

その管制室に居ると男は言った。

ならば向かうより他は無い。

それしか道が無いのなら、そこから突破口を切り拓けばいい。

いつものように淡々と。繰り返される日々のように粛々と。

死神は、少女を連れて歩き出す。

——謎の男の正体を暴き、囚われた部下を救い出す。

そして、与えられた任務を果たすために。



(まずい……!! 隊長をここに来させるのは絶対にまずい!!)

いやに明るい部屋の下、黒塗りの椅子に革のベルトで縛り付けられたゴーストは、背中にじつとりと脂汗を滲ませながら、脳神経を焼き切らんばかりにフル回転させていた。

(隊長のことだ、俺のような末端なんぞ簡単に見捨ててくれると思っていたが……クソッ! まさか嬢ちゃんの優しさが裏目に出るなんて。とんだ馬鹿野郎だ俺は、なにあっさり捕まってやがる!!)

焦り。憤り。そして、恐怖。

三色の感情がぐちゃぐちゃに入り乱れる胸を黙らせつつ、視線で穿ち抜くように前方を見た。

背中が見える。NESTの電子系統を統括する管制システムの前

に腰かけ、無数のモニターを悠然と眺める男の背だ。

「……お前、一体何者だ!? 何の意味があつてこんなツ!」

「無論、彼女を取り返すためですとも」

椅子が回転し、男の素顔が露わになる。

黒いインナースーツに身を包んだ、眼鏡をかけた金髪の男だった。枝垂れた前髪。褪せた目つき。浮き出た頬骨。手入れの行き届いていない無精髭……世間一般が想像する、末期研究中毒者の人相だろう。

有り体に言えば平凡で没個性的。専門の研究機関に一人は居そう  
な、ごくごくありふれた研究者。

——そう。この男が目の前で怪物に攫われたはずの眼鏡男でなければ、ただのいちスタツフと言われても何ら疑うことはなかった。

『L I S A | 0 0 1』は……私が作ったと言つても過言ではなくて  
ね」

マイク越しにハンクへ語り掛けていた時とはまるで違う、ねっとり  
とした言葉の粘性。

「入手困難な素材を彼女に提供して、最高の生物兵器を作る一助を担った。であれば、彼女亡き今、『L I S A | 0 0 1』の所有権は私にあつて然るべきでしょう。それを貴方たちが横取りしようとするから、手荒に出たまでのこと。それだけですよ」

当然のように吐き捨てる。被害者はこちらなのだど吐息を零す。

けれど、影に覆われたような暗い男の真相が読めず、ゴーストは困惑に吞まれるのみ。

「……何を言つてやがる? 嬢ちゃんを作つたのは別の科学者だ。彼女以外、開発データに名前なんて存在しなかった」

「でしようね。そもそも秘匿に秘匿を重ねた開発でしたし、私自身直接かかわつたのはほんの一握り……。ですが、リサ・トレヴァーとセルゲイ・ウラジミールの細胞組織を入手し、彼女へ流したのは他でもないこの私なのですよ。ある意味父親と言つても差し支えない」

リサ・トレヴァー。セルゲイ・ウラジミール。

どちらもハンクから開示された開発データにあつた名前だ。特に



U・S・Sであるゴーストにとって、T―ウィルスの完全適合者にしてアンブレラの親衛隊長であるセルゲイ大佐はよく耳にしていた名前だ。

「セルゲイ大佐の細胞を横流しにした……？ それに父親だって？ ふざけたことを抜かすな、本当に何者なんだお前は!! ただの研究職じゃないな!!」

「いいえ、ただの研究職です。諜報員の真似事なんかもしていました。そんなものアンブレラ中にいくらでもいる。貴方たちがバイオハザードを引き起こすその時まで、本当にただのスタッフだったんですよ」

男は立ち上がり、ゆっくりとゴーストに向かって歩き出した。

「専攻は電子工学と生物工学を少々。研究主題はB・O・Wの電子制御について」

カツ、コツ、カツ、コツ。

革靴が地を叩く音が、大きく大きく響いていく。

「趣味はボードゲームに数独。好物は微糖のコーヒーとハンバーガー。心掛けていることは規則正しい睡眠リズム。夢はノーベル賞の受賞、そして生物兵器市場でのブルーオーシャン開拓」

足音と共に気味の悪い影が広がる。

抑揚のない平坦すぎる口調が、ぞわりとする悍ましさを増幅させる。

どす黒い、粘着くような感覚。ゴーストは背筋に霜が蔓延ったかと錯覚した。

「元々アークレイ研究所勤めでしたが、彼女から計画の顛末と協力を呼びかけられて転属しまして。日々デスクワークと実験を繰り返す模範的研究者として腕を振るっておりました。ただそれだけの男です」

鼻と鼻がくつつきそうな至近距離。

視界一杯にうつる顔は、獣のように笑っていた。

「ね？ 米国最大のアンブレラにはありふれた一人でしょう？」

——ああ確かに。この男はただの一般人だ。

何の力も無い、賢いだけの一般人のハズだ。

なのにどうして、こんなにも薄気味悪く、敗北したような気持ちになるのだろうか。

鍛え抜かれた兵士が、<sup>ゴースト</sup>どす黒い悪寒をざわつかせるのだろうか。

「私が彼女に協力したのは『LISA-001』の可能性を信じたからだ。ウィリアム・バーキンを越える発明に未来を視たからだ。『LISA-001』を元手に、タイラントをも凌駕するブランドを立ち上げたかった」

その舌は脈絡も無い言葉を毒気のように紡ぐ。その声は真菌のように心の隙間を蝕み侵す。

魔性とでも言うべき妖しさがあった。ぬめる蛇のように、蠢く蟲のように、人にあつてはならない狂気の片鱗があった。

「何より『LISA-001』は美しい。不細工な筋肉達磨にはない可憐さがある。老いることも朽ちることも無い、無垢で幼気な美しい肢体……求める者は世界中に在りましょう。従者、人形、欲の捌け口——量産すればありとあらゆる用途に使える。兵器如きで終わらせるには勿体ないと思いませんか？ 私自身、彼女のことを欲しくてたまらない」

ある種、ハンクのように人間の枠を飛び越えた者の気配が、この男からも漂っていた。

けれどそれは、ハンクに似ても似つかない邪悪さで。

「……それなのに。あと一歩で私の物になるはずだったのに。お前たちU・S・Sがバイオオハザードを引き起こしてしまった」

ゴーストを虫けらのように見下ろす男。

「運よくアークレイのウイルス漏洩から逃れたと思ったのに……。拳句の果てには、『LISA-001』を懐柔して連れ去ろうとする始末。何から何まで癪に障る狗どもです」

今にも舌打ちしそうに口角を曲げて、憎悪を一面に押し出している。

「言ってることが何ひとつ分からねえ、無茶苦茶だ！　そもそも、開発に関わったからって何故あの子を狙う!?　お前だってアンブレラの

人間だろう！」

「これだから命令に従うだけのペットはいけない。先見の明を持っていない。いいですか、アンブレラはもう終わりなんですよ」

翻り、真つ黒な背中を向ける男。

モニターに映るハンクと少女を眺めながら、男は機械のように清々と続ける。

「ウイルスはラクーンシティ中に蔓延した。ドブネズミを通じて街中に広がった。今や感染者が感染者を生み、動く屍と変異体が往来跋扈する地獄と化している。恐らく、アンブレラは米国を揺すつて証拠隠滅に動くでしょう。あの企業にはそれだけの力がある」

一部のモニターに映る外部と思しき映像には、下水道をよろよろと徘徊する感染者たちの姿があつた。

「……しかし、嚴重なNEESTからほんの僅かなウイルスが漏れ出てしまったように、街から生きて脱出する者は必ず現れる。これだけの事件を引き起こした以上、アンブレラでも完全に揉み消すことは叶わない。少しずつ、少しずつ、根の腐った巨木がゆっくり死に絶えていくように、いずれ倒壊するのは自明の理」

「だからアンブレラを裏切つて、嬢ちゃんだけでも持ち逃げしようつて寸法か！」

「生物兵器市場は既に裏社会に浸透している。アンブレラが倒れても広がった火は止まらない。そこで新たな樹を育むのです。『LISA-001』という優良な種ならそれが出来る」

両手を広げ、天を仰ぐ。

電灯と無数のモニターにライトアップされながら、邪悪で象られたような男は三日月のように口を裂いた。

その瞳に理性は無く、獣の貪欲さと人間の底に溜まったどす黒い闇が融合した、狂気の荒野が支配している。

「貴方たちにはひとつだけ感謝しています。NEESTの機能が停止したお陰で、通常では不可能な実験が山ほど試行できた。怪物を屠ってくれたお陰でサンプルも大量に手に入った。特に冷凍保存された彼女の頭は格好の材料だった！」

べしやり、と。

粘質な塊が、糸を引きながら落下してきた。

熱した鉄板へ水滴を落としたような音が弾ける。床の一部が溶解し、異臭と水蒸気を巻き上げながら悲鳴を上げた。

「彼女も気付かなかった『L— a d a p t e r』の可能性！ タイラントシリーズに用いる電子制御技術！ それらが合わさった私の成果をッ！ ……これから貴方たちへ、存分に披露して差し上げましょう」

天井に。

ナニカが、居た。

(……ああ駄目だ。隊長、駄目だ。来ないでくれ。こいつは、こいつらは、人間が敵う相手じゃねえ……!!)

それは宿を守る番犬のように。それは洞窟に潜む未知の恐怖のよう。うに。

液を滴らせ、唸り声を吐き、しかし溢れる本能を機械に御された、かつて人間だったモノが張り付いていた。

骨の浮き出たトカゲのような、水膨れに覆われた大きな体。人間の面影を残しながらも異様に伸びた細い手足。

鞭を彷彿させる柔軟な首。先端に備わる髪の毛の生えた人の頭。

黄ばんだ瞳は常に小刻みにのたうっている。だらりと垂れた舌の先からは、白濁した泡混じりの液がでろりと滑っていた。

さらに、部屋の隅にはもう一つの影。

分厚い漆黒のトレンチコートで全身を包んだ大男。感情の無い灰色の無貌を湛える最強の生物兵器。

かつて死力を振り絞って溶鉱炉に沈めたT—103、その別個体までもが、まるで置物のように佇んでいるではないか。

コンピューターによる電子制御技術。T—103やネメシスT型に用いられた、高度生物兵器の管理法。

それによって、二つの怪物は男の忠犬と化しているのだ。

「そう言えば、ええ、自己紹介がまだでしたね。感謝を込めて、今こそ名乗り上げねばなるまい」

再び振り返る。

ゴーストを見る。

地獄で歪んだ狂気と精錬された知性をもって怪物を従える科学者は、舞台を圧する千両役者のように、心の底から楽しそうに歯を剥いて。

「私はハンス。ハンス・ウエスカー。この名こそ、新たなアンブレラの創造主と知れ」

## 舌禍と謀略の男

老人は夢を視た。

神として君臨する夢を視た。

思うが儘に万象を観測する叡智があった。

自由気ままに世を支配下に置く力があった。

国を動かすほどの権があった。

誰もが知る名門貴族。世界に名を馳せた大富豪。アメリカ合衆国最大企業を牛耳る頂点。

名をオズウィル・E・スペンサー。製薬会社アンブレラの総帥にして、世界史に名を遺す稀代の大悪党。

彼には一抹の野望があった。晩年まで燃え尽きることの無かった、恒星のような夢があった。

ウィルスによる世界の再編纂。至高の遺伝子の選抜、新たな文明の構築。

その頂きに君臨し、神として降り立つ前人未到大偉業である。

スペンサーは社会の表と裏を牛耳りながら、数多の策を蜘蛛の巣のように張り巡らせた。

ウィルスを使い、制御の難しい怪物たちを生み出した。始祖から派生した様々なウィルスで多くの混沌をもたらした。

全ては悪辣なる選民のために。全ては人類の歴史に幕を下ろすために。全ては新たな時代の創造主となるために。

そんな唾棄すべき悪の一端に、真に優秀な人間を創り出すという、極秘裏の計画が存在した。

世界中から才能あふれる子供たちを掻き集め、最高の頭脳と最強の肉体を持った従順な奴隷を生み出す筋書き。

その名を、ウエスカー計画と呼んだ。

苛烈にして残酷。無情にして無二の英才教育を施され、間引きの末に選ばれた13人のウエスカーたち。

そんな13人の1番目。始まりのウエスカーこそが、ハンス・ウエスカーだった。

しかし、彼にはこれと言って特筆すべきものがまるで無かった。アルバートのような超人的遺伝子の持ち主でもなく、アレックスのような卓越した頭脳の持ち主でもない。

ただ優秀なだけの没个性的凡人。それが相応しい評価だったし、スペンサーも特に意識はしていなかった。

けれど、彼には誰にも知られていない秘密が一つだけ。

ハンスが『ウエスカー』足りえる真の素養。普遍ながらウエスカーの名を授けられるに至った理由がある。

それは、他者の心を操る術に異常なほど長けていることだった。

彼は悪い人間ではない。彼は真面目な人間だ。彼は信用できる男に見える。

人は口を揃えて彼を評する。細部は異なれど、善き人であると帰結する。

これがハンス・ウエスカーの才能だった。人畜無害の皮を被れる才能だったのだ。

心理の掌握とは催眠でも洗脳でもない。他人の心に最も有益なポジションを確立することなのだ。

だから誰しも彼を悪く言わない。誰も彼を疑わない。誰でも彼を受け入れる。

ハンスはそう振舞える。他者の心の中で、己の立ち位置を望むがままに操縦できる。

ゆえにこそ、彼はどうしようもなく選抜された逸材だった。

『おお、それは素晴らしいプランですね！ 実現した暁にはアンブレラで確固たる地位を築くことが出来るでしょう。バーキン博士を越えるのも夢ではありません、ぜひとも協力させていただきたい！』  
『え、無報酬は流石に悪い？ 何をおっしゃる、養成所で苦楽を共にした貴女と私の仲でしょう。あ、でも諸々の必要経費だけはいただきますからね？』

『対価と合わない、ですか。ううむ、そこまで言うなら……では、完成したデータの一部を拝借しても？ 遺伝子マップだけで構いません

ので』

『ええ、はい。大丈夫です。我々なら絶対に成功できます。あのバーキン博士にだつて負けませんとも』

魔術のような言葉遣い。心の内に滑り込む天性の懐柔能力。僅かな精神の機微も読み解く観察眼。

それが彼の——『アルバート』になれず、『アレックス』にも及ばない、ハンス・ウエスカ―最大の武器にして、最悪の異常性なのだ。



「——以上が対策だ。把握したか？」

「うん、わかった」

「今回の肝はお前だ、『L I S A—001』。絶対に忘れるな」  
「まかせて」

「では、突撃前に最後の確認だ」

閑散とした空気と冷たい金属が支配する、NEST最下層ターンテーブル。

その管制室前にて、ハンクたちは息を殺しながらブリーフィングに勤しんでいた。

「中は十中八九罨が仕掛けてある。きつと予想だにしない攻撃を受けらるだろう。だが何が待ち受けていようと、決して冷静さを忘れるな。常に頭を冷やせ。未曾有にも対処できるよう構えておけ」

「うん」

「合図は瞬き三度だ。いいな」

「だいじょうぶ」

「よし。——いくぞ」

瞬時に臨戦態勢に移行。ハンクは渾身の力でドアを蹴破り、刹那に銃口で室内をなぞった。

想定していた暗器の類は襲ってこない。化け物の息吹もない。

ピアノ線による爆弾の誘爆。タレットを使った自動迎撃システム。放し飼いにされた怪物との遭遇。想定のひとつも見当たらず、拍



子抜けするほど平穩だった。

不可解な部分があるとすれば、壁や床が妙に濡れているくらいか。  
「あつー・はんく、あそこー！」

奥のガラスで隔たれた先に、視線を独り占めする影がひとつ。

ゴーストだ。椅子に縛り付けられている。没収されたのか、装備の類を一切身に着けていない。

駆け寄ろうとする少女。それをハンクが手で制した。

いわずもがな、部屋の影から匂う気配を感じ取ったからだ。

眼鏡をかけた黒いインナーสูツの男が、無表情で壁に凭れかかっていた。

「待ってましたよ、Mr・ハンク。そしてお久しぶりですね、リサ。随分と大きくなったものです」

男が壁からゆらりと離れ、この地獄に相応しくないさっぱりとした微笑みを電灯の下に見せた瞬間、少女の空気が変質した。

「ひッ」

唇を震わせ、顔を蒼くして、震える小鹿のように後ずさりながら、1センチでも男から離れようとしている。

それは怯えだった。年相応の子供のような怯えだった。

「あ、あ、あ」

「どうしました？ 随分と顔色が悪いようで」

「うあ、あつ、あなた、あなたは」

瞳は恐怖と嫌悪の色で染まっている。柔和で人当たりの良さそうな男に向けられるべき眼差しではなかった。

当然だ。少女の目に映っているのは、華のような笑顔の男ではない。  
い。

もつと、もつと、吐き気を催すくらい悍ましいナニカ。好青年の皮を被った、唾棄すべき獣の姿なのだ。

「いっ、いや」

「おやおや、蠟燭みたいに蒼褪めて、今にも粗相しそうなくらい震え上がって。かつては動じる素振りすら見せなかった君らしくもない」

「いやっ、いや、いやいやいやあつー！ こないでっ、こないでっー！」

「ははははは。まるでブギーマンに出くわした子供だ。まったく面白い進化を遂げたもんです」

ケラケラ嗤う男。恐怖のあまり、ハンクの後ろへ隠れてしまう少女。

ガチガチと歯が鳴っていた。今にも嘔吐しそうなくらい血の気を引かせてしまっていた。

あの暴君にすら果敢に挑んだ少女が、たった一人の人間に臆してしまっている異常事態。流石のハンクも怪訝を覚える。

——因果は、過去の記憶に埋まっていた。

少女にはヒトの心が読める。特殊な生体電気の乱れを感知し、何を考えているのか観測することが出来る。

母が協力者だと男を紹介し、少女に引き合わせた時のことだった。

少女は、男の底に直視し難い泥を視た。

陰謀。獣欲。悪意。敵意。仮初の親愛。ガワだけの笑顔。

すべて。すべて。すべてが邪悪な泥を視た。

「ですが、そんなに怖がらなくなつていいじゃありませんか。ほら、私はただの人間ですよ。怪物じゃない。武器も持っていない。怖がる必要なんてどこにもないのに」

心の内に滑り込んでくるような声。敵だと分かっけてもうつかり心を許してしまいそうな魔性が男にはあつた。

だがしかし、目の前にいるのは少女と死神だ。懐柔は意味を成さず、ハンクは毅然と突き放した。

「ゴーストを出せ」

「まあまあ、そう焦らずとも。時間にはまだ余裕がありましたように」

「二度も言わせるな。要求に応えろ」

「まったく、気の早い御仁だ。おまけに堅い。物事には順序があることを理解してないようだ」

仕方ない、いいでしょう——男は凍結した笑顔のまま言った。

「とっておきのつもりでしたが、予定変更だ。ここでお披露目としましょうか」

指を弾く。乾いた音が木霊する。

須臾に鼓動が応え、暗闇の奥からナニカが這い寄る気配が漂ってきた。

肉を引き摺るような音。ズシン、ズシンと重々しい足音。齒の隙間を抜けていくかのような、風を切る呼吸音。

全て天井から伝わってくる音だった。

「……………え？」

ソレが一体何かを理解するのに、少女は数秒を必要とした。

仕方ない。無理もない。こればかりはどうしようもない。

だって、この手で首を斬り落としたのだ。

確実に命を絶った。人間を辞めた惨すぎる生に、人としての閉幕を与えたのだ。

ああこんなの、どうしようもないじゃないか。

かつて母だったモノが、きめ細かな泡を無制限に吐き出しながら再び目の前に現れて、平静でいられる子供がどこにいる。

「ま、ま？ どうして？」

胸に杭を打たれたかと思った。その穴から魂がこぼれたかと錯覚した。

締め付けられるような痛みが心臓を襲う。濁流のような混乱に脳の隅まで吞まれていく。

干上がった喉から、ぽつりと落ちる絶望の言葉。

「そんな、そんなあつ」

ハンクから離れ、ヨロヨロと前に歩き出す少女。

生気の抜けた虚ろな瞳で茫然自失に母を視ながら、今にも泣きだしそうな表情を浮かべた。

感情の臨界を飛び越えていた。生じた心の波を処理しきれず、脳髓を真っ白に塗り潰された表情だった。

「君が刎ねた彼女の首を繋ぎ直したんです」

足が止まった。

信じられないものを見るようにハンスを見た。

「実に保存状態が良くてね。おかげですんなり回復しましたよ。いやはや、始祖系統ウィルスの自己再生能力には驚かされる」

「さておき、感動の再会にはなつたでしょうか？」

「ツツ!!」

赤熱した刃が腕から飛び出す。

絶望の灰に覆われていた顔が、羅刹の如く歪んでいく。

母の死がこれ以上なく凌辱された。

ようやく訪れた眠りを徹底的に穢された。

それは、墓を暴かれたに等しい蛮行で。

「やつとままもねむれたのに……!! それなのにツ……!!」

十分だ。優しい少女が、紅蓮の怒りに身を任せるには十分過ぎた。

目頭から灼熱を伝わせて。震える唇を必死に御して。

無尽蔵の怒りを、業火の如く焚き上げる。

「闇雲に突っ込むな。挑発に乗っては思う壺だ」

「っ!? でもっ!!」

言葉が肩を抑えたように感じた。

少女は髪を乱しながら振り返る。今にも爆発せんばかりの表情で、

これ以上は辛抱出来ないと告げるように。

「頭を冷やせ。あの男が何故無防備に姿を現したか、何故お前を煽っ

ているのか、もう一度よく考えろ。そして思い出せ」

「う、ううううう……!!」

「冷たい人だ。愛する親への冒瀆を子が看過できるわけがないのに、

その義憤を止めようなど。どうやら心が氷で出来ているらしい」

「見え透いた妄言に興味は無い。質問に答えろ、ゴーストは無事か？」

「彼なら奥に。ご安心を、健康です」

親指を背後に向け、椅子に拘束され項垂れているゴーストを示すハ

ンス。

「どうされます？ 取引に応じるなら彼を解放しますが」

嘘だ。それは少女にも理解できた。

だがハンクには分かっている。嘘だと思わせることすら狙いな

だ。

「端から取引する気など皆無だろう。そのために異形を見せびらかし

たか」

「ほう？」

「餌を使っておびき寄せ、獲物を挑発し喰いつかせる。その異形は疑似餌だ」

——『LISA-001』は心を持った兵器だ。それも深い慈悲の持ち主だ。

ハンスはそれを知っている。ゆえに彼は打って出た。安易に少女を確保する作戦に打って出た。

ゴーストを使って誘い込み、母の死をわざと愚弄して冷静さを欠かせ、猪突猛進してきたところを捕らえる算段だったのだ。

見破られたにも関わらず、ハンスは少し嬉しそうに口元を歪めた。

「噂に違わず鋭い御仁だ。流石は死神。しかしその様子だと、私の切り札が彼女だけではないことも既に見抜いているらしい」

「……」

「丸腰の私を撃たないのはそういうことでしょうか？ このちっぽけな私を警戒しているんだ」

「過小評価はしない」

ナイフのような断定だった。

死神の瞳は真っ直ぐハンスを捉えている。そこに油断や慢心はない。巨大な獣の隙を伺う熟練狩人のような、慎重で凍てつく殺気だけを滲ませていた。

「その女は変異後もある程度の知性を保っていた。それを御した絡繰り、十分警戒に値する」

「つまらない手品ですよ。T-103やネメシスT型と同じトリックではない」

しかし本来、B・O・Wは制御の効かない怪物だ。

例えタイラントシリーズだろうが、ひとつの命令を完遂させるだけでも入念な準備を必要とする。

この男はそれをたった一人でやってのけた。データにも存在しない完全新種の怪物を、ほんの数日で掌握してみせたのだ。

エンジニアは時として兵士よりも凶悪だ。暴れ馬な生物兵器を正

しく兵器として運用出来るのなら、これほどの脅威も存在しない。

仮にもう一匹タイラントシリーズがいるとして、少女とハンクだけで彼女と暴君を相手取るのは骨が折れる。

ハンクは常に確実に堅実な道を選ぶ。イチかバチかで命を投げ出す博打染みた選択はとらない。

だから、安易な攻撃は仕掛けない。

きっとハンクはそれを見越して丸腰なのだ。少女もしつかりと理解し、生唾を飲んだ。

「さておき。随分脱線しましたが、本題に戻りましょうか」

手を叩き一拍子。乾いた音が空を薙いだ。

『L I S A — 0 0 1』、こちらへ来なさい。そうすればゴーストくんを返しましょう」

「……！」

「Mr. ハンクは私に取引をする気が無いと言いましたが、それはまったくの濡れ衣です。もちろんありますとも。手荒な真似をしてしまったのは謝ります」

単純明快だが、簡単に割り切れるものではない悪魔の言葉。

男の言葉は嘘塗れだと少女は断ずる。心を読むまでもない。最初からゴーストを返す気なんて無いのだ。

けれど、ハンクは少女が応じると確信している。監視カメラで観察し、少女がゴーストを見捨てられない性分だと知っているから。

例え取引に応じてハンクの下に行ったとしても、ゴーストが助かる保証はひとつもない。どころか、1人になったハンクを更なる危険に叩き落すことになる。

では応じなかったら？ 拒絶を示せばどうなるか？

言うまでもない。男はきっとゴーストを殺す。傍の怪物に命令を下して、椅子に縛り付けたままゴーストを貪り食わすだろう。

「……！」

少女は一度だけ、後ろのハンクに目を遣って。

瞬きを三度。

決意と共に前を向いた。

「いかない」

「はい？」

「あなたのもとには、いかない！」

考えて。考えて。考えて。

少女が出した結論は、強い拒絶の言葉だった。

「ほう？　これは計算外。まさか彼をこうもあつさり見捨てるとは」  
「ちがう、みすててない。だって、あなたにごーすとはころせないもん」

少女は考えた。ハンクの言いつけ通り、冷えた脳を使って考えた。ふと思ったのだ。この男はどうしてこんなに余裕があるのだろうか。

戦力的アドバンテージはある。強力な駒が複数いるのだ。たった二人の少女とハンクは分が悪い。

ただ、それだけの戦力差で安心できるかと聞かれれば、首を傾げざるを得ないのだ。

こつちにはハンクがいる。ズバ抜けた戦闘のプロがいる。

緻密で大胆な戦略を即時展開し、瀕死だろうが火力不足だろうが、圧倒的ハンデをもともせず跳ね除けて、数多の強敵を屠り続けてきた死神がいる。

そんな死神が、生物兵器として最高のスペックを持つ少女を操るのだ。

的確な指示は駒の能力を限界以上に引き出せる。少女の能力を十全に活かして共闘すれば、この修羅場を潜り抜けることだって不可能ではない。

無論、それはあの男だって承知のはず。

理解していて、なお余裕の表情を崩さないのは虚構で象ったハツタリではない。

確信があるのだ。強靱な兵器よりも信頼できる、少女の優しさを逆手に取った絶対の盾を信じているのだ。

ゴーストが手元に居る以上、少女たちが攻勢に回ることはないのだと。

単純明快。ゴーストが死んでしまえば盾は消える。

故に、ハンスにゴーストは殺せない。

「だから、たたかう」

ハンスに抱き続けてきた恐怖を踏み潰し、幼き少女は一步前へ。気高さを取り戻した瞳を据えて、灼熱の爪を振りかざす。

「あなたをたおす。ゴーストをたすける！」

「……はあ。なるほどこいつは予想外。これも結局、あなたの母親はどうしようもない無能だったせいか」

心底鬱陶しそうに吐息をこぼし、ハンスは前髪をかき上げながら口走った。

少女の表情筋が凍結する。爪の赤熱が引っ込んでいく。

脈絡も無く吐き出された母への侮辱が、胸を抉るように突き抜けていった。

「兵器に心は必要無い。当たり前の常識です。なのにあの女は心を与えた。情を持って君と接してしまったせいだ。いつも通り非情に振舞えばよかったものを、まさかこんな面倒な成長を促すとは」

気怠そうに煙草を取り出し、手慣れた仕草で火を着ける。

沁みる紫煙が、侮辱と共に揺蕩い踊る。

「いやはや、流石としか言いようがない。名誉に駆られて自ら腹を裂き、取り出した子宮で兵器を生んだかと思えば、どうしようもない失敗作を作るとは。狂気充満するアンブレラの中でも、輪をかけて滑稽な女だ」

「だまって」

「何を怒るのです？ 子の責任は親にある。不出来な君の評価は当然彼女へ帰ってくるものだ。親にも科学者にもなれなかった、能無しの半端者にね」

「ちがう！ ままはそんなんじや」

「いいや違わない。己の力を過信して功を成せず、アンブレラの癖に真人間になれると思いがあって母にも成れず、行きついた先は醜い化け物。輝かしいところなんて一つも無い、生ごみに集るゴキブリにも劣る惨めな人生でしょう？ コレのどこに価値がありますか!？」



「ッ!!」

「君も可哀想に。こんな掃き溜めの女から実の子として見られていただなんて。子は親を選べぬものですが、こんな唾を吐きかけてもツリが来るってもんだ」

煙草をぐりぐりと押し付けた。

隣に控える母の顔を、まるで灰皿代わりとするように。

ブチン、と。何かが切れる音がした。

「あつ……あなたなんかッ……!!」

背後から少女の名を叫ぶハンクの声。

しかし既に少女の脳は、爪よりも赤熱した怒りに支配されていた。

「あなたなんかッ!! ままをばかにするなアああああああああああ  
あああああああああああッッッッ  
——  
!!」

童は疾風迅雷と化す。小柄な体躯が風を切り、紅蓮の軌跡を闇に描きながら砲弾の如く爆走した。

狙うはハンスの首筋ただひとつ。だが必殺の一刀は、傍に控えていた母親の手で防がれてしまう。

腐肉で肉付けされた人形のような手に、灼熱の爪が突き刺さって。

「ぶッ!!」

瞬間、腕から突如として小さな火柱が噴き上がった。皮膚を焼く灼熱を前に反射的に怯んでしまう。

まるで漏れ出たガスに火を着けたかのような突然の発火。少女の脳は真っ白に塗り潰される。

「親の首を切った時、どんな気分でしたか?」

隙に這い寄り、ぬるりと唾う男の声。

爪を引き抜こうとした少女の動きが、時を止めたように停止した。

「弔い? 責任感? 後悔? 覚悟? ……色々な感情があつたでしょう。けどね、そんなの何の意味も無いんですよ。君がどれだけ大義名分を掲げて、どれだけ母の死を美しく受け止めたって、そこにはただひとつだけの事実が存在する。『君が親を殺した』という事実だ

「けが」

言葉は、メスを入れられるのと似ていた。

肉を裂き、激痛など意に介さず、体の奥底まで到達してしまうかのような、凍り付くほどの鋭利な舌剣。

「怪物になってしまったから人間としての尊厳のために殺してあげよう！ うん、素晴らしい心だ。なんて美しい話だろう。……それで？ 君はどう思ったんだい？ まさか美談で終わるなんて思っちゃいないだろうね」

「――」

「君は殺したんだ。私が辱めればあっさり血が上ってしまいうくらい大切な、たった一人の肉親を殺したんだよ。義憤にかられちゃあいるが、君は間違いなく自分の母親を葬ったんだ」

「い、あ」

「聞かせてくれ、君の声で。親の骨肉をその爪でぐちゃぐちゃにした時の気分はどうだった？」

「わた、し、は」

「それで何も感じなかったら、ここで私を殺せたらうにね」

パスツと、軽く空気を押したような音がした。

少女の胸に針が突き刺さっていた。針の尾には円柱状の物体が付属されている。

◆ ハンスの手には、いつの間にか小さな拳銃が握られていた。

「B・O・Wの代謝機能は凄まじい。それを無視するほどの麻酔を投与するには超至近距離まで近づく必要があった。最後の最後に釣れてくれて安心しましたよ」

崩れ落ちる小さな体。力を入れようと必死に藻掻けど、毒餌を食った虫のように手足に力が入らない。

遂には、パワーで劣るはずのハンスに軽々担がれてしまう。

「つと、結構重いな。さあて、残すは貴方ただ一人か」

「……」

ハンクは微動だにしなかった。

何時でも引ける引き金に指をかけず、ただただ銃口だけをハンクに向けて、草陰から獲物を狙うように機を伺い続けている。

「流石に抵抗してくるかと思いましたが、当てが外れましたね」

「お前が特殊耐火装備など身に着けていなければ撃っていた」

「ははは、素晴らしい！ 貴方の洞察力には目を見張るものがある」

男を覆う漆黒のインナースーツは、普段着にカムフラージュされた耐火性に優れる特殊な衣類だ。

防弾ベストではなく、何故そんな仰々しい代物を身に着けているのか？

明快だ。燃えないために他ならない。

部屋に入った瞬間ハンクが感じた違和感。それは脅威が少なすぎる。

用意周到で小賢しいハンクの性格上、無策でハンクを相手取るのはありえない。凶暴なペットを配置するだけでは心もとない。

だから攻撃の手を根元から封殺していた。部屋一面に可燃性の液体をばら撒いていたのだ。

「貴方に氷漬けにされた彼女、どうやら進化を果たしたようで。極低温でも機能低下を起こさぬよう、体液に不凍性が見られるようになったですよ。おまけに副次効果として引火しやすいと来た。先のように、リサの爪に対抗するためでしょうかね？ とにかくそいつを利用させて頂きました」

——ほんの少し未来の舞台で、『T—Veronica』というウイルスが現れる。

それに適合した人間は、空気に触れただけで業火と化すほどの強力な発火能力を血に宿す。

彼女を蝕んだウイルスは『T—Veronica』ではない。しかし、それはモグラとケラの収斂進化のように、体液にガソリンが如き引火性を発露させていた。

「撃てば火の海と私の駒たちが一斉に貴方を襲う。撃たねばリサと部下を手放す。さて、どうします？」

「……」

ハンクの答えは迅速だった。

逃げたのだ。脇目もふらず一目散に、脱兎の如く逃げ出した。

「なるほど、逃走ですか。いや、これは戦略的撤退と言い換えるべきかな？」

ハンスとハンクの過去に直接的な面識はない。監視カメラで一方的に知ってはいたが、出会ったのはこれが初めてだ。

けれど、ハンスはまるで彼が十数年来の親友であるかのように理解していた。

アレは諦めではない。圧倒的に不利な状況を覆すため、歴戦の兵士が選び出した道筋に他ならない。

「狙いは奇襲か準備か。とにかく、このまま野放しにしておく理由は無い。貴方と同様、私も死神を過小評価などしませんとも」

指を鳴らす。

それは起爆のシグナルのように、彼女と影に潜んでいたT-103を起動させた。

「奴を追え。追って息の根を止めるのです。どこまでも追い詰めて、必ず五臓六腑を食い千切ってきなさい」

命令を受諾した2頭の獣が、地獄の魔物が如き唸り声を轟かす。

巨体を揺らし、ハンクの消えた通路へ進軍する。重々しい足音を引き連れながら、大きな影は消えていった。

「ヤッ」

ハンスもまた踵を返す。

腕に抱く意識無き少女の顔を一望して、軽やかに靴音を奏でながら去っていった。

——ハンスは見落としに気付かなかった。灯台の下に潜む影の真意を見抜けなかった。

万全の布石をもって勝利を掴んだと確信し、塵芥程度の違和を見過ごしてしまった。

そもそも、どうして死神は少女の暴走を止めなかったのか？

（フランBは上々。上手く感情的に振舞えたな。後は作戦通りに行け、『LISA—OOI』）

答えがあるなら、それはたったのひとつだけ。

用意周到で、狡猾で、目的のためならば手段を選ばない人間は、何もハンス・ウエスカーだけではないということだ。

喰らえよ血肉、理性を叫べ

（『L I S A—001』は前提として子供だ）

暗い通路を走り抜け、物陰に潜んだハンクは残弾を素早く確かめた。

依然、追手の気配はある。だがまだ近くまで来ていない。少しばかりの猶予はあるだろう。

立て直しのチャンスだ。手を抜かず、念入りに武器も調整する。

（子供の感情を無理やり抑えつけるのは限界がある。ましてや今度の相手は天敵に等しい。感情の決壊は目に見えていた）

だから、あえてハンクは『L I S A—001』に指示していた。我慢が利かなくなつた時は存分に暴れても良いと。

代わりに合図を教えた。瞬き三度が限界の合図。もう少しでゆとりが消え、プランAからBへの変更を訴えかける合図だった。

（あの男は『L I S A—001』を殺さない。ゴーストも殺せない。故に、奴へ『L I S A—001』が渡ること自体は些細な問題だ）

現状、ハンクの方が戦力的に大きく上回っていた。あの場で乱戦に持ち込んだとして、よくて相打ちだっただろう。

それでは駄目だ。それは紛れもない敗北だ。たとえ遠回りだろうが、確実に勝つための道を歩まねばならない。

（『L I S A—001』の薬剤耐性の高さ、強靱な代謝能力はデータで確認済みだ。しかし、男はデータを見ていない。見ているならパスワードは解除されていたはずだ。データは未開封のままだった。故にパスワードを必要とした。つまり、奴は『L I S A—001』の詳細なステータスを知らない）

『L I S A—001』はB・O・Wだ。それも選りすぐりの遺伝子を合わせて造られたサラブレッドである。

強靱な肝機能は、例えば並のB・O・Wを昏倒させるほどの麻酔だろうと即座に代謝してしまう。

つけ入るのはそこだ。『L I S A—001』を無傷で捕獲するなら麻酔を使うと踏んだハンクは、『L I S A—001』をわざと懐に潜り

込ませ、ゴースト救出作戦に打って出たのである。

（奴が逃走するとは考え難い。私の生還が、アンブレラへ謀反者の顔を知らせることに直結するからだ。あの用心深さ、私を確実に殺したと判断するまで撤退しないだろう）

故に、この機がハンスを仕留める絶好の機会でもある。

一言で表すならトロイの木馬。外ではなく中から奇襲をかけ、戦力差を度外視してひっくり返さんと試みた。

『LISA—001』の能力は信頼に値する。これまでの修羅場は、奴をその領域まで成長させた。知識も与えた。拘束も自力で抜け出せるはずだ）

もはや、『LISA—001』は命令を聞くだけの道具ではない。

思考し、対策を企て、それを実行に移せる知性を得た。これまでの戦いは、間違いなく彼女を強固に成長させたのだ。

（懸念は冷凍装置だが、あの時全て損壊している。壊れた機械をたった一人で修理する時間など無い。スペアがあったとしても、『LISA—001』の性質上、冷凍はほぼ無意味だろう）

無謀ではない。勝ちの目があるからこそ、敵に少女を明け渡した。

今の『LISA—001』なら、間違いなくゴーストを救出できる。（さて、こつちも仕事を片付けねばならんか）

背後から近づいてくる、巨影の足音。

T—103型が一体と、『LISA—001』の母。どちらも強力な生物兵器で、今まで一度たりとも単身撃破したことはない。

そんな怪物が、明確な敵意と殺意を持ってハンクを血眼に探している。並の人間なら発狂してもおかしくない死の鬼こつこだ。

無論、ハンクの心に波風ひとつ立ちほしない。

（手持ちの火器で殺すのは不可能。あの男が監視カメラで捕捉しているだろうから、撒くのも至難を極めるか）

かといって、ひとつひとつ監視カメラを潰していくのは弾の無駄使いだ。

脅威は追手だけではない。リッカーや感染者だって、未だNESTにうようよ存在する。

ならば、どうする？

(トランプだ。じわじわ追い詰め、弱ったところを叩く)

ハンス・ウエスカーへ意趣返しをするように、死神は抹殺計画を企てていく。

やるべき事は決まった。後は行動し、実現を果たすのみ。

ハンクは物陰から飛び出すと、夜闇を裂く無音の梟のように消えていく。

次の瞬間。前兆なく吹っ飛んできた瓦礫の雪崩に、ハンクは一瞬にして呑み込まれた。



『の——には——■■■■の血液——』

『■■投与——覚醒——間か』

『進化——結合——にて——無し——■■■■——』

『L— a d a p t e r   t y p e 4』

「っ」

ぐわんぐわんと頭蓋が揺れる。頭が鐘にでもなったような心地だった。

明滅する視界を正そうと瞬きを繰り返し、少女はしかめっ面を浮かべる。

(きもちわるい。あたま、ぐらぐらする)

気を紛らわそうと、思考を転換する。

自分は何故眠っていた？ ——芥の疑問から芋づる式に、意識を失う直前の記憶を引っ張り出す。

(……まま)

思い出した。



思い出してしまったと言うべきか。

ハンスの侮辱が許せなくて。沸騰していく頭を抑えきれなくて。少女は立ち向かい、捕まった。死神が企てた筋書き通りに。

(これでいいんだよね？ はんく)

上体を起こす。不意に、ジャラジャラと金属音がした。

体が上がらない。何かに身動きを邪魔されている。

口元にも違和感があった。自分の呼吸音が大きく聴こえるのだ。

酸素マスクを嵌められていると気付くのに、数秒も必要とした。

「うっ…なに、これ」

意識がハッキリしないせいか、手首に金属光沢を放つ蛇が絡みついているように見える。

鎖だ。猛獣の首輪に使われているような大仰な鎖で拘束されていた。

「どいっ」

見慣れない天井。やけに眩しい蛍光灯が網膜へ強く自己主張してくる。

直視するに堪えなくて、少女は周囲をキョロキョロと見渡した。

清潔感のある白い部屋だ。ベッドの上にいるらしい。

傍には手術台があった。上には金属のトレイと無数の注射器やメス、採血管が乱雑に散らばっている。

「……！」

やけに肌寒いと思ったら、衣服の類を何一つ身に着けていなかった。身ぐるみを剥がされたのだ。

左手にも違和感。見れば、腕の血管から血を盗むために真っ赤な管が伸びていた。

「ふっ！」

点滴を改造した採血針を引き抜こうとするが、拘束されているせいで右腕が届かない。

虚しい抵抗がしばらく続く。

「うーっ！ くっ、んん——っ!!」

藻掻く。足掻く。赤熱した爪を伸ばし、鎖を焼き切ろうと試してみ

る。

無理だ。長さを計算されてあるのか、四肢に絡みつく鎖のせいで満  
足に力が入らない。

「はあつ、はあつ、ふう。……………いつかい、しんこきゅー」

言い聞かせ、深く息を吸って吐いた。

冷静さを欠けば更に事態は悪化すると、ハンクから学んでいる。

(あのひとは、ちかくにいない)

ハンスの気配は生体感知に引っ掛かっていない。匂いも足音もし  
ない。

脱走のチャンスだ。しかし時間の問題でもあった。

(わたしに『ますい』はきかないって、はんくいつてた。ままの『でー  
た』にかいてたつて。そしてたぶん、あのひとはきづいてない)

『LISA-001』の代謝機能は凄まじいの一言に尽きる。特殊  
な組織によって電気を生み出せる少女は、細胞の活性レベルがB・  
O・Wの中でも頭一つ抜けている。

ハンスから大型の猛獣すら昏倒させるほどの薬量を撃ち込まれた  
はずだが、それをたった15分も経たずに解毒しきっていた。流石の  
ハンスも予想外だったことだろう。

(う。どうやってはげそう?)

目下の問題は、この頑強すぎる手錠だ。

爪も届かず、無暗に暴れば物音でハンスに気付かれる。

かといって、モタつけばハンスが戻ってくるかもしれない。早急に  
対策せねばならないのは自明の理だ。

(……………びりびり)

細胞を活性化させ、電気を生む。

鉄の骨身に稲妻を流す。電流は磁力を生み、手の届かぬ場まで射程  
距離を引き延ばした。

初めはやたらめたら鉄を引き寄せるだけだったこの力も、今では随  
分と加減が利くようになってる。

金属のトレーから、小さな針金を奪取することだって造作も――  
「！」

ガシャンツ!! とトレーが床へと墜落し、凄まじい金切り声を爆発させた。

冬の滝のような冷たい汗が背を濡らす。しまったと血の気を引かせていく。

(どうしよう、やだ、やだ、あのひとがくる……!)

少女の鋭敏な五感は、こちらへ近づいてくる人間の気配を感じ取っていた。

遠くから足音が聞こえる。まだ距離はあるものの、あと2分もしないうちにここまでやってくる。

意識があるとバレたらお終いだ。拘束を強化され、二度と脱出することは叶わない。

(ばれちゃだめ、ばれちゃだめ!)

瞼を閉じ、呼吸を整える。

力を抜いて自然体を。手に入れた針金は、口の中に放り込んで隠した。

――

痛いほどに鼓動が五月蠅い。のた打ち回る心臓に、胸を内側から喰い破られてしまいそうだ。

血潮の音が鮮明に聴こえる。それを掻き消すくらい、足音がだんだん大きくなっていく。

心臓と同じリズムの電子音が、どこか不気味で恐ろしい。

(……?)

薄目を開く。音源へと視線を遣った。

体中のパットやコードの終点にモニターが見えた。そこから音が聞こえている。

見たことがある。母が時々少女に使っていたものだ。心電図――心臓や血の様子を視るための機械だったか。

(あれ? おきたとき、ぴっぴっぴっぴってしてたっけ?)

もしかして、と脳裏に芽吹く不安の種。

目覚めた直後の電子音は、もっと間隔が長かったはずだ。少なくともこんなに早くはなかった。

脊髄が冷える。産毛が一斉に逆立ってくる。

例え寝たフリでやり過ごせても、心電図で薬が切れたとバレてしま  
うかもしれない。

火を着けた爆弾を埋め込まれたかのような心地だった。焦れば焦  
るほど心音は強まって、心電図が望まぬ数値を叩き出していく。

(どうしよう、どうすれば)

考えて。集中して。感覚と思考を研ぎ澄ませて。

(……これ、びりびりでうごいてる?)

生体電気を感じするほどの、人を越えたセンサーを持つ少女だから  
理解したと言うべきか。自身を巡る微弱な電気と同じリズムで、モニ  
ターが動作していると勘付いた。

だったら、ほんの少し電気を弄れば、

「お目覚めかな」

わずか一呼吸ばかりの僅差で、ハンスが舞い戻ってきた。

あとほんの少しでも判断が遅れていたら——少女は心臓を早鐘の  
ように鳴らしながらも、人形のように力を抜いた。

「……? 音がしたと思ったんだが」

ハンスは訝しみ、顎に手を当てながらその場にとどまる。

弱々しく電子音を奏でる心電図。微動だにしない『L I S A—00  
1』。

「脈は弱いまま。薬はまだ残っているか。……ネズミの仕業かな?」

床に落ちたトレイと医療器具を拾い、丁寧に戻していくハンス。

「なああんでね。寝たフリなんて、随分面白い真似をするようになっ  
たじゃないか、リサあ」

血が凍った。

心臓が痛いくらい鳴動する。血が逆流して血管が弾けそうになっ  
た。

粘着く恐怖がねつとりと五臓六腑に絡みつき、背骨をくすぐってく  
るかのよう。

(がまん、がまん、がまん……!)

それでも感情は表に出さない。動揺を見せたらそこで負けだ。ハ

ンスのブラフだと言い聞かせた。

心の中で震える子供のように祈りながら、少女はひたすら耐え続ける。

「…………ふむ」

(ひッ!?)

柔肌を突如這いまわる、身の毛のよだつほど悍ましい感触。

ツ——つと、ハンスの人差し指が、少女の腹を弄り始めたのだ。

赤子を撫でるようなソフトタッチで、ゆっくり、ゆっくりと、ヘソから胸を目指し、なぞりながら登ってくる。

(やだ、やだやだやだ、きもちわるい、きもちわるい、こわい、こわい、やだ、やだ、やだ、やだ、やだ……!)

堪らず悲鳴をぶちまけてしまいそうになった。

駄目だ。喉元までせり上がる声を、必死に必死に押し殺す。

震えても駄目だ。身をよじっても駄目だ。ひたすら耐えるしかない。耐え忍ぶほかに道はない。

ハンスの奇行はブラフだ。起きていると分かたなら、無抵抗の内に薬を追加して眠らせればいい。

それをしないのは、確信を持ってずにいるからだ。

だから耐える。耐えれば勝てる。少女は信じ、今だけは人形で在り続けた。

「…………気のせいか」

指が離れていく。

遠ざかっていく靴音。やがて音は聴こえなくなり、生体電気を感知できる射程圏からも姿を消した。

血に温かさが戻るような安堵。

一拍遅れて、絶望的な恐怖の乱流が、少女の胸を渦潮のように掻き回した。

体を這われた感触が、生々しい幻痛のように絡みついて離れない。

「…………ひっ…………ひぐっ…………グスツ…………うえ、え、ううう…………!」

緊張の糸が解れたせい、涙がぼろぼろと堰を切って溢れてくる。

止まらない。止められない。まるで心にへばり付いた恐怖という泥を、一心不乱に雪ぎ落すような涙だった。

声を一抹の理性で噛み殺す。ここでバレては水の泡だと、ただただ無音の号哭を奏でる。

怖かった。本当に本当に怖かった。

体を触られた時、もう駄目だと諦めそうになった。このまま実験台にされたらどうなるんだろうと吐きそうになった。

少女にとって、ハンス・ウエスカーは生きたトラウマだ。

対峙するだけで胃の中が逆流しそうになる。どんな怪物よりも、人間の腐敗した悪意の方が恐ろしい。

なのに、今の少女は布切れ1つ纏っていない。

手も足も塞がれた無防備で怪物と戦うなんて、子供の精神にはあまりに重すぎる駆け引きだった。

「はあーっ、はあーっ、こっふっ、えほっ、えほっ」

今まで怪物に立ち向かえたのは、ハンクやゴーストが居たからだとして強く実感する。

もともと少女は好戦的ではない。むしろ逆。本来は虫も殺せないほど臆病なのだ。

ここまで強く在れたのは、頼りになる二人の力があつたから。

怯えても、泣きそうになっても、挫けて塞ぎ込みそうになっても、立ち上がらせてくれる心強さがあつたから。

けれど、今の少女にそれはない。ひとりぼっちの小さな子供だ。

人を越えた力を持っていても、孤独の前にはなんと脆いことか。

「……」

鼻を嚙る。熱くなった目頭を瞼を閉じて冷ましていく。

落ち着けと自分に言い聞かせる。諦めたら全てが終わると刻み込む。

思考を止めるな。最善を尽くせ。

ああそうだ。『LISA-001』は矮小だ。

けれど、今までの戦いは無駄ではない。

確実に、少女の心は強くなっている。

「だいじょうぶ。だいじょうぶだから」

脳を冷やす。ニューロンを回す。

状況を整理する。未だハンスは気付いていない。まだ好機は少女のものだと、口から針金を吐き出した。

磁力と指先で器用に操り、手錠を外す。電子ロックの解除よりは簡単だった。

「いつ」

体中に繋がれていたチューブを引き剥がす。無理やり抜いたせいで痛みが走ったが、些事だ。血もすぐに止まった。

ピーツと電子音を垂れ流す心電図モニターをショートさせ、物陰から物陰に移動しながら、手術室のような場所を後にしていく。

「ゴーすと」

ハンクは言っていた。脱出したら、まずゴーストを探せと。

少女は人智を越えた兵器だが、サバイバル能力に長けていない。闇を歩くには司令塔が必要だ。ハンスの処遇は後でいい。

「……およーふく」

ペタペタと歩き続けて、ふと自身を顧みた。

布一枚も纏わぬ肢体。流石にこのままゴーストの元へ行くには羞恥が勝る。

適当な部屋に入り、ロッカーや棚を物色していく。

白衣があった。しかしどれもこれも大きい。NESTに子供サイズの服などあるわけがないから、当たり前ではあるのだが。

「ん」

一番小さい女性用の服を取る。不要な布を素手で千切り、少女の身長と合わせていく。

それでもかなりブカブカだが、最低限は隠せた。少女は満足げに頷いて、ついでに何か使えそうなものはないかと探索を続ける。

「あっ」

テーブルの上に、無骨で長大な金属があった。

アタッシュケースだ。アンブレラのロゴがプリントされている。

開くと、ロングバレルの散弾銃が眠っていた。少女は名前を知らな

いが、W870と呼ばれる銃器である。

「ゴーストにあげよう！」

銃だけでなく、傍には緑のパッケージに包装された弾薬も幾つか転がっていた。神の恵みと言わんばかりに、持てる分だけ回収していく。

千切った布片を合わせてポーチを作り、荷物を包んで肩にかけると、今度は天井へと目を向ける。

「……」

金網で塞がれた通気口が目に入った。

NESTの道を歩くより、こつちの方が見つかりにくいかと少女は思案する。

「んしょ」

足に力を籠め、カエルのように跳び上がった。

一息で金網を掴む。猿渡りのようにぶら下がった少女は、片腕から爪を出して金網を切断すると、そのまま通気口へと潜り込んだ。

狭く暗い、澱んだ空気の細道だ。けれど、どこか安心感を覚えてしまふ。

ハンクと共に歩いたせいか。それとも、広い通路を歩くより敵に見つかり辛いからか。

「……よしっ、頑張るっ！」

ぺちぺち顔を叩いて、少女は勇敢に前進した。

裸足が功を奏したか、ダクトに音は響かない。そのまま音を立てないように、静かに静かに進んでいく。

センサーも最大限に張り巡らす。小さな生体電気も見逃さない。

「ゴースト、どこだろう？」

幾つもの部屋の通気口へと辿り着く。だが肝心のゴーストが見当たらなかった。

血とゾンビがたむろする部屋か、荒れ果てた無人スペースだけ。生体電気を探っても、ドブネズミかゾンビしか引っ掛からない。

——いや。もうひとつある。

「っ」



少女と同じく、ダクトに身を潜める大きな電磁波。

剥き出しの脳。鋭い爪。剥がされた皮膚。鞭のような舌。

ゾンビの変異体、リツカーだ。

(しずかにしてれば、だいじょーぶ)

そろりそろりと後ずさる。

幸いなことにリツカーは背を向けていて、おまけに少女に気付いていない。

リツカーは肥大した脳に視力を潰され、代わりに聴覚が異常発達したクリーチャーだ。

声や足音さえ立てなければ、なんの問題も、

「」

きゆるる——最悪なタイミングで、腹の虫が駄々をこねた。

即座に振り返る舌の化け物。荒々しい吐息を吐き出しながら、ヒタヒタと距離を殺し始める。

不測の事態。しかし、少女の脳裏は焦りではなく飢餓に染まりつつあった。

(う、う)

なんだか、空腹になるまでのスパンが短くなっている気がする。

そこまで電熱は使っていないはずだ。なのにカロリーの消費が凄まじい。

ぐらりと意識が傾いた。

何度も味わい、抗ってきた「暴君」が、本性を覗かせ始めてくる。

血が熱を持ち、滾る。瞳孔が蛇のように細まり、中枢神経の隅々まで食欲という魔物に支配されてしまいそうになる。

潮時は近い。幽かに悟った。

(……いいえ)

熱くなつた吐息を呑み込むように、少女は深く息を吸った。

このままゴーストを探したら、少女は間違いなくゴーストを食うだろう。

肩から噛みつき、肉を食い千切って、悲鳴を上げるゴーストを五臓六腑まで引き裂いたら、骨すら咀嚼して喰い尽くすのだ。

(それはぜったい、やだ)

理性が猛然と拒絶した。ゴーストを喰らう幻を見て、吐き気を覚えることに安堵した。

しかし少女は生物兵器。人を喰らう怪物だ。持って生まれた暴君のサガからは逃れられない。

違う。

逃れる方法はある。

(ごめんね)

少女は生まれて初めて、怪物として牙を剥いた。

## 虚妄の破顔

(どれくらい経った)

時計も無く、物も無く、ただ椅子に囚われる虚無だけが存在する白亜の部屋。

ゴーストは脱力したまま、曖昧になりゆく時間の感覚に焦りを覚えつつあった。

(隊長たちは生きてるだろうか。いや、死ぬはずが無い。何とか生き延びている。きつとそうだ)

願わくばそのまま脱出してくれないかと、ゴーストは呻く。

(俺が死ぬのはいい。最悪なのは、あのクソツたれの変態野郎に嬢ちゃんが捕まることだ。アイツは駄目だ。アンブレラより質が悪い。きつと……口にするのも憚られるくらい凌辱されちまう)

ゴーストはハンクたちの動向を知らない。拘束されたまま定期的に部屋を移動させられるだけで、一切の情報を遮断されているからだ。

今のゴーストには何も出来ない。装備は全て没収されている。拘束も雁字搦めで、関節を外そうとも脱出できないだろう。

(頼む、頼む隊長、嬢ちゃんを説得して俺を見捨てさせてくれ。来ちゃ駄目だ。あの男は一筋縄じゃいかない)

ハンス・ウエスカー。邪悪な笑顔を貼り付けて、男は高らかにそう名乗った。

一見、傲慢と慢心に駆られた自尊心の高い男に見える。端的に言えば小物だ。自らのプライドで破滅するタイプの小悪党だ。

だがゴーストにはそう思えなかった。何かが決定的に違うのだ。名状し難い、不気味な違和感を拭えなかった。

力に酔い痴れるピエロのようで、しかしその裏に強靭な理性が垣間見える。

辻褄が合わないのだ。違和感の正体は、きつとここにあるのだろう。

そもそもの話。何故ハンス・ウエスカーは姿を現した？

ハンスは狡猾で陰湿な男だ。決して表舞台には現れず、影から手駒を動かすタイプで間違いない。

事実、ハンスはハンクの実力をよく理解していたし、『LISA—001』の価値も十分把握していた。強力な怪物も従え、念には念を入れて動き出した。

そんな男が、いくら戦力が揃ったからといって、戦闘のプロの前に堂々と姿を現すだろうか？ 死神の前にわざわざ首を晒す危険を冒すだろうか？

あの手の人間は非効率で不確実な方法を嫌う。陰に隠れたまま暗殺に徹した方が確実だったのに、その絶対的優位を捨てたのは何故だ。

本当に、ただ慢心しただけの愚か者なのか？

(得体が知れねえ。矛盾まみれだ。吐き散らす言葉も嘘だらけ、どれが真実か分かりやしない。あいつの目的は何なんだ？ 本当に嬢ちゃんを手に入れたいだけなのか？)

狂気。それ以外に、男を表せる言葉は無い。

常軌を逸した執念の断片を、ゴーストは仄かに嗅ぎ取っていた。決して底を悟らせないナニカが深い場所に眠っていると、直感的に感じ取ったのだ。

ロジカルなハンクと違い、未熟ゆえに感覚にも頼るゴーストだからこそ分かる部分と言える。

(クソツ)

どうしようもない現状に対し、自暴自棄になりかけていたその時だ。鼓膜へ微かに金属音が届いたのだ。

椅子に縛られているゴーストは、首だけを精一杯音源に向ける。

「ゴースト」

思わず眼を疑った。

ここに居ないはずの、銀髪の少女が立っていたから。

「……嬢ちゃん!？」

「しいーっ。声、出したら気付かれちゃう」

人差し指を自分の口に当て、ゴーストの発言を制する。

少女は爪を伸ばすと、ゴーストを傷つけないよう、拘束具のみを器用に切断していった。

自由の身になったゴーストは、圧迫され痺れかけていた手足の調子を確かめながら、彼女が現れた天井を見やる。

「ダクトを通って来たのか……。隊長は？ 一人か？」

「うん。わたしひとり」

「どうして！ 何故俺を助けに!? 隊長は止めなかったのか!？」

衝動的に肩を掴む。

少女がビクツと身を震わせて、ゴーストは「すまない」と手を離れた。

「わたしが言ったの、ごーすとを助けてって。はんくはわがままを聞いてくれただけ。ごめんなさい、見捨てるなんて出来なかった」

「……いや、悪いのはハマした俺の方だ」

「ううん、無事でよかった。本当によかった」

そう言って、少女は安堵したように抱きつく。思わず潰れたカエルのような苦悶が漏れた。

相当力を抜いている様子だが、見た目と比例しない腕力に苦笑いを浮かべざるを得ない。

しかしここは我慢だと、黙って受け止めるゴーストである。

——そこでようやく、ゴーストは少女の違和感に気がついた。どことなく背が伸びたような気がするのだ。

いや、気のせいではない。目の錯覚でもない。間違いなく、少女は10歳程度から12歳ほどに成長している。

思えば舌足らずさも消えていた。随分はつきりと喋れるようになっていたのではないか。

どういうことだと、ゴーストは困惑に小首を傾げた。

答えを示すように、少女の一張羅には血痕が。

それは衣服に留まらず、口や喉の周りにも。

「っ」

血に気付かれたのを悟ったか、顔色を悪くする少女。

対してゴーストは取り乱すことも無く、膝を折って目線を合わせ

た。

「大丈夫、ちゃんと分かっている。俺を食わないため……なんだよな」  
乾いたばかりの血。拭いきれていない口元の汚れ。肉体と言語能力の急激な成長。

理解を得るには十分過ぎた。少女がゴーストを食い殺してしまわないよう、血で汚れる覚悟を決めたことを悟ったのだ。

だから、敢えてそれ以上は触れなかった。

「嬢ちゃんが来たってことは、隊長は独りか？」

「……うん」

「不味いな、早く合流しないと。すぐここを出よう。あのサイコ野郎が戻って来る前に」

「ん！」

強く頷く少女。すると、思い出したように「あつ」と口にした。

ありあわせの布で作ったショルダーバッグを前へ回し、手に入れたショットガンをゴーストに手渡す。

「こいつは心強い……！」

装備を丸ごと剥がされたゴーストには、もはや武器も防具も無い。あるといえば拳くらいだ。

ゾンビとの一騎打ちならいざ知らず、リツカーやイビーのような化け物相手ならまず立ち向かえない。死に行くようなものだ。

散弾銃の存在は、暗雲に光が差し込むようだった。

二人は一度顔を合わせて頷くと、直ぐに部屋を飛び出していく。

左右を確認する。敵影は無いが、右の扉はガラクタの山でバリケードのように封鎖されていた。

ならば左へ進もうとした、その時。

『んっんっ、無事に合流できた様子ですなえ。いやはや安心しました。居なくなつた時はどうなることかと思いましたが』

前触れもなく、ガガガガツ！ と強烈なノイズが、傍のスピーカーから吐き出された。

次いで垂れ流される男の声に、二人は全身を強張らせる。

『おや？ いつの間にか背が伸びてませんか？ ……ははあ、T型生物

の細胞を摂取して急速的な成長を促されたと。さながら両生類の共食いだ。貴重なデータをありがとう』

「ハンス……!」

『はい、そんな怖い顔をしない。もっと笑顔に朗らかに。幸せが逃げますよ』

「サイコ野郎の与太話に付き合う気はねえよ。隠れてないで出て来やがれ、ぶっ殺してやる!」

『望むところですねえ。しかし簡単に終わってはつまらない。またとない舞台ステージなんです、大いに楽しみましょう。ね?』

無邪気に、心の底から楽しそうにハンスは言った。

まるで遊園地に来た子供のようなワクワク感に溢れている。血腥い地獄にいるとは思えない狂気に背筋が凍りそうだ。

『今、君たちがいるのはNEST深層の格納エリア……言うなれば倉庫の端っこですね。市外から物資を搬入するため、山を刳り貫いて鉄道を引いた場所です。私がいるのはそこから上がった先、列車のターミナルになります。我々で取引をしようとしたところですよ、リサ』

わざわざ場所を伝え、挑発的に煽る男。

語外に、ここまで来てみると言っているかのようだ。

『ゲームをしましょう。辿り着けたら貴方たちの勝ち。負けはシンプルに死です。如何ですか?』

「何がゲームだぶぎげやがって!! 結局お前は何がしたい!? この子を手に入れたいと言っておきながら、負けたら死だ!? 気でも触れたいのか!」

『残念ながら私はいたって正気です。そんなに本心を知りたければ、ここまで来て私を口説けばよろしいかと。さき、ゲームスタート』

問答無用に音声途切れる。

訳の分からないハンスの言動に、ゴーストは苛立ちを隠しきれなかった。

「ゴースト、どうしようっ!」

少女は戸惑い気味に横顔を見た。ゴーストは舌打ちを一瞥して、う

んざりしたように言う。

「右の道は塞がれてる。アイツはきつと何が何でもゲームに付き合わせたいんだろう。思い通りに動くのは癪だが、進むしかない。どのみち奴は始末しなきゃならないからな」

『ああそうそう。言い忘れてましたが、新兵くんの装備はそこから突き当たって左の部屋にあります。ゲームはフェアにね。ではでは』  
「……クソが。俺たちをおちよくって楽しんでやがるな」

嘲笑うかのようなハンスの言動。神経を逆撫でする手腕は相当だと評価せざるを得ない。

意趣返しにダクトを通ってやろうかと見上げるが、高すぎた。常人離れた身体能力を持つ少女にしか使えない。

「大丈夫。はんにくに会えば、きつと何とかなるもん」

「ああそうだな。立ち止まってても仕方がない、行こう」

ゴーストたちは、ハンスの掌であえて踊るように進んでいく。突き当りを左に曲がるとドアがあった。血文字で「Save Point」と書かれている。どこまでもゲーム感覚を貫くつもりらしい。

半ば呆れつつ、ゴーストはドアノブに手を掛けた。

しかし、ノブを回す寸前で手が止まる。止めたのは少女だった。

「開けちゃだめ。何かおかしい」

ゴーストは一考し、視線を少女とドアノブで行き来させて、素直に手を引いた。

少女の細腕から金属の爪が飛び出す。一呼吸の一閃が、まるで豆腐でも斬り分けるようにドアを横に両断した。

もはやただの板と化したドアが落ちないよう掴み、静かに床へ置く。

生まれたスペースから中を覗き、ゴーストは思わず息を呑んだ。

暗闇の中で点滅する謎の物体が、壁中に取り付けられていたのだから。

「動体感知トラップ……危ないところだった」

センサーは赤外線、つまり電磁波である。少女に視えたのが命拾い



だった。

もし安易にドアを開けていたら、即座に罨は発動、無数の破片榴弾に不細工なオブジェへと加工されていたことだろう。

ゴーストは間一髪を噛み締めて汗を流す。これをゲームだと一笑するハンスの猟奇性に悪寒を覚えずにはいられなかった。

「参ったな。装備は諦めるか」

「ううん。わたしがいく」

言うが早く、少女は行動に打って出た。

猫のように侵入し、まるでダンスをするかのように、のらりくらりと体をくねらせながらセンサーを避けて進んでいく。

あつというまに部屋の奥まで辿り着くと、これ見よがしに置かれていたゴーストの装備を取り戻してみせた。

一歩間違えれば少女でも重傷を負っただろうに、ものともしなかったのは胆力が鍛えられた証か。

『なるほど、不可視のレーザーを五感として捉えることが出来るのですか。素晴らしい。またもや貴重なデータが手に入った』

取り戻したプロテクターやガスマスクを着けていると、ハンスの声がスピーカーから響き渡った。

逐次こちらを観察しているらしい。そこら中にある監視カメラは、いわばハンスの眼なのだろう。

ゴーストたちは無言のままその場を去った。反応すれば喜ぶのは目に見えていた。

罨の脅威を念頭に置きつつ、神経を張りつめながら進んでいく。道はほぼ一方通行だ。分かれ道があっても、片方は瓦礫やゴミの山で潰されている。丁寧に血で矢印まで描かれている始末だ。

完全にNESTを遊び場代わりになっている。大勢の同僚が死に、多くの悲劇が生まれただろうに、ハンスはまるで意に介していない。奴にとって他人は路傍の石ころ並にどうでもいいのだ。命に対してまるで柵を感じていない証だろう。

「趣味悪いぜ。どんなモン食ったらこんな頭になるんだ」

曲がり角を曲がった瞬間、それは視界を埋め尽くした。

杭のようなもので壁に打ち付けられた、無数の死体のギャラリ―  
だった。

血脂にまみれ、油断すると転びそうになる赤黒い一本道。血と臓腑  
で造られた美術館のような光景は、1人の人間が創作したとは信じ難  
い惨状である。

――腐臭と死体に紛れ、彼らは足元の存在に気付かなかった。

注視しなければ分からないほどの細いワイヤーが床スレスレに張  
られていた。歩幅の小さな少女は、それを見事に踏み抜いてしまう。  
ザバアツ!! とバケツをひっくり返したような音が爆発した。

それは天井から息つく間もなく訪れる。通気口のフェンスを押し  
退ける勢いで、何百という巨大なゴキブリが、スコールのように少女  
目掛けて降り注いだのだ。

「ぎゃああああああああああああっっっ!!」

絹を裂いたような絶叫が炸裂した。全身を這い回り、柔らかな肉へ  
噛みついてくる虫の群れに動転して、少女は床をのたうち回る。

瞬間、稲光を伴うほどの大電流が爆発した。バチバチと火花を散ら  
しながら虫の大群は剥がれ落ち、足を痙攣させて息絶える。

「ねっ、ねえ、ごーすとっ、着いてない!? せなっ、背中っ、着いてな  
い!?!」

「大丈夫だ。一匹も着いてない」

「うえっ、うえええええええええっ」

涙を滲ませながら、少女は何度も何度もゴーストに確認をせがん  
だ。

肌を駆けるカサカサとした感触が取れないのだろう。一匹一匹が  
成人男性の拳と同じくらいのごきぶりだ。想像するだけで産毛が逆  
立ち、ゴーストも釣られて身震いしてしまう。

しかも、虫は少女の柔肌にたくさんの噛み傷を残していた。

もし罨を浴びたのがゴーストだったら、例え生き残っていても感染  
は免れなかったに違いない。爆弾よりも陰湿な殺意に溢れていた。

ゴキブリを集めるために使われたらしい、もはや白骨寸前と化して  
いる人間の頭を脇に退ける。

(巧妙に隠されたワイヤートラップだったら嬢ちゃんは見抜けない。俺がすっかりしないと)

緊張の糸を一層張り詰め、注意深く腐肉と血の海を歩く。

ライトで照らし、よく観察してやっと見分けられるほど巧みなトラップたち。引つ掛かる前に解除するか避けていくが、水面下に潜む脅威というものは、想像以上に神経を擦り減らしていく。

ワイヤー爆弾まみれの階段を上り、赤外線トラップの廊下を潜り抜け、ドアに仕掛けられたギロチンを解除しつつ、ゴーストたちはやっこの思いで、指定のエリアに辿り着いた。

「来たぞサイコ野郎！ 出てこい！」

畏がないと確認してドアを蹴破れば、そこは真つ暗な世界だった。

非常灯の蛍光だけが微かに明滅する、ホール状のただっ広い空間だ。市外から物資を運んできた列車を昇降させるターンテーブルである。

米国の誇る大企業が手掛けた施設だけあって、まるでSF映画のセットをそのまま持ってきたかのような近未来的様相で埋め尽くされていた。

「レディース&ジェントルメン！ このまたとなき舞台に役者が揃いました僥倖、主催者として大変喜ばしく思います。よくぞここまで来てくれましたとも！」

暗闇に拡声器越しの声が響く。

反響し過ぎてどこから聞こえてくるのか分からない。それが狙いだろう。位置を悟らせまいとしているのだ。

「ではでは、ご来場いただきましたU・S・Sの新兵くと悲しき生物兵器『LISA-001』のベストカップルへ、盛大な喝采をもってお迎えいたしましょう！」

闇が一気に晴れていく。

そこから中から網膜を刺すような光が咲いて、黒に塗り潰されていたターンテーブルの全貌が露わになった。

列車の一両が中央に据えられた円盤状のステージだ。そこかしこに分厚い金属の障害物が散乱しており、ハンスが隠れられそうな場所

は山ほどあった。

「君は……私の本心が知りたいと、そう言いましたよね？」

けれど、そんなものなど意に介さぬように、列車の上から見下ろす影が。

ハンス・ウエスカーだ。歯を剥き、獣のように噛つて、ゴーストたちを待ち構えていた。

「——は？」

絶句。呆然。

言語も、思考も、全て泡のように消えていった。

武装した兵士の前に生身で現れた愚かきに対してではない。

ハンスが構える金属の物体が、ゴーストを白痴に焼き焦がしたのだ。

「どうぞ。これがその答えです」

毎分3000発もの圧倒的連射性能を誇る電動式ガトリング。

即ち——ミニガンである。



銃撃と一笑するにはあまりに獰猛過ぎた。

毎秒100発を越える嵐の如き一斉掃射。もはや音が空気を割り、束ねられた6本の銃身からは弾丸と共に炎が噴き出す。

最悪の兵器が猛り爆ぜた。放たれる弾のスコールは、あまりの連射速度に収束したような錯覚を植えつけ、オレンジ色のレーザーとなって無尽蔵に降り注ぐ。

「うおおおおおあああああああああああああああああああああああああああああああああツツツ!!?」

紙一重の回避だった。

砲身が回転するより速く、咄嗟の判断で少女を抱え、ゴーストは遮蔽物まで飛び込んだのだ。

元居た床が須臾の間に蜂の巣と化す。心臓が痛いくらい脈を上げる。

頑強なターンテーブルの床すら穿たれるほどの威力だ。あと1秒

でも判断が遅ければ挽肉に加工されていただろう。

「はあつ、は、畜生ツ！ ミニガン……ミニガンだど!? 脳ミソどつかに置いてきたのか!? あの野郎完璧にイカれてやがるツ!!」

幸い遮蔽物は頑丈だ。衝撃も音も体を貫くように強烈だが、貫通する気配は無い。

それを計算してハンスは設置したのだろう。簡単には殺さず、じわじわと追い詰めるために。

「落ち着け、ミニガンは弾の消費が早い。あと十数秒も持たずに尽きる。やたらめたら撃たせとけば、そのうちただのガラクタに——」

その判断は甘かったと、ゴーストは刹那に改めた。

カラン、と無機質な音を引き連れて、どこからか転がってきた暗緑色の球体。

それを手榴弾と認識するより先に、二人は床を蹴り飛ばした。

「クソツタレがああッ!!」

爆発を背にバリケードから炙り出される。手足をバタつかせ、必死に傍の障害物へ身を隠した。

「まずい、まずいぞ。あまりにも不利過ぎる！ こっちは顔を出す余裕すら無いってのに、あっちは幾らでも攻撃できると来た。しかも掠っただけでミンチだ!! ふざけンのも大概にしろってんだ!!」

「おやおやどうしました？ 私、我慢比べは趣味じゃないんですけどねえーっ！」

B級映画のサイコキラーを思わせる、下卑た笑い声が響き渡る。

再び手榴弾が投げ込まれた。二度も同じ手にかかるかと、ゴーストは着弾と同時にキャッチする。

グリップを握って爆発を防ぎ、息を吐いた。

カラン、コロン。

ゴーストの視界に、さらに2つの爆弾が目に入って。

「」  
声も出さずに駆け出した。

2人は散り散りに走り、それぞれ別のシエルターへと逃げ込んでいく。





歯を剥き、眼球を血走らせ、ハンスはゴーストに突撃する。

だが、既に決着はついていた。

いくらバッテリーで防いだとはいえ、爆発はハンスへ深刻なダメージを刻んでいた。

本来なら立つことだって不可能なのだ。どう足掻いても勝敗は決した。

もはやハンスは、最後の力を振り絞ってもゾンビのように歩けるのみで。

ハンスの凶悪な笑顔は曇らない。

脳内麻薬の過剰分泌が招いた惨事か、もはや苦痛すら感じていないかのようにだった。

ただただ獣が如き笑顔を浮かべ、猛然とゴーストに襲い掛かる。

「……どうやら本当にイツちまっただけみてーだな。流星石に同情するぜ」

引き金を引いた。

凄烈な炸薬音が轟き奔る。至近距離から放たれた散弾は、ハンスの胸に狂うことなく直撃した。

防弾ベストを着込んでいたせいも、貫通はしない。しかし威力は殺しきれず吹っ飛んで、ドロリと赤黒い液体が噴出していく。

「ごぼっ、あ、がぼっ、がはがっ、カツ、く、ふくっ、はっははははははは……!!」

それでも、笑う。

全てが喜劇のように囁う。

膝に手をつけて立ち上がる。唇をピエロのような朱に染めて、無数の銃弾をその身に受けながら、臓腑までミンチにされた激痛の中で。

男は尚、歯を覗かせた。

「はアーツ、はアーツ」

倒れない。倒れる気配が無い。

凄まじい執念で生にしがみつき、バタバタと血を滴らせながら、再びゴーストににじり寄って来る。

流星石に動揺を隠せなかった。撃つのを躊躇ってしまった。



確実に急所を破壊したのだ。なのに即死どころか、笑いながら歩み寄ってくるなど、常軌を逸しているにも程がある。

「ごお、すと。カハツ、はは、っは。れイを、いわせて、く」

亡者の行進を止めたのは、背後から奇襲をかけた少女だった。

ハンスの胸から赤熱した爪が生える。鉄板で肉を焼くような音が木霊して、ハンスは遂に白目を剥き、事切れるように絶命した。

「……」

少女は無言のまま、無造作にハンスを放り投げた。

胸から左肩に掛けて切り裂かれ、ドチャツ、と水風船が叩きつけられたような音が染み渡って。

下を視る。自らの血の水溜りに沈んでいくハンスが映った。

中指を突き立て、「地獄に落ちろ」と唾を吐くゴースト。

「最後まで訳の分からねえ野郎だった。こいつは何がしたかったんだ？」

結局、ハンス・ウエスカーという男の真相を掴むことはなかった。言葉も、行動も、何もかもが一致しない。その目的すら不明瞭なままだ。

初めは狡猾な策士と推測したゴーストだったが、あまりの狂乱ぶりに、ただNESTの地獄が産んだ狂人だったかと認識を改める。

この世のものとは思えない出来事アンブレラの数々が、彼の精神を狂わせたのだろう。

もはや答えを知ることはない。知る必要もないし、知る気もない。

「……よし、気を取り直していこう。早く隊長と合流しなくちゃな。まだ頑張れるか？」

「うん」

「偉いな。じゃあ急ぐぞ」

少女を連れ、大量の薬莖と硝煙を踏みしめながら、ゴーストは再びNESTの奥へと潜っていった。

「ふぁん……たステイつく」

身を捨てずして浮かぶ瀬を

死んだはずだった。

それは間違いなく死んだはずだった。

(ウィルスの力がこれほどとは……既存のデータを遥かに超えている。見通しが甘かったか)

N E S Tの一室に立て籠り、ハンクは体中を苛ませる打ち身に緊急用医療スプレーを吹きかけていた。

散布された経皮薬が鎮痛抗炎症作用をもたらす。

ひやりとした冷感を過ぎれば、ずいぶん体が軽くなった。多少痛みは残っているものの、行動に支障はないだろう。

——事の顛末は、ほんの少し時間を巻き戻すところから始まる。

迫りくる魔の手から逃れ続けていたハンクは、前触れもなく爆発した壁の雪崩に呑み込まれた。

一呼吸の暇もなく、飛び散った無数の瓦礫が散弾の如く肉を打ちのめし、無視できないダメージを一瞬にして叩き込んだのである。

瞬く間にハンクを窮地へ追い込んだモノの正体。それは確かに葬ったはずの生物兵器——T—103の変異体だった。

生きていたのだ。数えきれないほどの実弾を浴び、心臓を破壊され、脳天をナイフで貫かれた拳句、煮えたぎる溶鉄のプールに突き落とされたT—103が、生きて再び現れたのだ。

岩石の如く硬質化したどす黒い皮膚に覆われた体。

鎧のように肥大化した筋肉。

ただでさえ巨大だった体躯が膨張を遂げ、もはやベースが人間とは思えぬほどの異形の進化を遂げた生命体。

変異が著しかったのは両腕だ。異常発達した剛腕に、大型の猛獣すら赤子と思えるほど巨大な五爪が備わっていた。

強固な壁をも豆腐のように破壊した圧倒的なパワーは、変異前と比較にならない脅威を燦然とハンクに示した。

不幸中の幸いか、硝煙に紛れて逃げおおせ、今に至るわけだが。

(タイラントクラスのB・O・Wを葬るには溶鉱炉では無理か。一撃

で半身を吹っ飛ばすほどの火力が必要だ。携行式のランチャーでもあればいいが……)

探している余裕はない。そもそもいくらNESTと言えど、研究室にロケットランチャーなどあるわけがない。

あるとすれば、ゴーストや『LISA-001』が捕まったターンテーブル付近だ。あそこは物流の中枢で、必然的に物資が多い。入荷された武器のストックがある可能性も高い。

(問題は……奴らの眼を潜り抜けてターンテーブルに行く術が無いことか。戻り道にはT-103に母親がいる。そこに暴走したタイラントまで加わった。私を血眼に探す怪物が三体だ。強行突破は自殺に等しい)

電子制御され、機械的に動くがゆえに行動パターンを読める刺客だけならまだしも、予測不能な暴走タイラントまで相手にするのはあまりに酷と言わざるを得ない。

そもそもタイラントシリーズは白兵戦において戦車級の脅威を誇る怪物である。

ましてやスパータイラントなど、最新装備で固めた精鋭ぞろいの小隊ですら撃破できるか怪しい化け物だ。

「……」

手持ちを確認する。

LE5、MUPともに残弾は余裕がある。

しかし相手が相手だ。今は戦力不足と断じざるを得ない。マグナム弾に関してはたったの3発だ。

変異前のタイラントすら瀕死に追い込むまで相当数を要した。雀の涙に等しいだろう。

(ナイフは無い。破片榴弾も底を尽きた。あるのはゴーストが残した閃光手榴弾が2つだけか)

非殺傷武器だ。致命を与えるには程遠い。

だが活躍の場は広い。むしろ、この状況では通常火器より役に立つ。

ただし、タイミングを誤れば死は免れないが。

(……まずは奴らの行動パターン、癖を把握する。分析をもとに新たな作戦を構築する。少なくとも1体は確実に始末せねば)

今後の脱出を考えるなら、怪物との戦闘は避けて通れない茨の道だ。決行する他にない。

ハンクは脳裏に軌跡を描きながら、緩やかに闇の中へと這い出ていく。

辿り着いた先は怪物たちを眺められる死角だ。曲がり角や障害物の影を使い、斥候のよう息をひそめる。

観察する。さながら標的を監視し続ける暗殺者のように、気配を完全に殺しながら、徹底的にB・O・Wを観察する。

B・O・Wは人智を越えた脅威だ。

鉄を鉛細工のように扱う臂力もさることながら、引つ掻き傷程度の僅かな負傷からウイルスを侵入させる致死率の高さが悉く厄介である。

おまけに生命力も段違いときた。ただの感染者なら中枢神経を破壊できれば行動不能に追い込めるが、タイラントシリーズともなれば、頭を丸ごと消し飛ばすほどの火力が無ければ太刀打ちできない。

パワーとタフネス。そして目に見えない脅威<sup>ル</sup>。

人間を殺すという点において、タイラントシリーズはあらゆる兵器を凌駕する。

しかし、少なからず弱点は存在する。

それは知性だ。有り余る力と引き換えに失った、論理的思考能力の欠如こそが最大の弱点なのだ。

(制御加工済みのT-103をタイラントA、暴走状態のT-103をタイラントB、異形化した女研究者をマザーと仮称する)

死神は闇に紛れながら観察を続ける。

真紅の双眼は怪物たちをしっかりと捉え、一挙一動を脳の海馬に刻んでいく。

よく見れば、彼らはそれぞれ個別のルートでハンクを探し、NES T中を徘徊していると気付いた。

おまけに、ある種の法則性まであるようだ。

(タイラントAは最も機械的だ。恐らく側頭部のチップからの指令で動いている。一定の規則、一定の速度で移動するのが特徴か。マザーは伸縮自在の肉体を活かしてダクト中も移動するが、ランダムではない。行動に法則がある。コンピュータ制御で命令に従順になる代償に、アクションが単調になっていいるのだろう)

忘れてはならないのは、思考がゼロになっているわけではないことだ。

僅かな物音や生物の気配に反応し、最短最速の経路で距離を殺そうとする。ひとたび手掛かりを掴めば虱潰しに探そうとする。

逆を言えば、だ。

音や痕跡による誘導が可能で、移動コースも予測可能ということになる。

(次はタイラントB)

少し距離を取る。

自動ドアを抜け、別の区画へ身を移す。

遠方にスーパータイラントの姿があった。苛立ったように唸り声をあげながら周囲を見渡し、時折痲癩を起しては暴れている。

不意にゴミ箱を殴りつけた。爪で輪切りにされた籠と中身が宙を舞い、壁や天井に叩きつけられる。

こちらに気付いた様子はない。ただ暴れているだけだ。行動も不規則で、ただただ衝動のまま暴れ狂っているだけに見える。

(奴の予測は難しい。タイラントAやマザーと比べてイレギュラーを否めない。しかし、制御個体が積極的に他の生物を攻撃しないのに対し、タイラントBは目につく感染者やリツカーを躊躇なく殺害している。まさに暴君といったところか)

しかしだからこそ、ハンクにとってこの上なく好都合と言えるのだ。

(タイラントAとマザーは互いに敵対しない。コンピュータがターゲットとして認識させないからだ。だがBは違う。奴は無尽蔵の破壊を繰り返す。……つまり)

—— 作戦は決まった。

◆  
撃つ。

(残り60秒)

撃つ。撃つ。撃つ。

限りある弾を惜しむことなく引き金を引き、撃鉄と炸薬の咆哮を轟かす。

照準は、怒り狂いハンクを細切れにせんと迫りくるスーパータイラントへ、ピツタリと定まっていた。

「■■■■■■■■■■ ツツツツツ —— !!」

鼓膜が破裂しそうなほどの、獣が如き絶叫が爆発した。

怒りが音に乗って撒き散らされるようだった。恥辱を味わわされた死神へのどうしようもない憤怒が、喉から吐き出されたものがこの咆哮だ。

(40秒)

空を切り裂く弾丸豪雨が、鋼の肉体に音速の螺旋を伴って突撃する。

穴が開く。赤黒い液が噴く。

通用しない。無意味だ。肉の砦と見紛うタフネスを前に、対人兵器など何の意味も成さない。

「■■■■■■■■■■ ツツツツ!!」

瞬間、大気が圧倒的な力によって引き千切られた。

腕を振るわれたただけだ。タイラントが両腕の鉤爪で薙ぎ払っただけなのだ。

たったそれだけで、軌跡が可視化されるほどの衝撃波が、無慈悲なまでに産声を上げてしまう。

「ッ」

咄嗟に屈む。身を逸らす。

床や壁を蹴り、空間全てを利用して、あらゆる手段で必殺を躲す。掠るだけで終わりだ。爪の先端が服をほんの少し引つ掻けるだけで、ハンクは玩具のようにバラバラにされる。

(20秒)

極限状態の中、殺意の爪がハンクを葬ることはなかった。

寸前を空振り続けている。その度に、修羅のような暴君の顔貌が怒りの熱を更に滾らせ、攻撃を苛烈にさせていく。

一撃で殺せるはずのネズミが殺せない。どころか、チンケな豆鉄砲で抵抗される。

苛立ちがタイラントを煽り続けているのだ。それが加速度的に、暴君から冷静さを奪い取っていた。

(3、2、1)

不意に。

死神は逃げるのをやめた。

ここぞとばかりにタイラントが爪を振りかぶる。

牙を剥き、唾を飛ばし、白濁した眼球で獲物を定め、全力の一撃を見舞う。

(ゼロ)

爪の軌道からハンクが消えた。

ハンクが突如、こと切れたように後ろへ倒れこんだせいだ。

なのに、暴君の爪は骨肉を裂き、咽ぶほどの血の華を暗闇に咲き誇らせている。

——ハンクの代わりに、音を聞きつけてやってきたタイラントAを、出会い頭に切り伏せる形で。

(クリア)

ハンクは天井を見上げるように、タイラントAの頭が宙を舞い、吹っ飛んで転がる様を床から眺めていた。

事故ではない。計算だ。ハンクは両者の距離、移動経路、速度を全て計算し、この曲がり角で鉢合わせするよう仕組んだのだ。

鉄骨の如き強度を誇る暴君の頸も、同じタイラントの——それも進化を遂げた怪物の膂力であれば、容易く豆腐のように斬り落とせる。





だ。

大穴が穿たれる。夥しい血飛沫が舞う。

死なない。腹を抉られた程度で絶命しない。

マザーはひたすら血と共に酸液を吐き出し、同時に老婆のような指から爪を引き延ばして、タイラントを滅多刺しにせんと襲い掛かった。

「……」

もはや両者の眼中にハンクはない。

ただただ目の前の敵を葬り去らんと雄叫びを上げる怪物が、互いに互いを貪り合う地獄が広がるのみだ。

死神はゆつくりと、街を散策するような静かな足取りで消えていった。



一步先を歩く少女と共に、ゴーストは周囲を警戒しながら進んでいた。

少女はゴースト救出後の合流場所をハンクと決めていたらしい。後はハンクさえ無事なら、そのまま問題なくNESTから脱出できるだろう。

「ゴースト」

「ん、何だ？」

「お外ってどんなところ？」

疲労による沈黙を破って、少女がおもむろにゴーストへ問いかけた。

ラクーンシティのことではない。NESTの外——つまり、少女の知らない世界のことだろう。

少女は外の世界を知らない。地下深くで生きることを余儀なくされていたせいだ。

小銭で買えるミートソースパスタすら、少し前に軍用の携帯食料で食べたのが初めてなくらいだ。

そんな少女が興味を抱くのは当然と言える。そして、今は外を知る人間が傍にいる。しかしハンクに聞いたところでロクな答えは返ってこない。

だからゴーストと二人きりな今、沈黙が辛かったのもあっただろうが、胸の内の好奇心を明かしたのだろう。

「そうだなあ」

ほんの少しだけ、ゴーストは答えるのに戸惑った。

何故なら。NESTから出たとしても、少女は結局アンブレラの奴隷になってしまふ運命にあるからだ。

(本当のことを教えるべきなのか。残酷すぎる自分の未来を)

少女は自分の結末を——醜い大人の都合というものを知らない。

知らないままに、命を落とした親愛なる者たちの想いを背負って、必死に生きようと足掻いている。

そんな少女を、さらに突き落とすような真似ができるのか？

(……今は隊長もいない。今だけは、俺はゴーストじゃなくていい) ふわりと零れる青い吐息。

覚悟が固まる。

「えーっと外は色んなものがあるところだ。美味しいもの、楽しいもの、綺麗なものがわんさかある」

「本当？ すごい！」

ゴーストと目を合わせながら、子供らしい期待にキラキラと輝く笑顔に向けて、少女は笑う。

「わたしね、わたしね。ここから出たら、美味しいものいっぱい食べたいな」

「ああ、山ほど食べられるさ。外に出たら連れて行ってやるよ。良いレストランを知ってる」

「……れすとらん？」

「あー。お金つてもものを出せばな、美味しい料理をいくらでも食べられる所だ」

「本当!? ぱすたも? しちゅーも?」

「あるとも。他にも嬢ちゃんが見たことない美味いもんがたくさんあ

るぞ」

「行く！ 絶対行く！ 約束！」

ぴよんぴよんと喜びを表して、少女はもう一度「絶対！」と念を押す。

微笑ましさに、思わずマスク越しに笑みが零れた。

こうしている時だけは、彼女は生物兵器ではなく、ただの女の子と変らない。

「でもな、その約束を守るためには、嬢ちゃんに知ってもらわなきゃいけないことがある」

「？」

「いいか、落ち着いて聞いてくれ。………俺たちはな、嬢ちゃんを助けるために来たんじゃないんだ」

「――」

立ち止まって。膝を折って。視線の高さを合わせて。

ゴーストは、少女に全てを告白した。

ハンクやゴーストが所属する組織。何故NESTに来たか、その動機。

そして少女がどうなってしまったのか、結末も含めて、全て、全て。

「……」

少女は真摯に、ゴーストの言葉へ耳を傾ける。

一拍の沈黙。そして、花のようににはにかんだ。

「ん。知ってるよ」

「え？」

知っている。確かに少女はそう言った。

自分の境遇も、これからどうなるのかも、全て理解しているのだと。理解した上で、少女はハンクたちに着いてきたのだと。今、確かに

そう言った。

「わたしね……別に死んでもよかったんだ」

少しだけ俯いて、少女は懺悔をするように告白した。

か細い声で、震える手を抑えながら、頑張つて胸の内を絞り出すように。

「ままも、優しくしてくれた人も、みんなみんな死んじやって。独りぼっちで。暗くて。怖くて。もうどうでもいいやって」

それは、真の孤独を知った悲痛で。

「でもはんくが助けてくれた。泣くことしか出来なかったわたしに、人の在り方を教えてくれた。死んだらままの死が無駄になるって教えてくれたの」

暗雲に光が差し込んだ微笑みで。

「ゴーストもそう。いっぱいいっぱい、教えてくれたでしょ？ 楽しいこと。美味しいこと。綺麗なこと。……だから、生きたいって思えるようになったの。わたしは、人間になれたの」

己が背負う業もこれから起こる未来も、全てを受け入れた強い覚悟で。

「思考を止めず、常に最善の選択を——これがわたしの選んだ最善の道。別にはんくもゴーストも恨んでないよ」

「ッ……!!」

「だから、ね？ そんな悲しそうにしないでいいんだよ」

「嬢ちゃん、君はッ」

強く、強く、包み込むように、ゴーストは少女を抱きしめた。

破滅の未来を受け入れながら、今の状況が嘘偽りと知りながら、それでも覚悟と共に生き続ける。

そこに後悔は無いのだと、少女は強く言葉にした。

（ちくしよう、ちくしよう、なんてこった。この子は全部受け止める気なんだ。脱出したら逃げるなんて考えも無い。逃げれば俺たちが咎められると分かっている。隷属させられても、それでも生き続けよう  
とっ……!!）

——ゴーストは兵士だ。金で雇われた薄汚い人間だ。大金を積まれば、人殺しだって辞さないくらいでなしだ。

それでも、ここで彼女の背中を、先人の一人として押さずにはいられない。

ここで力を添えなかったら、ゴーストはきつと人ですらなくなってしまう。

「嬢ちゃん。俺も約束を守るから、嬢ちゃんもひとつ約束をしてくれないか」

「？」

「逃げるんだ。ここから脱出したら、なりふり構わず逃げてくれ。約束してくれ」

少女は驚いたように瞬きをした。

「でも、そしたら皆が」

「俺は仕事を辞める」

少女の肩を掴み、向き合いながらゴーストは言った。

「正直、俺には合わない仕事だったと散々思い知らされたよ。全部片付いたら終わりにするつもりだ。だから君が逃げるのも、隊長の責任も、全部負ってアンブレラから消えてやる。隊長にも迷惑はかからないようにする。だから、約束してくれ」

「……うん」

複雑そうで、けれどちよっぴり嬉しそうに少女は頷く。

どれだけ心が強くなっても、不安に襲われていたのは確かだ。ゴーストの言葉が、未来への希望になったのかもしれない。

ゴーストは銀の髪を一度撫でて、「よし」と気持ちを入れ替えながら立ち上がる。

「ひとまず話は終わりだ。あとは隊長と合流して、それから」

「ッ!? ゴースと!! 逃げ——」

晴天の霹靂が如く。

少女の言葉を理解するより迅く、ゴーストの体が、玩具のように吹っ飛んだ。



前触れなんて無かった。

予兆なんて存在しなかった。

気付いた時には、隣にいたはずのゴーストが消えていた

「がふッ!? ば、あがぁッ!?!」

肉が滅茶苦茶な力で叩きつけられたような轟音が迸る。ゴーストの苦悶が、少女の鼓膜をザクザクと抉る。

血の温度が消えた。四肢末端にいたるまで悪寒が張り廻って、言いようのない震えが襲い掛かった。

「ゴースとっ!?!」

駆け寄ろうと地を蹴り飛ばして。

行く手を阻むように立ち塞がった影に、少女は思わず二の足を踏んだ。

「……甘いな。実に甘い。観察力も洞察力も何もかもが足りていない。だからこうして隙を晒す。死神ならこうはならなかったろうに」

「——あ、なた、は」

それは。その声は。その姿は。

もう二度と、目にも耳にもすることは無いはずのもの——

「馬鹿な……!?! げほっ、なんで、生きてやがる!?! ハンス・ウエスカー……!?!」

散弾を真正面から食らい、少女に腹から肩まで真っ二つに切り裂かれ、完璧に絶命したはずの男が、さも当然のように立っていた。

ずいぶん雰囲気が変わっている。お茶にかけて、常に不気味な笑顔を張り付けていた道化のような男が、まるで極圏の氷塊のように冷ややかな、凍て刺すほど冷たい気配を纏っていた。

薄闇でほんのり光る紅色の瞳も、一層人間離れた空気を醸す。

（この人、前と全然違う……!?! 見た目は人間なのに、中身が別物みたいな……!?!）

「そもそも話をしようか」

舌で唇を舐め、眼を天井に向けて、頭の中から言葉を掘り起こすように口を動かす。

「私と会った時、こう思わなかったかい? ただの人間がどうやってこのN.E.S.Tを生き延びたのか。……T-ウイルスは強力だ。拡散初期の空気感染能力は尋常じゃない。漏洩したウイルスは通気口を通って、瞬く間に屍の国を築き上げた。なのに私は生き残った。何故

？」

血に染まり、ボロボロになった上着をおもむろに脱ぎ捨てるハンス。

露わになった男の躰が、その面妖さを如実なまでに曝け出す。

傷が塞がっていた。少女に切断された半身が繋がって、古い手術痕のような名残だけが残されているではないか。

「シツツツ!!」

少女は本能で即断した。脳が理論理屈で判断するより速く、体が動き始めていた。

この男は危険だ。以前と比べ物にならないナニカを感じる。ここで確実に始末しなくてはならない——と。

躊躇は無かった。躊躇は決意に掻き消された。

砲弾の如くすっ飛んで、一直線に首を狩り取る。

「人の話は最後まで聞きたまえ」

「あぐツ!」

パアンツ——と、乾いた音が響き渡って。二度、三度。暗澹の廊下を転がった。

床を舐めたのはハンスではない。電熱ブレードを振るい、豪速で飛びかかった少女の方だ。

(痛っ、う、何、が……!?)

何が起こったのか理解出来ない。

全く見えなかったのだ。そも、男は一步も動いていなかった。

少女が切りかかった瞬間、ハンスの腕が一瞬霞のように消えたかと思えば、意味も分からず吹っ飛んでいた。

ひよっとして殴られたのだろうか？ ただ殴られただけなのか？

「T—ウィルスは遺伝子に作用する。その性質上、遺伝的に免疫を持つ人間がたびたび居てね。ああ、セルゲイ大佐のような完全適合者とは違うよ。空気感染や接触感染を起こさないだけだ。確率もたった100人に1人程度。で、私とその体質だった。別に不思議なことはないまい」

這いつくばる少女の背を踏みつけ、動きを封じる。



ポケットから煙草を取り出すと、手慣れた様子で火を着け、紫煙を静謐に吐き散らす。

「少し話を変えよう。君は『L—adapter』を知ってるかな？」  
——『L—adapter』。母が少女の血清から製造を試みたが、失敗に終わった薬の名前。

いわく、ウイルスの恩恵を万人に与えることを目的としたものだったという。

「あれは目的こそ素晴らしいが未完成だね。『LISA—001』……君と遺伝子が近くなければ、拒絶反応を起こして異形化する重大な欠陥があった。しかも近縁なだけでは駄目ときている。事実、子宮を通じて遺伝情報が混じったはずの君の血が、お母さんを醜い化け物に変えただろう？」

では足りないのは何か？ 男は少女の背中に煙草を落とした。

「免疫さ。ある程度ウイルスに抵抗できる素養が必要だった。となると、おや？ ここに適切な材料があるじゃないか」

自分の胸を親指で指す。口角を三日月に裂きながら、悪魔のような形相を象り嗤う。

重苦しさに喘ぎながら、少女は言葉を理解して、ゾツとするほどの寒気を味わった。

呼吸が死んだかど錯覚する。背骨から全身へ波紋する身の毛がよだつほどの嫌悪感が、膿のように沸いて出た。

この男は、他人どころか自分そのものも実験台にしていたのだと。

「生まれて初めて博打というものを体験したよ」

踵の圧が増す。

踏み躪られた骨肉が悲鳴を上げ、少女は顔を顰めて歯を食いしばった。

「君たちとやりあったのも、肉体を覚醒に追い込むためだった。ウイルスは死に瀕すれば瀕するほど活性化する。しかし自殺は非効率だ。身体能力、再生能力、その他あらゆるデータを計測できないからね。

だから狂人のフリまでやった。死神と離れ離れになるようにも仕組んだ。彼の場合、感付いて私を焼く可能性があったからね」

理解し難いどれもこれもを、さも当たり前のようにハンスは言う。そこに内包された狂気など、まるで存在しないかのような口ぶりだ。

「おかげで私は人間を越えることが出来た。『L—adap—ter』は完成した。君のお母さんの夢がひとつ叶ったんだ。全て君たちのお陰だよ、ありがとう」

本当に、本当に、心から気持ちを込めたような感謝。

端から滲み出すはどす黒い執念。『L—adap—ter』を完成させるため、他人どころか自分の命すら駒として扱う冷酷さ。目的を達成するためならどんな手段も選ばない、常軌を逸した執着。

新たなアンブレラの創設？ 違う。『L I S A — 0 0 1』の奪取？ 違う。

そんなもの、ハンス・ウエスカーにとってどうでもいいものだった。本当の目的は、ウイルスを使って人間という枠組みを超越することだったのだ。

ああ、だから彼はNESTに居残ったのだ。

邪魔な人間は消え、設備は使い放題。彼のホームグラウンドが屍の上に出上がった。だからハンス・ウエスカーは、自身の欲を叶えるためにずっとずっと実験<sup>あそ</sup>んでいたのだ。

狂っている。この男は根本的に狂っている。

出会ってからずっと感じていた嫌悪感の正体がこれだ。

もはや心が人ではない。どんな生物兵器よりも悍ましい怪物は、この男としか言いようがない！

「うぎ、ぎッ……！」

「ん？ ほう、この体勢から立ち上がるか」

「うがあああああッ!!」

ありったけの力を込めて立ち上がる。生物兵器としての筋力を解放し、牙を剥き、まずは足を切断せんと振り回す。

しかし少女の爪がオレンジ色の軌跡を描いた時には、既にハンスは

5 mも離れていた。

(速い！ わたしよりもずっと！)

拳動は視えた。ただ少し歩いて移動しただけ。

それでも、少女の動体視力でようやく認識できるほどのスピードだった。

これが『L— a d a p t e r』の——いや、ウイルスの力。遺伝子を進化させる力が正に働けば、人はこれほどの能力を獲得できるのか。

「しゃあああああ——ツ!!」

喰らい付く。ここで確実に仕留めんと、全力全霊で斬りかかる。

我武者羅ではない。思考をもって殺意を振るう。床を、壁を、天井を、その場全てをフィールドとし、立体的な機動をもって跳弾のように襲い掛かる。

「やはり膂力は君が上か。金属の骨格、それを支える筋肉の爆発力は伊達ではない」

斬る。薙ぐ。突く。蹴る。刃を返し叩き斬る。

当たらない。どれもこれも紙一重で躲かれてしまう。

ハンスの反射神経、動体視力、そしてスピードは、少女を遥かに上回っていた。

「そういえば、『L I S A— 0 0 1』」

心臓を狙って突いた腕を掴まれた。

視界を男の顔が占拠する。血染めのように赤い瞳がぬらりと光る。

「彼……あー、ゴーストなんだが。さつきからピクリとも動かないね。心配しなくて大丈夫かい……?」

心臓が凍った。

「ほら見ろ、何だかぐったりしてるぞ！ ずいぶん具合が悪そうじゃないか、どうしたんだろうな?」

「少しだけ視線を動かして。床に倒れて動かないゴーストへ焦点を定めて。」

小さな小さなソレが、少女の黒い瞳に、大きく大きく映り込んだ。

首元に突き刺さった、細くて小さな注射器が。

ウイルスの入った注射器が。

「いやあああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああツツツ!!!」

## 死神を殺せ

兵器に心は必要ない。

兵器は道具だ。人を殺すための道具でしかないのだ。

人を思い遣るだとか、情に駆られるだとか、期待に胸を膨らませるだとか、そんな無価値なノイズなど一片たりとも必要ない。

(だから壊す。徹底的に、磨り潰すように心を壊す)

死体のように倒れ伏す<sup>ゴースト</sup>兵士。縋りつき、必死に揺さぶりながら泣きじやくる銀髪の少女。

「いやっ、いやあっ！ ごーすと、お願い起きて！ ねえ、目を覚まして!!」

「手遅れだ。高濃度のウイルスを一気に投与した。もう十分理解しているだろう?」

甲高く幼い絶叫に耳を澄ませながら、ハンス・ウエスカーは言葉の凶器で、少女の心に杭を打つ。

「嘘だ!! そんなの絶対嘘だツ!!」

「嘘じゃない。散々見てきたはずだ。全てが手遅れなんだよ」

ゴーストの体が痙攣を起こす。少女の血色が死に絶えていく。

始まった。ウイルスが遺伝子に干渉し、強引な書き換えを行う歪な進化が始まった。

もう止められない。免疫を持っていようが例外なくヒトではなくなる。全く異なる生物へと生まれ変わる。

それはもはや、ゴーストではない別のナニカだ。

「私に気付くのがもう少し早かったら、結果は違っていたかもしれないいな」

「ツ……!!」

「彼を突き飛ばしていたら。私を止める力があれば。彼はまだ生きていた。2人なら私を殺せたかもしれない。ここから脱出して平和に暮らせたかも」

ぬらりと這い回る舌のような、言語の形をした刃。

舌剣は心臓を切開するように、ずぶずぶと精神を切り刻んでいく。

『L I S A—001』はまだ生後1年も経っていない幼体だ。理論理屈で責め立てる必要は無い。『もしワタシがこうしてたら？』——そんな可能性を突き付けてやるだけでいい。ひとつのミスで希望が消えたのだと思いきや、知らせてやればいい。それだけで、勝手に肥大した後悔の自重で潰れていく』

ハンス・ウエスカーは魔術師だ。心を捻る術に異常なほど長けた外道なのだ。

心を持つならどんな怪物も手玉にとれる。それは兵器であつても平等だ。握力だけで鉄を凹ませるほどの怪物だろうが、問題なく屈服させられる。

精神を折るのは簡単だ。人が一番触られたくない部分を、徹底的に抉り続けるだけでいいのだから。

「私を倒したと油断したか？ 気を抜けば死ぬこの戦場で、ほんのちよっぴりでも安心したか？ その結末がこれだ。ゴーストの犬死には報いと知れ」

「う、うううう……!!」

「ほら、しつかり噛み締めろよ。君の愚鈍さが全部招いたんだぞ」

涙でグズグズになった顔を夜叉のように歪めながら、少女はハンスへ跳びかかった。

動きは直情的で獣のよう。冷静さなんか跡形も無く消し飛んで、猛り吠えながら暴れ狂う。

五臓六腑を煮えくり返させる怒りが少女を駆り立てていた。目の前の怨敵をただ殺さんとする殺意だけで満たされていた。

（見える。『L I S A—001』の動きが全て見える。人間だったころと比較にならない神経系の発達、それに伴う動体視力と反射神経の向上！ ウイルス進化はこれほどまでに素晴らしいか！）

ハンスの眼には世界が止まったように映り込む。

砲弾の如き少女の疾駆も亀に等しい。まるで子供の駄々っこだ。避けるも反撃も自由自在で、ハンス・ウエスカーの胸に圧倒的な全能感が満ちていく。

「フンッ!!」

「あぐっ!？」

少女の斬撃を避け、合わせるように顎へ掌打を叩き込む。小さな体が軽々と宙を舞い、二転三転と転がった。

ダメージは無に等しい。そも、ハンスに殺意は無い。『L I S A | 0 0 1』は回収すべき商品だ。殺すわけがない。

だがしかし、顎骨への痛烈な一撃は少女の平衡感覚を一瞬にして奪い去った。

がくがくと足腰が揺れ、生まれたての小鹿のように這い蹲ってしまふ。力が入らない。立ち上がれない。

「かはっ、あう、あ」

「……見えるか? 『L I S A | 0 0 1』」

おもむろに、蛍光色の液で満ちた試験管を懐から取り出す。

揺れ動かして疑似餌のようにチラつかせる。

「NESTに残された最後の抗ウイルス剤だ。私がウイルスに適合できなかつた万一の保険にとっておいた。結局使わなかつたが」

目の色が変わる。一抹の希望が、少女の瞳へ光を灯した。

歯を食いしばり、血が滲むほど拳を握り、雄叫びを上げて立ち上がる。

蹴った。床を蹴った。

少女そのものが電光石火と化す。空気を切り裂き、鎌鼬のような衝撃波を巻き散らしながら全力全霊でハンス目掛けて飛びかかった。

鳩尾に突き刺さる拳。

がぼっ、と唾液が床を濡らした。

腹を抑え、後ずさる。

倒れない。神経系へのダメージでなければB・O・Wは倒れない。

一瞬で態勢を立て直し、再びハンスへ立ち向かう。直線的な攻撃は無策だ。少女は壁や天井を駆使し、立体的に攻め入った。

それはハンスも承知の上。

波状攻撃を退け、作業的にカウンターを見舞う。

肉を叩く音が炸裂した。土嚢が乱雑に放られたような重々しい落

下が何度も起こった。

少女の躰が痣だらけになる。すぐに治癒する。けれどすかさず次の傷を植え付けられる。

何度も。何度も。何度も。何度も。

「君は私に勝てない」

交戦の果て。少女は糸が切れたように崩れ落ちた。

背を丸め、げほげほと咳き込んで、小刻みに体を震わせながら膝を折る。

ダメージが限界に達したのではない。限界なのは心だ。彼女の精神が、カビのように粘着いたどす黒い絶望に覆われて、どうしようもなくなってしまうていた。

「勝算は無い。逃げることも出来ない。出来ると言えば、そのまま彼が怪物になっていく光景をただ見守ることだけ。惨めなものだ。哀れで哀れでしようがない」

「――、――」

芋虫のように丸まって、ぶつぶつと囁き続ける少女。

怒りと屈辱に呪詛を滲ませているのか。苦し紛れに殺意を奮い立たせようとしているのか。

どうでもいい。仕込みは済んだ。

心という樹がメキメキと音を立てているのが聴こえる。あと一押しで、少女の支柱は崩れ去る。

「ひとつ、彼を救うチャンスをあげよう」

だからここで希望を投げる。

地獄へ落ちた大罪人へ、そつと蜘蛛の糸を垂らす釈迦のように。

「死神を殺せ。そうすれば抗ウイルス剤をあげようじゃないか。ゴーストと、君と、私の3人で脱出するんだ」

這い寄る。

心の天秤にそつと手を掛け、無理やり傾かせるように、黒い影が忍び寄っていく。

「君の世話は彼に任せようと思う。その方が君も納得するだろう？」

それにゴーストは些細なミスでウイルスをばら撒いた元凶だ。もは



やアンブレラに居場所は無い。逃げたところでどうせ始末される。このまま私と共に来たほうが、より幸せな未来になると思うが」

「……」

「さあどうする？ 時間は無いぞ。こうして無駄話をしてる間に感染のステージは進んでいく。そのうち抗ウイルス剤も効かなくなるかもれない」

希望を示し、退路を断ち、逃げ場を失くし、選択の余地を略奪する。そうしてとことん追い詰めれば、誰だって正常な思考回路を失う。ただ目先の『最善』を手にしようとする躍起になる。

ゴーストを救うために視野は狭まり、手段を選ばなくなっていくのだ。

「迷っているね。わかるよ。ハンクに情があるんだろう？ でもよく考えてみる、彼が君に何をした？ ただいいように利用してただけじゃないか。実際一度だって優しくされなかっただろう？ だから君はゴーストに懐いた。違うかい？」

「……」

「君が死神に従っているのはただ安心したいからだ。彼の的確な指揮能力とカリスマ性にね。けどほら、死神の力はもはやなんの意味も成さなくなった。縋りつく意味なんてどこにもないじゃないか」

少女は蹲ったままだった。顔を挙げることも無く、微動だにせず、拳を握り込みながら震えている。

ぶつぶつと自分へ言い聞かせるように呟き続けていた。ハンスの耳には聞こえないが、一種の自己暗示、いわば防衛反応だろう。

精神の崩壊が始まったのだ。ハンスには分かる。今まで何度も見えてきた光景だ。

「大好きなゴーストの命と、ただ依存してただけの、君を利用していた死神。君はどつちを選択する？ 時間は無いぞ。すぐに答えを出さない」と

確信が芽吹く。 邪悪に芽吹く。

あとほんの一押しで、少女の根幹は腐り落ちると。

「選べよ。君はどうするんだ？」

さあ、無力で愚かな怪物の稚児よ。  
無様に壊れ、華やかに砕け散りたまえ。



『死神を殺せ。死神を殺せ。死神を殺せ』

『簡単な仕事だ。君ならできる。彼は所詮ただの人間だ。どれだけ能力が高かろうと、首を刎ねれば確実に死ぬ』

『一瞬で終わる。後悔もないさ。だって彼は何もしてくれなかった。優しく人として接してくれたゴーストとは違う。君は殺せる。必ず殺せる』

『シユミレーションしろ。確実に殺せる道筋を作れ。大丈夫、死神の癖や動きを見つけてきた君なら勝てるさ』

『死神を殺せ。死神を殺せ。死神を殺せ』

『殺して、勝って、幸せな未来を勝ち取ろう』

『ゴーストと美味しい物でも食べればいい。私にはほんの少しだけ血を分けてくれるだけでいい』

『それだけで、君はごく当たり前の生活を過ごすことが出来る。平和に生きることが出来る。血と臓腑の地獄からオサラバできる』

『決断しろ。勇気を持て。意思を固めろ。困難を砕こう』

『そして、人生最後の兵器となれ』

はんく。はんく。はんく。  
わたしは――



少女と打ち合わせの合流地点。上層のエレベーター前に到達してから、早くも15分が経過した。

ハンクは静かに待っていた。透明な円柱状のエレベーターへ凭れかかり、腰を落として座り込んで、可能な限り脱力したまま、神経を研ぎ澄ませて待ちわびていた。

無音の世界。地下に埋められた真つ暗な金属の檻の中、生き残った電灯だけが照らす深淵の世界。

ガスマスクで掠れる呼吸音しか聞こえない。感染者の呻き声も、飢えた怪物の唸り声も、換気扇が送り出す風の音も無い。

そばにはU・S・Sだった隊員の遺体が転がっている。脱出しようとしたところをバーキンに襲撃された部下たちだ。

全員、首の骨は折っておいた。

(……来るか)

虫の知らせか、歴戦の兵士が故の勘か。それとも合理的な根拠ゆえか。

ハンクは、『LISA-001』の到着を的中させた。

ひたひたと、裸足が冷たい床を踏む細やかな足音。

薄汚れた無地のワンピースが闇に映える。連絡橋をゆつくりと歩きながら両手をぶらぶらと脱力させて、まるで見世物となった罪人のように力なく動く子供の影。

歩く少女の背後には、ひとまわり大きな影があった。

ハンス・ウエスカー。そして荷物のように背負われたゴーストだ。

「……」

動揺は微塵も無かった。

ゴーストの異変も。様子のおかしい『LISA-001』にも。

「私と彼女がやってきた時点で、もうすでに察している様子だな。あ

あそうだ。『L I S A — 0 0 1』は君を裏切った。甲斐甲斐しくもゴーストを救うためにね」

少女の眼には一切の光が宿っていなかった。

今までどれだけ怯えようとも、どれだけ苦悩しようとも、理性と高潔の灯火を燃やし続けてきた少女の瞳は、下水道の底に溜まった汚泥のように濁っていた。

爪が伸びる。数多の敵を両断し続けてきた電熱ブレードが空気を焦がす。

明らかな殺意と敵意。今までハンクに連れ添っていた幼い少女が、一個の兵器として牙を剥いている。

「……不審な痕跡は幾つもあった」

無口な死神が、そっと立ち上がりながら能動的に言葉を紡いだ。

今まで無駄な会話を一切展開しなかったハンクにしては、あまりにも珍しく。

「1つ目は停電。メインシャフトの電源部へ感染者が触れたせいで起きた事故だ。2つ目は怪物の死体の消失と、ただの感染者だったマザーの過剰変異。3つ目は加工前のT-103の覚醒、そして奴が我々に向けた異様な執着。……これらにはバラバラなようで共通点があった。人為的な背景を感じざるを得なかったことだ」

今まで密かに感じながらも、回収することの出来なかった違和感のピースを並べていく。

ひとつひとつ嵌め込んで、丁寧に丁寧にジグソーパズルを完成させるように。

「都合よく停電が起きたのは偶然か？ 違う。誰かが感染者を電源へ突き落とした。そうしてヒューズの回収に向かわせ、一時的に我々を除外するよう仕組んだのだ。その隙に怪物の死体を回収し、低温で満足に活動も出来なかったマザーへ食料を与えた。だからあの短期間であそこまで過剰に成長出来た。コールドスリープルームが死体まみれになっていたのはそのせいだ」

感染者はウイルスの影響で代謝機能が異常活性を引き起こす。それゆえ、エネルギー不足に陥ると全身が腐敗し、やがて活動不能とな

る。

マザーの素体はただの感染者だった。「L—a d a p t e r」に強化された特殊個体とはいえ、冷凍睡眠装置から漏れ出す冷気のせいで満足に動くことも叶わない感染者だった。

それがどうやってエネルギーを補給し、あそこまで進化することが出来たのか？

簡単な答えだ。第三者が餌を与えたからに他ならない。

「初めに襲撃したT—103の異様な執着にも違和感があった。無加工のタイラントシリーズは原始的な本能に従って近くの生物を殺害する。しかしあの個体は初めから我々を狙って動いていた。原因は明らかだ。簡易的な命令を施されて覚醒されたからだろう」

天井を破って現れた一体のT—103。初めからハンクたちを狙い続け、遂に溶鉱炉へ突き落とされた。

明らかな意思を感じていた。徹頭徹尾、ハンクたちを葬らんとする意思を感じていた。

「……ずっと見ていたとお前は言ったな。最初から仕組んでいたのがお前だったのだ。ウイルスの蔓延までは偶然だ。ゴーストが起こした人為的なミスだ。そこにお前は便乗した。思うままにNESTを操れる状況に好機を見出した。ならばその動機はなんだ？ 何を成したかった？ そうまでして策を弄した理由はなんだ？」

紅色の双眸がハンス・ウエスカーを捉える。

組み立てたパズルで象った、真実を男に突き付けていく。

『L I S A—001』の回収か？ いいや違う。お前は『L I S A—001』を追い込みこそすれ、一度も回収しようとしなかった。私より先に冷凍装置から覚醒させられたはずなのに」

「……急に何を言い出すかと思えば、ホームズごっこか？ らしくないぞ死神」

「一見支離滅裂なお前には明らかかな執着がある。異常とも言える執着だ」

ハンスに発言の余地を与えない。畳みかけるが如く死神は言葉の矢を放つ。

「お前は『L I S A—001』の精神を破壊するよう仕組み続けた。肉親の変異。親殺し。極限状態での死闘。……本来なら精神的に摩耗させ、『L I S A—001』を追い込めるはずだった。兵器として不要な感情を駆逐しようと奔走した。だが失敗した」

「……ああそうだ。貴様が『L I S A—001』の精神的支柱となったことで失敗した」

至極あっさりとして、ハンスは突き付けられた推測を肯定した。

明確な苛立ちと殺意を、青筋を浮かび上がらせて露わにしながら。

「それが執着心の正体だ。お前は無視すればいいはずの私を、何が何でも殺害しようと試みた。獲物を横取りされた熊のように」

ハンス・ウエスカーの行動は、乱雑かつ不合理なようで一貫していた。

少女の心を殺すよう嬲り続けた。ハンクを確実に始末するよう動き続けた。

その答えは。その奥底に眠る動機は。

「全てはひとえに理想の兵器……『L I S A—001』を造るため。そして計画を邪魔した私を消去し、『親』としての誇りを保つため。これがお前の正体だ。腹の底に据えた狂気の源泉だ」

「……フ」

ハンスの顔が歪んでいく。

愉悦とも。怒りとも。殺意ともとれる、ぐちゃぐちゃな色に潰れていく。

答えは示された。死神の頭脳は異端者の狂気を曝け出した。

「大正解だ。やはり貴様の存在が、最も脅威に値する」

——全ては、理想の子を成すために。

「……私は彼女をリスペクトしていた。能力の高さ。美しさ。そして手段を選ばない冷徹さに惚れ込んでいた」

ぽつり、ぽつりと、ハンスは心境を明かしていく。

顔を歪めたまま、充血した眼を見開いて。

「自分の子宮を抉り出して兵器を作るような彼女のことを好きだった。だから彼女が「G」を越える生物兵器を持ち掛けて来た時、心が震えるようだったよ。幸せだった。私と彼女に完璧な子が出来るのだと」

崇高な夢でも語るように両手を仰ぐ。

光悦に染まる唇に編まれたハンスの言葉は、背筋が総毛立つほどの、筆舌に尽くしがたい邪悪に塗れていた。

「それなのに、彼女は不必要な情を抱いてしまった。私が素を手配し、彼女が孕み産んだ子に！ あろうことか感情を与えてしまった！

擬態能力、殺傷能力、知性、あらゆる面で秀でた奇跡の産物がガラクタになった！ あの女は私を裏切り、傑作を駄作にまで貶めたのだ!! 笑顔で他人に飴を分け与えるような兵器がいるか!? 私は誓ったよ、我々の子を完璧な作品へ育て上げるのだと！ 容易く民衆に紛れこみ、ただただ忠実に標的を抹殺する最強の兵器へと！」

唾を飛ばし、歯を剥いて男は叫ぶ。

人間とは思えない常軌を逸した剥き出しの執念。人の悪意が、言語という形を伴って吐き出されているかのようだ。

「NESTが汚染された時は天啓だと思ったよ。ゴーストには感謝してもきれいなさ。リサを正しい道に矯正する、またとない機会を与えてくれた！ ……だが、それを死にぞこないの貴様が妨害した。私のシナリオ通りに行けば容易くりサを理想の兵器ことにすることが出来たのに！ 貴様は身の程知らずにもリサに触れ、理性や誇りなどという最も不要なオプションパーツを付け加えた！ 私の子を穢し尽くしたのだ!! 許せるわけがあるかア!!」

その執念に名を付けるなら、最悪のモンスターペアレント。

子に理想を押し付け、己の承認欲求を満たすためなら心を壊すことだって厭わない、最低最悪の親心。

それが、ハンス・ウェスカーという『最悪』の正体だったのだ。

「だがしかーし。見たまえよ、今のリサを！ 美しい肢体、心亡き冷徹な瞳、純粹な殺意！ どれもこれも素晴らしい！ 彼女はタイラントやGを凌駕する最高傑作に生まれ変わった！ これが本来あるべき

『LISA—001』の姿なのだ！」

「……」

「ここまで来るのに相当な苦勞を強いられた。これまでの人生で貴様ほど思い通りにいかない人間はいなかった！ ああだからこそ、ゆえにこそ！ 私と彼女の——いいや。完成した我が娘の力を、その身で存分に味わうがいい！」

顎を使い、機械のように佇む少女へ合図を飛ばす。

少女はじつとハンクを見据えながら、ゆつくりと一步を踏み出した。

悪辣なる狂気が牙を剥く。

高く、高く、天蓋へ向けて吼え猛るように。

「さあ我が娘よ！ 忌々しい死神を殺せえッ!!」



わたしは裏切らない

「T-ウィルス完全適合者、セルゲイ・ウラジミール。数多の実験が産んだ不死身の怪物リサ・トレヴァー。」

本来交わるはずの無かったふたつの遺伝子イレギュラーを掛け合わせ、TやGを投与されたことで彼女は生まれた。

未成熟ながら身体能力はタイラントに匹敵し、特殊な筋組織と内臓器官が生み出す莫大な電流を自在に操る能力を持つ。

両腕の皮膚を裂いて飛び出す刀状の鉄爪は、人体を豆腐のように引き裂く殺傷能力を秘めている。電熱を帯び、灼熱の刃ともなれば頑強な鉄骨すら相手にならない。

加えて、従来のB・O・Wの欠点だった知能低下すら克服している。

まさに奇跡の生物兵器。それが『LISA-001』。

味方となればこれほど頼もしい存在はいないだろう。しかし彼女は今、明確な脅威となつてハンクの前に立ち塞がった。

（考え得る限り最悪のルートだ。ここから先は賭けになる。可能ならば避けたかったが……）

少女には知性がある。ハンクが教え込んだ戦術がある。それを捨てても余りある脅威がある。

つまり、T-103に使つたような小手先のひっかけが通用しない。

豹のような敏捷性と暴君の怪力を併せ持ち、あろうことか電撃で距離を殺してくる化け物だ。

今まで少女が苦戦を強いられていたのはあくまで同等以上の怪物相手であり、戦闘に不慣れな未熟者だったからに他ならない。

今は違う。少女は『LISA-001』という兵器として完成した。完成してしまった。

「……『LISA-001』。止まらなければ撃つ」

止まらない。少女は無機質に歩き続ける。

一歩一歩近づいてくる少女へ、銃口を定めてハンクは言う。

「いいだろう、来い」

——言葉は戦場の引金を引いた。

先手はハンクの機関銃。猛烈な唸り声を上げ、音速を越えた弾丸の雨が一斉掃射されていく。

空気が揺らぐ。少女が動く。狭い連絡橋を舞台に踊る。

肢体を捻り、跳び、回転し、銃弾の嵐を悉くしなやかに躲けていく。止められない。少女との距離が縮む。確実に殺されていく。

須臾に生まれたりロードの隙を突き、少女が一息で肉薄した。

赤熱した爪を振るい、居合が如く空を薙ぐ。焦がされた空気はオレンジ色の軌跡を刻み、熱波と衝撃へ姿を変え猛然と襲い掛かった。

寸前で躲す。ハンクがいた場所を一撃必殺の刃が過ぎる。

互いの距離、およそ2m足らず。

至近距離の白兵戦。戦闘法を切り替える。ハンクは素早くLE5サブマシンガンを仕舞い、ナイフとMUPハンドガンへ持ち直した。

「シッ!!」

風切り音が連続する。真つ赤な爪が何度も何度も虚空を薙いで、その度に火の粉が暗闇を食んだ。

ハンクも躊躇は無かった。一撃掠めれば即死の境界線に立ちながら的確に回避し、その度に少女へ風穴を穿った。

効かない。怯みもしない。

ほんの少し血を噴くだけで、瞬きをする間に傷は塞がる。一切のダメージを匂わせない。

それどころか、傷がどんどん浅くなっているような。

「っ!?!」

少女が心臓を狙った突きの動作を見せ、応じて半身を逸らしたその時だった。

死線に萌芽したコンマ数秒の一瞬で、ハンクの脳はかつてないほど回転した。

(突きが来ない?)

刹那。本能が警報を爆発させる。

腕を寸前で止めた少女が、右足を踏み出して杭の如く固定したのが

見えたのだ。

悟る。本命は、爪で穿つ必殺ではない。

(フェイントか!)

足を軸に流れるような回転。遠心力を利用した渾身の回転蹴りが爆発した。

反射的に腕を挟み急所を庇う。

間髪入れず、重機に匹敵する衝撃がハンクを襲った。恐ろしい勢いで吹っ飛ばされ、流星のようにエレベーターへ激突する。

「ぐあっ!」

怒涛の轟音。到来するインパクト。

強化ガラスへ亀裂を植えたハンクは、そのまま片膝を着いてしまう。

激痛。

腕への痺れ。内出血。胸部の鈍痛。

無視する。派手に飛んだのは逆に衝撃を殺すためだ。見た目以上にダメージは無い。ただ痛いだけだ。

すかさず撃つ。撃つ。撃つ。

自動小銃の引き金をありったけ引き絞り、とどめを刺さんと迫りくる少女を、弾丸の応酬をもって文字通り迎え撃つ。

その時だった。

奇妙な現象が巻き起こったのは。

弾丸が全て逸れていた。

バチバチと火花を散らしたかと思えば、少女の脇を避けるように軌道を変え、あらぬ方向へ消えていくではないか。

(……磁力を応用した電磁バリアのようなものか)

雷電の被膜を纏い、金属を磁力で弾き飛ばす荒業。電気を操る少女だからこそ可能とした、対銃火器における無敵の盾。

もはや銃は通用しない。対戦車ランチャーすら意味を成さないだろう。コンバットナイフも存在意義を失ったに等しい。

残された武器は肉弾戦程度だ。だが素手で岩を砕く怪物相手に、人間がその身一つでどこまで立ち向かえる？

「ッ」

時間を稼ぐために撃つ。ひたすら撃つ。弾がある限り撃つ。

幸い部下の死体から物資補給は出来ている。余裕はある。

電磁バリアは強力無比だ。全くもってどうしようもない。数人がかりの一斉掃射なら話は変わってくるだろうが、ハンク1人で打ち破ることなど不可能だ。

しかし弱点はある。電気操作に精密性を要するのだ。証拠に、電磁バリアを展開している少女は高速で移動することが出来ていない。

加えて、発電は膨大なエネルギーを必要とする。絶えず撃ち込み、無理やり展開させ続ければ、いずれガス欠を引き起こす。

（それは『LISA-001』も承知のはず。ならば奴が次に打つ手はひとつ）

すなわち短期決戦。ダメージを無視した強行突破。

電磁バリアを解除。両腕で弱点の頭部を庇い、少女は弾丸豪雨を猪突猛進に突っ切った。

無数の銃弾が肉を削ぎ穿つ。少女は身を裂く激痛すら意に介さない。

ただただ殺戮マシーンが如く、ハンクの命を刈り取らんと突き進む。

衝突まで2秒。頭部を正確に射貫かんと放たれた鉄の爪を、ハンクはほんの少し首を傾げる機微で回避した。

爆速を伴って射出された剛腕は、勢いを殺せずエレベーターの強化ガラスを突き破り、腕の根元まで呑み込まれてしまう。

ハンクはこの瞬間を待っていた。深々と刺さった腕を引き抜かねばならない瞬間を、このタイムラグを待ちわびていた。

超至近距離。電磁バリアは無い。

頭、首、胸——急所を破壊するなら今しかない。

この一撃が未来を別ける。生と死の境界線が色濃く映るのを実感した。

ナイフを両手で握り込む。最も強く残酷に、骨肉を破壊できるように。

放つ。鍛え抜かれた肉体を全霊で振り絞り、少女の頭めがけて銀刃を見舞う。

「——うううあああああああああああああああああああああああ  
あああああツツツ!!」

刹那。網膜を焼き潰さんばかりの光の津波が、一帯の暗闇を完膚なきまでに蹂躪した。

◆  
「むっ」

光が爆ぜた。恒星の誕生が如き光の奔流が視界を潰し、思わずハンスは眼を庇った。

少女が電気を放ったのだ。正確には放電ではなく、応用して発光しただけかもしれない。

電流が空気の抵抗を食い破る独特の音が聴こえなかった。目潰しだろう。

死神に誘われて陥った窮地を打開すべく、少女が咄嗟の判断で繰り出したのだ。

「ふふ、素晴らしい戦闘センスだ。力と知恵と冷酷さを併せ持った君は、この世のどんな生物をも凌駕する最高傑作だ」

光が止み、チカチカと星の舞う視界がゆっくり鮮明になってくる。ゴミの詰まった袋が落ちたような音。べしやり、と床を濡らす生々しい水音。

ハンスの頬が緩む。

勝利を噛み締めた笑顔が満面を飾る。  
少女がハンクの首を持つてきた。

放られたベトベトの血を滴らせるガスマスクの頭が、路傍に転がるゴミのように、ハンスの足元へ転がってくる。

「ふ」  
たまらず歓喜が漏れた。

「はははははっ！ よくやった、よくやったぞ！ ああ君はなんて素敵な良い子なんだ！ 素晴らしい、素晴らしいぞリサ！ よくぞあの厄介な死神を殺してくれた!!」

まるで本当の親子のように、ハンスは少女を抱き留め、わしやわしやと髪を撫でる。

少女は身動きひとつしない。されるがままに受け入れる。

「約束通りご褒美をあげよう。ほら、ゴーストへ抗ウイルス剤を投与したぞ。これでもう大丈夫だ」

床へ寝かせられていたゴーストの首へ注射器を刺す。

液体が注入されると、躰がビクンと飛び跳ねた。

「う、う」

「おお、目を覚ましたぞ。よかつたなりサ、君は無事に幸せな未来を手に入れたんだ。ああ、妙な気は起こすんじゃないぞ。もはや君にそんな反抗心は残されていないだろうが、万が一でも私に牙を剥けば今度こそゴーストを殺す。君は私に敵わないという現実を絶対に忘れないことだ」

「……」

「良い子だ。さあ、ゴーストを担いで私の前を歩きたまえ」

頷き、少女は呻き声をあげるゴーストの肩を持つ。

ゆっくりと背を向けて、連絡橋を引き返していく。

(忌々しい邪魔者は始末した。『LISA-001』の戦闘データも十分に手に入った。そして私自身も人間を超越した)

くつくつ、と息を殺した笑みが零れる。

胸を満たす充足。全ての勝負に勝ったという優越感。

勝利の美酒に酔い痴れながら、凱旋の兵士のように軽やかに未来へ踏み出していく。

——キン。

「？」

気のせいか。そう切り捨ててしまえばそうなくらい、小さな小さな金属音が鼓膜を撫でた。

反射的に、音源へと振り返る。

「なッ」

ウイルスで強化された動体視力が刹那の狭間でソレを捉えた。

驚愕が神経を押し潰し、一瞬にして思考が漂白された。

ハンスの顔のすぐ真横へ、ピンを抜かれた閃光手榴弾が迫っていたからだ。

「なッ——なんッ!?!」

光が、音が、狂瀾怒濤の大輪を咲き誇らせた。

あまりの至近距離に小型爆弾と同レベルの爆発が起こる。

180デシベルと100万カンデラの大奔流が、ハンスの鼓膜を完全無欠に破壊する——!!

「がッツツツツあああああああああああああああッツツツ?!?!」

暴れ狂う音圧に頭が破裂しそうになる。血を吐き出す耳を抑えながら、ハンスは悲鳴を振り絞ってよろめいた。

世界から音が消える。生暖かく滑りを帯びた涙がこぼれる。破裂した眼球の毛細血管が、視界を真っ赤に染め上げていた。

視覚。聴覚。平衡感覚——情報の受信能力を一瞬にして吹き飛ばされ、自我すら曖昧模糊に白紙化される。

「うぐアああッ、み、耳が、私の耳がア!?!」

激痛が頭を締め上げのたうちまわる。今にも破裂せんばかりに頭蓋が膨張しているかのようだ。

粉々にされた平衡感覚のせいで、もはや自分が立っているのかどうかも怪しい。上下が分からない。

「聴こえない! 何も聴こえない……! リサ、どうなっているリサ! 何が起こっ、ぎッ!?!」

足から力が抜けた。

何かが肉を貫いた、唾棄すべき感覚が脊髄を殴った。

次の瞬間、首筋に激痛が走り抜ける。金属的な冷感と神経を焼き尽くさんばかりの灼熱感が到来し、蛙のような呻き声が漏れ出した。

刃物が頸へ突き刺された。ただそれだけを理解するのに数秒をも必要とした。

しかし理解した時には、既に5発もの銃弾が、ゼロ距離から叩きこ

まれた後だった。

「ぬううあああああああツツ!!」

我武者羅に腕を振り回す。

ハンスに張り付き、無数の傷を与えた異物が離れていくのを実感する。

聴覚は戻らない。視界は血に濡れて不鮮明なまま。激痛の電気信号は全身を絶えず巡回し、神経をズタズタに引っ掻き回している。

脳裏に根を張るは確固たる事実——たった数十秒の刹那で、満身創痍に追い込まれたという現実だ。

少女の仕業ではない。ゴーストを優しく床へ寝かせようとしているだけで、攻勢に転じる暇は無かった。

だったら、誰のせいでこうなった？

そんなの決まっている。

こんな真似ができるのは、この世に1人しか存在しない！

(馬鹿な)

寒気に貫かれる。氷漬けにされたかと錯覚する。

身震いが爪先から頭頂まで伝播していく。

混乱に吞まれた頭脳が拓かれ、事態を理解していく毎に、血の気が遠退いていくのを生々しくも実感した。

(そんな馬鹿な。奴は死んだ。首を絶たれて死んだはずだ！ なのに、なのに！)

——どうして、この男はハンスの前に立っている？

「死神イイイイイイイイイイイイイイイイイツツ!!」

血を吐き散らしながら絶叫する。

現実を直視出来ないと喚くように。滲む視界が捉えた信じ難い光景を、力技で吹き飛ばそうとするかのように。

(クソツ！ 不味い不味い不味い!! 耳をやられた。平衡を保てない。眼が霞む！ 五感が全部狂わされている……!!)

ほんの数秒前なら、死神など子虫のようにあしらえたはずだ。



人間を越えた身体能力で踏み躪り、首を叩き折ればそれで終わる。それだけで終わるはずの存在だった。

なのに今、ハンスは急所を守るだけで精一杯なほど追い詰められてしまっていた。

死神が迫る。

死の気配を濃厚に纏わりつかせ、一点の曇りもない殺意と共に。

迎撃しようと拳を飛ばす。足を放つ。

当たらない。全てあらゆる方向を撫で、代わりと言わんばかりに鼻っ柱へ全体重を乗せた肘打ちを返された。

(何故だ)

死神の猛攻は止まらない。

鳩尾。顎。こめかみ。肝臓——人体のありとあらゆる急所を正確

無比に拳で打ち抜かれる。

使うべき時に使う技を選び、標的を確実に殺害せんとする、一切の

無駄がない殺人技術。

ハンス・ウエスカーは、その凄烈さを身をもって味わわされた。

致命になりかねないナイフだけを辛うじて堰き止める。

だが防御すれば、隙を突いて予期せぬ方向から殴打に蹴撃が飛んでくる。

「何故だッ……!!」

全力で抵抗する。ハンスの膂力なら人間など拳で葬れる。

なのに当たらない。どうしても当たらない。

体が触れ合いそんなほど近いのに、ただ一度のパンチすら見舞うことすら許されない。

攻撃すれば倍の痛打を返される。

逃れようとすれば詰め寄せられ、さらなる追撃が襲い掛かる。

容赦も、加減も、躊躇も、情も無い。どこまでも無色透明な絶対の殺意。

ハンスは生まれて初めて、血肉が凍り付きそんな恐怖を覚えた。

遥かに脆弱なはずの人間が殺せないことへの焦り。負傷を一切感じさせず繰り出される研ぎ澄まされた近接格闘術。

純黒の戦闘服を纏った紅眼の死神が、その鎌で命を刈り取ろうとしてくる光景が、無力な赤子のように恐ろしい。

(わた、しは)

髪を掴まれ、顔面に渾身の膝蹴りを叩きこまれた。

頭が跳ねる。激痛と衝撃で意識がトボ。

次の瞬間。鼻腔を鉄錆びた匂いが大挙した。

鈍く光る銀のナイフが、下顎から一気に刺し穿ったのだ。

ごぶつ、と生暖かい赤が唇を押し退けて飛び出ていく。

(どこで、間違えた)

蹴り飛ばされ、崩れ落ちる。無惨にも血だまりの中を這い蹲る。

頭は酷く冷えていた。生存本能がアドレナリンを大量放出させたせいか。ハンスの思考は、窮地の最中で雲一つない青空のようにクリアだった。

(完璧だった。リサの洗脳も、死神の対策も、ミスは無かった。何を間違えたんだ)

思考して、思考して、記憶の断片からヒントを探る。

何が歯車を狂わせたのか。どこが決定的な分岐点になりえたのか。

(待て。まさかあの時)

追憶を遡り、違和感に気付く。

ゴーストにウィルスを投与し、少女を追い詰めたあの時。怒り狂う『LISA—001』が我武者羅に襲い掛かってきて、それを力で捻じ伏せたあの瞬間。

気付く。あまりにも致命的な見落としに。

——なぜ、彼女は電撃を使わなかった？

(最も有効な手段を頑なに使おうとしなかった。怒り狂って冷静でいられなかったせいかな？ 違う。むしろ狂乱状態だったなら惜しまず使うはずだ。何故だ？ 使うことが出来なかったのか？)

使うことができなかった。

悟る。悟ってしまう。

自問自答が、芋づる式に埋もれた真実を浮上させていく。追い詰めていたはずの少女の背後に、死神の入れ知恵が根付いてい

たという真実を。

(身ぐるみは剥いだ。装備は全て捨ててやった。だが腹の中は？ 胃袋の中には何があった?)

少女はハンスに追い詰められ、派手に吹っ飛んでは何度も床を這い蹲っていた。

それこそ、強靱な生物兵器にしては不自然なほど長く。

心神喪失による活動停止と思っていた。完全に屈服させたと思っていた。

違う。酷く嘔吐<sup>えず</sup>していたのは、胃袋の中から何かを吐き出していたからではないのか？

例えば、超小型の無線装置。

あり得ない話ではない。死神が万一を想定していないわけがないからだ。

予期せぬ事態に遭遇し、少女たちが合流不可能になった場合。バラバラに散った少女とハンスは互いに連絡を取り合う必要がある。そうしなければ脱出できない。

ゴーストの無線は既に壊れていた。

故に端末を呑み込ませ、有事の保険を施していても不思議ではない。

待ち合わせをセッティングするだけではない。ハンス・ウエスカーという未知の脅威を明確化するため、情報を横流しさせるよう持たせたのだ。

(あの時……リサがうずくまってブツブツ喋っていたのは……恨み辛みの戯言ではない！ 吐き出した端末を使って、やられたフリをしながら連絡を取り合っていたというのか……!?!? それしか考えられない！ そうでなければ、こんな逆転が起こり得るはずがない！)

退路を断たれ。希望を潰され。ゴーストを人質に取られ。精神を滅多刺しにされて。

それでもなお、少女は鋼鉄の意思を折らなかつたのだ。

ハンスの誘惑と狙い、置かれている状況、自分の心情を、全て流し伝えていた。

どれだけ蹴られようと。どれだけ踏み躪られようと。少女は初めから、屈してなどいなかっただのだ。

——はんく。はんく。はんく。

——わたしは裏切らない。決してあなたを裏切らない。

——だからどうか、信じてください。どうか、わたしのことを信じてください。

「こん、な、ことが」

不可能だ。有り得ない。信じられない。

だって、少女は間違いなくハンクを殺そうとしていた。本気だった。一切の手加減なく襲い掛かっていた。

ハンクだってそうだ。躊躇なく撃った。幾つもの風穴を少女に開けていた。

しかも首は少女の手で落とされた。はっきりと肉眼で見たのだ。幻覚であるハズが無い。

「だったら、あの生首は？」

(傍に転がっていた、U・S・S隊員の死体か……!)

ガスマスクとヘルメットに覆われていたから分からなかった。先入観で死んだと思い込んでいた。

あの違和感のない目晦ましすら、真の狙いがハンスの視野を殺すことだったなんて。

(全て演技だったというのか……? 互いの動きを読んで、互いの意図を察して、打ち合わせなんぞもないただ一度限りの即興で! 真に迫る殺陣を演じたとも言うのか!? この私を騙すために!!)

考えてみれば確かにおかしい。『LISA—001』の回ソバットし蹴りは一度ハンクに命中した。

重機に匹敵する膂力で蹴られれば、例え鍛え上げた兵士だろうがその体は碎け散る。吹っ飛んで終わりなわけがない。

少女の手加減と、ハンクの受身が合致していなければ不可能な演劇。

リハーサルも何もない。互いに互いを知らなければ絶対に不可能な賭けだ。博打というのも烏澁がましい、常軌を逸した力技だ。

度し難い。あまりにも度し難い。決して許されることではない。死神と少女が共に突破してきた修羅場の数々が、ある種の信頼という形で結実し、ハンス・ウエスカーに一矢報いたなど！

「ふざけるな……!! 私人間を越えた！ 誰であろうと意のままに操ってきた！ この私が、虫けらのような浅知恵で!!」

吼える。上体を跳ね起こし、拳を握り締めて牙を剥く。

ズダンツツ!! と衝撃が走り抜けた。

体を起こしきるより早く、ハンクが全力で蹴り飛ばしたのだ。

後頭部から床に叩きつけられる。筆舌に尽くしがたいインパクトが頭蓋中を蹂躪した。

死神が動く。研ぎ澄まされた殺意を、息つく間もなく突き立てる。

倒れたハンスに馬乗りになり、脳天目掛けてナイフを一直線に振り下ろした。

「ぬぐつ、ぐううあああつ！ 舐めるな死神イ!!」

「っ……!!」

ハンスは間一髪で刃を掴み、致命の一撃を食い止める。

手の皮膚が裂け、血飛沫が顔を濡らす。思うように腕に力が入らない。

全体重をかけ、脳を刺し抜かんとする死神の攻撃を抑えられない。

「がアツ!!」

最後の力を振り絞る。ハンクを思い切り蹴り飛ばした。

万全なら胴を真つ二つに出来ただろう。しかし、衰弱しきったハンスではせいぜい転ばせる程度のパワーしか出せない。

それでいい。隙を作ればそれでいい。

脱兎の如く駆け出していく。向かう先は少女でもハンクでもない。連絡橋の外へ。何もない真つ新たな空間へ。そのまま遥か下層まで、飛び降りようとしているのだ。

（褒めてやるぞ死神。私をここまで追い詰めるとは、もはや天晴としか言いようがない！ だが最後の最後に勝つのはこの私だ。逃げ延

びてやる。生き延びてやる！　いくら満身創痍とて、私の肉体はタイラントシリーズに匹敵する！　この連絡橋から飛び降りて、いつか復讐のチャンスを一――」

「逃がさない!!」

ズグツ、と。

宙へ身を乗り出したハンスの腹を、爪が食い破る音がした。

「あなただけは逃がさない!!　絶対に倒す!!」

あと少しで自由落下にこぎつけていたハンスは、釣り針に掛けられた魚の如く、再び連絡橋へ引き戻される。

「こお、の――親不孝ものがアアああああアツツ!!」

背水の陣。歴戦の兵士と生物兵器に逃げ場を塞がれた手負いの獣は、最後の悪足掻きを繰り広げる。

腰から拳銃を抜く。バースト機構を組み込んだ改造銃だ。粗雑な照準のままハンクへ向けて発砲する。

「例え無数の反撃を喰らおうとも、この死神だけは道連れにせんという意思を込めて。」

銃声。

発生源はハンスではない。ハンクでもない。

辛うじて意識を取り戻したゴーストだった。力を振り絞った1発の弾丸が、ハンスの銃を吹っ飛ばしたのだ。

「やれ……!　嬢ちゃん!!」

直後、ハンスの腕が彼方へ斬り飛ばされる。

「は」

悲鳴をあげる暇すら無かった。

死神に裏膝へ蹴りを叩き込まれた。体がガクンと崩れ落ちた。首に一瞬で腕を回された。

頸椎の碎ける音をもって、ハンス・ウエスカーの処刑は執行される。

(こ　ん　な)

終わらない。生存の可能性を、彼らは1%だって残しはしない。

少女の電熱ブレードが上半身と下半身を両断した。そのまま心臓

を串刺して、電撃を爆発させながら全力で連絡橋の外へ放り投げる。

「――失せろ。仕事の邪魔だ」

死神が投擲した手榴弾が、ハンスの瞳に反射して。

張り裂ける焔の華が、肉の花卉を舞い散らせた。



「生きて　る？」

下半身を失った。

右腕も消えた。首も折られた。心臓も串刺しにされた。高圧電流を浴びたうえ、至近距離で手榴弾まで喰らったせいで、肉という肉がぐちゃぐちゃだ。

それでも、ハンス・ウエスカーは生きていた。

『Leader』……凄まじい性能だ。これほど生命維持機能が高いとは。リサ・トレヴァー由来の不死性が、功を奏したか。く、く)

血のカーペットを塗りたくりながら、残された左腕を使って這いずり足掻く。

(やはり最後に勝つのは私だったようだ。栄養さえ確保できれば手足も再生するだろう。私の、悪運の、勝利だ……！)

非常用エレベーターに乗り込む。スイッチを押し、ドアを閉じる。直後だった。猛烈なサイレンが施設中に響き渡り、赤く鮮烈な警告灯が一斉に目覚め始めたのだ。

(自爆コードが実行されたか。奴らの仕業か？ ……それとも)  
何にせよNESTは終わる。証拠隠滅のために組み込まれた自爆システムが作動してしまった。

もはやNESTなどどうでもいい。今は生き延びれさえすればそれでいい。

このままターンテーブルまで下り、列車を稼働させて、ラクション  
ティの外に出る。

脱出こそが最優先だ。命さえあれば、また何度でもやり直せる。

——ガゴン。

ゆっくりと下り始めていたエレベーターが、突然重厚な揺れと共に  
停止した。

ドアの隙間から、巨大な腕が挟み込まれている。

ぬらぬらと体液に塗れた腕。爬虫類を思わせる指と爪。ドブのよ  
うな強烈な臭い。

「ハッ」

こじ開けられる。黄ばんだ瞳と相對する。

巨大な刃物で抉られたような生傷を無数に抱えた、女の顔を持つト  
カゲのような化け物。

元人間。既知だった研究者。『LISA—001』の産みの親。

「……これが因果か」

不揃いに並んだ黄色い歯が、糸を引いて開かれていく。



## Chapter 4

### 駆け抜ける、生と死の境界線を

親らしいことは何もしてやれなかった。

親としての想いを自覚するにはあまりに遅すぎた。

身を裂く痛み。体が絶えず組み変わっていく痛み。脳髓が望まぬ獣性に冒されゆく痛み。

取るに足らない。どれもこれもちっぽけな苦痛だ。蚊に刺された程度の些事に思える。

どんな艱難辛苦よりも、この胸を穿つ後悔の方が、ずっとずっと痛くて苦しい。

臍に霞み、形を整えることすら叶わない思考の中で、いつも中心に抱くのは愛娘の未来だった。

愛しい子。冷酷な機械のようだった心に人としての灯火をくれた子。

色紙で花を作るのが好きな可愛い子。美しい銀の髪が素敵な子。

——そんな愛しいあの子は、残酷な実験と凌辱に犯される未来へと向かっている。

命を賭しても止めてやりたい。出来ることならなんでもする。束の間に蘇ったこの理性が泡沫に消えてもかまわない。

でも、今の自分に何が出来る？ 何も出来やしないだろう。

無力さに胸が張り裂けそうだ。大粒の涙が今にも零れ落ちそうだ。この身を傀儡にしていた男を食ってから、濁っていた頭が晴れ空のように冴えてきている。

だからこそ、置かれた状況がどれほど絶望的かよくわかる。もう人間じゃなくなつた。醜い哀れな化け物に成り下がった。

あの子を抱きしめてやることすら叶わない。

かといって、こんな死に体では黒服の死神を殺すことも出来ない。命の灯火が尽きかけている。覚醒した暴君に八つ裂きにされたせ

いだ。

傷が治らない。辛勝して得た、暴君の死骸を喰っても再生しない。もはやただの肉塊だ。利用価値の無い、生命活動を維持しているだけの死体じゃないか。

この体じゃ駄目だ。あの子を救えない。こうしている内にも、あの子は唾棄すべきアンブレラに身を委ねようとしているのに。

アンブレラの手には堕ちれば全てが終わる。産まれてこなければよかったと、泣きじゃくるだけの人生で終わる。

絶対に許すわけにはいかない。見過ごすなんて出来るわけがない。

止めなければ。

なんとしてでも。何を犠牲にしても。どんな手段を使っても。あの子の未来を守らなくては。

ああ、ああ。このガラクタのように無価値な体に、絶対的な力さえあれば。

強く、新しく、娘を守る肉体に、生まれ変わることが叶うなら。

神様。

どうかこの愚か者へ、最期にもう一度だけ、母の務めを果たす我儘を。



手のひらに収まる、金属フレームで補強された一本のガラス管があった。

中身はウィリアム・バーキン博士の最高傑作にして、命をこの世ならざる異形へと変える悪魔。即ちGーウィルスである。

恐らく最後のサンプルだろう。ハンス・ウエスカーとの戦闘の最中、ハンクはどきくきに紛れて奪取していた。

(G―ウィルスと『LISA―001』。命令にあつたターゲットは全て手に入れた)

もはやNESTに滞在する意味は無い。

速やかに脱出し、ラクーンシティからも撤退する必要がある。

「すみませんでした。俺がドジツたせいで、とんだ迷惑を」

「謝罪はいらん」

NESTとラクーンシティを繋ぐ唯一の移動手段ケーブルカーの中、ハンクはゴーストの言葉を一蹴した。

「回り道を余儀なくされたのは事実だ。だがお前が私の命を救ったことも確かな事実。そしてB・O・Wを操る離反者の出現は不可抗力だった。お前を助けたのも必要と判断したからにすぎん」

確かに余罪はある。結果論だが、ゴーストが判断を誤らなければ部隊は壊滅しなかったし、NESTが地獄と化すことも無かつただろう。

しかし、ゴーストに全ての責任があるとはハンクも思っていない。ウィリアム・バーキンの死をまともに確かめず、蘇生と逆襲を許してしまったのは隊長たるハンクの油断なのだ。

負うべき責の割合はハンク自身がよく理解している。

それに失態ばかりでもない。かつてマザーとの死闘で意識不明にまで陥ったハンクを治療したのは、紛れもなくゴーストだ。

ハンクには出来ない人情をもって、少女を手懐ける一助を担った。

ハンス・ウエスカアの凶弾を阻止したのもゴーストだ。

以上を踏まえ、ハンクは結論付ける。

「私から言うことは何もない。始末書が書きたければ帰って好きなだけ書け」

「……！ 感謝します、隊長」

心から、一心に礼を示すゴースト。

調子はすっかり元通りになっていた。幸運にも抗ウィルス剤が効いたらしい。

感染からあまり時間が経っていなかったことが功を奏したのだろう。

どちらかと言えば、問題は少女の方にあった。

度重なる戦闘。多大な放電。積み重なった疲労の数々。少女の肉体は半ばガス欠を起こしかけていた。

今の今まで理性を保っていられたのは、湧き上がる暴君の性をハンス・ウエスカーにぶつけられたからと言っても過言ではない。

つまり。空腹を満たすための食料を、自爆システムの作動したNE STから脱出する間に、可及的速やかに調達することが必要だった。もつとも、ケーブルカーで下水道へ向かえている時点で、その問題は消化されたわけなのだが。

「……こうしてみると、やっぱ、その、嬢ちゃんもB<sup>ア</sup>・O<sup>レ</sup>・Wなんだな」  
少し腰が引けた様子のゴースト。そんな彼の前で、新鮮な肉を満足そうに頬張る少女。

リツカーの肉だ。どうやら少女にとって、豊富な栄養を摂取して羽化を遂げたリツカーは最もエネルギー効率のいい食料らしい。

焼き切った四肢や臓物が小分けされ、ケーブルカーの床に食べ放題のレストランが如く広がっている。

好きな部位を手にとって、鉄の爪で小さく切りわけつつ口に運んでいた。なるべく血で汚れたくないらしい。

指先と鉄爪で丁寧にフルコースを満喫するその姿は、あどけない少女像と怪物の野生が入り混じった奇妙極まりない光景である。

「美味しいのか？ それ」

噎せ返る血と臓腑の匂いを紛らわすためか、それとも純粹な好奇心か。ゴーストは引き気味に少女へ訊いた。

「んう？ んー！」

少女は凄惨な血だまりに似つかわしくない笑顔を浮かべ、骨着き肉に齧りつく。

そのままブチブチと食い千切り、肉片を咀嚼して呑み込んだ。美味らしい。

「凄いな……」

ゴーストの呆然を余所に、恐るべき速さで肉が胃袋へ消えていく。頑強な歯はリツカーの強靱な筋線維などものともしない。どころ

か、骨まで噛み砕いて髓を堪能しだす始末だ。

バキバキ。ゴリゴリ。ブチブチブチ。

今後の人生で二度と耳にしたくはない奏楽に揺られながら、ゴーストは催した吐き気を零さないよう天井を仰いだ。

「? ごーすと、大丈夫?」

「あー。ちよつとケーブルカーに酔っただけだ」

「……いる?」

「気持ちだけ」

「ふふ、知ってる。ごーすとはだめ。病気になっちゃう」

「なんだよ」

空腹を満たせてよほど上機嫌なのか、冗談まで交えだす少女。

こうしてみると、初めて出会ったころの怯えきつた小動物のような雰囲気とはまるで別人だ。遅しくなっている、というべきか。

精神衛生を保つためか、ゴーストは視線をハンクへ移した。

「隊長、これからどうします?」

「ポイントK12へ向かう。そのまま下水道を通って地上を目指し、ナイトホークに回収を要請する」

ナイトホーク。ハンクやゴーストと同じく、U・S・Sのエージェントである。

チームの回収を担当するヘリコプターパイロットだ。ウィリアム・バーキンから襲撃は受けていない。

順当にいけば連絡を取れるだろう。そのままヘリに乗り、ラクーンシティから脱出すれば任務完了だ。

少女がリツカーをほとんど平らげきつた頃合いに、ケーブルカーはラクーンシティ下水施設へ到着した。

ハンクを先頭に降りていく。周囲を見渡し、状況を確認する。

下水道の管理を行っていたのだろうスタッフが、大勢倒れている現場を目撃した。

「……みんな死んでるのか?」

「ううん。でも、もう人じゃない」

少女の補足にゴーストは蒼褪める。

倒れ伏す彼らは誰一人として、元の人間ではないことを物語っていた。

「下水道がこれってことは……ラクーンシティそのものも……」

「くだらない心配は後回しにしろ。K12へ向かう前に『LISA—001』の携帯食料を調達する。安全を確保するぞ」

「……………イエス、サー」

少女の食料確保は絶対に必要だ。

ヘリコプターという逃げ場のない環境の中、空腹で暴れられてはたまったものではない。

幸い時間はある。距離的にNESTの自爆の影響もない。

すみやかに行動へと移る。感染者がハンクたちに気付いて起き上がるより早く、頭や首を破壊する作業を淡々とこなす。

「クリア」

一帯の感染者を全て排除し、少女の生体感知も鳴りを潜めたところで食料を探す。

未開封のスナック。栄養ドリンク。チョコレート。保存の効くスティック状の栄養調整食品。

ひと段落ついたところで、ハンクは招集をかける。

「K12に移動する。着いてこい」

「……………ねえ、はんく」

「何だ」

「ほんとに、ここを通るの？」

苦虫を噛み潰したような面持ちで、少しだけ声を震わせて、少女は後ずさりながらそう訊ねた。

困惑と嫌悪の源は、眼前に広がる異臭立ち込めるドブ色の川にこそある。

ここは下水処理施設。ラクーンシティ中の汚水が流れ込んでくる本流だ。

何週間も履き続けた下着を絞って作ったような色の水路は、つまりそういうことである。

少女は激しく拒絶した。これだけは嫌だと首を振った。

「我慢しろ。どのみち避けては通れん」

「や、やだ。絶対やだ!」

「まあこの深さだと嬢ちゃん半分以上浸かっちゃうからな……そりや嫌か」

ハンクやゴーストは過酷な訓練を踏破した兵士だ。ある程度の極限状況には耐性がある。

しかし少女は違う。血や臓物ならまだマシだが、コレだけは駄目なのだ。

無数のラージローチに集られた時も、悲鳴をあげてゴーストに泣き絶ったほどである。汚物の川に半身を沈めるなど正気の沙汰ではない。

「う、うううう……!!」

絶対に通りたくない。しかし通らなければ先に進めない。

激しい葛藤を浮かべる。目尻に涙が貯まり、ぎゅつと唇を噛み締める。

おもむろに、少女は両手を前へ伸ばした。

「おんぶして」

「……なに?」

「おんぶ!」

「隊長、俺が。さあおいで」

苦肉の策だった。これ以外の選択肢は少女の中で両断された。

ゴーストの背に身を委ねる。水を怖がる子犬のように縮こまり、しがみ付いたまま固まってしまう。

足先は少し触れてしまおうが、半身を浸けるより遥かにマシだった。

「……鍛えててよかったぜ」

予想外だったのは少女の体重か。

金属骨格と常識を超える密度の筋肉で出来た生物兵器の肉体は、見た目が子供のそれであっても、成人男性をゆうに越える。

「行くぞ。気を引き締めろ」

歩く。歩く。歩く。

狭く汚らしい下水を歩く。汚染は相当なもので、理解し難い謎の肉塊や死体がそこかしこに浮かんでいた。

ゴーストと少女が戦えない以上、極力戦闘は避けていく。

少女のソナーを利用して、汚濁に潜む怪物たちに見つからないよう進んでいく。

『こちらナイトホーク。アルファ、応答しろ』

そんな時だった。悪臭と汚泥を掻き分け突き進む最中、一条のノイズが反響した。

男の声だ。ハンクの無線機から聞こえている。

『アルファ、聞こえるか』

「ナイトホーク。こちらアルファチームハンクだ」

すかさずハンクが応答を返す。

おぼられている少女が不思議そうに「誰？」と呟き、ゴーストが「俺たちの仲間だ」と添えるように言った。

『てつきり全滅したかと思ってた。ずっと探してたんだが——』

「K12に到着。回収地点の詳細を」

『——なるほど。死神と呼ばれるわけだ』

ウィリアム・バーキン連行作戦からはやくも数日が経過している。

ナイトホークはラクーンシティの惨状を伺いながらもずっと身を潜め、アルファチームを捜索し続けていたのだろう。

そんな暗雲の中、ようやくハンクからの応答があった。

感動の再会かはさておき、仲間が一人残らず全滅したという絶望感からは救われたに違いない。

しかしハンクはナイトホークの心情など意にも介さない。ただただ機械的に言葉を放つのみだ。

「回収地点の指示を」

『安心しな、死神さん。ラクーン市警正門に向かっている。そこでピックアップだ』

無線が途切れ、再び静寂が訪れる。

暗く悍ましい世界を塗り替えるように、少女たちの胸には一抹の希



望が咲きつつあった。

やつとこの地獄も終わる。死臭に濡れた生と死の境界線から、ようやく逃れることが出来るのだと。

「嬢ちゃん、もうひと踏ん張りだ。あと少しだけ我慢できるか？」

「ん……！」

「油断するな。下水道も地上もNEST同様、怪物が息を潜めている。死は隣り合わせだと肝に銘じ——」

「りゃ」

時が凍る。

呼吸も、心臓の鼓動も、前進する足も、何もかもが止まる錯覚。

遠く、遠く、離れた場所からそれは聴こえた。

聴こえてはならない声が、風に波紋を落とすように響き渡った。

「……ままっ！」

凍てついた時間を解きほぐしたのは、驚愕に塗り潰された少女の声で。

「おい、おいおい嘘だろ！ ここまで追って来たってのか!? ウェス

カーの野郎が死んだから制御が解けたってのか、畜生！」

「動揺するな。先を急ぐぞ、足場が不安定なこの場では我々が不利だ。

速やかに下水道を脱出する」

指示を飛ばし、ハンクはようやく辿り着いた足場を登る。先には上へと続く階段があった。

脳裏に浮かぶ地凶通りなら、登ってすぐの部屋にラクーン市警へ繋がる隠しエレベーターがあるはずだ。

「はんく！ 右にいる！」

少女の声が電気のようにハンクを動かす。

餌の気配に勘付き、起き上がってきた感染者の額を正確無比に撃ち抜いた。

薬莢と死体がコンクリートに落ちる音が反響し、赤黒い血だまりがひとつつ出来上がる。

続いてゴーストも上陸、背負っていた少女を降ろす。

全員の無事を確認したハンクは、視線を階段の上へと向けた。

発砲音に吸い寄せられたか。呻き声の重奏と共に、活性死者が集まってきた。

「覚悟は良いな」

ハンクの言葉に、二人は応じて頷いた。

少女は鋼鉄の爪を。ゴーストは散弾銃を携え、ハンクの背後をカバーする。

「このままラクーン市警を目指す。まずは奴らを片付けるぞ」

## 愛憎の収斂進化

始祖ウイルスから派生した数多のウイルスたちは、どれも例に漏れず遺伝子に干渉し、進化の暴走を引き起こす悪魔である。

特に「G」が起こす体組織の増殖や再編成は、目視を可能とするほど目まぐるしいスピードで体を組み替え、全く異なる生き物へと変えていく。

ある意味、殻を持たないサナギのようなものだろう。

サナギ。完全変態を行う昆虫類に見られる、形態変化の中間地点。

頑丈な殻の中ではどろどろの液体組織が絶えず蠢き、幼虫の面影を持たない成虫へと、恐るべき速度で変身を遂げている。

サナギはこの世で最も身近な進化の一部始終と言っても過言ではないだろう。

それは未来の世界で、予期せぬ形として始祖ウイルスの息子と関わった。

一人の秀才が生み出した混沌の化身。名をC—ウイルス。

植物と蟻の遺伝子を組み込んで生まれたT—Veronica。無限の変異をもたらす「G」。そして始祖ウイルスを融合させることで生み出されたそれは、投与された生物をサナギに加工し、驚くほど短期間で怪物へ生まれ変わらせる悍ましい能力を孕んでいた。

——ソレが直接的な因果関係を持っているわけではない。

そもそも、別に彼女は意図したわけではない。1998年には、C—ウイルスなど影も形も無かったのだから。

だからこれは偶然だ。あるいは、多種多様かつ複雑な要因が絡み、結実して成された奇跡なのだ。

学術的用語を当て嵌めるなら、収斂進化が近いかもしれない。

遙か遠方に位置する南北アメリカとアフリカの孤島には、同じ『棘を持つ』進化を選んだ多肉植物と亜竜木が生息する。

土の中で暮らすことを選んだケラとモグラは、昆虫と哺乳類という縁遠い関係にも関わらず、土を掘るために似たような『シャベル状の手』へと進化した。

たとえ両者に接点は無くとも、似たような環境さえ整えば、進化の羅針盤は1つの行先を指し示す。

進化は奇跡で満ちている。

ウイルスに歪められた無法の進化であっても、結局本質は変わらない。  
い。

ゆえにそれは、体内と言う名の環境で巻き起こった、ひとつの禍々しい奇跡なのだ。



「2時の方向、感染者3！ 7時方向からも無数に来てます！」

「感染者の動きは遅い、後ろの奴らは構うな。前方の障害だけ排除しろ。転がっている死体も動き出すことを肝に銘じて行動しろ」

「了解！」  
ラジャー

「しゃあああっ!!」

階段を越え、踊り場を越え、ハンクたちは隠しエレベーターで警察署の地下通路へと辿り着いた。

大部屋へ続くドアを蹴り破り、灯りのひとつもない暗闇の中へと進軍する。音で目覚めた亡者の群れを司令塔ハンクの指示で捌き続け、ひたすら回収地点を目指していく。

「クソッ！ こいつらどこからこんなに湧いて来るんだ！」

止まない唸り声。唾を垂らし牙を剥く感染者。フラッシュライトを反射する白濁の眼球が無数の脅威を曝け出す。

ほんの掠り傷が死を招く極限状態。しかしゴーストや少女の心は凧いでいた。

これまでの修羅場が二人に死神の心臓を授けたか。圧倒的な物量で迫る「死」の群れを前に、臆することなく的確に排除していく。

「嬢ちゃん、カバー頼む！」

「ん！」

背後から飛びかかってきたリツカーの首を、少女の鉄爪が斬り飛ばす。

膿んだ口を開く感染者へ、ゴーストの散弾銃が火を噴き屠る。

「扉まで走れ！」

倒してもキリがない群れを銃器で裂き、鉄製の階段を全速力で駆け上がる。

手すりごしに腕を伸ばしてきた感染者を少女の鋼の爪が切り裂いた。赤黒い飛沫を背に、ハンクはドアノブに手を掛ける。

開く。銃口を部屋中に滑らせる。

「■■■■ツ——！！」

「っ！」

雄叫びと共に牙を剥いたのは、全身に腐敗が生じた大型犬だった。

肋骨や筋組織が剥き出しになったドーベルマン。ウイルスに冒され、湧き上がる食欲に従うまま、圧倒的身体能力をもって獲物を狩る警察犬の成れの果て。

それは砲弾のようなスピードを伴い、ハンクの喉笛目掛けて飛びかかった。

（避けるのは不可だ。後ろにはゴーストと『L I S A — 0 0 1』がいる）

ハンクは引き金を引き絞った。サブマシンガンL E 5が唸りを上げ、無数の弾丸が犬の顔面を穿ち削ぎ抜ける。

金切り声が炸裂した。獣の体が弱々しく墜落する。

死んでない。怯んだだけだ。すかさずコンバットナイフを握り固め、脳天めがけて振り下ろす。

頭蓋を貫き壊す感触。脳漿を散らし、猛獣は今度こそ息絶えた。

「感染した犬……ですか」

「二次感染の賜物だろう。怪物リックカーには劣るが、目も鼻も利く。おまけに素早い。油断するな」

「はんくっ！ っーすとー！」

窮地において息つく暇など存在しない。慌てた少女の声が、二人の兵士に警報を鳴らした。

小窓から身を乗り出し、何を見つけたか指さすジェスチャーを繰り返す少女。

駆け寄り、窓を覗く。

「あいつ……！　もう追いついてきたやがったか……！」

窓の外。地下施設の機械室にソレはいた。

人間のパーツを滅茶苦茶に組み合わせ造ったトカゲのような体。頭部に靡く脂ぎった髪の名残。

少女の母だったもの。ハンズ・ウエスカーの支配から解き放たれ、生前の微かな情動に縋ってハンクを追って来た化け物だ。

(……何だ？　様子がおかしい)

ハンクの瞳には、何度も相見えたはずのマザーの姿が、異様となつて映りこんでいた。

むしろ互いに死線を交えたハンクだからこそ、違和を覚えたと言わべきか。

(顔が無くなっている。それに何だ、背中の巨大な瘤は？)

マザーは女の顔を持つトカゲのような怪物だったはずだ。

絶えず動き回る黄ばんだ眼と、小刻みに痙攣する頭部。酸を撒き散らす管を隠した齧歯まみれの口。

半端に人間の面影を残すせいで、強烈な不気味さを醸す異形だった。

そんなマザーの顔が、綺麗さっぱり無くなっていた。凹凸が存在しないのだ。

真っ白でブヨブヨした脂肪の塊のような頭に、人を丸呑みに出来そうな歯の無い大口が備わっている。髪の毛の生えたミミズのようだ。

最も面妖なのは背中に背負う人間大の腫瘍だ。繭とでも言うべきか。

肉と皮膚が幾層にも折り重なった、巨大で生々しい繭状の物体が、背中に根付き脈打っているのである。

(奇妙だ。行動に意思を感じない。ハンズ・ウエスカーの支配が消えた今、マザーは私とゴーストから『L I S A — 0 0 1』を取り返そうと躍起になるはずだ。なのにその執着がない)

マザーは傍に転がる死体や徘徊する感染者を襲い、手当たり次第に喰らい尽くしながら、以前と比べて遥かに鈍重な動きでハンクたちを追っていた。

食欲を優先しているように思える。ハンクたちは二の次で、まずは腹を満たすことを重きを置いていてと伺い知れる動きだった。

だというのに、傷が全く治癒していない。

莫大なエネルギーを補給しているはずなのに、組織が再生の兆しを見せていないのだ。

冷水を髓に注すような悪寒。

根拠は無い。ゆえに断定はない。

されど兵士としての直感が、あの存在へ警鐘を鳴らす。

「……奴と交戦する必要はない。早急に脱出する」

「同感です。もう化け物相手はコリゴリだ」

「……」

「何をしている『L I S A—001』。来い」

「……………うん」

戸惑いの色。

いや、迷いと言ったほうが正しいか。

まるで影を床に縫われているかのように、少女の足どりは重かった。

何度も何度も振り返って、母だったものが這いずる方角を見やっていた。

変わり果てた親への憐憫や悲哀ではない。少女の心は、母との訣別をとつくの前に果たしている。

少女は過去を振り返ることを止め、涙を払い前を向いたのだ。

言葉も想いも、とうに送り届けている。

「……」

頑なに母を映そうとする少女の瞳。

それは子が親に向けるものでは無かった。

なにかこの世のものではない、得体の知れないものを目の当たりにしたかのような眼差しで。

『L I S A—001』

呼び声にハツとした少女は、迷いを祓うように頭を振った。

◆ 『何してるんだハンク。遅いじゃないか』

梯子を登ってマンホールを抜け、駐車場にたむろする無数の感染者を退けて、ハンクたちはようやくラクーンシティ警察署へと辿り着く。

だがしかし、回収地点に繋がる玄関口は無数の瓦礫に押し潰されてしまっていた。

脱出を急かすナイトホークの無線に、ハンクは物陰から現れた感染者の頭蓋を撃ち抜きながら応答する。

「玄関が封鎖された。迂回路を探す」

『気をつける。上の奴らがラクーンシティへの滅菌作戦を命じた。早く脱出しないと、あんたも消されるぞ』

「分かった」

「……ちよつと待ってくれ、滅菌作戦だつて!？」

驚天動地と声を吐いたのはゴーストだ。

冷や汗を流す彼を余所に、少女は言葉の意味が分からず、不思議そうに首を傾げる。

「どういうこと?」

「ええとな、どう説明すればいいか……とにかく、このままだと全員死んでしまうってことだ。どでかい爆弾で街ごと吹き飛ばされちゃう」

ゴーストの必死な説明に「そんな」と少女は蒼褪める。

対し、無線の向こう側のナイトホークがノイズを交えながら眉をひそめた。

『おいハンク、あんた以外の声が聞こえたぞ。しかも子供の声まで……気のせいかな?』

「ゴーストと回収対象だ。同行して向かっている」

『なんだつて? ゴースト? おいおい! 他に生き残りがいるなんて思わなかったぞ! それも新入りくんとは、ははっ、まさかのまさかだ。……しかしハンク。回収対象ってなんのことだ? バーキン博士は死んだんじゃないのか?』

「詳細は後だ」



『はいはい。ならちやんと生き残ってくれよ、死神さん。それと新入りくんもな。まだ一度も飲みに行けてないんだ、帰って新人歓迎会と洒落込もうぜ』

「ええ、是非」

無線が途切れる。

すると、少女が封鎖された玄関に向かって駆け出した。

「これ、退かせるよ」

積み重なったガラクタの山、生存者が設置したバリケードを一望する。

今にも崩れそうな風貌なのに、微塵も揺るがない家具と瓦礫の砦だ。生半可な力で取り除くのは不可能に近い。

ウイルスに脳を破壊され、痛覚を喪った感染者は凄まじい膂力を発揮する。大挙して押し寄せる怪物を留めるためには、こうして防がなければならなかったのだ。

しかし、少女の力は感染者を遥かに凌駕する。

バリケードを排除することだって造作も無い。

「どうする？ はんく」

「……玄関せこを抜ければポイントは目の前だ。撤去できるなら任せる」「んー！」

腕を回し、少女は意気込んで解体作業に取り掛かった。

小さな体で自分より大きな障害物を片付けていく。雪崩を起こさぬよう、上から少しずつ降ろす地道な工程を繰り返す。

問題は、このメインホールには腐った邪魔者が蟲のように湧いてくることだ。

バリケードを崩せば崩すほど、物音を聞きつけてそこらじゅうから飢えた獣が溢れてくる。

唸り声。腐敗臭。血の気配。

死の濃度が、一気に膨らみ上がっていく。

「ええい、奴らとんでもない数だな畜生ー！」

「今の『LISA-001』は無防備だ。近づいてくる敵を全て排除するぞ」

「了解です。誰もバリケードに近づかせません！」

——生死を賭けた最後の防衛戦が、銃声の二重奏によって幕を開けた。

感染者の数に限りはなく、反して対抗手段はたったの二人。

ゆえに神経を研ぎ澄ます。兵士としての連携を、極限まで強化する。

「リロード」

ラジャ  
「了解！」

ハンクが弾倉を交換する。その隙をゴーストが埋めるように、感染者の頭を吹っ飛ばす。

ゴーストが弾を込める時は、ハンクが無防備な背をカバーする。

前線に一切の綻びが生まれぬよう、消耗した弾数すら互いに把握し、徹底的な連携を築きあげた。

たかが二人の兵士。されど、その防衛戦線は城塞が如く。

無限に迫る活性死者を寄せ付けない。確実に中枢神経を破壊し、屍の山を増産する。

——その時だった。

■■■■■

メインホールに、突如として悪臭の津波が到来した。

腐肉を絞った脂汁で打ち水でもしたかのような匂いの災害。ガスマスク越しでも鼻が折れ曲がりそうになるほど強烈な異臭の津波だった。

「げほっ、なん、だ？ この臭い？」

這い寄る汚濁。粘質な足音。

感染者の群れを蹴散らしながら——否。喰らい尽くしながら異形は姿を現した。

マザー。『LISA-001』の製造者だったもの。

しかし、その姿はほんの少し前に目撃した時よりさらに醜悪な変異を遂げていた。

例えるなら、様々な動物の死体を滅茶苦茶に継ぎ接ぎして造った肉塊のようなもの。



「外は豪雨。引火の心配は無い。瓦礫さえ撤去できれば、いくらでも対策は講じられる」

それ以上の言葉は不要。

防衛線をゴーストに一任し、ハンクは豹の如く駆け出した。



ハンクは対生物兵器戦に慣れている。

プラント43やタイラントシリーズ、そしてマザーとも激闘を繰り広げ、これを制してきた。

だからこそ囷役に相応しい。怪物の習性を熟知したハンクだからこそ、陽動役が最適なのだ。

「こつちだ、来い！」

メインホールを駆け、邪魔者をナイフで始末しながら死神は煽る。血肉を貪っていたマザーの瞳無き顔が、ゆっくりとハンクを向いた。

環形動物を想起させる伸縮自在の口をぐばっと開き、悲鳴と金切り声を混ぜ合わせたような咆哮を張り上げる。

(聴覚は健在のようだな)

マザーが動く。ハンクは階段を全速力で駆け上がる。

行く手を塞ぐゴミの山を登り、一心不乱に上を目指す。

敵はマザーだけではない。新鮮な馳走へありつこうと四方から伸びる腕を躲し、切りつけ、盾を持った獅子の像の元へ辿り着く。

「私はここだ」

天井へ向けて発砲する。距離があればガスや体液に引火しない。ハンクはバリケードへマザーが向かわぬよう、一心に注意を引き付けた。

べちゃべちゃと粘着いた重々しい足音が響く。巨体からは想像もつかないスピードを伴って、マザーはガラスを擦り合わせたような鳴き声を爆発させながら突進した。

再びハンクは動き出す。

像を離れ右方へ。マザーが到達するより先にドアを蹴り開け、図書室へと侵入する。

(敵影5。排除可能)

ぼうつと呆けている感染者に死を見舞う。的確なヘッドショットで脳を木っ端微塵に砕き、脅威を無力化していく。

全て物言わぬ屍へと変え、ハンクは床を蹴った。

跳躍し、そのまま前のテーブルを踏み台にして、2階へ続く階段の手摺を掴んだ。

よじ登っていると、ドアが吹っ飛ばされる音がした。

出入り口より遙かに巨大な体にも関わらず、マザーは蝮の如く穴をすり抜け、相変わらず死体を拾い食いしながら追って来る。

「来い！」

誘う。

図書室の二階へ。逃げ場のない細道へ。

「■■■■」

マザーは鎌首をもたげ、原始的に笑った。

ぐじゅぐじゅと泡を吹きながら、『そこから先は無いぞ』とでも嘲笑するかのよう。

事実、ハンクの行く手は塞がれたも同然だ。

道は2つある。ひとつは警察署西館3Fへと繋がる道。もう一つは床板に穴が開いた道なき道。

西館へ逃げた所で意味は無い。むしろ狭い廊下へ追い込まれるだけだ。おまけに感染者やリッカーも大量に息を潜めている。

いくらハンクとて、マザーに追われながら数多の獣を相手取るのは自殺行為に等しい。

かといって穴から飛び降りるのも愚策だ。降りた隙を狙われてしまう。

マザーは予想以上に機敏で、恐ろしく速い。腐敗した水死体のように膨満だというのに、小回りの利くハンクとの距離を着実に殺していくほどだ。

単純な馬力が違う。追いつかれるのも時間の問題だろう。



ワな存在ではない。そも、殺害ではなく足止め程度の腹積もりだ。

——そのつもりだった。

「……………」

しかし、マザーはピクリとも動かない。

背中 of 巨大な瘤に突き刺さり、体を押し潰しているシャンデリアを引き抜くような抵抗を見せない。

腕は力なく倒れ、皮膚が筋肉の補助を失って弛みきつている。腐敗ガスも発生源が活動を止めたせい、空気に薄められて霧散していくほどだ。

(擬死か?)

頭を撃つ。

一度ではない。マガジンをひとつ空にするほどの弾丸を撃ちこんだ。

無数の穴が穿たれる。どす黒い血が溢れ出すと、火花を喰って一気に燃え上がった。

肉塊が一瞬で火の海に呑みこまれ、バチバチと脂が弾ける、焦げ臭い大合唱が開催される。

それでも、マザーは動かなかった。

(死んでいるのか?)

念には念を。ホルスターから手榴弾を取り、ピンを抜いて転がした。

傍を離れ、物陰へ。そして爆発が到来する。

硝煙が晴れる。燃え盛るマザーの頭は、潰れたトマトのように爆砕されていた。

依然、沈黙は保たれたままで。

「……………」

死んだ。

そう、結論付けるほかになかった。

(こいつはどれだけ感染者を捕食しようと傷が癒えていなかった。タ

イラントとの戦闘で限界を迎えていたのか?)

理由が何にせよ、動かないのであればどうでもいい。

元々時間稼ぎが目的だ。それは十二分に達成したと言える。

ならば速やかに脱出しよう。ハンクは踵を返し、少女たちが待つ玄関へと駆けていった。



「はんく！ バリケード退けたよ！」

「よくやった」

死体の森と化したメインホールに幼いソプラノが響く。

ホール中にあれほど狂い満ちていた魔物の気配は枯れていた。感染者はほぼ駆逐されたらしい。

呻き声のひとつも聞こえない。誰も喋らないと、雨音がザアザアと外から自己主張してくるほどだ。

「隊長、奴は？」

「活動を停止した」

「……死んだんですか？」

「確証は無い。だが事実として奴は動かなくなった。頭も砕いた。少なくとも当分は動けんだろう」

どれだけ強靱な不死性を誇ろうが、頭を木っ端微塵に砕かれた拳句、全身が燃えて生きていられるB・O・Wはいない。

仮に生きていたとしても脱出は目前だ。事実上の脅威は消えたに等しい。

ハンクたちは警察署の入り口を出た。

雨が降っている。土がぬかるむ程の雨だ。

少女は「冷たい」と眉を顰めながらも、初めて見る雨や土に、少しだけ興奮を覚えていた。

『こちらナイトホーク。ハンク、あんたの姿がこっちでも確認出来た。今は亡者どもの影も少ない。早く正門まで来てくれ』

「すぐに向かう。——聞こえたな？ 行くぞ」

『ところで、その子供たちが例の回収対象か？ こりやまた随分可愛



らしいお供だな。死神よりハーメルンの笛吹きって感じだ』

「……子供たち?」

子供に当たる同行者は『LISA—OOI』ただひとり。しかし、ナイトホークが冗談を言ったようには聴こえなかった。

上空からハンクたちを見下ろすナイトホークの視野はずっと広い。

ならば、彼の眼には一体何が映った——?

「——正門に向かって走れッ!!」

反射神経が爆発した。体に電流を流されたかと錯覚する。

ハンクは背後へ振り返りながら、まだ見ぬターゲットに向けて猛然と発砲した。

転瞬。

事態は、濁流に呑み込まれたが如く一変する。

ゴムの塊を思い切り叩きつけたような轟音が爆発したかと思えば、さながら蹴り飛ばされたボールのように、ハンクが恐ろしい速度で吹っ飛ばされたのだ。

「ぐあッ!」

「隊ちよ、がはっ!」

ハンクが冷たい地面へ雨粒と共に叩きつけられた瞬間、鉄骨で殴りつけられたような衝撃がゴーストにも襲い掛かった。

錐揉み回転。視界が攪拌され、頭から地面に墜落する。

視界が破裂した。眼が霞を植えられたようにぼやけ、チカチカと星が瞬き、耳鳴りが頭蓋を蹂躪してくるようだった。

「うぐ、くっ……! 隊長、な、何が起きて……!」

ほんの刹那、ほんの須臾。

たったそれだけの時間が二人を叩き潰した。

前触れもなく訪れた異変の奔流が、兵士二人を完膚なきまでに打ちのめしたのだ。

油断は無かった。ゴールが目前でも、誰一人として気を抜いてはいなかった。

ああそうだ。死神が油断するはずがない。彼が気を緩めるのは任務を遂行した後だけだ。

だからこれは、もはやどうしようもなかったのだ。  
天変地異に等しい、未曾有の襲撃に他ならなかった。

「はんく!? ゴーすと!」

『おいなんだ!? 何が起こってる!?』

この場の誰よりも鋭い少女ですら、ソレの存在に気付くことが出来なかった。

生体電気を感じ取るセンサーに引つ掛からなかった。気配を感じ取ることも出来なかった。

彼女の持つ五感——否——六感の全てが、捉えることすら叶わなかったのだ。

ソレは異形の怪物ではない。

巨大な肉塊だとか、この世のモノとは思えない醜悪な姿だとか、進化の袋小路に追い込まれた成れの果てだとか、そんなものでは断じてない。

——『L I S A — 0 0 1』と、瓜二つの女だった。

少女より長い、腰元まで伸びながらも、べったりと油ぎった銀系の髪。

乳頭や生殖器が存在しない滑らかなマネキンのような女体。

右腕の皮膚だけは火傷のようなケロイドに覆われ、癒着した五指が一本の肉槍と化している。

黄金の蛇の瞳は雨の夜に爛々と輝き、静謐に少女を見据えていた。

「……ままじやない」

ざあざあと重たい雨が降り注ぐ。水を孕んだ衣服が、肌にびったりと吸い付いてくる。

睫毛が取りこぼした雨粒が目には張り付き、視界が水中のように滲んだ。

それでも、少女は瞬きすら出来なかった。

「あなたは……誰?」

ざあざあと、ざあざあと。



しかし瞬時に再生する。女は咆哮と共に少女の首を掴み、逆に少女を投げ飛ばした。

「アンブレラアア……………!!」

「くっ！」

銃撃、輪唱。ハンクとゴーストは迫る炎の女を迎え撃ち、無数の弾丸を叩き込む。

効かない。まるで効いていない。当たっても火が生まれるだけ。雨を蒸発させ、白い水蒸気を散らすだけだ。

動きも速い。速過ぎる。ハンス・ウエスカーのような、視認できるかどうかとも怪しい敏捷性で迫ってくる。

「■■■■■■■■■■ツ!!」

炎の女の姿が消えた。

次の瞬間。業火を纏った右腕が、ハンクの胸に叩き込まれた。

「ツツ!!」

間一髪。

LE5を合間に挟み、致命の一撃を寸前で防ぐ。

しかし銃は折れ曲がり、外装が熱で溶解を始めていた。

刹那、炸薬音。

引火したマガジンの弾薬が弾け飛び、炎の女を怯ませた。

その一瞬を少女が捕らえた。電熱ブレードで雨を斬り、背後から首元目掛けて振るったのだ。

ぐるんと女が振り返る。少女の刃を避け、右腕で頭を殴りつけた。

熾烈な打撃が音の波を放つ。少女は歯を食いしばって堪え、女の膝を蹴り碎いて体勢を崩した。

「逃げてはんく！ 私を置いて行って!! 早く!!」

「……………っ！」

壮絶なダメージで飛びかかっていた意識を取り戻し、ハンクは事態を俯瞰する。

紅色のレンズが、雨の中で取っ組み合う二人の少女を反射した。

『L I S A — 0 0 1』と酷似した体……………匹敵する力……………そしてアンブレラへの……………私に対する明らかな憎悪。信じ難いが、あの女の正体

は)

シャンデリアの下敷きになり、息絶えたはずのマザーで間違いない。

(背には繭のような瘤があった。体を苗床とするように根を張り、養分を吸い取るかの如く脈打つ瘤だ)

繭。その比喩は正しかったのかもしれない。

感染者をいくら食べても癒えない傷。それは肉体が再生限界を迎えていたのではなく、そもそも再生させるつもりが無かったのではないか？

栄養を集中させ、繭としての役割を果たさせるため。

即ち肉体の再構築。怨敵を討つために、新しい肉体を得て生まれ変わったのか。

「わたしが止める！ その隙に逃げて！ お願いはんく、行って！ お願いだから！」

自分を捨てて脱出しようと、少女は力の限り叫んだ。

それが合理的なのだど理解して、少女は命を投げ打つ選択をした。ハンクも、ゴーストも、致命は免れたものの大ダメージを負ってしまっている。

これまでの戦いで蓄積したぶんもある。ゴーストはハンス・ウエスカーに翻られ、ハンクは少女との模擬戦や数々の戦いで消耗している。

これ以上は無理だ。残酷なまでの現実だ。

まして、新しく力を得たマザーを相手になど出来ない。少女の素人目でも理解出来る事実だった。

それにハンクの任務は達成されたも同然だ。「G」のサンプルは手に入れ、少女の研究データや毛髪も確保している。

もともと、本部は『LISA-001』の生死を問わなかった。

最善は回収だ。しかし、最低限遺伝子情報とデータさえ揃ってれば問題ないのだ。

ならば、少女がマザーを抑えている間に脱出するのが合理的だろう。

それを理解しているからこそ、少女は逃げろと叫んだのだ。

「アアアアアアアツツ——!!」

「はんく! もう駄目、これ以上止められない……っ!」

『ハンク、時間が無い! 騒ぎにつられて化け物どもが集まって来るぞ、どうするんだ!?!』

迫られる選択。

刻一刻と進む秒針。

しかし残酷かな。死神の答えは、ただひとつだけ。

◆『L I S A—001』を      ・回収しない      ・回収する

## End 1 : 最期の流星

「戦闘続行不可能。本作戰を終了し、これより本部へ帰還する」  
「……え？」

『LISA-001』が食い止めている今がチャンスだ。速やかにへりに乗り込め、ゴースト。この街から脱出するぞ」

「隊長……!?! まさか嬢ちゃんを見捨てるって言うんですか!?!」

雨が降る。重たい雨が、ゴーストの訴えを拒むように降り注ぐ。

ハンクは踵を返していた。視線をナイトホークのいるヘリコプターに定め、何の躊躇もなく歩き出した。

ゴーストは水飛沫を巻き上げながら走り、ハンクの肩を掴む。

「正気ですか!?! あの子を置き去りにして逃げるなんて!」

「正気はどちらか考えろ。己の役割を履き違えるな」

ハンクはゴーストの手を払いのける。

紅色の双眼が、ゆっくりとゴーストを視た。

「我々はアンブレラの狗だ。与えられた任務を遂行する……それが存在意義だ。慈善事業の真似事をしていても思ったのか？ 勘違いするな。我々はただの兵隊だ」

「しかし、それではあまりに!」

「目的は達成した。これ以上時間を浪費する意味はない」

冷たく鋭い、氷柱のような言葉がゴーストを刺し穿つ。

もはやハンクの思考に、『LISA-001』は含まれていなかった。

いいや。最初から眼中にすらなかったのかもしれない。

任務に必要だから保護した。任務に不要だから切り捨てる。

それだけだ。ハンクの芯は徹頭徹尾それだけなのだ。

少女の回収は絶対ではない。遺伝子サンプルと研究データさえ揃えればいい。

それらは全て手元にある。目的のアイテムは回収した。

ならば悠長に構ってる場合ではない。どれだけ猶予があるかハン

クは知らないが、核弾頭がこの街を焼き滅ぼすのも時間の問題なのだ。

「本当に何も思わないんですか。俺たちを助けてくれたあの子を、そんな簡単に見捨てられるんですか」

「お前の言い分を通すなら、むしろこの場を立ち去るべきだ。『LISA—001』はお前の死を望むのか？」

「っ……っ！」

「現状をよく噛み砕いてから思考しろ。私もお前も負傷している。だが奴は健在で強大だ。『LISA—001』ですら足を止めるのがやつの怪物だ。そんな状況でお前1人に何が出来る？ 無駄死にするだけだろう。それは『LISA—001』とて本懐ではない」

ハンクも、ゴーストも、これまでの戦いで傷を負い過ぎている。

そんな体たらくで、暴走タイラントを沈めた怪物に立ち向かえるわけがない。蹴散らされ、永遠の眠りにつくだけだ。

あるいは、抵抗できたとしても核の炎に焼かれて消える。

それは『LISA—001』も望まない。少女は自分が灰になろうとも、ハンクとゴーストが死ぬことだけは看過しない。

「選べ」

だから、あえてハンクはゴーストに選択権を譲渡した。

銃口を額に突きつけるという形で。

「U・S・Sとして帰還するか、ここで名も無い灰となるか。2つに1つだ」

「——俺は」

苦渋。苦悩。苦虫を噛み潰したように顔を歪める。

一拍の間。ゴーストは目を伏せながら、声を振り絞るように言った。

「俺は帰還しません。ここに残ります」

「……」

「約束したんです、彼女を外の世界に連れていくって。……あの子は、砕けていた俺の心を救ってくれた。地獄のきっかけを作った俺のことを赦してくれた。なのに約束を破って、嬢ちゃんを見捨てて、のう



のうと生きていくことなんて出来ない。例えそれが嬢ちゃん意志に反しても」

「それがお前の選択か」

「ええ。これが俺の答えです」

ゴーストは、その場に銃を投げ捨てた。

そつとガスマスクを外す。ヘルメットと共に放り投げる。

重々しい音響とともに、ゴーストはU・S・Sであることを放棄した。

「……」

ハンクは銃をホルスターに仕舞い、踵を返す。

手を下す必要は無い。どうせ死ぬ。

だから死神は鎌を振るわなかった。

「ご苦労だった。マルチネス」

激しい雨音の喧騒の中でも、その言葉だけは、はっきりとゴーストの耳を打った。

暗号名ではない呼称。もう二度と耳にすることはないかもしれないと、諦観を抱いていた唯一無二の名前。

ゴーストは息を吸うように理解した。

それは死神が送る、最初で最後の、殉職者に手向ける花束ことばなのだ。  
「……」

自然と、ゴーストの背筋は伸びていた。

踵を揃え、爪先を少し開く。右手を挙げ、額あなに添えて。

亡霊より精一杯の敬礼を、夜の雨を歩く死神へ。

ちらりと背後を見やる。

少女と炎の女は、既に戦闘態勢を解いていた。

戦う理由が無くなったからだろう。一度上昇したヘリコプターを止める術はない。

二人は互いに寄り添って、街が消えるまでの一時を、まるで今までの空白を埋め合わせるかのように、親子としての時間で費やそうとしていた。

割り込むことなどできない。少女は地獄の底を必死に足掻いて、最後の最後によく親子へ戻れたのだ。

それを邪魔するなど、ゴースト自身が許さない。

「……そうだな。これが最後の仕事だ」

騒動を聞きつけてきた感染者たちは、ゆつくりと少女の元に向かっている。

ゴーストは再び銃を取った。

セーフティを外す。初弾を排莖する。

兵士であることを棄てた男は、まるで亡霊のように死人の群れへ向かっていった。



「行つてしまった」

少女と乱闘を繰り返していた炎の女が、飛び去っていくヘリコプターの背を見て、全身の力を抜いた。

ぺたり、と濡れた地面に座り込む。

戦意の喪失。それを認めた少女もまた、赤熱した鋼の爪を引っ込めていく。

「まま」

「……リサ」

少女は少し戸惑いながら、炎の女の横へと座る。

女は憂いた瞳をほんの少しだけ和らげて、少女の頭をそつと撫でる。

瞼を閉じる少女。肩を寄せ合い、頭をもたれかけた。

どうして怪物から人型に戻れたのか。どうして再び理性を得たのか。

野暮な疑問は、全て雨に溶かして消えた。

今だけは、今この瞬間だけは、ただ穏やかに。

「こうしてゆつくりするのも、ずいぶん久しぶりな気がする」

「ん……」

「怖がらせてごめんね。どうしてもリサを行かせるわけにはいかな

かったんだ。……ブツたところ、まだ痛い？」

「ううん、平気」

「はは、そっか。リサは強いなあ」

途端、女はほんの少し顔を顰めると、異形の右腕を抑え込んだ。

心臓のように脈打つ槍の腕。既に焰は鎮火したが、まるで独立した生物のように今にも動き出そうとしている。

「その腕、やっぱり」

「う……く……い！ いや、大丈夫、大丈夫だ。耐えられる」

少女は何かを察知していたらしい。五感ではない第六感、生体電気を受信するセンサーが、右腕の正体を見抜いたのだろう。

女は精一杯の笑顔を作って、左手の指を右腕に喰い込ませながら平気だと告げた。

「ずっと謝りたかった」

ぽつり、と。

「最初はあなたのこと、なんとも思っていなかった。ただの作品でしかなかった。それだけの存在だったんだ」

雨粒のように、降り落ちる言葉。

「あなたの存在が大きくなっていくことに眼を背けてた。最後の最後でようやく気付けたくらい愚鈍だったよ。何もかも遅すぎた。何もしてやれなかった。その挙句、自分のエゴであなたを殺すことになった。正真正銘の大馬鹿だ」

「……」

「だけど、だからこそ、あなたを連れて行かせるわけにはいかなかった。アンブレラに捕まったら終わりだ。生きることを呪うくらい酷い目に遭ってしまおう。それだけは、どうしても見過ごせなかった」

「うん、大丈夫。全部わかってるよ」

「ごめんなさい……私の我儘であなたの命を奪ってしまうことを、どうか許して」

「大丈夫。大丈夫だから」

雨は止まない。

幾重も頬を伝う雫が、涙なのかわからないほどに。

「ね、聞いて。わたしね、人間になれたんだよ」

少女の言葉に、女は目を拭いながら首を傾げた。

少女はこの土砂降りに似つかわしくなくらい、まるで太陽のような微笑みを浮かべて、

「わたしは化け物。人間じゃない。体だけじゃなくて、心もずっとずっと冷たかった。でも、ままと、はんくと、ごーすとがね、教えてくれたんだよ。綺麗なもの、良いこと、悪いこと、美味しいもの。たくさんたくさん覚えたの。暖かいものがいっぱいあるって解ったの」

「……リサ」

「わたし、生まれてよかった。辛いこともたくさんあったけど、わたしの心は人間になれた。本当に生まれてよかった」

——ねえ。だから、どうか。

「ごめんなさいなんて、言わないで」

「っ……っ……」

目頭が熱い。

熱くて、熱くて、焼けてしまいそうになる。

ぽろぽろと大粒の涙が数珠のように連なった。

止まらない。止められない。堰を切ったように溢れ出てくる。

唇は震えて、声押し殺すのに精一杯。

女はくしゃくしゃに顔を歪めて、胸に溜まった後悔という汚泥を洗い流すように、押し殺しながら嗚咽を漏らし続けた。

「あつ、あれ」

遠くに何かを見つけたようで、リサは彼方を指さした。

赤い飛翔体が雲を裂いて飛んでくる。だんだんとこつちに近づいている。

街を焼き払う弾道ミサイルだ。もう見えるところまで来ていたか。

刻限は近い。

二人は互いに、融け合いそうなくらい身を寄せ合った。

「綺麗。絵本で見た流れ星みたい」

「……そうだね。こうして見ると、うん、悪くないかも」

雨と雷鳴が叫ぶ空を、一途に奔る死の行軍。

終幕もたらずはすのそれが、まるで燃える星屑のように美しい。

「ねえリサ。あなたのおかげで、冷たかった私の心は人間になれたんだ。今になってようやく、普通の幸せが何なのか理解出来た気がする。素敵なりサ、生まれてくれてありがとう」

やつと言えた。

謝罪ではなく、感謝を口にする事が出来た。

少女は嬉しそうに口元をほころばせて、優しく母を抱きしめる。死への恐怖は微塵も無かった。

こうして親子に戻れたことが、二人の一時を燦然と輝かせてくれたから。

「ママ」

「なに？」

「んー。よんだだけ」

「ふふ、そうかい。よしよしおいで、撫でてあげよう」

「んう、ママ。ママ。まーま」

「ああ聞こえているよ。——とても、とても、綺麗な声だ」

◆  
【使い古された手記】

ラクーンシティが消滅してから数ヶ月経つ。

しかし、どれほど時が過ぎ去ろうとも、世界中がああ惨劇と我が社の話題で持ちきりだ。

テレビは毎日のように幹部連中の顔を映し、高飛車なコメンテーターや老いぼれの専門家が渋い顔で批判を繰り返している。

というのも、アンブレラが事件の関与を否定して、アメリカ政府を相手に訴訟を起こしたからなのだが。

街道ではデモ行進まで行われ、アンブレラ敗訴を求める署名運動は

爆発的な勢いで票を集めているらしい。

かつてアンブレラといえば尊敬と羨望の的だったが、今では別の意味での的になっている有様だ。

この時勢でアンブレラ社所属と曝露しようものなら、昼の大通りで私刑に遭つても文句は言えないだろう。

生存者たちは結束して、あの事件を無かったことにはしまいと、ラクーンシティで起こった地獄の様相やアンブレラの悪行を次々と暴露しているのだという。

おかげで、世論はもう完全にアンブレラを糾弾する方向に傾いている。お上は火消しの毎日で大忙しだが、既に口封じだとか金を握らせるとか、そんなレベルでは收拾がつかなくなっている。

確かに証拠は街ごと消えた。だが事件が大きすぎた。

あれほどの規模の悲劇があつたとなれば、生存者の声を完全に封殺することは出来ない。

幾らアンブレラが強大だろうが、流石に世界中を敵に回したとなつてはいつまで持つかわからない。

そんな切迫した状況でも、私は目の前のデータから眼を離さずにはいられなかった。

U・S・Sアルファチームの生き残り……死神と呼ばれる男が持ち帰った極秘データだ。

人間としての姿を保ち、知性を備え、戦闘能力は非常に高い。おまけに電気を自在に操れるときている。

能力の応用性も凄まじく、これが本当なら既存のB・O・Wを遥かに凌ぐ暗殺兵器となるだろう。

タイラントシリーズのような圧倒的破壊力はない。紛争地帯のど真ん中へに直接投入するような使い方は出来ないが、誰にも気づかれず要人を暗殺する……あるいはスパイ紛いの活動だって可能なはずだ。

なにせ言語能力も識字能力も備わっている。諜報、斥候、暗殺にもってこいの性能だ。

これは使える。私はそう確信していた。

コードネームHUNKが持ち帰った『LISA-001』の毛髪をクローニングし、量産型の『LISA』を製造できれば、アンブレラに頼らずとも裏の武器業者を通じて一財産を築くことができる。

確か、ウラジミール大佐のいるコーカサス研究所でも新たな計画——『T-A・L・O・S計画』だったか——を進めているはずだ。

その新兵器と『LISA』のふたつがあればアンブレラ復興も……いいや、アンブレラを越えることも夢ではない。

もはや監視員などという身分に甘んじる必要も無い。別にアンブレラが倒産しようがどうでもいい。

新たな組織、新たな場所で、大金が手に入りさえすればそれでいい。

——『LISA』に関する研究は、少数の精鋭スタッフを金で引き抜いて極秘裏に実行した。私には研究など出来ないからな。

情報封鎖は『T-A・L・O・S』以上に徹底した。

どうも製薬企業連名によって、批判逃れのために対バイオテロ組織が立ちあげられつつあるという話がある。

社内にスパイが紛れ込んでいる可能性を否定できない今、例えアンブレラ相手であっても情報を漏らすわけにはいかない。

全てを明かすのは完成してからだ。

少女の躰で、類稀な知性と身体能力で、確実に標的を殺害する暗殺者。

タイラントの破壊力とコンピュータ制御の精密さを融合させた、いわば生きた戦車であるT-A・L・O・Sとは違う。全く新しいB・O・Wの製造だ。

ああしかし、余計な感情は排除するようにはなくてはな。

データ通りの情緒は邪魔だ。感情など、生物兵器にもつとも不要なバグなのだから。

《ニコライ・ジノビエフ》

◆  
2003年2月18日。

クリス・レツドフィールドとジル・バレンタインを含む、対バイオハザード私設部隊の一同は、アンブレラ社ロシア支部にて新兵器開発が行われているという情報を掴んだ。

極寒が支配する雪と静寂の大地。二人は悪夢の製造工場へ乗り込み、新兵器の破壊を目論む。

しかし既に工場は壊滅。制御を失ったB・O・Wと感染者に溢れ、ラクーンシティを思わせる地獄の様相へと変貌していた。

多くの犠牲を伴いながらも、二人は偽装エレベーターを探し出し、地下数百メートルに隠された大規模の研究施設に辿り着く。

アンブレラに残された最後の篝火。想像を絶する規模の生物兵器量産工場。

二人は息を呑みながら、不気味なほど清潔な銀の地下要塞を駆けて行く。

「ここは……」

「たぶん……生物兵器の実験場……」

ハンター、カメラ、エリミネーター……数多のB・O・Wによる総力戦を潜り抜けた先に待っていたのは、ドーム状の巨大な部屋だった。

目を焼かれるほどの照明が天井を占拠している。中央には巨大な円盤状の接続器のようなものが存在し、真下には用途不明の奇妙なオブリジェが中心を囲むように整列していた。

『珍しい客だ、歓迎しよう』

部屋のスピーカーが目覚め、壮年の男の声がドーム中に反響した。『諸君らも戦いを生業としているなら解るだろう。命を削り合う時間にこそ至福がある。流れる血こそ、命の歓喜だ』

「……なんだ？ こいつは」

思わず困惑を吐くクリス。しかし言葉だけで理解出来る。名状し難い狂気の渦が、声の主に巣食っているという事実だけは。



この人物こそが、二千万人に一人の完全適合者——セルゲイ・ウラジミールに他ならなかった。

『紹介しよう、アンブレラの新製品——テイロスだ』

けたたましいサイレンが突如として爆発する。

瞬間、二人の眼前に巨大な影が降り立った。

全身を金属装甲で包んだ巨漢のような怪物だ。

かつて遭遇したタイラントシリーズとは決定的に違う、機械的な冷感を帯びた生物兵器。

装甲の狭間から覗く蒼褪めた肌は生気を感じさせず、もはや生き物というよりは、肉を持ったロボットと表現する方が相応しい。

何より右腕に担ぐ四連装のロケットランチャーが、既存のB.O.Wとは一線を画す兵器としての能力を証明していた。

『それともうひとつ、面白いものを見せてやろう』

男の声が号令のように、更なる刺客を呼び寄せる。

テイロスの背後から小さな影が飛び出した。それは怪物の肩へ無音で飛び乗って、クリスタたちの前に姿を現す。

テイロスとは違う、異形を感じさせない風貌だった。

しかしゆえにこそ、異様のあまりに言葉を失う。

何故ならそれは、人の子供としか思えない姿をしていたのだから。『私の同志がプレゼントしてくれた新兵器だ。驚いただろう？ 私も随分驚いたよ。まさかこんな童のような兵器を開発していたなんてな』

「兵器ですって？ ふざけないで！ どう見てもただの子供じゃない！」

「クズどもめ！...そこまで堕ちたか！」

『ああそうだ、確かに子供だ。だが中身は違う。さあリサ、お前の力を二人に見せてやりなさい』

合図を境に、漆黒の瞳を金色が冒す。

銀の髪。ボデイラインを映す漆黒の防弾スーツ。

戦闘服を着せられた女童にしか見えないソレは、冷えた金属のような表情で二人を見下ろした。

——華奢な細腕から、赤熱する鋼の爪を引き伸ばして。

『楽しんでくれ。この上ない痛みを！』

End 2: The death can't add  
ie

(状況は圧倒的に不利だ)

無視できないダメージ。秒針を進める有限の時。常軌を逸した未知の強敵。

少女を援護し、女と戦うのはあまりにリスクが高すぎる。

そも、目の前にゴールがあるというのにわざわざ危険を冒す意味は無い。

少女の生存は絶対条件ではない。このまま見捨てたとしても何ら問題ない。

へりに乗り込み、ラクーンシティから脱出するのがベターな選択で間違いない。

「……」

この男に情は存在しない。

あるのはたったひとつの行動原理。任務を必ず達成するという忠義のみ。

その邪魔になるなら仲間だろうと切り捨てる。自分の命だつてどうでもいい。

仲間の死臭は嗅ぎ慣れている。少女を切り捨てるなど、ハンクには造作も無いことだ。

ハンクはそうして生き残ってきた。ラクーンシティに来る前から、過酷な任務を全て成功に導いてきた。

——そう。全てだ。

ハンクが失敗したことは一度も無い。悉くを最善の形で叶えてきた。

例えば隊が全滅しようとして彼だけは生き残る。絶対に任務を成功させる。

ゆえにこそ、ハンクは死神と畏れられたのだから。

「……………」

別に絆されたわけではない。

憐れみも同情も、庇護欲だっって一片たりとも存在しない。

これは誇りの問題だ。

任務を完璧な形で成し遂げてきた、歴戦の兵士としての矜持なのだ。

アンブレラは望んだ。少女の生還を。

最優先事項でなくとも、アンブレラはそう望んだ。

ならば、その主命に忠を尽くそう。

例えこの身が果てようとも、主の願いを叶えよう。

それこそが、ハンクの持つ唯一無二の人間らしさなのだから。

失敗は無い。敗走も無い。

全ては与えられた責務のために。全てはアンブレラへの忠誠のため。

兵士は再び、戦場へ舞い降りることを選択した。

「ナイトホーク。ヘリには何を積んでいる」

『標準的な戦闘ヘリと変わらない。機銃に予備の物資、目ぼしいのは四連装ロケットランチャーくらいか』

「……了解した。ゴースト、これを持ってヘリに戻れ」

「隊長、何を考えて……?」

強引に押し付けられたサンプルの数々を手に、ゴーストは困惑を示した。

ナイトホークの下に行けとハンクは言う。目的の品を持って、ヘリコプターまで帰還しろと。

それはつまり、ハンクがこの地に残ることを示唆している。

「騒ぎを聞きつけて感染者たちが集まりつつある。機銃で上空からカバーしろ」

「!」

「私は『LISA-001』の援護に向かう」

「——了解!」

ゴーストは力強く頷き、全速力で走り出した。

ハンクは佇む。暗く重い雨の中で、機械のように冷たい瞳を標的に向けて。

「ナイトホーク。猶予はどのくらいだ」

『……粘って15分が限界だ。それ以上は危険すぎる』

腕時計に手を伸ばす。タイマーを15分にセットする。

開幕の電子音が鳴動した。

ライティングホーク

白銀の拳銃を引き抜いて、ゆっくりと一步を踏み出していく。

「ダメー！ ダメだよはんく！ 今すぐ逃げて!!」

幼く甲高い声が雨空を衝いた。ハンクが立ち去っていないと勘付いたらしい。

けれど少女の制止は意味を成さない。元より耳を貸すつもりなどない。

「来ちゃ駄目なのっ!! おねがい……!」

必死に母を抑え込み、歯を食いしばりながら懇願した。

体を焼かれる痛みにも耐えて、今にも振り解かれそうな猛獣の如き剛力と戦って、振り絞るように訴えた。

——闊歩。

死神は水溜りを鋼鉄の意志と共に踏みしめる。

誰にも止められないと悟らせるほどの、重々しい一步だった。

「本当に死んじやうかもしれないんだよ……!?! はんく、もうボロボロだもんっ! お願いだからっ……逃げてよおっ!!」

「死なないさ」

刀のように鋭い否定が、雨を斬り払って少女へ届いた。

透き通るほど鋭い言葉だった。そんな心配は塵芥に等しいと、少女の憂いを断頭するような言葉だった。

ああそうだ。全くもってその通りだ。

紅色の双眼を闇夜に浮かべるこの男に、死などという安楽が訪れるものか。

どれだけ過酷な任務だろうと、どれほど困難な逆境だろうと、彼だけは必ず生き残ってきた。

腕を挽がれ足を千切られようと、この男だけは死が避けるのだ。

何故なら。何故なら彼は、

「ここは戦場だ……運命は自ら切り開く」

——死神は死なず。



「はんく……」

無謀だと唇を震わせた。

勝てるわけがないと絶望した。

少女は他者の生体電気を受信し、様々な情報を解析アナライズすることが出来る。

対象の大まかな位置に加え、バイタルサイン、感情、感染や疾病の有無……その応用性は多岐に渡る。

だからこそ、少女にはハンクの容態が克明に理解出来るのだ。

全身の内出血。蓄積し続けた疲労。誤魔化しても誤魔化しきれないダメージの数々が、少女の眼にはつきりと映り込んでいた。

満身創痍と変らない。戦闘服を脱げば、どれほど痛々しい痣と傷の苗床になっているか分からない。

「はんくっ……い！」

ハンクはもう戦えない。戦える体じゃない。

彼はただの人間だ。秒単位で傷が塞がることもなければ、拳で岩を砕くパワーもない。動体視力を越えるほどの高速移動なんて出来るわけがない。

そのはずだ。そのはずなのに。

どうしてだろう。少女には、この男が膝を折る未来など欠片も脳裏を過らなかつた。

「離れる『LISA-001』。そいつの狙いは私だ」

「で、でもっ！」

「水は電気をよく通す」

意図を読み取れず、少女は一拍硬直する。

「屋上には貯水タンクがある。炎を掻き消すほどの大量の水だ。分かるか? 『LISA-001』。前と同じだ。今度はお前の番だ」

「……!」

ハツとするように理解した。

前と同じ。確かにそうだ。その通りだ。

立ち位置がまったくの反対だが、あの時とよく似ているじゃないか。

「3分! 3分だけ待ってて!」

「ああ」

「……信じて!」

「ああ」

少女は女の拘束を解き、一目散にその場を離れた。

雨に紛れて消えていく小さな後ろ姿を見届ける。

残されたハンクは、陽炎を羽織る女へ向けて銃口をかざした。

「アンブレラ」

女の瞳孔が不気味に開く。

雨を蒸発させるほどの炎熱。じゅうじゅうと水の悲鳴が焼べられ、

足元の水溜りはあつと言う間に姿を消した。

右腕が鬼火のようにゆらりと燃ゆる。ドクドクと肉が拍動している。

少女と似た美しさに、醜悪な肉塊を添えた異形の姿。

しかし白煙を纏う女の瞳は、確かな理性を帯びていた。

「お前たちに恨みは無い。でも、あの子を連れて行かせるわけにはいかない」

声帯が馴染んだか、女の言葉は流暢だった。

かつての女研究者の面影はない、『LISA-001』と酷似したナニカ。人の心を捨ててアンブレラの傘下に下り、ウイルスに人間であることすら忘却させられた女。

その歪な旅路の果てに、姿も振舞いも、生前より人間へ近づいてしまったのは何たる皮肉か。

「リサは私と共に終わらせる。それが私に出来る、親としての最期の

仕事。お前たちの傀儡にはさせない」

槍の腕を構える。

唇を引き裂かんばかりに牙を剥く。

「アアアンブレラアアア———— ツツ!!」

「ツ！」

絶大な咆哮を連れ、女は肉の砲弾と化した。

ドガンツ!! 地が爆ぜる。炎の軌跡を流星の如く闇夜へ刻み、蛇行しながらハンクの命を刈り取りにかかる。

槍の右腕が放たれた。ハンクは寸前で身を投げ出し、地面を転がって必殺を躲す。

体勢を立て直すと共に引き金を引く。落雷のような発砲が大気を裂き、50口径の凶弾が女の胸を抉り抜いた。

熾烈な反動が腕を伝い、肩を殴る。しかし放たれた弾丸は女を怯ませ、更なる連撃の間を生み出す。

撃つ。限界間際の肉体に活を入れ、心臓目掛けてライティングホークを叩き込む。

(妙だ)

血肉の華を咲かせながらも止まらない炎の女に、ハンクは一抹の疑問を抱いた。

(確実に心臓へダメージを与えているというのに全く衰える気配が無い。T-103より筋肉層の薄い女なら、弾は確実に深く届いているはずだ。何故少し怯むだけで済んでいられる?)

心臓はT-103ですら一気に弱体化するほどの急所だった。ナイフで刺し穿っただけで簡単に力を失い、溶鉱炉へ突き落とすことが出来たほどののだ。

生物である以上、心臓を破壊されれば絶命は免れられない。それはB・O・Wであつても逃れられない宿命である。

場合によっては、的が小さく頑強な頭蓋骨に守られている脳よりも、効率的にダメージを与えられるだろう。

だというのに、女は全く弱る素振りを見せずにいる。

音速を越えて叩き込まれる50口径の銃創すら、数秒とたたずに塞



がってしまおう。

『LISA-001』が背中から心臓を貫いた時も意に介していなかった。……まさか、心臓の位置が違うのか?」

タイラントシリーズのように右に寄っているなどという話ではない。根本的に胸の中に存在しないのではないか?」

炎の女は繭を経て変異した怪物だ。それを昆虫と似たシステムと仮定するなら、液化化した体組織が肉体を再構築したことになる。

仮説が芽吹く。外面は人間に近くとも、あの女の中身はヒトと全く異なる構造に進化したのではないかと。

(頭を狙おうにも、ただでさえ小柄なうえにあのスピードでは狙撃で きん。胴が有効打に成り得ないなら別の弱点を探すしかない)

即座に戦法を切り替える。ハンクは攻撃の手を緩め、右手をあげて合図を送った。

上空に座するヘリコプター、周囲一帯の感染者を駆逐していたゴーストへ。

「掃射しろ! 奴を狙い撃て!」

瞬間、金属の豪雨が炎の女へ降り注いだ。  
滅茶苦茶な炸薬音が津波と化けて雨を呑む。毎秒何百発というガ

ンシップの自動機関銃が火を噴き散らし、夥しい弾丸を地表に向けて吐き出した。

「■■■■■■■■■■——ツッ!!」

咆哮と共に女が消える。人間の動体視力を超越した速度を纏い、あらゆることか銃撃の嵐へ突っ込んできた。

身を振じり、逸らし、地を蹴って宙を舞い、踊るように女は弾の嵐を掻い潜る。ひとたび掠れば肉も骨もまとめてミンチに加工する死の落屑にも臆していない。

元がデスクワーカーの研究者とは思えぬほどの身体能力。ハンクの予想も上回る機動力をもって、女は瞬く間にヘリコプターの真下へと潜り込んだ。

「上昇しろ! ヘリを落とす気だ!」

『分かってる！』

ナイトホークに操られ、ガンシップが急激に高度を上げていく。逃さんとばかりに女が跳んだ。アスファルトを全力で踏み砕き、迫撃砲の如く跳躍した。

すかさずナイトホークがスイッチを入れる。本来は誘導ミサイルを攪乱させるためのフレアをばら撒き、女の視界を奪うとともに焼き焦がす。

超人的な炎の女も空中では身動きが取れない。ゴーストはその隙を突き、機銃の掃射をもつて迎え撃った。

「喰らいやがれ!!」

「ッ!!」

女は強引に身を捻り、到来する破壊の礫を背中で受け止める。

ザクロのように肉が弾けた。露出した骨まで割れ砕け、髄液が雨に溶け混じった。

だがしかし、傷は瞬時に消えていく。タイラントシリーズに匹敵、いやそれ以上の自己再生能力が、機銃すら致命まで届かせず防ぎ切っていた。

「アンブレラアアアッ!!!」

——その時、夜に太陽が降臨した。

大気を破裂させるほどの爆熱が迸り、信じ難い現象が巻き起こった。

女の全身が日輪の如き焰に覆われ、人の形をした業火と化したのだ。

あまりの熱に銃弾すら溶け落ちて、威力を大幅に削ぎ落されるほどの猛炎。それでも女は燃え尽きず、咆哮を轟かせながら隕石の如く着地する。

「なんなんだこいつは……!!? こんなのだうやって倒せてんだ!?!」  
今までの怪物と次元が違う。認めざるを得ない特異点がそこにあった。

銃弾を削ぐほどの炎熱など正気の沙汰ではない。ましてやそれを一個の生物が操るなど。

(あまりに異常すぎる。自分自身を燃やして熱の壁を作るだ？　いくら強靱な再生能力を持つとうと不合理にもほどがある)

理に適っていない。端的に言えばそれが奇怪極まりないのだ。

自在に電気を操る『LISA-001』も、植物の規範を越えたプラント43も、自然を逸脱すれど生物としての枠組みを超えることは無かった。

デンキウナギやシビレイイのように、電気を操る生物は他にも存在する。驚異的な速度で葉を閉じるハエトリソウも、言ってしまうえばプラント43の縮小版だ。

だがこの世界に有史以来、自らを燃やす生物が存在しただろうか？　いない。そもそもほとんどの生物は炎に耐えられるようになっていない。

生態の一部に自焼を組み込んだユーカリのような種もいるにはいる。だがそれは、あくまで生存戦略の一環なのだ。

(この女は生存を重きに置いていない。明らかに命を捨てている。何が何でも終止符を打つつもりか)

比喻でもなんでもない。女は命を燃やしていた。

邪悪なアンブレラに娘を連れて行かせるわけにはいかない。ただそれだけを燃料に、例え灰になっても構わないという覚悟の体現。

全ては『LISA-001』のため。少女を呪われた運命から、死という免責をもって解放するため。

母を衝き動かす炎の意志が、闇夜を朱く焼き尽くすのだ。

(――弱点はどこだ)

観察に徹する。

炎を纏い、炎を散らし、炎に生きる女を掻い潜りながら。

(綻びが必ずあるはずだ。不死身の生物など存在しない。まして付け焼刃で体を作り変えた不安定なマザーなら)

考えられるのはスタミナか。あれほどの燃焼を続ければ『LISA-001』のようにいずれ枯渇する。それ以前に熱で自壊するのは必ずだろう。

だが持久戦は選べない。こうしている間もタイムリミットは迫っ

ている。一刻も早く始末しなければ全てが無に帰す。

(どこだ。どこにある)

火球が飛んでくる。全力で身を投げ出して躲し、物陰へと滑り込む。

ライトニングホークをリロードする。しかし闇雲に撃つても効果がない。やはり弱点を穿つしかない。

(――)

ふと。

炎熱で歪む陽炎の海に浮かぶ、小さな小さな旗印に気付く。

炎が濃すぎる部位がある。炎の根源とでも言うべき場所か。

(あの槍の腕……余所と比べて明らかに発火量がおかしい。むしろ腕から炎が広がっているような)

思い返してみれば最初に炎を吐いたのも槍の右腕だった。あの腕からは耐えず体液が染み出していて、空気に触れる度に燃え盛っていたのだ。

そう、体液。あれは体液の源泉だ。

(マザーは『L I S A ― 0 0 1』への防衛反応から可燃性の体液を獲得した。燃える血だ。脈打つ腕から絶えず血液を体外に送り出しているという事は、まさかあの腕そのものが……)

思考した時には既に、ハンクの足は動いていた。

全力疾走で雨を駆けた。行先は警察署の壁際、屋上のバルコニーへ繋がる梯子の元へ。

「逃がさない!!」

女が追ってくる。

鬼のような形相で呪詛を交え、ハンクを上回る圧倒的な膂力を爆発させて、風を裂く破壊と化してやって来る。

槍の腕が飛ぶ。ハンクは間一髪で滑り込む。

頭上擦れ擦れを槍が通過し、警察署の壁へ突き刺さった。

瞬く間に壁が溶け落ち、赤熱した粘土が雨を焼いた。

女は歯を剥き、己が身を焦がす炎の激痛すら意に介さず、ただただハンクを仕留めんと腕を振り回す。

「ガアアアアッ!!」

「くっ……!」

振り返らず走り続け、遮蔽物を利用して爆熱を避けていく。戦闘服では防げない熱波の洪水が背中を焼いた。燃えていないところが奇跡だった。

噛まれれば終わりなどという生温い次元の話ではない。女があと5mでも距離を殺せば、骨までグズグズに溶かされる焔の脅威が牙を剥くのだ。

「奴を撃て! ゴースト!」

「駄目だ隊長、その距離じゃあなたも被弾してしまう! 蜂の巣になるぞ!!」

「構わん撃て! 今しかない!!」

ゴーストは迷いを捻じ伏せ、機銃の引き金を振り絞った。

轟音絶叫。弾の嵐が女を跪かせんと降り注ぐ。

女は怒号と共に爆熱を滾らせ、生きる日輪へと変生していく。

「そのまま炎を吐かせ続けろ! オーバーヒートを狙え!」

「了解ッ!!」

ゴーストはハンクを巻き込むまいと、暴れ狂う機銃を腕が千切れんばかりに力を込めて制御する。

弾丸は女を射貫き続けた。しかし空対地機関銃の掃射能力であっても威力が足りない。

溶けた弾丸は肉の表面を削るだけで、女へ致命を与えない。

「おオオおおおおおおあああああああああッ!!」

それでも撃ち続ける。ハンクの判断に間違いはないと信じて、機銃が悲鳴を上げるほど撃つ、撃つ、撃つ!

だが次の瞬間、一発の跳弾がハンクの足を撃ち抜いた。

「ぐあッ!!」

「隊長!」

熱や壁で威力を殺されているとはいえ、大口径の凶弾には大腿の一部を吹っ飛ばす程度のパワーはある。

ボロキレのようにハンクは転がる。赤黒い血飛沫が足を伝って雨

を染め、ハンクの自由を奪い去った。

対して女は笑っていた。「馬鹿め」と嘲笑するように、溢れる炎の底で頬を釣り上げていた。

「——ゴースト、よくやった！」

しかし、度重なるダメージが女を限界へと誘っていた。

炎が増すということは血を失うということだ。失血による身体機能の低下が顕れたのだ。

致命傷には至らずとも、度重なる銃撃の二重奏は女を鈍らせるのに十分過ぎた。

「まだ……だ！ まだ終わってない……！！ アンブレラア……！！」

女は荒々しく息を吐き、たまらずその場に膝を着く。

それでも二つの眼はハンクを離さず、雄叫びを張り上げて大きく右腕を振りかぶった。

ハンクはもう動けない。いくら女が弱っていても、金属を溶け崩すほどの熱塊を振り下ろされたらひとたまりもない。

だから、こうして梯子の元まで辿り着いたのだ。

「はんく！！」

梯子の上——警察署のバルコニーから、翼を得たように跳び上がる小さな影。雄々しく宙を舞う少女の姿。

巨大な金属の塊を持ち上げている。警察署の貯水タンクを腕ぎ取ったのだ。

電熱ブレードで切れ込みを植えられたタンクを、少女は全力で放り投げる。

タンクの中には、女の業火すら押し潰すほどの水が眠っている——

「!?」

咄嗟に女はタンクを受け止める。水を被らぬよう左腕だけで防ぎきる。

少女はそれは許さない。軽やかにタンクの上へ飛び乗ると、電熱ブレードを薙ぎ払った。

洪水の竜が、女を一息に呑み込んだ。

「■■■■ツツ!!」

夥しい水が女を襲う。

炎は膨大な水蒸気と共に打ち消され、肉の躰を露わにする。

「3分びつたり!」

「上出来だ、『L I S A—001』」

刹那、ライトニングホークが稲妻の如く猛り叫んだ。

銃弾が脈打つ右腕を穿ち抜き、女は悲痛な絶叫を張り上げる。

叫びが仮説を証明する。心臓は腕そのものなのだ。

ハンクは反動で肩を痛めることも構わず、両腕で銃を抑え、精密に叩き込んでいく。

凄まじい血潮が舞い散った。女は悲鳴をあげて腕を庇った。

しかし、脅威は死神だけに留まらない。

「しゃああああアツツ!!」

その一閃は雷光の軌跡。少女の電熱ブレードが、女の右腕を斬り飛ばしたのだ。

腕の形をした心臓を失い、女は急激に力を失う。

血は水のせいで発火することも叶わず、少女の接近を許してしまう。

——ぞぶり。

女の胸を、少女の刃が刺し穿って。

次の瞬間。落雷に匹敵する大電流が、二人を光の底へ突き落とす。

◆ 「どう、して」

光が止んでいく。

心臓を奪われ、全身を電流で焼き切られ、それでも息を繋ぐ炎の女が、弱々しく少女の肩を掴みながら声を絞った。

「どうして分かってくれないの……! げほっ、アンブレラはっ、彼らは、決して善人なんかじゃないんだ! あなたを街から連れ出して、救ってはくれない! あ、あなたは、かは、ひゆ、死よりも辛い

眼に遭うだけなのに……どうして……!!」

悲哀と懇願の入り混じる、慟哭のような訴えだった。

女はアンブレラへの憎悪や復讐心で動いていたわけではない。ただ『LISA-001』の未来を憂っていただけだ。

アンブレラに従い、地獄を作る一端を担ってしまった、彼女だからこそ願いだった。

アンブレラは外道だ。この世のどんな裏側も稚児に思えるほどの邪悪で出来た怪物だ。

目的のためなら人道を捨てることすら厭わない。かつて女もそうだったから解るのだ。

罪なき人を生きたまま怪物の餌にした。投薬とウイルス実験の苗床にした。ヒトとしての尊厳を徹底的に破壊してきた。

肉塊になっても死ねない被検体がいた。殺してくれとしか言わなくなった人間を見た。チューブと機械に生かされているだけの死者もいた。麻酔無しで頭を開かれる若者の叫びを聞いてきた。

あの限り無い悪夢に、少女をこれ以上巻き込むことが許せなかった。身勝手と分かかっていても、拒絶せずにはいられなかった。

断言する。アンブレラに捕まるくらいなら死んだ方が遥かにマシだ。

だから命を狙った。U・S・Sを排除しにかかった。

「それなのに、なんで、どうしてあなたは、彼らに着いていこうとするの……!!」

「まま」

少女は女をそつと抱き留めて、静かに地面に腰を下ろした。

もはや女に抵抗する余力は無い。命が終わりを迎えかけている。

もともと歪んだ進化の果てに生まれた泡沫の奇跡だ。どのみち長くは持たなかった。

ゆえにこそ、少女は残された彼女との時間を、対話に費やすことを選択した。

「大丈夫。わたしはあんぶれらの思い通りになんかならない」

「……え?」



ハンクに聞こえないくらい小さな声で、少女は女の耳に囁いた。心を安心させるような、優しい力強さを孕んだ声だった。

「わたし、強くなったんだよ。自分を守れるくらい、強くなれたの」「リ、サ」

「わたしは生きる。絶対に生きる。ままを忘れないために、ここで見てきたことを失くさないために、絶対絶対生き続ける」

まるでダイアモンドのような、純粹で強固な生きるとい意志だった。

それは気弱で、大人しくて、いつも何かに怯えているようだった昔の少女とは違う、明らかな決意の焰だった。

——ずっと前から、少女は己の境遇を理解していた。自分の運命に『生』は無いのだと理解していた。

死ねばそこで終わり、生き残っても実験台という末路。

生きるか死ぬかの話ではない。そもそも少女に未来など無かった。だから少女は簡単に命を投げ捨てられた。せめてハンクたちが生き残るなら、母と最期を共に出来るなら、後悔は微塵も無かったのだ。そんな少女の諦念を払い除け、『生きる』と心から願わせたのは、死神が見せた決意と信念に他ならない。

ハンクは決して諦めなかった。絶望的な状況でも絶えず頭を働かせ、常に最善を選択し、不可能を可能に変えてきた。

眩しかった。例えばそれが任務のためでも、少女を救うべく再び戦場へ戻ったハンクの姿が、あまりにも強く焼き付いた。

「もう大丈夫。運命は自分で切り開ける。ままを悲しませるようなことには、絶対にならないから」

「……そうか。あなたは、私が知る頃よりずっと」

女の笑みが零れ落ちた。自嘲ではなく、それは紛れも無い喜びだった。

生物兵器としての力を持っていても、少女は生まれて一年も経たない赤ん坊だ。女の知る少女は、ただ無垢に後ろをついてまわる子供だった。

それがこんなにも、眩しく逞しく育っていた。

仲間と共に協力し、ハンス・ウエスカーや女を討つほど、強く強く成長していた。

遠いところに行ってしまったという寂しさと、強くなってくれたことへの安堵が、女に微笑みを与えたのだ。

「間違っていたのは私の方か。あなたを信じることが出来なかった私のせいだ。私はまた、間違えてしまった」

「ううん、違う。間違いないかじゃない。ままの気持ちは本物だった。間違いないかじゃないもん」

「……ふふ、本物か」

少女は人の心を読める。だから純粋な真心だったと断言できる。

女にとって、その言葉は何物にも代えがたい救いだった。

——だったら、私の役割はもう決まってる。

——あなたが本物のお母さんと認めてくれるのなら、あなたを信じて送り出しましょう。

——それが私に出来る、最後の最善だと信じます。

「ねえ。最後にお母さんと、約束してくれる？」

「うん」

「絶対にアンブレラに従っては駄目。どんな手段を使ってもいい、逃げなさい。必ず生きて」

「うん、うん」

「人に迷惑をかけちゃ駄目。私のようにはならないで。『L I S A — 001』という兵器じゃなくて、リサとして生きると約束して」

「ぜったい守る。やくそく」

「……本当に、良い子」

焼け溶けた左腕が頬を撫で、優しく銀の髪を梳いた。

喀血。女の体を赤黒く染めていく。

瞳が曇り始めていた。視線はどこか上の空で、既に見えているかど

うかも怪しい。

刻限は近い。けれど女は、陽だまりに腰を下ろしたように微笑んでいた。

「リサ、リサ」

「……まま」

「生まれてくれてありがとう。これだけはあなたに伝えたかった。素敵なりサ、あなたのお陰で、私の心は……人に……戻……」

腕は花の落屑のように、力なく地に落ちていく。

命の蠟燭が、静かに燃え尽きた音がした。

もう二度と、握り返してくれることはない。

「っ、っ」

瞳が震えた。覚悟していたはずなのに、目頭が燃えるようだった。

胸の奥から今度こそ何かが喪われたという実感が貫いてくる。

噛み締めるように唇を結び、もう一度だけ手を握る。

けれど、涙は無い。むしろ優しく労うように、そっと母の瞼を降ろす。

「わたし、生まれてよかった。ううん、これからきつと、もつとよくなる。絶対よくして見せるもん」

震える声を必死に抑えて、少女はくしゃくしゃな微笑みを浮かべて立ち上がった。

本当は埋葬してあげて、花の一輪でも添えたかった。

それを時間が許さない。せめて雨に晒されないよう、木の陰へと亡骸を運ぶ。

「おやすみなさい。どうか安らかに」

母の死を看取るのはこれが3度目になる。

3度目でようやく、母は眠りに就くことが出来たのだ。

きつと安心してくれただろうと少女は信じる。だから最後は笑ってくれたと、少女は胸をぎゅつと抑えた。

「行こう、はんく」

前を向く。未来を視る。

必ず生きてみせると、心の底に炎を灯して。

「大丈夫？ 立てる？」

「足をやられた。肩を貸してくれ」

「……ん！」



「梯子を下ろせナイトホーク。速やかに帰還する」

『了解。つたく、ひやひやさせるなよハンク。死神が死ぬなんて冗談じゃないぞ』

「隊長、上がれますか？ 今タンカーを」

「大丈夫、わたしが引き上げるから」

ハンクは足を撃たれて動けない。しかしここで少女の怪力が功を奏した。

貯水タンクを放り投げるほどのパワーだ。小さな背中に大の男を背負っても、何の苦も感じず登ってみせた。

「傷を手当てします。少し痛むかもしれませんが」

「ああ」

ハンクを受け取ったゴーストが、手早く患部を処置していく。

肉が一部吹っ飛んでいたが、致命傷ではない。感染症対策に消毒を施し、包帯を巻いていく。

——その時だった。

ガゴンツ!! とヘリが大きく傾いたのだ。

まるで巨人に掴まれたような衝撃が襲い掛かり、警報機器が一斉に叫び始める。

「なんだ!?! 何が起こった!?!」

「っ……! まさか!」

血の気を引かせ、真っ青になった少女がヘリコプターの下を見て。

「驚愕のあまり、全細胞が停止した。」

「しニガみいイイイイツツ!!」

それは腕だった。女から斬り飛ばされた槍の腕だった。

腕だったものが怨嗟の雄叫びを張り上げながら、梯子を登ってきて

いるではないか。

手の甲に眼球が生え、槍の先端が真つ二つに裂け、異形の口に変異している。

無数の牙が生え揃う極悪な蛇のようなソレは、明らかな意思を持って活動していた。

「嘘だろ、この声——ハンス・ウエスカー!?　なんで生きてやがる!?!」  
いいや違う。ハンス・ウエスカーは確かに絶命した。女に捕食され、その命に幕を下ろしたのだ。

だがそこで予期せぬ事態が起こってしまった。女が体を突貫工事  
で再構築した際、ハンス・ウエスカーの強靱な細胞の一部が寄生虫の  
ように残留してしまったのだ。

——ままじゃない。

——あなたは、誰?

炎の女を初めて見た時、少女はこう漏らしていた。

電磁波の異常な混沌に、怪訝を抱いたからこそその言葉だった。

しかし断言する。あの腕は決してハンス・ウエスカーなどではない。  
い。

ウエスカーの執念を引き継いだ、怨霊のような残滓なのだ。

臓器移植を行った患者は、ドナーの精神に影響を及ぼされるとい  
う俗説がある。記憶転移と呼ばれる未解明の現象だ。

それに類似するナニカ。あるいは本物の記憶転移。

ハンクに対する並ならぬ憎悪が、邪悪を再び呼び覚ましたか。

「■■■■ツ!!」

不意にヘリが軽くなる。同じくして強烈な羽ばたきが到来した。

腕に翼が生えていた。それはもはや腕ではなく一個の生物として  
君臨し、歪な牙が鍵盤の如く並んだ口腔をガバツと開いて、ハンクた  
ちを貪り喰らわんと襲い掛かる。

「撃てー!」

号令に従い、すぐさまゴーストが機銃を握った。

だが次の瞬間、ハンス・ウエスカーの口から鞭のような舌が伸び、ま



けれど。

もう二度と失敗はしない。

「必ず当てる……!! 当ててやる!」

震えを御し、恐怖を捻じ伏せ、ゴーストは猛禽の如き集中を体得する。

蜻蛉のように空を旋回する怪物の隙を待ち続け、ひたすら照準を合わせていく。

——そして訣別は到来した。

一条の赤い光があった。猛り狂う爆熱の咆哮があった。

源は遙か下。燃え盛る火柱が突如として地より現れ、ハンス・ウエスカーを蛇の如く呑み込んだのだ。

少女は視た。確かにその眼で見届けた。

左腕を掲げ、天へ向けて炎を捧ぐ、母の最期の雄姿を視た。

「今だ、やれ!」

閉幕の一射が放たれた。

ロケット弾は硝煙を連れ、一直線にハンスの元へ。

怪物は最後の悪あがきとロケット弾を口で啄む。恐るべき威力で猛進する砲弾の脅力を、渾身の力で抑え込む。

『L I S A — 0 0 1 』!」

己の角度からでは狙えないと判断し、ハンクは少女ヘライトニングホークを放り投げた。

ランチャーを持って下がるゴーストに代わり、空を舞う銃を掴み取る。

握る。まるで最初から手に馴染んでいた道具のように。

使い方は知っていた。ずっとずっと、彼らを見てきたのだから。

「もう二度と顔も見たくない! 大っ嫌い!」

轟く炸薬音。

銃弾は機械の如く精密に、暴れまわるハンス・ウエスカーのロケット弾を刺し穿つ。

裂光が爆ぜる。熾烈な衝撃が大気を殴り飛ばす。

ようやく帰ってきた静寂に、少女は深く吐息を零した。

## エピソード

### ファイル：回収後の記録

〔1998／11／15〕

例の街が消滅してから約一月。我が社は連日、嵐のような動乱に見舞われている。

事が事だ。事件はあまりにも大きすぎた。流石のアンブレラでも揉み消しが容易な規模ではない。

汚れ仕事を担うU・S・Sも一部隊丸ごと壊滅し、たった3名しか生還しなかったほどだ。まさか天下の大企業が人手不足とは夢にも思わなかったろう。

U・S・Sといえば、死神と呼ばれる男が面白いものを持ち帰ってきた。少女の姿をしたB・O・Wだ。

実物を眼にした時は大層驚いた。人間とまるで変わらない。このまま学校に通わせても、全く違和感のないほどよく出来た子供だった。

報告によると知能も人間と大差ないらしい。識字能力、言語能力まで備わっているとか。

収容されてから一向に喋る気配がないため、真実かどうか定かではないが、簡易検査のデータからして相当な潜在能力を秘めているのは間違いない。

お上はこれを量産しろとのことだが、データ通りの製法ではサンプルが足りない。リサ・トレヴァーが既にこの世にいないからだ。

手っ取り早くクローニングするのがいいだろう。早速体組織サンプルの回収にとりかかる。

〔1998／11／18〕

あの小娘、なかなか厄介だ。なまじ知能が高いせいで扱いづらいところの上ない。

まず薬が効かない。象を昏倒させるほどの麻酔を吹き矢で打って



も、ものの数分で覚醒する。連続投与しても耐性ができるのか、一切眠らなくなる。

力づくでも駄目だった。U・B・C・Sを使って保定を試みたが、結果は言わずもがな。死者は出なかったがほぼ全員重症だ。

アレは最新装備に身を固めた傭兵部隊を、あつというまに蹂躪した。

特に電熱ブレードは脅威的過ぎる。耐熱耐刃加工を施した自信作の盾も真つ二つだ。得られたデータと言えば、装備の耐久テストくらいか。

おかしい。明らかにおかしい。アレは力技で兵士を捻じ伏せていなかった。状況を把握し、冷静に分析を重ね、戦略を練って効率的に打倒していた。

一体NESTでどんなトレーニングを受けていたんだ？ よほど実戦経験が豊富でもなければ、あの人数をものの数分で制圧するなど不可能だ。

忌々しい奴め。人材も道具もタダじゃないんだぞ。

〔1998/11/20〕

報告によればエネルギーの消耗が激しいとのことで、水も食事も与えず弱体化を図ってみた。

それが悪い結果を招いてしまったのは言うまでもない。

脱走したのだ。今まで大人しく部屋の隅で縮こまっていたのに、食事が来ないと勘付くやいなや、通気口を破壊して社内の食堂まで忍び込んだ。

備蓄をあらかじめ強奪されたらしい。しかしそのまま逃げるでもなく、また同じ部屋に戻ってきていた。

なんなんだこいつは。意味が分からない。

何時でも脱走できるなら何故そうしない？ 何か目的があるように見えるが……。

【1998／11／21】

今まで黙りこくっていた『LISA—001』が突然コンタクトを取ってきた。

なんでも、ゴーストというコードネームの男を世話係にしてほしいとのこと。

ゴースト——J・マルチネスは軟禁状態にある。間接的だが、バイオハザードを引き起こした発端だからだ。

アンブレラに致命的なダメージを与えたということから、表向きには死亡扱いにされている。今も処分検討の真っ最中である。

幸か不幸か、『LISA—001』と接していたという点だけで首の皮を繋いでいるようなものだ。もし『LISA—001』からサンプルが取れていたら、直ぐにでもエサかモルモットに加工されていたことだろう。

『LISA—001』はゴーストに危害を加えないことを約束させる代わりに、体組織サンプルを提供すると言ってきた。生物兵器が、一丁前に我々へ交渉を申し出たのだ。

やられたと言わざるを得ない。あの小娘が今まで沈黙を貫いていたのは、交渉にこぎつける条件を整えるためだったのだ。

奴に檻など何の意味も無い。薬も毒も、武力も効かない。現代科学のあらゆる拘束が通用しない——そう知らしめるための演出だった。

アレは暗に示したのだ。「その気になればこんなところすぐにも脱出できるし、お前たちを皆殺しにも出来る」のだと。

それを証明して、脅迫材料を準備した。

我々にノーという選択肢はない。断れば最後、アレは確実にこの研究所を壊滅まで追い込むだろう。

忌々しい。まったくもって腹が立つ。

……だが、優位性が我々にあることに変わりはない。しよせん、子供の浅知恵だ。

【1998／11／23】

マルチネスに首輪型の爆弾を装着させ、『LISA—001』の付き人にした。

我々の指示に従わなければマルチネスを処分するという条件を呑み込ませたのだ。いくら頭が回ろうが、感情が人並みなら人質を持つ我々に逆らえることはない。

案の定、『LISA—001』は驚くほど従順になった。

サンプルを快く提供してくれている。おまけに拷問に等しい耐久テストにも反抗しない。

爪や皮を剥ぐ。水に沈める。低酸素下に置く。過剰な薬物投与を施す——そんな筆舌に尽くしがたい苦痛すら甘んじて受け入れている。

生意気にも決して弱音を吐かないが、それもいつまで持つか。

B・O・Wはやすやすと死ねない。しかしダメージを与えすぎると暴走する可能性がある。あくまで「痛み」に重点を置いた実験を繰り返している。そうしろという注文があったのだ。

目的は、拷問による洗脳を兼ねた訓練にあるのだろう。

お上はアレを暗殺者として使役するつもりだ。万が一敵に捕らわれた場合、情報を吐かれては不味いことになる。それを防ぐためのトレーニングか。

なににせよ、マルチネスは使える。暫くキープしておくのが無難だろうな。

〔1998／11／26〕

やられた。マルチネスを奪われた。

あの娘、どんな手品を使った。どうして爆弾を解除できた。

無暗に弄れば即座に爆発する代物だ、工学知識の無い子供に外せるわけがない。

ええい、警備班は何をしていた！

〔1998／11／27〕

『LISA—001』の能力は我々の想定を遥かに超えていた。

あの娘は毎日の拷問と洗脳に耐えながら、監視カメラや動体センサーの配置を全て記憶していたのだ。

それだけではない。爆弾を作った工学者まで特定されてしまっていた。

奴は誰にも悟られぬまま部屋を抜け出し、工学者に詰め寄って、爆弾の解除方法を吐かせたのだ。なんてやつだ。

視力を潰すだけでは足りなかった。全身の皮膚を剥ぐでもしないと、奴の感覚器は周囲構造を立体的に把握できてしまう。

データを全て破壊された。サンプルも火の海に消えた。備品も幾らか奪われる始末だ。

マルチネスも一緒に消えている。不審な動きをすれば即座に爆破される環境でどうやって伝えていたのかは分からないが、奴も『L I S A—001』に情報を流していたらしい。

機動部隊が追っているが、無駄だろう。賭けても良い。

我々の手に負えるものではない。我々では止められない。

こんなの、B・O・Wなんて枠組みにあつてたまるか。

アレはあまりに賢過ぎた。もはや新種の人類じゃないか！

## 第5の生存者

ラクーンシティの惨劇は世界に大きな爪痕を植え付けた。

1998年10月1日。ひとつの街が滅んだ日。数えきれないほどの善き人々が、残酷な運命に葬られてしまった日。

けれど彼らの死は無為に終わらなかつた。世界中の人間は、唾棄すべき事件の真相を権力者の手で握り潰されることを良しとしなかつたのだ。

アメリカ合衆国最大企業、製薬会社アンブレラ。悪魔のウイルスを創造し、大勢の命を弄んだ邪悪の権化。

秘匿の中で行われてきた数々の非人道的活動をラクーンシティの生き残りたちに暴露され、さらには掌で転がしていたはずの国自身からも首を斬られる末路を辿る。

しかしアンブレラはこれを受け入れず、アメリカそのものへ裁判を引き起こした。

有史以来、最悪の悪あがきが始まったのだ。

5年にも及ぶ泥沼の戦いは、ロシアで極秘裏に行われていた新生物兵器計画をクリス・レットフィールドおよびジル・バレンタイン率いる対バイオテロ組織が壊滅へ追い込んだことが拍車を掛け、数多の証拠が明るみにされたことで決着となる。

巨大な傘は腐り落ち、ひとつの戦争が洛陽を迎えた。

それでも、残された者たちの戦いは終わらない。

アンブレラから流出した生物兵器の数々は「負の遺産」として社会の裏側に蔓延り、日々多くの命を奪い続けている。

Tの子孫に始まり、寄生体プラーガ、ウロボロス、C―ウイルス、E型特異菌……脅威は進化を繰り返し、生者の喉元へ牙を剥く。

それに抗い戦う者たちに、かつての安息は訪れない。

B S A Aを筆頭とした世界の免疫力と、世界を侵食する<sup>レジデントウイルス</sup>邪悪な居住者の終わりなき戦いが、新たな物語を生み出してゆくのだ。

——かくして、時は15年を刻み歩む。

◆ 東欧、中国、アメリカを巻き込んだ大規模なバイオテロが沈静化してからしばらく。

惨劇の生存者であり、世界を救いながらも歴史に残らぬ英雄、ジェイク・ミューラーは日々戦場を渡り歩いてきた。

国勢、宗教、革命。2013年となった今でも、戦争の火種は世界中で燻っている。平和な国なんて上澄みだけで、それも「負の遺産」の手でいつ崩壊するか分からない時代だ。

食いつぱぐれる日はまだまだ遠そうだなと、ジェイクは寂れたバーの中で、何世代も前のテレビに映る画質の悪いニュース番組をぼんやりと眺めながら、独り酒を煽っていく。

「あ、あの。ジェイク・ミューラーさんですか？」

ただし、以前と少しだけ違うのは。

かつてのような大金ばかりの汚れ仕事は、あまり引き受けなくなるところか。

「し、仕事の話で来ました。あなたなら力になってくれるだろうって、紹介されて」

ボロボロの服を着た気弱な青年だ。ジェイクとそう年は変わらなまいだろう。

それでも酷く幼く見えるのは、ジェイクの纏うただならぬ雰囲気との差のせいか。

「お願いします！ 村からあの化け物どもを追い出して欲しいんです！ もちろん報酬は払います、これが僕に出せる全財産です。村を取り返してくださいしたらもつと支払いますから、どうか、どうか！」

小汚い包みを開いて見せる。錆の酷い硬貨とくしゃくしゃになった貨幣がぎっしり詰まっていた。

身なりと口振りからして、本当に有り金の全てらしい。

それを失つてでも引き受けてもらいたいという、鬼気迫るほどの覚悟があった。

「……」

ジエイクは小包を一瞥し、手元のグラスを空にする。

「場所は？」

「ここから北東に行った先にある小さな村です。僕の故郷でした。紛争に投入された怪物がうちの村に雪崩れ込んできて……ぼ、僕だけが生き残って」

「北東の村あ？ おい、俺は冗談に付き合ってるほど暇じゃねーんだぞ。北東付近でB・O・Wが投入されたなんて情報は入ってねえ」

「そ、そんな！ 誓って嘘なんかじゃない！」

「あ？」

椅子を引き、ジエイクはゆっくりと立ち上がった。

引き絞られた筋肉の鎧を纏う190cmもの巨体。丸く刈られた坊主頭に、左頬に走る一条の傷痕。猛禽を彷彿させる鋭い目つき。

立ち上がっただけで圧倒されそうになるほどの威圧感に、青年は思わず後ずさった。

「だったらよ、嘘かどうか確かめてきてやる」

「……え？」

「本当に居たらその金は貰う。だが居なかったら仕事は受けねえ」

「え、あ」

「ちなみに相談料は別だ。代金は、あー、さっき呑んだ一杯とコイツで丁度になる。前払いで頂くぜ」

カウンターのバスケットから、瑞々しいリングをひとつ手に取ってジエイクは言う。

一口齧り、「いいな？」と目で同意を促して。

「あ、ありがとうございます……！」

唇を震わせる青年を一瞥しながら、ジエイクは静かにバーを後にした。



「ここか」

バイクを止め、東欧北東部にぽつんと佇む廃村の土を踏みしめる。寂れ切った村の情景を一望しながら、ジェイクは不機嫌そうに顔をしかめた。

死臭がする。鼻にずしんと来るほど濃厚な臭いだ。

そこらじゅうでニクバエの群れが羽音の演奏会を我が物顔に奏でている。腐敗が始まってからちようど1日程度らしい。

「シケてやがるな。デートスポットにしちや辛気臭すぎる」

この様子では全滅だろう。

元よりジェイクを頼った依頼人だけが、命からがら逃げのびた唯一の生存者だったらしい。惨劇の度合いは往々にして知れている。

——ジェイクはあの事件以降も、フリーランスの傭兵として日銭を稼いでいた。

ただし仕事の内容は劇的と言っていいほど変わっている。今では紛争地帯に蔓延る生物兵器——アンブレラの「負の遺産」の駆除を引き受けることが多くなった。

傭兵というより掃除屋などと、ジェイクは笑う。

「さて、化け物さんはどこだ？」

銃のコンデイションを手早く確認したジェイクは、まるで観光を楽しむかのような足取りで村を歩く。

今回のターゲットはC—ウイルス由来の生物兵器だ。名をナパドゥ。ウイルスを投与された人間が蛹を経て、岩の肌をもったゴリラのような姿に変態した怪物だ。

C—ウイルスはその扱いやすさと制御の容易さから、東欧など発展途上国では根強く流通してしまっている。

ワクチンが開発された今となっては、ウイルス自体の脅威度は著しく下がったものの、「既製品」の需要は沈まない。

「おーい、いるなら出て来いよ。てめーらのランチ様が直々に来てやったぞ」

面倒くさいと言わんばかりに、ジェイクは大声を響かせた。

陽動だ。隠れている化け物を探し出して始末するより、手っ取り早く全滅させるほうが性に合っている。



しかしどれだけ声を上げようとも、一向に現れる気配がしない。

「気配がねえ」

不気味なほどに静かだった。

生命が死に絶えた核戦争後の世界かと、毒づきたくなるほどの静寂だ。

ジェイクはその類稀呪われたな血筋ゆえ、常人を遥かに凌ぐ身体能力を持つ。

長年の傭兵経験も乗算し、僅かな気配さえあれば居場所なんてすぐに特定できる。

それでも匂いがしないということは、本当にいないのか。

「……そういやここいらでもあったっけか？ 噂のシニガミ」

死神。ジェイク自身、数日前に耳にした程度の与太話だが、最近戦場で出回っているという噂だ。

生物兵器に汚染された戦地に現れる、白い髪をした死神の話。

世界中の様々な紛争地域で目撃されているらしく、奇妙なことに死神が確認された戦場からは、決まってB・O・Wが姿を消すという。

ジェイクは現実主義の男だ。死神なんて曖昧なものは信じない。そんなものがいたらジェイクはとっくの昔に死んでいる。

けれど、B・O・Wが活動した痕跡があるというのに影も形も見当たらないのは、死神の仕業のように不気味だった。

「……」

何にせよ、立ち止まってばかりでは始まらない。

仮にB・O・Wが何らかの理由でこの場を去ったのなら、その証拠を確認する必要がある。どちらにしろ探索は不可欠だ。

怪物が潜んでいそうな場所をピックアップする。

暗がり、大きな家屋の中、遮蔽物の影。

ひときわ目立つのは、廃村の中央に座する教会か。

「おおー。こんなナリじゃ神も仏もねえな」

銃痕が蜂の巣のように壁へ刻まれ、十字架は折れ砕け、窓硝子や聖像が散乱している。

かつてあつただらう神聖で肅然とした面影はどこにもなく、神は死

んだと思いい知らされそうな、荒廃した聖域が広がっていた。

(……音?)

教会に足を踏み入れ、即座に気付く。

ペちやペちやと液体を舐めるような、啜るような、小さな水音が絶えず奥から聞こえていた。

いる。間違いなく何か潜んでいる。

銃をホルスターから抜き、セーフティを外す。

砕けた雰囲気捨てる。神経を張り詰め、一切の隙を潰し、ゆっくりと教会を進んでいく。

水音が大きくなる。

耳を澄ませば、肉を食むような咀嚼音も鼓膜が捕らえた。

(お楽しみ中か。気楽なことぞ)

発生源は懺悔室だ。懺悔室に怪物はいると確信した。

ジエイクはドアに張り付き、一息に蹴破り突撃する。

迅速に銃口を滑らせる。いつでも引き金を絞れるよう、指先の神経を尖らせて。

「あん?」

だがしかし、そこに生物は存在しなかった。

命を失った粘質な肉の塊なら、無数に床へ転がっているが。

「んだ、こりゃ?」

異様すぎる風景だった。

死体の山だ。決して広くは無い懺悔室を血の海に沈めるほどの死体の山だ。

けれど、人間の死体はひとつも見当たらなかった。

どれもこれもナパドウと呼ばれる生物兵器の亡骸である。巨大なエリマキトカゲのような怪物も混じっているが、既に原形を留めていない。

(小分けされてやがる。まるでサイコロステーキだ。滅茶苦茶鋭い刃物で一息に斬るでもしなけりゃ、こんな切り口にはならねえ)

怪物はバラバラに分解され、床に敷かれた布の上で並べられていた。

一面の血は滲み出たものだ。傷口の断面はどういう訳か焼いて塞がれている。赤熱させた日本刀を使って両断したかのような切断痕だ。

「サムライでも出たつてか？ それとも……」

死神の噂が脳裏を掠る。

噂の出所は定かではないが、死神と呼ばれる所以は共に語り継がれている。このバラバラ死体が特徴だ。

まるで大鎌を使って解体したかのような、B・O・Wの屠体だけが現場に残される。故に死神と囁かれた。

（気になるのは切り口だけじゃねえ。この噛み痕もだ。肉が食い千切られてやがる。しかも新しい）

「あれ？ まだ避難していない人がいたの？」

突然背後から掛けられた声に、ジエイクは電流を流されたが如く銃を向けた。

いない。

誰もいない。微かな埃の粒子が日光の中を漂っているだけだ。

「ここは危ないよ。はやく逃げて。生き残った人たちはみんな麓の街へ出て行つたよ」

まただ。また声がした。

近くにいる。なのにとどこから聞こえているのかが分からない。懺悔室の中だというのに、声の正体すら特定できない。

分かることがあるとすれば女だ。それもかなり若い。

「あなた村人じゃないね。でも危険だよ、早く帰った方が良い」

「ウチの門限は晩飯までだ、帰るにはまだ早い。それより顔を見せてくれよ。かくれんぼは嫌いなんだ」

「だったら銃を降ろして」

「悪イがそいつは聞けねえ」

「じゃあ貰うから」

刹那、風を裂く影がジエイクへ襲い掛かった。

文字通り目にも止まらぬ豪速の物体。それは神出鬼没にジエイクの眼前へ顕現し、華奢な腕を砲弾の如く撃ち放った。

「残念だったな。非売品だ」

しかし腕は無空を掠め、逆にジェイクが掴み取った。軸足を回し回転。遠心力を存分に利用、襲撃者を懺悔室の格子に向けて叩きつける。

木材が折れ砕ける悲鳴が響く。投げ飛ばされた襲撃者は派手な破壊とともに格子ごと床へ転がった。

「びっくりした。強いんだね」

「お前もな」

全力で叩きつけたつもりだった。腕の関節まで外したはずだ。並の人間なら痛みで悶絶してしばらく動けない。

なのにこの小さな襲撃者は、不測の投げ技に適応し受身を取ったばかりか、何事も無かったかのように立ち上がっている。

「何者だ。ナニモン村のガキじゃねえだろ」

「そっちこそ」

「俺は仕事で来てんだ。食うために稼がなきゃならんのでね」

「仕事？ わたしも」

自分を指さし、ふんわりと微笑む襲撃者。

驚くべきことに少女だった。目を反射させる銀系の髪が神々しい、15歳程度のほんの子供だ。

漆黒の戦闘服を身に纏っている。脇にはガスマスク付きのヘルメットを抱えていて、紅色のレンズが暗がりでも鈍く揺らめいていた。

「ねえねえ、もしかしてあなたジェイク・ミューラー？」

「さあ。ナントカレッドフィールドかもしれないねえ」

「やっぱり！ 凄く強い電磁波だから間違いないと思っただあ。一度会ってみたかったの」

まるでジェイクの心が読めているかのように断言する少女。

あまりに無邪気に笑うものだから、思わずジェイクも牙を潜めてしまふ。

「えっとね、わたし敵じゃないよ。むしろ、味方？ ジェイクはBSA Aと協力してバイオハザードを収束させたんだよね？」

「馬鹿言え。あいつらが俺に協力したんだ。つか、それは極秘になっ

てたんじやないのか？ ザルかよまつたく」

「素直じやないなあ……。んと、わたしはここに所属してるの」

言いながら、少女は懐からワツペンを取り出した。

諸悪の根源アンブレラの社章と酷似した、青い傘のロゴマークだ。

「……こいつはあれか。アンブレラの残党が再結集したっていう」

「そう。わたし、立派なエージェントなんだよ！」

胸を張り、得意げに少女は言う。

——時は2007年。アンブレラの元職員たちの手により、全てを一新させた新生アンブレラが誕生した。

その名を民間軍事会社アンブレラ。かつてのアンブレラが残した「負の遺産」の駆逐および回収を責務とし、対B・O・W専門の軍事組織として生まれ変わった後継者である。

あえてアンブレラの名やそっくりなロゴを残しているのも、過去の罪を贖うという決意の表れなのだ。

「ハッ。悔い改めて贖罪しますって言いながら、クリーンなアンブレラはガキを使いに出してんのか？」

「ガキじやないもん。これでもちやんと——ジエイク、離れて！」  
前触れもなく少女が声を張り上げた、その時だった。

教会の天井に突如として大穴が穿たれ、瓦礫と共にけたたましい金切り声が降ってきたのだ。

それは人の形を留めながら、明らかな獰猛さを煮え滾らせる異形だった。

全身が溶け崩れたような容貌。隆起した筋肉。大腿から飛び出す刺々しい骨組織。

なにより視線を奪うのは、骨肉がぐちゃぐちゃに組み合わさって造形された、生体チエーンソーと化した右腕である。

ウビストヴオ。セルビア語で殺害を意味する怪物だ。

「さつき仕留め損ねたやつ……！ また戻ってきたんだ」

（仕留め損ねた？ じゃあやっぱ懺悔室の死体はこのガキンチョが？）

「どこかに隠れててジエイク、怪我しちゃうよ」

「アホか」

少女の忠告など意に介さず、ジエイクは首を鳴らしながら前に出た。

むしろ少女を手で制し、語外に『下がれ』と強調している。

「ガキの出る幕じゃねえ。すつこんでろ」

「んうーっ！ だからガキじゃないってば！ とうか、危険だから下がってて！」

「うるせえ。ガキンチョは家で勉強してんのが仕事だ」

睨む。唾液を巻き散らし、骨の刃を高速回転させながら雄叫びを吐く怪物を。

歩む。眼前の脅威などモノともしないかの如く、口笛を奏でるほど軽やかな足取りで。

「来いよババ・ソーヤー。生け贄はてめえの方だ」

「■■■■■■——！！」

悲鳴と怒号を織り交ぜたような絶叫が炸裂した。

歪な外見に似つかわしくない異常なまでの敏捷さが披露される。ウビストヴォは右腕を振り回し、教会の長椅子を滅茶苦茶に破壊しながらジエイクへ向かって突撃した。

ジエイクは冷静に引き金を絞る。放たれた弾丸は怪物の胸、頭、右腕に着弾していく。

怯みもしない。衝き動かす殺意のままに刃を回転させ、標的をズタズタに切り刻まんと躍進する。

あつという間にジエイクへ肉薄すると、甲高い咆哮を爆発させながら必殺の右腕を振り下ろした。

しかし、その腕は肉を裂くことなく静止する。

ジエイクが凶刃を避けることなく逆に踏み込み、腕の根元——力の支点を抑え込んだのだ。

「オラアッ！！」

大砲の如き膝蹴りが吹っ飛んだ。

二度、三度と肉を打つ。怪物が怯んだ瞬間突き飛ばし、間髪入れず顎へ掌底を叩き込む。

それだけでは終わらない。肘打ちが喉を穿ち、上段回し蹴りが側頭を捉える。

正拳突きの一斉掃射が縦横無尽に襲い掛かり、とどめのアツパークットは怪物の体を吹っ飛ばした。

熾烈な肉弾に怪物はチェンソーを振るう暇すら与えられず、須臾の間に追い詰められていく。

「とつととくたばれ！」

ジェイクが倒れたウビストヴオの顔面を踏み砕き、心臓が宿る右腕へ全弾を叩き込んだ。

夥しい血飛沫と断末魔を張り上げて、怪物の刃が回転を止める。

「すごい……人間なのに素手で倒しちゃうなんて」

「殺り合うのは初めてじゃねえからな」

「でも油断しちゃダメ。バラバラにするくらいしないと」

刹那、少女が一瞬にして姿を消した。

気付いた時には背後だった。まるで瞬間移動でもしたかのように、少女は起き上がりつつあった怪物の傍に立っていた。

ジェイクも怪物の復活には気付いていた。ウビストヴオのしぶとさは嫌というほど知っている。

少女の言う通り、かつてヘリコプターのプロペラでバラバラにするまで何度も襲い掛かってきたほどだ。

だから弾倉を換えて、再生能力を上回る銃弾を浴びせんと銃口を定めていた。

けれど、怪物は既に物言わぬ肉塊の群れと化し、床に伏して静まっている。

懺悔室で見た死体の山と同じだった。焼き切られたような傷痕を植えられ、無数のパーツに解体されてしまっている。

「これで大丈夫」

少女の腕から赤熱する刃が飛び出していた。

暗器ではない。腕の皮膚を突き破って、体内から露出している体の一部だった。

磁励音と酷似した振動を帯び、膨大な熱を放つそれは、さながら焼

き入れした日本刀のよう。

「お前……」

明らかに人間ではない。

しかし、怪物とも言い難い。

言葉を流暢に操り、情緒を表すB・O・Wなど聴いたことが無い。

「改めまして。わたしはリサ、民間軍事会社アンブレラのエージェン  
トです。よろしくね、ジエイク」

冷えた刃を腕に仕舞い込みながら、少女は花びらのような笑顔を咲  
かせてそう言った。



「じゃあお前は、人を探しながら旅してるのか？」

「うん、そうそう。お仕事も兼ねてね」

実に奇妙な光景だった。

出会ったばかりの戦闘服に身を包んだ謎の少女と焚火を囲ってい  
る。そこまではいい。

問題なのは、解体された怪物の肉を火で炙って、BBQさながらに  
頬張っている異常さである。

話を聞くに、リサは特殊なB・O・Wだったらしい。かつて世界中  
を震撼させたラクーンシティ事件の生き残りだという。

街の研究所で生まれた彼女は紆余曲折を経て脱出し、その後ゴース  
トという男と共に各地を転々としながら、新生アンブレラへ腰を落ち  
着かせ、今に至るのだそうだ。

「あんまり驚かないんだね」

「まあ、そっくりなスーパーガールを一人知ってるからな」

「ほんと!?! へー、わたしみたいなのが他にもいるんだ。いつか会っ  
てみたいなあ」

「流石にお前ほどX-MENモドキじゃねえけどよ」

かつて国を跨ぐほどの大事件を共に駆け抜けた、一人の女性を思い  
出す。

彼女もラクーンシティの生き残りで、人間離れた自己再生能力の



持ち主だった。

だからだろうか。少女が特別なB・O・Wと知っても、すんなりと受け入れられたのは。

「ねえ、ジエイクも色んな戦場を渡り歩いてるんだよね？」

「一応な」

「じゃあさじやあさ、物凄く強い傭兵さんとか、スペシャリストの噂みたいなの聞いたことない？　なんでもいいの」

「むしろ噂になってんのはお前だろ」

「えっ。わたし？」

「巷じゃ死神呼ばわりだぜ。それが蓋を開けてみれば、こんなチンチクリンだったとは」

「死神……わたしが死神……にへへ」

「なんで喜ぶんだ？」

　どういう心境なのかニマニマと頬を緩める少女に呆れつつ、ジエイクは気怠そうに立ち上がった。

「ん。もう行くの？」

「用は済んだ。お前が仕事取っちゃったからな。帰って寝る」

「そっか。……ねえジエイク、もしよかったらアンブレラに来ない？」

　あなたとつても強いし、何だか親近感湧いてくるの。ぜひぜひ来てほしいな」

「折角のヘッドハンティングだがお断りだ。独りの方が気楽でいい」

「むう、残念。じゃあここでバイバイだね」

「達者でな。ちゃんと歯は磨けよ」

「だから子供じゃないってば！　もー！」

　憤慨するリサを軽くないなし、ひらひらと手を煽りながらその場を去った。

　懐からサングラスを手を取って、バイクのエンジンを唸らせる。

　ジエイク・ミューラーの奇妙な一日は、そうして泡沫のように幕を下ろした。



アンブレラ崩壊後、彼の消息はぷつぷりと途絶えてしまった。

まるで最初から存在しなかったかのように、一切の痕跡が消えていた。

「うー、お腹いっぱい」

あらかた肉を平らげて、リサは満足そうに吐息を漏らす。

このまま横になってしまいたくなる誘惑を必死に堪えて、懐から半透明なキューブ状の通信端末を起動した。

「もしもし、ゴースト。お仕事終わったよ。全員は助けられなかったけど、生き残った民間人は街に避難させておいたから」

『お疲れさん、こっちで洗浄隊と救出隊を要請しておくから後は任せとくれ。ただ早速で悪いんだが、もう一件近場で仕事が入ってな。どうする？ 疲れたなら別部隊を派遣するよう手配しておくが』

「んーん、平気。どっちに行けばいい？」

『悪いな。そこからさらに東へ行った先の工場跡地で、不正なB.O.Wの取引が行われるとの情報があった。それを阻止するか、B.O.Wを回収もしくは破壊してくれとのことだ』

「ん、了解」

『俺も現地で合流する。終わったら美味しい飯でも食おう』

「うん！」

通信が途絶える。

訪れた静寂を噛み締めながら、リサは焚火に砂をかけて夜闇に戻す。

——アンブレラから逃げ出したリサとゴーストを待っていたのは、数年にもおよぶ逃亡生活だった。

リサは生物兵器で、ゴーストは戸籍上死亡扱いにされながらも裏社会のお尋ね者だ。強大なアンブレラから逃れつつ生活を送るといのは、並大抵の所業ではなかった。

世界中を旅してきた。時には観光客に紛れ、時には地元の人衆に溶け込み、時には森の中へ身を隠して、ひたすら機会が来るのを待ち続ける日々だった。

不幸中の幸いだったのは、アンブレラは既に失速の最中であつたこ

と、そして彼がラクーンシティで負傷し、動けなかったことだ。

もし全盛期のアンブレラで、彼が敵に回っていたら、こうして生き延びることなど出来なかっただろう。

アンブレラが完全に崩壊するまで続いた放浪の旅は、対バイオテロ組織がロシアの研究所を壊滅させ、裁判におけるアンブレラの敗訴が決定した日に終わりを告げる。

そこからは順調だった。アンブレラの残党ということもあり、スムーズに民間軍事会社アンブレラで、居場所を確保することが出来たのだ。

ただし、リサはその特異性から正体を極秘として扱われている。ゴーストを除けば、ほんの一部しか少女が『LISA-001』であることを知らない。

表向きは一介のエージェントとして。

裏では生物兵器の力を振るい、極秘裏に単独作戦を実行する対B。

O・W専門の暗殺者として、世界を股にかけている。

その傍ら、リサはずっと彼を探し続けていた。

顔も、名前も、経歴も、何もかも知らない彼のことを。

死神と呼ばれる男がいた。

U・S・Sアルファチームの隊長で、少女を地獄から連れ出してくれた、いつまでも心に焼きつく憧れの人。

「ハンク」

夜空に向かって名を零す。

満天を包む星の大海。薄暗い地下で育ったりリサにとって、どれだけ眺めていても飽きない絶景だ。

彼もどこかでこの星空を見ているだろうか、少女は瞳を閉じながら想いを馳せる。

ハンクの消息は完全に不明だ。

そもそも彼のプロフィールは全て謎に包まれていた。分かっていた事といえば、ロックフォート島で訓練を受けた兵士という経歴だ

け。

それ以外は等しく闇の中。生きているのか、死んでいるのかも分からない。

けれど、リサは確信を持ってこう答える。

ハンクは絶対に死んでいないと。

絶望が跋扈する困難の中で道を拓いてきたあの人が、アンブレラが無くなった程度で死ぬわけがない。

彼は今も、必ずどこかで戦っている。

傭兵か、エージェントか。それともリサやゴーストと同じように、対バイオテロ組織に紛れているのか。

少なくとも、ハンクはまだ生きていて、今も戦場で戦っている。

それだけは、自信を持って断言できる。

「死神は死なず、だよね」

だから少女は、これからもずっと戦い続ける。

地獄を生き残った者として。忌まわしき傘の呪いを雪ぐ者として。いつか大切な死神と再会するその日まで、少女は運命を切り開く。それが彼から教わった、リサの最善だと信じているから。

漆黒のガスマスクを身に着けて、少女は戦場を駆けるのだ。

— This is a war. Survival is  
your responsibility.